

---

**猛る地の底で 君咲く天のユリ ~ 神の眼(まなこ)を抱く王子~**

向上冴香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猛る地の底で 君咲く天のユリ 　　〈神の眼を抱く王子〉  
まなこ

### 【Nコード】

N4123T

### 【作者名】

向上冴香

### 【あらすじ】

世界を再生する力『バラモンの天眼』を持つ少年サウラス。  
世界を崩壊へ導く力『シユドラの地眼』を持つ少女アスナム。  
『天の力』は『命』を削り、『地の力』は『心』を削る。  
痛みを抱えながら互いに求め合う二人。

けれど運命はあまりにも過酷に二人を追い詰めていく　　！！  
正統派ダーク冒険ファンタジー。



## 序説

数多い人間のの中から、神は自らの『代弁者』として一組の男女をお選びになった。  
そしてこう云われた。

『死は男がもたらすもの。  
生は女が紡ぐもの。』

だが、私はあえてその力を反する者に遺すことにする。

互いの苦しみを理解せよ。  
互いの存在を理解せよ。  
互いに尊重し合い、互いを愛せよ。

しかる後、死は終焉ではなく、生を導く道しるべとなる。死を飲み込んだ生は新しい秩序の元に育まれるものになる。』

この地を去る前に、神はその二人に相反する力を遺された。

男には『生』を司る『バラモンの天眼』<sup>てんがん</sup>を。  
女には『死』を司る『シユドラの地眼』<sup>ちがん</sup>を。

『生』の力は『命』を削り。  
『死』の力は『心』を削る。

痛みを抱えた二人は後にこう呼ばれるようになった。

『再生の君』と『崩落の乙女』と

(エシエンタール聖書 リベイラ福音書より)

## 序章

これでいいのだと思うことにした。

これが最善の道であるのだと自分に何度も言い聞かせた。

そして決めたこと。

荷物をまとめる手を止めて、少女は溢れてくる涙を拭った。

拭っても、拭っても、こぼれ落ちる涙がキレイに磨き上げられた石畳の床に落ちては滲んだシミを作った。

離れることに決めたのだ。

ずっとずっと。

命が尽きるその時まで。

もう二度と会わないことに決めたのだ。

決めたのは自分のはずなのに。

涙だけは止められなかった。

(彼を守るためなの。彼を失いたくないからなの。なのに……)

我儘なのだと思う。

強欲なのだと思う。

傍にいたいと思う気持ちだが、重く押し掛かる。

その重みに、自分の決意が簡単に揺らぎそうになるのを、少女はぐっと歯を食いしばることで耐えていた。

(傍にいたら、いつか彼は命を落とす。自分のために……)

運命を呪いたいと思った。

こんな運命を自分に科した神を怨んでしまいたくなかった。

こんな自分たちでなかったなら。

『普通の男と女』として出会っていたのなら

だが、そんなことを考えたところで現実世界は変わらない。

止めどなく溢れる涙をそのままに、少女は再び小さなバックへと荷物を積み込んだ。

持っていくものなどあまりない。

思い出も、想いも。

ここへ残していくのだ。

夜明け前にここを立ち去らなければならない。

誰にも知られず、ひっそりと、ここを出ていかなければならない。

そうしなければ守れないから。

そうしなければ負けてしまいそうだから。

すべての荷物を詰め込んで、少女は静かに立ち上がった。

窓辺に灯っていた蝋燭をフツと吹き消して、少女はそつと扉の前に立った。

ゆっくりと振り返る。

青白い三日月が彼女を見下ろしていた。

凍てつく光が長い影を作っていた。

静まり返った部屋の中をぐるりと見渡す。

ここにはもう戻ることはない。

自分自身も。

ここで一緒に暮らしていた家族の笑顔もまた

彼はこんな自分をどう思うだろうか？

少しは寂しいと。

そう想ってくれるだろうか。

そうだったらいい。

ほんの少しでも彼の心にいられることができたのならば、これから先の人生は、それを支えに生きていけるだろう。

「さようなら……」

消え入るほどに小さい声で少女はそう告げた。

思い出し。

想いに。

重たい蓋をして、ゆっくりと扉を開ける。

軋んだ木製の扉の音が静まり返った空間にこだまする。

もう少女は振り返らなかった。

ただ青白い月の光が照らす道をまっすぐに歩いていく。

刺すような冷たい月の光の中を、藤色の輝く長い髪がふわりふわりと舞い……

やがてその姿も光の届かない闇の中へと消えていったのだった。



## ともに過す日々（1）

運命の相手とは何を指すものであろうか？

いや、そもそも運命とは何を指すものであろうか？

それは神によって定められた相手であり。

神によって定められた道のりであると言えなくもない。

だが、運命とはそれだけのものであるのか？

ならばと思う。

もしも、運命の相手と幸運にも出会うことができ。

その相手とともに定められし運命を歩むことができるのならば。

それがたとえ苦難に満ちた道であろうとも、進む覚悟を持つとうではないか。

それがどれほどの痛みを伴うことになるうとも……

心地のいい風が頬を撫でていく。

その風に乗って、芳醇な香りが鼻先を掠める。

新緑の草原の波はその風に揺れ、サワリ、サワリと小さな合唱をする。

その波の中に身を沈める銀髪が、同じように揺れた。

少年はゆっくりと目を開けた。

鮮やかな碧眼の瞳が姿を見せる。

そこに遙かに高く、彼方まで広がる澄み切った青空が映り込む。

すつと伸びた鼻筋、程よく肉付きのいい唇はほんのりと薄紅色に色付いていた。

美しい顔立ちではあるが、女性的ではなく、むしろ野性味に溢れている彼は、まさに原石と表現するに値するものがあつた。

だが、そんな彼の顔は晴れ上がった空とは対照的に曇っていた。整った眉の間に自然に小さなシワが寄っていた。

胸が妙な息苦しさを訴えていた。

心地のいい風のはずなのに。

今日はそれをまったく感じなかった。

深い緑の山々に囲まれた資源の豊富で、寒暖の変化もなく、常に温暖な気候に恵まれた国。

『マリエステ王国』

透き通る湖を囲むようにして、建設された王都『ローゼンブルーム』の中心に少年の居城である『エストゼラ城』はあつた。

雪のように白い大理石の城は空を突き抜けるほどに高く聳えている。遙かに遠い丘の上からさえ、その姿は見る事ができた。

誰もが一度は入城を憧れる美しい城。

だが、少年がその居住者であることを知る者は王都の住人には誰ひとりとしていない。

少年の存在は国家の最大機密。

そう、少年には隠さねばならない大いなる力が宿っていた。

少年はゆっくりと自分の右目に触れる。

彼の神が去ってから数千年の時が流れようとしていた。

三百年に一度、彼の神の審判の下されるときに生まれる特別な力を持った子供。

その一人が少年だった。

神の代弁者たる力。

神の眼を抱く者。

絶対的な力を宿した大いなる存在。

そうであるが故に、少年の存在は王家から隠された。

力を利用しようとする悪なる存在が彼に近づかないように。

また国家の存亡を揺るがさんとする敵国から、彼という存在を守らんがために。

「サウラス？」

その声にサウラスと呼ばれた少年は曇った顔を捨て、ゆっくりと起き上った。

声を聞いただけでそこにいる人物のことは分かっていた。

彼女を心配させたくないがために、胸のざわめきを無視するように笑顔を浮かべた。

彼女はそんな彼にやんわりとした笑顔を向けていた。

藤色の長い髪がふわりと風になびいていた。

髪と同じ色の大きな瞳は照らされる日の光を反射し、キラリと輝いていた。

白い肌に差し込む薄紅色の頬に、形のいい唇。  
彼の愛してやまない彼女が、覗き込むように屈んで見つめていた。

「早かったな、アスナム。親父さんの手伝いはもういいのか？」  
尋ねるサウラスにアスナムはふふつと小さく笑って見せた。

「サウラスが『話がある』なんて言うから。お父様の手伝いに身が入らなかつたのよ。だから、早抜けさせてもらったの。百合リリーのことならお父様に任せておけば問題ないし。私なんてただの肥料やり係だし」

「そうだな。親父さんはこの国の植物達の育ての親だからな」

「王国庭師の称号持ちですから」

アスナムはそう言うのと自慢げに胸を張って見せた。

この国にとって『王国庭師』は特別な存在である。  
シヤンタナという世界において、ここローゼンブルームの王宮にしか存在しない希少種である『アスナムリリー』という百合の管理を任された名のある庭師にのみ与えられた称号。

『神の花』と呼ばれ、『王国』を象徴するその花を管理、育成する任を授けられた名誉職である。

アスナムの父はその庭師であり、彼女はそんな父親に付き添って王宮に出入りできる稀な都民であった。

だが、王宮に出入りできる存在である彼女にさえ、サウラスの本当の姿は知られていない。

『王国庭師』の父親にも守秘義務が課されていたこともまた、理由

の一つであつただけれど。

「ねえ、それより、話つてなあに？」

興味津津という顔をさらにサウラスに近づけるアスナムの腕を、思わずサウラスは自分のほうへと引き寄せた。  
その腕の中にしっかりと抱きしめる。

「君の髪は……リリーの匂いがする」

アスナムの髪に鼻をすり寄せるようにしながらサウラスは呟いた。  
濃厚で甘い香りが鼻の奥を通り抜け、喉元に達する。  
香りを飲み込みながら、サウラスはアスナムの長い髪を一房すくう。  
日に透けると白金色のように透ける藤の色の髪が彼の手の手の中から、はらりとはらりと落ちる。

「王宮のリリーに……触れたから……」

同じように、呟くようにアスナムは返した。

「君は……リリーそのものだ」

王宮の庭園に咲くリリー。

エシエンタール神の彫像を取り囲むようにして咲き乱れる白百合の花は、彼女のように凜として美しく、それでいて優しい。

王宮でこの花を見るたびに想う。

彼女と一緒にこの花とともに過ごす日々が自分に許されたらと……

抱きしめていた右手をそつと自分の上衣のポケットに這わせ、中に

ある物を確認する。

指先に堅い金属が触れる。  
丸みを帯びた小さなもの。

それを渡すために、サウラスは彼女を呼び出したのだった。

母を失った時、絶望に打ちひしがれた自分を救ってくれたのは王宮で見かけた彼女の姿だった。

輝く太陽の元で、軽やかなステップで歌い舞いながら、彼女は植物達に水を与えていた。

弾けるような笑顔と、美しい旋律とその歌声に、サウラスは神の姿さえ重ねそうになった。

生きる喜びを。

生きていく希望を。

生きている幸せを彼女は歌っていた。

讚美歌だった。

幼い頃に何度も枕元で母が歌ってくれたものだったが、彼女ほど希望に満ち溢れ、生气溢れた瑞々しさは感じなかった歌なのに。

その時のサウラスにはまさに地の底から救い出してくれた奇跡の歌だった。

それ以来、サウラスは自分の正体は隠し、王都に出かけるようになった。

彼女が王国庭師の娘であることを知り、彼女の父親に彼女の出かけ

る場所を聞いては偶然を装って近づいた。

今思えば、バカな真似をしたと思う。

そんなことよりも正面切って彼女に「友達になってほしい」と言え  
ば、彼女は快諾したに違いないのだ。

## ともに過ごす日々(2)

結局、自分から彼女に近づいたのに。

その手を差し出してくれたのは彼女のほうだった。

『私でよければ、あなたのそばにいるわ』

という一言を添えて。

その時以来、時間の許す限り二人は会い、話をし、笑い、遊んだ。幼い体と心は時を重ねるたびに成長する。

それは恋へと発展し、心は離れ難いほどに寄り添っている。彼女がいなければ、サウラスの世界は曇りを帯びる。

いや、おそらく、闇になる。

それはもはや違えることができない事実だった。

「ねえ、アスナム。僕たちの最初の出会いを覚えている？」

問いかけにゆっくりとアスナムは顔を上げた。

何をいまさらといった目で彼女はサウラスを見つめていた。

「覚えている？」

もう一度聞くと、彼女は大きくうなずいて「夢げに見えた」と言った。

「夢げ？ ボクが？」

「そう。とつても……その手を取らなかつたら消えちゃいそうなくらい」



そう言っつて、アスナムはサウラスの左手を辿り、しっかりと握りしめた。

「もっと小さくて、もっと細かったのに……私と同じくらいだったのに、逆転されちゃったね」

遠い日に思いを馳せるように、彼女はそう言っつて笑った。

「ボクと仲良くしたきっかけっつて、もしかして同情？」

そんなことを言い出したサウラスに、アスナムは一瞬驚いたように彼の顔を見、それからまた小さく笑った。

「わからない。

ただ、この手をとらなくちゃいけないっつて思ったのは確か。

『運命的』っつて言うのが一番かも知れない」

「運命ね……」

その言葉にサウラスは取り出そうとしたリングを引っ込めた。

自分の背負う『運命』に彼女を巻き込むのか？

今更ながらに躊躇いが生まれた。

「サウラス？」

「キミを愛しているよ。初めてキミを見つけた時から……ボクはキ

「ミの虜だった」

王都でもアスナムの美しさは有名だった。誰も振り返り、誰もがため息をついた。

言い寄る男は山ほどいた。

貴族や官職たちも、王宮で彼女を見かけるたびに、彼女に声をかけていた。

だが、その誰ひとりとして、彼女に触れることは叶わなかった。そう、サウラス一人を除いては。

「私もあなたを愛しているわ」

見つめ合う二人に言葉はなく、ただ、お互いの唇をそっと重ねた。

この幸せが永遠であることを望むのは間違いなのだろうか……とサウラスは思っていた。

愛しい人と、愛しい時間を過ごすことを許されるだろうか？

許されなくてもいい。

ただ今は、こうして抱き合い、こうして唇を、心を重ねていたいだけ。

だが、幸せな日々が続けば続くほどに不安は募り、胸がざわめく。今日はそれが一層強かった。

そのときだった。

「アスナム！！ サウラスッ！！」

自分たちの名前を呼ぶ声に二人は一斉にそちらへ視線を走らせた。丘の向こうから自分たちの見知った人物が走ってくるのが見えた。

「露店商の女将さん？」

ふくよかな体を思いきり揺らしながら駆け寄ってくる人物は、王都でもかなり名の知れた名物女将だった。

実際二人もよく女将の店を利用していた。

豪快な性格の彼女についてこの間買わされた物がサウラスのポケットの中で眠っていた。

煮え切らないサウラスに『プロポーズをしろ』と女将が押しつけたものだった。

『アスナムはもつとキレイになる。そうなたら王宮に呼ばれる可能性だつてあるんだよ！！』

自分がその王宮の人間であることを知らない女将はそう力説した。内情を知っている人間から見れば、そんなことは絶対にあり得ないことなのだけれど。

それでもいい機会だと思つたことは確かだった。

自分の彼女への想いを未来へ向けるいい機会だと

だからこそ、彼女の提案を受けた。

『エストゼラ城』の見える丘で交わした約束は、生涯違えることはない。

その一言に縋りつくように。

自分を嚇けた彼女が、まさか邪魔をしに来たわけでも、ひやかしに

来たでもないことをすぐにサウラスは悟った。

彼女の顔は全力で走ってきたにもかかわらず蒼白で、汗がびっしりと彼女の額を覆っているのを見て、それは確信に変わった。

胸のざわめきがより大きくなり、ドクドクと早鐘を打っていた。

「セラインさんと……シエラさんが!!」

ゼエゼエと息を切らしながら、女将はやっとそう紡いだ。

その名前にアスナムはサウラスの手を解いて走り出していた。

「アスナム!!」

サウラスの言葉にも振り返ることなく、彼女は丘の向こうへと、王都へと走っていった。

「何が……親父さんたちに何があったんだ!!」

息を整えるように胸元を抑える女将の肩を掴んで、サウラスは尋ねた。

咳込みながら、女将は「見たんだよ」と言った。

「黒づくめの男たちに……二人が連れて行かれる所を見ちまったんだよ!! あれはただ事じゃない!! あれは……この国のもんじやない」

一気にそう告げると女将はサウラスに「追いな」と言った。

「路地裏に入ってしまったよ。たぶん……まだそう遠くへは行ってないはずだから……」

「分かった」

「アスナムを……守るんだよ」

最後の言葉に頷いて、サウラスもアスナムの後を追うように急いで、その場を後にした。

嫌な予感が的中しなければいい。

ただ、それだけを願いながら。

晴れ渡る空に、うつすらと灰色の雲がかかり始めたことに、まだサウラスは気づいていなかった。

## 死を与えし者

「いやあああつ!!」

それは信じたくない光景だった。

顔を覆ったその先で愛すべき人の首がゆっくりと宙に舞い、弧を描きながら石畳の地面の上に転がった。

真っ赤な血が首のなくなった胴体から噴き出し、あたり一面を赤い海へと変えていく。

転がった首は真っすぐにこちらを凝視し、その瞳からは赤い涙が流れ落ちていた。

「お父様……お父様あつ!!」

自分の腕を掴む男の手の甲に噛みつき、その手を振りほどく。

そして父親の首の元に駆け寄り、それを抱きあげた。

その少し後ろのほうには、中年の女性の死体が転がっていた。

胸を一突きにされた女性の血と、父親である男性の流す血が混じり合い、大きな海になる。

その海の真ん中で、アスナムは首を抱き、そこに頬をすり寄せた。

まだうつすらと温かみが残っていた。

けれど、その口は二度と言葉を紡がない。

「クソツ。この女、オレの手に噛みつきやがった!!」

手をかまれた男が父親の首をはねた相棒の男に向かって叫んだ。剣についた父親の血をまるで汚いものでも扱つかのように振り落としながら、もう一人の男は卑しい笑いを浮かべた。

「それぐらい我慢しろよ。コイツは『金のなる木』なんだから。『ビシユヌ』様にも言われただろう？  
女は無傷で連れて来いと」

「チツ。そうじゃなきゃ、ヤルことヤツて、叩き殺してやりたいくらいだぜ!! でもなんだって、こんな女一人を捕まえる『王国庭師』まで殺さねーといけないんだ？ これっていくら積まれたってリスク高すぎだろうがよ」

「さあな。『ビシユヌ様』に言われたのは『女』を連れてくることと。『火種を撒け』ということの2つだけだからな。どっちにしろ、『傭兵』である身の俺達には関係のないことだ。金さえ貰えればそれでいい。そのことで『大国』がどうなるうとな」

「ああ、分かったよ」

父親を殺した男が手をさする男に向かって言った。  
手をさする男はブツブツ不平を口にしながら近づくと『行くぞ』と言って、アスナムの腕をつかみ上げた。

「放して！ 私はあなたたちとなんか、行くつもりないわ！！」

「おまえの都合なんか、こっちは関係ないんだよ！！ おらっ！！  
早く立て！！」

必死で抵抗するが、男の力に少女の力が敵うはずがなかった。  
ひどく引つ張られた反動で、抱えていた父親の首が地面に再び転がった。

「お父様！！」

「何だあ？ まだこんなものに未練があるのかよ、おまえ？ 死んでるんだよ。モノだろうが！！」

「やめて！！」

「うるせえっ！！」

そう言うと、男はアスナムの頬を容赦ない力で殴った。

痛みにめまいがした。

一瞬視界が真っ白になった。  
ぼんやりとするアスナムに向かって男は卑しい笑いを浮かべ「未練なんざ、断ち切ってやるさ」と告げた。

父親の首の元に立つのは、彼を手にかけて男だった。

腰の鞘に剣を戻すと、男はにやりと笑った。



足元に転がる首の髪の毛を掴み上げると、そのまま思い切り投げ捨てた。  
首は周りを囲むレンガの壁に激突し、グチャツ……という短い音を立てて潰れる。

残ったのは父親であつたはずの残骸だけだつた。

男たちは声を上げ、腹を抱えて笑つた。

その声がざらざらと胸を撫でた。

「さあ、これで未練もないだろう？　行くぞ」

腕を再び引つ張られる。

しかし、アスナムはもう抵抗はしなかつた。

抵抗できないわけではなかつた。

ただ、絶望感が胸を埋め、そこまで追い詰めた男たちが憎くて仕方がなかつた。

憎くて。

憎くて。

身が焼きつきそうなほど

どうして、自分の家族がこんな目に合わなければならぬのか？

どうして、こんな酷い仕打ちができるのか？

父も母も、温かくて思いやりのある、優しい人だつた。

誰からも好かれ、恨まれるようなことがあるような人たちではなかった。

植物を愛し。

平和を愛し。

慎ましやかに静かに暮らしていただけなのに。

愛する家族。

尊敬する両親。

いつか自分も愛する人と、こんな穏やかで幸せな夫婦になりたいと。

それなのに　　！！

大金のためだと男たちは言っていた。

そんなくだらないモノのために、2人が殺されなければならないというのか？

怒りがこみ上げる。

怒りが痛みとなって胸の中をぐるぐると駆け回る。

それをどこへ吐き出せばよいのであるのか？

(そんなもの、決まっている！！)

アスナムはギュッとこぶしを握り締めた。

「……さない」

「はあ？　なんか言ったか？」

覗き込んでくる男の黒ずんだ汚い顔に胸の内の黒い闇が大きく広がる。

「許さない」

「許さないならどつするんだ？　ん？」

父親の亡骸をまるで玩具のように弄んだ男が嘲笑う。

「死ねばいい」

そう、死ねばいい。

くだらないものはこの世の中から消え去ってしまえばいい。

胸のざわめきが大きな黒いうねりを作った。

この衝動を抑えられなかった。

口から洩れる言葉に、アスナムは高揚さえしていた。

「あんなたちなんて、死ねばいいっ！」

左目が熱を帯びる。

全身の血の流れがすべてそこに集まるかのように脈打ち、たぎる。青い空は色を失い、目に映る全てのものが灰色と化す。

その瞬間。

鼓膜を破るほどの奇妙な絶叫がこだましたかと思うと、左目から男とも女とも知れない、老人とも子供とも分らない、得体の知れない白濁色の『イキモノ』がいくつもいくつも、嘲笑う男に向かって飛び出していった。

嘲笑っていた男の顔は引きつり、逃げるように後ずさった。

しかし、それらは男を取り囲み、身体の自由を奪うようにまとわりつくつと、絶叫する男の口に自分たちの口を近づけて吸い込むようなくさをした。

その途端、男の皮膚はポロボロと崩れ落ち、張りのあった肌からは水分が溶け出してカラカラになり、髪は一気に白くなった。

肉付きのよかった身体は骨と皮だけに成り果て、その場に立っていられずに膝をつく。

しかし、その膝は地に着いた途端に折れ、バランスを崩した身体は石畳に叩きつけられるとそのまま粉々に砕け散った。

身に着けていた一切の物が、『初めからこの世になかった』かのようになつてキレイに砂と化したのだ。

「ヒイツ！ 助けてくれ！ お願いだ！」

仲間の変わり果てた姿に、腕を掴んでいた男は思わずその手を離し、懇願した。

『死にたくない』

『オレはおまえの父親を殺したわけじゃない』

『そんなつもりはなかった』

そんな言い訳を口に乘せる男の顔は恐怖で醜く引きつっていた。

(クダラナイ)

自分の声であるようで。

しかし、そうでないような声が地の底から這い上がり、それは腹の中に響いた。

父も、母も、願うことすら許されなかった。

無情にも2つの命を引き裂いておいて、自分だけは助かりたいなどと言う男の声は耳触りでしかなかった。

(滅スベシ命。不用ナル命。世界ハ浄化ヲ望ンデイル)

生きる価値など、この男にはないだろうと思った。

生き延びたら、また同じことを繰り返すに違いないのだ。

そんな害虫以下の命など、この手で、この場で、握りつぶしてしまえばいい。

「己ガ欲望ヲ抱イタ事。地ノ底デ悔ヤムガイイ……」

再び左目が熱を帯びる。

「ダメだ!!! アスナムーッ!!!」

誰かの声が聞こえた気がしたけれど。  
それが誰かも分からないまま、アスナムは放った。  
あの、醜い名もなき亡者たちを。

カッ  
！！

見開いた瞳に白光色の光が刺さるように視界を奪っていく。  
焼けつくような痛みと熱が左目を襲い、アスナムは思わずその瞳を  
手で抑え込んだ。

『ギヤアアアア！！』

耳をつんざくいくつもの絶叫にアスナムは手で瞳を覆ったまま顔を  
上げた。

ゆっくりと戻ってくる視界の先で、彼女は心臓が凍りつきそうにな  
った。

指先がピクリと動いたかと思うと、それは波のように全身を走った。  
震えが止まらない。

ドクドクと脈打つ心臓の音が異様なまでに大きく聞こえた。

醜い亡者たちが弾けるように消えるたびに、一人の男の体に大きな  
傷ができ、そこからぱっくりと肉が見え、血が噴き出していた。

「いや……」

顔をそむけることもできず。

そこから動くこともできず。  
ただ現実には彼女に迫る。

愛しい彼の体がゆっくりと石畳の地面の上へと倒れていく。

「いやあああつつつつ！！ サウラス ツツツ！！」

涙が溢れだしたアスナムの顔に雨露が落ち始め、それは流した涙と同化し、石畳に染みを作りだしていく。

雨の足は加速し、血の海はそれと混じり合いながら小さな川を作っていた。

赤い血の川の中で動かない愛しい人の体を抱えながら、ただ泣き叫ぶことしかアスナムには出来なかったのだった。

## 別離

全身の至る所が悲鳴を上げていた。

この痛みはなんなのか？

どうしてこれほど身を引き裂くような痛みと熱があるのか？

ゆっくりと目を開けて、そこに見慣れた顔を見つけた。

黄金色の長い髪を後ろで三つ編みに結びあげた青年が一人、不安に満ちた顔でサウラスを見つめていた。

「レーター兄……さん!？」

かすれる声でサウラスは兄を呼んだ。

レーターと呼ばれた青年はその声を聞くと、ほんの少し安堵したようにほほ笑んだ。

ゆっくりと周りを見回す。

大理石の床に敷かれた王家の象徴であるアスナムリリーの紋章が入った絨毯。



デザインこそシンプルだが、漂う高級感は一級品の証であろう家具。広く開け放たれた窓の向こうにはマリエステ王国を囲む大いなる山々の姿があった。

揃えられた家具も、部屋もすべて見覚えがある。

そうだ。

エストゼラ城の自室だ。

なぜ、ここに自分がいるのだろうか？

兄レーテルがここにいるという事実もまた、サウラスには疑問を感じずにいられない要素だった。

自分の最後の記憶はどこであったのだろうか？

確か、アスナムを追いかけ……

「アスナムッ！！」

勢いよく身を起こした途端に襲う全身の痛みに、サウラスの顔はすぐに歪んだ。

「無理をするな。おまえは力を……使ったのだから」

サウラスを気遣うように、レーテルはベッドの脇の椅子に置いてあった緋色のローブを彼の肩に掛けた。

しつとりと馴染むローブを手繰り寄せながら、サウラスはレーテルの顔を見上げた。

「ああ……そうだった」

力を使ったことは覚えていた。

なぜ、その力を使わなければならなかったのか、その理由もはっきりと思いだせる。

力を使ったその事で、今の状況があることも理解はできた。

ただ、気になるのは一人のこと。

「アスナムは……セラインの娘はどうなったんだ!!」

その質問にレーテルは答えなかった。

ただ沈黙し、首を振り、一言だけ告げた。

「忘れなさい」と

「兄さん!」

食ってかかるサウラスに兄は押し黙ったまま、彼を見下ろした。

「忘れろってどういうことだよ!! 無事なのか? それとも、あいつらに連れて行かれたのか!! それくらいは知っているんだろう!!」

痛みも忘れ、サウラスは兄の胸倉をつかみ上げた。

その手に己が手を重ね、兄は「わからない」と答えた。

「分からないのだよ、サウラス。娘の安否がわからないのだ」

沈痛な面持ちで、ゆっくりとそう兄は告げた。

その言葉に、サウラスの心の糸がぷつぷつと音を立てて弾けた。

渾身の力を込めてレーテルの体を突き飛ばした。

後方で彼が名前を叫んだが、サウラスは止まらなかった。

体の痛みなどどうでもよかった。

思うように動かない体を引きずるようにしてそれでも懸命に走った。

向かう先は一つだ。

王都の露店街のその先にある、アスナムの家へ真っすぐに向かった。

白壁の小さな家の周りには色とりどりの花が咲き乱れていた。

彼女と彼女の父親によって、よく手入れされた花が風に揺れている。

不安に胸をかきむしられながら、木製の重い扉を開け、サウラスは中へ入った。

部屋は薄暗かった。

しんと静まり返り、水音一つない。

中へ入るたびに、サウラスの立てる足音だけがその場を支配する。

現実がサウラスに一つの事実を突き付けた。

ここに住む者はもういないということ。  
愛しい女ひとがいないということ。

がつくりとその場に膝をついた。  
痛みが再びサウラスを襲った。

巻かれた包帯の下からじんわりと血の染みが広がり始める。

全身を引き裂くような痛みが襲った。

けれど、痛いのは体ではなかった。

血を流す体よりも、もっともつとひどく傷むのは心。

彼女を守れなかった不甲斐ない自分に苛立ちもあった。

最後の彼女の顔を覚えている。

怒りと憎しみに満ち溢れ、その心に囚われた瞳が目の前の男を獲物のように捉え、見つめていた。

そして、男の懇願を見下ろしながら、彼女が力を解き放った時。

確かに彼女は笑ったのだ。

にやりと、どこか満ち足りた笑みを。

見たこともないその笑顔に背筋が凍りつきそうになった。

震える足を叱咤し、走り、そして夢中で自分も力を解放した。

ただ、彼女を止めたい一心で。

あんな笑顔をさせてはいけないと、そう思ったから。

「でも……なんでだよ」

温かいものが頬を伝った。

その場に両手を付き、サウラスは嗚咽した。

これが神の科した試練だと言っのだろうか？

ではなぜ、こんなにも酷い試練を神は自分たちに科すのだろうか？

なにも彼女でなくてもよかったはずなのだ。

彼女が『シュドラの地眼』を持つ者である必要などなかったはずなのに

こんな異質な力をその身に宿すことなど、自分ひとりで十分なはずなのに。

今、彼女はなにを思っているだろうか。

生きていればいい。

生きてさえいてくれればいい。

世界のどこかで生きているのなら、自分は何年かかろうと、彼女を見つけたして抱きしめるのに!!

キィ……と小さな音を立てて扉が開く。

ハツとし、サウラスは顔を上げた。

振り返り、そこに立つ人物を見て、また肩を落とした。

アスナムかと思ったのに、そこに彼女の姿はなかった。

代わりにいたのは白いロングコートを身につけ、フードで顔を隠した青年だった。

そう、そこにいたのは兄であるレーテルその人だったのだ。

「アスナムを探しに行く……止めても無駄だよ」

ゆっくりと立ち上がり、その場を後にしようとするサウラスの腕をしかし、レーテルは今度はかりは離してくれなかった。

「『今は』行かせられない」

「いくら兄さんの言葉でも、これは譲れない!!」

なおも振り切って行くこととするサウラスに、兄は冷たく言い放った。

「探しに行ったとしても、今のおまえでは野垂死するのが目に見える」

「そんなこと、やってみなけりゃ……」

続けようとするサウラスの頬がピシヤリという音を立てた。

容赦なくサウラスの頬を打ったレーテルは、冷たい瞳でサウラスを見下ろしていた。

「なんで……なんで邪魔するんだよっ！！　兄さんだって分かるだろう！！　アスナムは」

「彼女がおまえにとってどれほど大切な存在か。私だって彼女には感謝しているし、よく理解もしている。だからこそ、行くなと言っている」

そう言うと、レーテルは近くの椅子にサウラスを座らせた。

それから向い合せになるように椅子を持ってきて、同じように座り続けた。

「いいか、サウラス。今のおまえが彼女に会ったとしても、彼女を



守りきることなど絶対に出来ない。未熟なおまえはまた、彼女のために神の力を使うだろう。

己の命を代償とするその力を使って、傷つくおまえを見て、彼女は どう思うのか。彼女が生きてここを去ったとしたら、なぜ、そんな辛い選択をしたのか？

彼女はおそらくおまえの身を案じ、誰よりも大切だから離れる決意をしたのだと思う。

ならば……おまえはなにをしないといけないのか？」

レーテルの言葉に、サウラスは返す言葉を見つけれなかった。

もしも、彼の推測通りなのだとしたら。

そんな選択を彼女に迫ったのが自分の存在なのだとしたら。

サウラスは自分自身を許せなくなりそうだった。

「おまえたちはまだ若い。5年の月日を費やしたとしても、まだ20も前半だ。何を急ぐことがある？ 彼女がおまえと同じ気持ちであると感じるのなら、費やした時間など問題ないだろう。」

強くなれ、サウラス。

おまえ自身の運命だけでなく、彼女の運命をも切り開けるほどの強い精神力とその術を学べ。

それが、彼女を見つける一番の近道だと私は思う」

レーテルの言葉にサウラスは小さく頷いた。

迷う気持ちがないわけではない。

今すぐにでも探しに行きたいと、揺らぐ気持ちがないわけではない。

自分の両手を見たサウラスは、苦い笑みを浮かべた。

小さな手。

まだ、剣すらまともに握れない半人前の自分に、彼女の運命を切り開く力などない。

彼女どころか、自分の運命さえも怪しいだろう。

この手に彼女を再び取り戻すため。

この手に彼女と自分の未来を取り戻すため。

今はじっと耐えよう。

そして、必ずそう出来るほどに自分は成長をしなければ

ギョツとこぶしを握り締め、サウラスは空を見上げた。

沈む夕日を睨みながら、彼はただ誓った。

いつの日にか、必ず愛する女をその腕に取り戻すことだけを、ひたすらに誓ったのだった。

## 手掛りとなるもの(1)

創造神エシエンタールがシャントナと呼ばれるこの地を去った後、人々は神の加護を失くしたことで、己の力のみで生きることが余儀なくされることになった。

そんな中、ある人は科学力を発達させ、自由に扱えぬ自然の力を疎んじ。

またある人は、自然の力を最大限に生かす魔術を発展させ、自然を破壊する科学を忌み嫌った。

両者は互いの欠点を補うのには最良の相手でありながら、互いに憎しみ合った。

そして、それぞれ己を慕う仲間を集め、独立国家を建てることになった。

これがシャントナ(今の世界)を支配する二大国家。

科学の国『デルブルール帝国』

魔術の国『マリエステ王国』

という国々の始まりだとされていた。

「悪いけど……うちにセラインの娘は来ていない。あんたの役に立

てなくて申し訳ない」

顎鬚を生やした体格のいい中年の男は感情のこもらない声でそう言った。

「そうか」

男の言葉に青年はそう返すと静かに立ち上がった。

それから、男の目の前に広がる御座の上に置かれた木製の土産品を一つ選ぶと、懐に入れてあった皮袋から一枚銅貨を取り出して、男に手渡した。

「また来させてもらおう」

そう告げて、青年は立ち上がった。

日に反射する艶やかな黒髪から覗くのは、透き通るような濁りのない碧眼の瞳。

キリリと結ばれた唇に、凜と整った顔。

その顔立ちに不相応な擦り切れた旅人用のマントを羽織った青年は、くるりと行商人の男に背を向けた。

「サウラス……って言ったよな、あんだ!!」

男は立ち去ろうとする青年の名を呼んだ。

サウラスと呼ばれた青年は顔をほんの少しだけ男に向けると、感情の読みとれない表情で「なにか？」と尋ねた。

「あんたの目的はなんだ？　なんでセラインの娘なんかを探してるんだ!？」

どこか不安げな様子の男に、サウラスは首を傾げて見せた。

「それを話せば、彼女に会わせてくれるのか？」

サウラスの返事に、男はゴクリと唾を飲み込んだ。

サウラスのその言葉に、男は殺気に似たものさえも感じていたからだ。

答えなければ殺されるかもしれない

それほどの覇気をサウラスは纏っていた。

「あんたもあの子がどんな子か知っていて、探しているのか？」

サウラスは男の言葉に疑問がわいたが、それを表には出さなかった。どうやら、男の様子からアスナムを探しているのは自分だけではないらしいことだけは分かった。

では、誰が他に彼女を探しているのだろうか？  
自分たちが離れるきっかけになったあの事件と、それは関係があるのだろうか？

サウラスはもう一度男に向き直った。

そして男をじっくりと観察する。  
額にびっしりと細かい汗が浮かんでいた。  
指先は微かにだが、震えているようにも見える。

「知っていると言っただら？」

探るようにサウラスは投げかけた。

男はサウラスの返答にもう一度唾を飲み込んだ。

その額からは小さな雫が一粒ゆっくりと頬を伝っていった。

サウラスはそんな男に「書けるものがあるか」どうかを尋ねた。

男は眉間に眉を寄せながらも、サウラスに小さな紙切れとペンを差し出した。

それを受け取るとサウラスはそこにさらさらと何かを書き込み、男に返した。

「これは……？」

「オレの宿泊しているところの連絡先だ。気が変わったら連絡してくれ」

男がアスナムのことを知っているのはもはや疑う余地もなかった。

だが、言えない事情があることも間違いなさそうだった。

そして、嫌な予感がサウラスにはしていた。

男が放ったあの言葉が、どうしても頭にこびりつく。

探しているのが自分だけではないとしたら、また彼女は危険な目に合うことになる。

そしてまた、あの力を使うことになったとしたら？



そう思ったたびに、背筋が寒くなった。

彼女が恐ろしいからではない。

気味が悪いということでは決してない。

サウラスにはどうしても分からないことがあった。

それが不安と、得体の知れない寒気呼び起こすのだ。

何が分からないのか？

あの事件から5年を費やして、様々な学問を学び、見聞を広め、知識を養った。

それにも関わらず分からないままだったのはやはり、『シユドラの地眼の力』そのものについてだった。

己が持つ『バラモンの天眼』はそれを持つ者、その力を使う者の命を犠牲にして成り立つものだった。

それは自分自身が体験しているが故に、分かり過ぎるくらい分かっていることだった。

だから、より大きな力を使うには、その命を差し出す覚悟が必要になる。

一方、対となる『シユドラの地眼』は『心』を犠牲にして成り立つものだと言われている。

力を使うために『心』を差し出さなければならぬのだとしたら、それは一体どのようなものであるのか？

感情の一部が壊れていくのか？

感情がむしばまれていくのか？

それとも感情の一部を切り落とすのか？

もしもそうだとするのなら、それは治ることが可能であるものなのか？

肉体の傷は時間をかければ『命』を落とすことにならない限りはなんとか治癒できる。

その方法もある。

けれど、心の傷は外から見ることでもできなければ、その痛みも様々で、結局のところは本人にしか分からない。

いや、傷ついていることを本人が気付かない場合だとて、ないわけではないのだ。

あのととき彼女が犠牲にしたものが一体なんだったのか？

彼女が力を使う見返りとして差し出した『心』はなんだったのか？

その痛みを、今もなお、彼女は抱えどこかで生きているのだろうか？

彼女を想えば想うほど、もたげる疑問は……

今のサウラスの心を抉る痛みとなっていた。

## 手掛りとなるもの(2)

男がサウラスの渡した紙をギュッと小さく握りつぶして懐にしまったのを確認してから、背中を向けた。

とりあえず、これでよしとすることにした。

この男にも時間が必要なのだろうと思ったからだ。

今焦っても仕方ないことをサウラスは理解していた。

あの事件からもう、6年になる。

彼女の両親の血縁関係を巡って、マリエステの王国を離れてからは1年の歳月が流れている。

やっと掴んだ最後の手がかかりがこの行商人だった。

彼女の父親の腹違いの弟だった。

その存在を掴むのに半年もの時間を費やした。

彼女の血縁者たちは決して口を割らなかつた。

彼女の存在自体を自分たちと切り離れたかつたようだった。

酷い最後を迎えた彼女の両親のように自分たちがならないために

黙ることが身を守る術だとも言うように。

だから、彼女の行方を追うのは容易ではなかった。

彼女が血縁を頼りにするとは考えにくかったけれど、それでもセラインという男は愛する家族を守るための保険を絶対に用意しているはずだと、そう兄が助言してくれたからだった。

セラインという男を自分よりもよく知る兄の助言は間違いではなかった。

そして、マリエステとデルブールの国境近くの小さな集落に住んでいたこの男の存在を知ったのが1月前。

集落の近くのイベイルという街に物を売りに来る男がその血縁者であることを突き止め、彼を待った。

そしてやっと。

やっと彼女の尻尾を掴んだ。

これだけ待ったのだ。

今すぐアスナムに会えなくとも、いつか会えるという確実な未来があるのなら、待つ時間は苦ではない。

行商人たちの集う市場を抜け、サウラスはその町の中の小さな酒場に向かった。

とりあえず、手がかりをみつけたことで張り詰めていた糸がわずかに緩んでいた。

旅人たちでひしめきあう酒場のカウンターに腰をおろし、強い酒を一杯注文した。

それをぐっと喉の奥に押し込めるようにして飲むと「となりイイか？」という太い声があった。

ふと見上げると、顔を枯れ草色のフードで覆った無精ひげを生やした大柄な男がそこに立っていて、サウラスを見下ろしていた。

「ああ、かまわないが」

そう答えると、サウラスの隣に腰を掛けた。

フードからわずかにのぞく男の顔は五〇歳手前くらいに見えた。

男は、手入れされていない顎鬚を触りながらサウラスと同じものを頼み、ぐっと飲み干した。

「おまえさん、ずっと付けられているって知っているか？」

男はそう言うと視線だけを左に向けた。

不用意に見ようとするサウラスに「目だけで追え」と囁き、「知らなかったみたいだな」と呟いた。

サウラスは男の助言通りに視線だけを向けた。

黒のロングコートに身を包み、同じ色のフードをかぶった二人組の男がサウラスたちを伺うように見ていた。

その姿にサウラスは息をのんだ。

6年前に見たあの男たちとまったく同じ格好をしていたからだった。

思わず立ち上がりそうになるサウラスの腕を、カウンターの下に隠れるようにぐっと男が掴み制した。

「あれはデルブールの人間だ。不用意に近づくと、おまえさんのほうが痛い目を見る」

男は言いながら、もう一杯酒を注文した。

「デルブールの人間って……あんたはなんで知っているんだ？」

「おまえさんも旅人だろう？ その手の情報屋はおさえてあるんじゃないのか？ それともまだまだ初心者か？」

そう言うと、男はサウラスの分の酒を頼み、「自然に飲め」と囁いた。

「デルブールの人間が、なんでオレを……」

「あの行商人になにか渡しただろう？ おそらくそのせいさ」

その言葉にサウラスは目を見張って男を見た。

男は涼しい顔のまま「気にするな」と言った。

「オレはあの男にも、おまえさんの探し人にも用はない。今のところはな」

「引つかかる言い方だな」

探るように見るサウラスに男は苦い笑みを浮かべた。

「いろいろあるんだよ、事情がな。おまえさんだって一緒だろう？」



そう言う男にサウラスはなににも答えられなかった。

男は無言になるサウラスに「気をつける」と言った。

「デルブルが不審な動きをし始めている。十分に気を付けて行動しろ。命だけは無駄にするなよ」

それだけ伝えると、男は立ちあがり、逃げるように酒場を後にした。残されたサウラスは男の後ろ姿を追うように、同じく酒場の外に出てみたけれどもう、男の姿をどこにも見つけることは出来なかった。

男は忽然とその姿をくらませた。

まるで、初めから存在していなかったように。

サウラスは胸をかきむしられるような不安に襲われた。

黒フードの男たちがデルブルのまわし者であるとするのなら、なぜ、アスナムを必要とするのか？

答えは一つ。

「戦争だ……」

目に入る空は黒い雲に覆われていた。

嵐がくると、街中がにわか騒がしくなった。

その中をサウラスは夢中で駆け抜け、行商人のいた場所に向かったけれど、もうそこにはあの男の姿はなかった。

雨がまた降り始めていた。

6年前の記憶を手繰り寄せるように、降り注ぐとする雨空を睨みつけながらサウラスは走った。

風がゆっくりとその強さを増そうとしていたその中を

## 忍び寄る不安

「アスナム？　またここにいたの？」

突然湧いた声に、アスナムは振り返った。

藤色の柔らかなウェーブのかかった髪が湿り気を含んだ風に舞った。

日に透ける白い肌、艶やかな桜色の唇。

美しく整った顔とは似つかわしくない粗末な木綿のワンピースに袖を通したアスナムの目に、茶色の髪を後ろで一つに束ねたそばかすの少女がニコニコ人好きのする笑顔を浮かべながらたっているのが映った。

「リチエット。本を読んでいたのよ」

言いながらアスナムはリチエットに膝の上で広げた分厚い本を見せた。

背丈の低い草で覆われた坂道で一人、本を読むのが日課になっていた。

この場所に来てしまうのは、愛しい人と過ごしたあの丘にどこことなく似ていたからだった。

思い出せば辛いのに、それでもそれに縋りついていないと辛かった。

見える景色が違つと分かっているにも関わらず

リチエットはアスナムの隣にストンツと勢いよく腰を下ろすと、その本の表紙を覗きこみ、大きなため息をついて見せた。

「『シヤンタナ創世録』だよな？ この間は『エシエンタール聖書』でしょ？ なんだってそんな古くて説教じみた本ばつか読んてるんだよ。もっと恋に燃えるお話とか読んでみたらいいじゃない？ 折角、字が読めるつてのに勿体ない」

「恋………ね」

リチエットの言葉にアスナムは寂しげにほほ笑んで見せた。

アスナムはあえて『恋愛』の本は読まないようにしていた。

いや、読めなかった。

自分には『誰かに恋をすること』など許されていない。

自分にそうすることを許していない。

ふとアスナムは左の目に触れた。

長い髪の下。

獣のなめし皮で作った眼帯の柔らかな感触が指先に触れた。

(この力が消えない限り、私は望んじやいけない)

あの事件があった日以来、戒めとして左目に眼帯をした。

もう二度と『忌まわしい力』を使わないようにと、心に刻むだけではダメなような気がしたのも理由の一つだった。

左目のことは『生まれつきの奇形を隠している』ことにした。

そういった意味で眼帯をしていると言え、誰も不用意にはアスナムに近づいてこなかった。

そうしろと言ったのは他でもないリチエットの父親であり、自分の伯父にあたる人だった。

「アスナム？」

一点を見つめたまま押し黙ったアスナムにリチエットは気遣うように声を掛けた。

「なんでもない。それより、わざわざ私を呼びに来た用事はなあに？ 朝から作ってたアレが完成したのかしら？」

アスナムはわざと明るい声を出して見せた。

するとリチエットも追求することなく彼女の話題に乗ってくれた。

アスナムはそういう心遣いをしてくれる彼女が大好きだった。

「そうよ、そう！ 木苺ケーキ、一人で焼けたんだよ。おやつの間にしようと思って呼びに来たんだ」

「ふふ、それは楽しみ」

リチエットは素早く立ち上がると、アスナムの腕を取った。

アスナムは本をたたむと引っ張られるように立ちあがり、彼女とともに家路へと急ぐ。

『アスナム！！』

ふと、誰かに呼ばれるような気配を感じアスナムは立ち止った。

振り返ってみてもそこには誰もいない。

揺れる草原があるだけだった。

けれど妙な胸騒ぎが襲った。

ぼんやりと空を見つめると、先ほどまでは雲一つなかった空に薄気味悪い灰色雲が手を広げ始めていた。

「嵐がくるみたいだね。山の天気は変わりやすいから、仕方ないよ」

リチエットがそう言った。

晴れていた空が急に雨になることも別段珍しい話ではない。

ただ、今日の空は妙な不安を掻き立てるのだ。

湿った空気に雨の匂いが混じっている。

「考えすぎ……かな」

ポツリと呟き、不安を取り除くかのようにアスナムはリチエットとともに走った。

そう、何も起きない。

起きるわけがない。

あの事件から6年も経っている。

自分を探す人間など、いようはずがない。

けれど、アスナムの不安は消えることはなかった。

家についたとき、それはさらにはっきりと彼女の心に巢食った。

「おかえり、リチエット、アスナム」

帰り着いた家にいたのはあごひげを生やした中年の男だった。

リチエットの父であり、自分の伯父であるその人が、まだ帰る時間でもないのにそこにいた。

いや、嵐が来るのなら早く帰っても別段驚くことではないけれど。

彼の目に何かに脅えるような、そんな気持ちが見え隠れすることに、アスナムは不安を抱いたのだ。

「今日は早いんだね、父さん」

リチエットは気づいていないのか、明るくそう言った。

男は気持ちを押し隠すように笑い「品物が売り切れてしまった」と答えた。



「荷車全部ですか？」

問うアスナムの目を男は見なかった。

軽くうなずき「イイ匂いだな」と話を逸らした。

「ああ、私が木苺ケーキを焼いたんだ。アスナムはどうまくは出来てないけど、父さんも食べる？」

リチエットの問いかけに男は「ああ」と小さい声で答えた。

「トンゴ伯父さん!!」

アスナムが声を掛けた時、地下の階段を駆け上がって中年のふくよかな女性がやってきた。

「あら、あんた。今日はやけに早いじゃないか？」

女性の登場で、アスナムはトンゴに問う機会を失ってしまった。

トンゴは少しホツとしているような顔で女性を見ると「よくない噂がたっている」と言った。

「よくない噂？　もしかして、また戦争かい？」

女性はそう言うと鍋に掛けていた温かいミルクをカップに注ぎ、ト  
ンゴに手渡した。

「いつもの小競り合いじゃないのかい？　この里は大丈夫なの？」

女性に差し出されたミルクを一気飲みすると、トンゴはふうつと一  
息ついた。

それから「こんな小さな里になど大国が興味を持つわけがない」と  
言った。

その言葉はまるで自分に言い聞かせているみたいだとアスナムには  
思えてならなかった。

「大国の支配者たちはなにを考えてるんだろうねえ。  
特にデルブルーだよ。」

3年前に代替わりしてからやれ軍事強化だの、領地争いだのってせ  
んそうばっかじゃないか！

前皇帝がマリエステと和平会談までしたのを無駄にしてさ。

戦で損をするのはいつだって、弱い私たちのような庶民だって言うのにね」

「ジル……誰が聞いているかわからないんだから、あまりそういうことは言つもんじゃない。特にデルブールの批判はな」

トンゴは怒りあらわなジルをたしなめた。

「どうして……戦争なんてしたがるの」

ポツリ……思わずもれた問いにトンゴは優しくアスナムの頭に手をのせた。

「なぜだろうな。でも、それが人の欲というものさ。大きな力を持つてしまうと、より大きな見返りがほしくなる。

人より上に立ち、神の地位を望む。

人である限り、それは不可能なはずなのに……儂い夢を求めてしまふ。

人とは愚かだよ」

いつになくトンゴの言葉には重みがあった。それがズシリと胸に響く。

「いいかい、アスナム。」

忘れてはいけない。

力はそれを扱う人によるんだ。

キミは人にない大きな力を持っている。

それを己の欲望のために費やしてはいけないよ。

自分を不幸にするような生き方を、後悔するような選択を、絶対に  
してはいけないよ」

優しく包むその瞳に、アスナムは涙が出そうになった。

けれど、ぐっとこらえ大きくうなずいた。

まるで別れの言葉のようで、切なく胸がしめつけられた。

この予感が当たらなければいい。

この時間が永遠に続いてくれればいい。

そう心から願わずにはいられなかった。

## 帝国の影（1）

予想よりもはるかに雨は降っていた。

嵐が来そうだとは思っていたけれど、これほどまでにひどいものには出会ったことがなかった。

激しく戸口や窓にうちつける風雨に、アスナムは眠ることができな  
いでいた。

嵐が怖いわけではない。

昼間の胸騒ぎをまだ引きずっていた。

夕食の時間はいつもと変わりなく楽しいものだったし、なによりリ  
チエットのケーキは美味しかった。

いつも元気のない自分を励まそうと、リチエットなりの心遣いが嬉  
しくてお替わりまでしてしまっただくらいだ。

不安に感じることは何一つないはずなのだ。

本当の娘と同じように接してくれるトンゴヤジル。  
姉妹のように仲の良いリチエットとの時間。

幸せで心安らぐはずなのに、それでも胸をかきむしるようなげざワ  
ワしたこの乾いた思いはなんなのだろう？

デルブルとマリエステの戦争の話を知りたいだろうか？

彼もその戦火に巻き込まれるのかもしれないと思うから働くものなのだろうか？

寝がえりを打ち、目をつむる。

まだ幼かったアスナムが眠れなかった時、父が教えてくれた。

無心になって目を閉じる。

そうすればいつのまにか眠ってしまうと　だが、それは物々しい足音で遮られることになった。

(一体なに?)

胸を不安の暗雲が包み込もうとしていた。

アスナムがいるのは地下の貯蔵室の小さな物置き部屋だった。

もっと違う部屋があったのだけれど、自分はその方がいいと我儘を通してのことだった。

それにトンゴも『もしものとき』に対応できる場所だからとそれを許してくれた。

まさか、今日がその『もしものとき』でなければいいのだが、足音

は上の階から響いてきている。

一人や二人といった感じではない。

あちこちをバタバタと歩き回り、時折怒鳴り声も聞こえてくる。

耳を澄ましてみたが、外の音と足音で聞き取れない。

だが、『娘をどこに隠した』という内容は聞き取ることができた。

(まさか……私!!！)

考えられることは自分しかない。

自分の力を知っている人間にまた見つかったのだ。

そのとき、物置き部屋を叩く小さな音が響いた。

それと同時にリチュエットの小さな声が聞こえてきた。

「アスナム！ アスナム、起きてる？」

音をたてないように静かに物置部屋の扉を開けると、ところどころ破れた粗末な獣の毛皮のフードをかぶったりリチュエットが神妙な面持ちで立っていた。

「リチエット、何があつたの！」

リチエットは静かにという代わりに口に人差し指を当てて見せ、同じ毛皮のフードをアスナムに手渡し「急いで」と急ぎたてた。

「ここから逃げよう、アスナム」

「私のことでしょ？ 私を探しに来た人がいるんでしょ？」

リチエットはそれには答えず、アスナムの手を引っ張った。

「理由なんていいの！ 今はとにかくここを出なくちゃ！！」

引っ張った彼女の手がわずかに震えている。必死で平静を保とうとはしているけれど 確信に変わる不安に、しかし今出来ることは彼女とここをでることしかなかった。

アスナムは急いでフードを被ると、リチエットともに貯蔵室から家の裏庭に抜けられる通路に向かって走った。

すると遠くから「あそこだ！」という低い怒声が響いてきた。

振り返ろうとするがリチエットに引っ張られ見ることは叶わなかった。



ただ分かるのは誰かが自分たちを追っているということ。

そしてそれには絶対につかまってはならない ということだった。

裏庭にでる扉を開ける。

叩きつける強い雨と吹き荒れる風の中、アスナムはリチエットに連れられるままに飛びだした。

大雨でぬかるんだ土は滑りやすく、走る足をもつれさせる。

だが、立ち止まっている余裕などない。

暗闇でどこに向かっているか分からなくても、とにかくここにいてはいけない。

焦る心に反して、足はなかなか進まなかった。

迫ってくる声は次第に近くなってきた。

このままでは逃げ切ることなど叶いそうにない。

不意にリチエットの足が止まった。

アスナムは勢い余って彼女の背中にぶつかってしまった。

「リチエット、どうしたの？ 早く逃げないと」

リチエットはゆっくり振り返ると、懐から小さな革袋を取り出し、アスナムに手渡した。

「これ、父さんから預かったもの。アスナムに渡しとく」

「リチエット？」

「この中に連絡先が書いてある紙が入っているから、そこへ行けて父さんが言ってた」

「リチエット！」

「このままじゃ二人ともつかまっちゃう。あたしが囹になるから、その隙にアスナムは逃げて！」

「止めて！！ そんなことして、あなたにもしものことがあったら！！」

だが、必死の訴えにリチエットは耳を貸さなかった。

アスナムの眼帯を解くと、自分の左目に当てた。

「あたし、アスナムが大好き。だから、どうしても逃げ延びてほしい。アスナムには神様の力が宿ってる。それを変なヤツには使わせられない!!」

「リチエット……」

「アスナム。大丈夫。きっと大丈夫。父さんも母さんも……みんなアスナムが大好きだから。それだけは忘れないで」

そう残してリチエットは迫ってくる光に向かって走り出した。

アスナムには追うことができなかった。

リチエットは自分のために命を掛けて逃げさせようとしている。

その思いは無視できない。

でも、それでいいのか？

このまま一人で逃げてしまってよいものなのか？

狙いは自分。

『シユドラの地眼』を持った自分なのだ。

もしもリチエットにその力が宿っていないと分かったら、彼女はど  
うなる？

(ダメ! !)

渡された革袋を胸の中に押し込んで、アスナムは振り返る。

そのときだった。

アスナムの耳に銃声が届いた。

## 帝国の影（2）

もう、迷いはなかった。

アスナムは走り出した。

泥が足にまとわりついてうまく走れず、何度となく膝をついた。

だが、立ち止ることだけはしなかった。

（リチエット！！　どうか無事でいて！！）

小さかった光が徐々に大きくなる。

誰かが泣き叫んでいる。

前方が明るくなり、うっすらと姿を見せる。

目に映るのは悲痛な光景だった。

何人もの屈強そうな男たちが、口元をだらしなく緩めながら何かに剣を突き立て、銃を放っていた。

ゆっくりと近づくとアスナムは目を見張った。

男達が弄んでいたのは中年の男女の身体だった。

目玉をくり抜かれ、腿には剣が突き刺さっていた。  
足や腕は銃に吹き飛ばされ、あたりに肉片が飛んでいる。

折り重なるように倒れる彼らを男達は玩具にしていた。

舌を切られているのか、二人からはうめき声しか聞こえてこない。

「おじさん……おばさん……」

変わり果てたトンゴ達の姿に全身が凍りついた。

そして、その傍らに彼女はいた。

それを冷ややかに見つめる男の腕に抱えられながら泣き叫んでいた。

『やめて!』『助けて!』と

「リチエット!」

思わず叫んだアスナムの声にリチエットの顔が凍りついた。

ゆっくりと彼女の目がアスナムを捉える。

トンゴとジルを痛みつけていた男達の手も止まり、ゆっくりとアスナムに近づいてくる。

アスナムは恐怖で震える足に力を入れ、ギョツと拳を握りしめた。品定めするように見つめる男をまっすぐ見据える。

それからその男に向かってリチエットを放すように告げた。

リチエットの瞳は変わらずアスナムを見つめていた。

その瞳が訴えている。

『逃げなきゃダメだ』と。

けれど、アスナムはその願いを聞き入れる気はなかった。

自分のためにこれ以上の犠牲になる人を見たくなかった。

これ以上、大好きな人たちを失いたくなかった。

大好きな人を守れるのであれば、自分のことなどどうでもいいように思えた。

彼女を助けるためならば、地眼の力を解放することなどいとわない。

それがどんな代償を必要にするとしても……

けれど、今、この状況で地眼の力は解放できなかった。

リチエットを巻き込まない保証がどこにもないのだ。

男は金属製の豪華な彫りの施された鎧に身を包んでいた。

鎧には傷一つなく、鈍い輝きを放っていた。

彫の深い顔立ちは三十代半ばぐらいといったところだろうか。

濃紺色の髪をした男からは威厳とも畏怖とも言えるものが感じられた。

男は黙ったままりチエットを下ろした。

それからゆっくりと腰の剣を抜くと、リチエットの首にそれを突き付けた。

「おまえがアスナムⅡウルバンか？」

「そうよ。だからリチエットを放して！ あなたたちの目的はわたしでしょう！！ だったら彼女は関係ないわ！！」

「そうか」

男は短く答えると一瞬、底意地の悪い笑みを浮かべて見せた。

その笑みにアスナムは背筋が凍る思いがした。



その刹那。

男はリチエットの首をかき斬った。

リチエットの首から一気に赤い血が噴き出した。

首を抑えるリチエットが倒れ込んでいく。

音もなく、色もなくなる。

彼女の叫び声も男達の下品な笑い声も聞こえなくなる。

手足の感覚がなくなり、全身が冷たくなった。

「リチエットオオオオツツ！！」

駆け寄って彼女の体を抱き上げる。

泥にまみれた彼女の首後はそれでも止まることなくアスナムの全身を濡らしていく。

見開かれたリチエットの瞳に自分の姿が映っていた。

「どろろして……どろろしてなの……！！」

左目が熱くなる。

リチエットが死ななければならぬ理由がどこにあったのだろうか？

どうしてこうも簡単に人の命を断てるのだろうか？

(違う!! 私にもできる!!)

ドクン、ドクン。

脈打つ音が耳元近くで聞こえてくる。

『受け入レヨ。ソシテ解キ放テ』

頭のどこかでそんなザラリとした感触を伴った声が響いた。

「おまえなんか……おまえなんか死んでしまつがいい!!」

左目から何かが解き放たれる。

それらは一斉に鎧姿の男に向かっていく。

（死ネ！！ 死ネ！！ 死ンデシマエ！！）

男はしかし、身じろぎひとつしなかった。

それどころか、面白そうにクツと笑い、右腕を高く掲げて見せた。

瞬間。

男の右腕から青白い光が放たれ、辺り一帯を包み込んだ。

「きゃあああああつっ！！」

光に目を焼かれるような痛みがアスナムを襲い、両手で襲つ。

一瞬の後。

静寂が訪れ、アスナムの目から痛みが消え失せる。

ゆっくりと覆っていた手を離し、男を見る。

男はかすり傷ひとつなく、余裕の頬笑みをたたえ佇んでいた。

### 帝国の影(3)

「どうして……?」

確かに地眼の力を解き放った。

父を殺されたあの日と同じように

あときは確かに灰のようになって相手は死んだのだ。

しかし、目の前には傷一つ負うことなく平気な顔をして立っている男の姿があった。

一体、何が起こったのか。

アスナムにはまるで理解ができなかった。

「陛下！ 大丈夫ですか!!」

「ああ、問題ない。ゴルギア=ビシュヌはそこにいるのか、レーヴン?」

(ビシュヌって……!!)

聞いたことのある名前だった。

忘れようと思っても忘れられない記憶の底にこびりついた名前だった。

呆然と立ち尽くすアスナムのことなど気にも留めていない様子で男は駆けよってきた鎧姿の青年に向かって言った。

茶色い髪を高い位置で一つに結びあげた青年は男に向かって頭を下げると、すぐにそばに控えた。

そのわきをすり抜けるように、小さな背をした腹の出た中年の男が姿を見せた。

「お呼びでしょうか、陛下？」

「ゴルギア、おまえの言ったことは正しかったようだ。アレが地眼の持ち主に間違いなかった」

「そつでございましょう。」

昔から地眼の持ち主は絶世の美女であると謳われておりましたから。

そばかすだらけの小汚い娘であるはずがございませぬ。

それにしても陛下もムチャをなさりますなあ。やはりシヤンタナの王となるべきお方は器が違つということですか？」「

言いながらゴルギアと呼ばれた男は卑しい笑みを浮かべた。

陛下と呼ばれた鎧の男はゴルギアを一瞥すると、黙ったまま立ちつくすアスナムに目を向けた。

「レーヴン。アレを船に乗せろ。すぐに戻るぞ」

「はい、陛下」

レーヴンは再び頭を下げるとゆっくりとアスナムに近づいてきた。

そして「参りましょう」と言った。

「嫌よ！ あなたたちなんかと絶対に行かないわ！！」

後ずさりして逃げようとするものの、品のない屈強そうな男達に取り囲まれてしまった。

「大人しく従っていただければ乱暴なことはいたしません。それともここに未練がございますか？」

レーヴンは冷ややかな眼差しを向けながらアスナムに尋ねた。

その瞳にアスナムは寒気がした。

人の温かみなどそこから微塵も感じなかった。  
人を殺すことに躊躇などない　そう感じた。

アスナムはしびしび頷いた。

ここにはもはや自分の居場所はない。

リチエットたちを失った瞬間に、自分の居場所はまたしても消えて  
なくなったのだ。

それでも関係のない里の人たちを巻き込むわけにはいかなかった。

「一つだけ約束して！　彼らをきちんと埋葬するって！　お願い！」

アスナムの懇願にレーヴンは「あなたに交渉権はありません」と冷  
たく答え、踵を返した。

「それならせめて、彼らを埋葬するまで待って！！　そうしたらど  
こにだって行くから！！」

「交渉権はないと言ったでしょう。聞こえませんでしたか？」

レーヴンの容赦ない冷徹な言葉に、アスナムは黙って頷くしかでき  
なかった。

それでもなんとか僅かな時間を貰い、彼らの元に駆け寄った。

見るも無残で、あまりの姿に胸が押しつぶされそうになった。

楽しかった時間が走馬灯のように頭の中に甦り、目頭が熱くなった。

涙を流せなかったのは、そんな自分を誰にも見せたくなかったからだ。

泣いてしまえばきっと、止まらなくなってしまう。

もう誰も自分を優しく抱きしめてはくれないのだ。

心を強く持たねば、この先に待つ未来に耐えられそうになかった。

胸元で手を合わせ、大好きだった彼らに向かって小さく一礼した。

そして強く願った。

彼らがエシエンタールの胸の中へと無事たどりつけることを。

レーヴンに従って歩き出す。

雨はいつの間にか小雨になっていた。

森に隠れるように停泊していた大型の飛行船が姿を見せた。

金属の滑らかな光沢が夜の中で鈍く輝き、動力エンジンが低い唸り声を上げながら、森の木々を揺らしていた。



「飛行船？」

「違います。これは我がデルブール帝国が誇る飛空母艦シリオンです」

「飛空母艦？ デルブール……」

息を呑み、レーヴンの鎧を見る。

肩のところに確かにデルブール帝国である『獅子と薔薇』の紋章が  
あしらわれていた。

「陛下がお待ちです。急ぎなさい」

逃げ出したかった。

嫌な予感はこのことだったのだ。

デルブールに捕えられた理由は一つ。

自分の力を戦争の道具にするつもりなのだ。

関係のない人たちを自分に殺させるつもりなのだ。

そんなこと、絶対にしたくなかった。

おそらく、その中に彼も……サウラスも入ってしまうのだろうか。

サウラスのことが頭によぎった瞬間、アスナムは走り出そうとしていた。

しかし、母艦から降りてきた鉄の鎧に身を包んだ兵士たちに腕を捕まれ、どうすることもできなかった。

引きずり込まれるように母艦の中へと入っていくアスナムの耳に――瞬サウラスの声が聞こえたような気がした。

自分の名を呼ぶサウラスの声。

でも、アスナムは首を振った。

自分が彼を求めたから聞こえた幻聴に違いないのだ。

彼がここへ来ることはない。

彼の中で自分はもう過去となり、死んでいるに違いないから。

失意のまま、アスナムはブリッジに連れて行かれた。

そこで待っていたのはリチャットを手に掛けた男だった。

「遅くなり申し訳ございません、陛下」

「どうもその女は余に盾ついたクズどもに執着があるようだな」

その言葉にピリツと痛みが走った。

クズではない。

クズなどであるはずがない。

「はい、陛下。どうしても祈りを捧げたいと」

「エシエンタールか……」

レーヴンが黙って頷くと、男は面白くなさそうに眉を寄せた。

だが、すぐに表情を崩し、くるりと背を向けると「焼け」と告げた。

「仰せのままに」

アスナムには二人のやりとりがまったく分からなかった。

だが、そんなアスナムを一人取り残し、兵たちはきびきびとした態

度で動いていた。

次の瞬間、前方がカッ　と眩く輝き、地を引き裂くような轟音が響き渡った。

アスナムは思わず両手で顔を覆った。

一瞬の後、放した手の向こうに見えたのは空まで焼き尽くしてしま  
いそうなほど激しく唸る炎だった。

森は真っ赤に燃えあがり、炎は里を飲み込んでいく。

「いやあああつつつ!!」

男の大笑いが響く中、アスナムはただ泣き叫ぶことしかできなかつた。

## 宙を掴む手

叩きつけるような雨に視界を遮られながらも、サウラスは足を止めようとはしなかった。

行商人の住む里は、サウラスが宿をとっていた街から然程遠いところにあるわけではない。

ただ、雨のせいで舗装されていない路面に足を取られ、前に進むのに時間が要るだけだ。

急ぐ心。

しかし、その気持ちとは裏腹に距離は縮まらなかった。

内心、サウラスは舌打ちしたい気持だった。

どうしてこうなってしまっただろうか？

あと一步。

あと一步で彼女と会える。

そこまで来ていたはずなのに。

自分にもたらされた情報はあまりにも残酷なものだった。

間にあわなければならぬ。  
自分は何としても間にあわなければならぬ。

ぬかるんだ地を蹴り、鬱蒼とした森の奥へと進む。

枝が、根が、行く先を塞ごうと手と足を延ばしていた。

それを剣で振り払いつつ、サウラスは前へ前へと進む。

その足がピタリと止まった。

銃声が聞こえた。

（アスナム！！）

自分が調べた限りの情報では、この里で争い事が起きるような要素も、そういった人もなかったはずだ。

里の人間はみな、デルブルーとマリエステの小競り合いに巻き込まれ、住む土地を失った者たちだった。

辛い経験をした者同士だからこそ、肩を寄せ合ってひっそりと生きてきた者たちが争うなどとは考え難い。

だからこそ、アスナムはこの里に受け入れられたのだらうと思うの

だが

だとすれば、里のモノ以外のなにかがそこにいると考えるほうがしっくりくる。

押し寄せる不安と予感に押し出されるように、サウラスは走った。

銃声のするほうへと、まっすぐに

声がした。

泣き声と叫び声。

鎧姿の男が一人、少女らしき影を抑え込むように抱えている。

その傍らで、何人もの傭兵らしき男達が地面に向かって銃を放ち、剣を振りおろしていた。

(なんだ……?)

物陰から隠れるようにしてサウラスはその様子を窺った。

そして、そこに走り込んでくる少女を見て心臓が止まりそうになった。

土砂降りの雨の中、髪だけでなく、すべてをそれに晒した愛しい彼女がそこにいた。

「ア……」

『スナム』と叫びそうになって背後から急に口を押さえられた。

ふと見ると、自分よりも一回りは大きい体軀をした男が立っていて、自分の口をその手で塞いでいた。

フードの下からのぞく無精ひげ面には見覚えがある。

酒場でサウラスに『気をつける』と忠告した男だったのだ。

「いいか、絶対に声を上げるな。ここで飛び出したら、おまえは確実に死ぬ」

低く、ドスのきいた声で男はそう囁いた。

だが、サウラスにとって命などどうでもよかった。

手の届くところに彼女がいる。

ずっとずっと、彼女のことだけを想い、耐え、そしてやっと見つけたのに……！！



「相手が悪すぎる。いいか、少し様子を見る。それから行けそうになつたら援護もしてやる。今は無駄に動くな」

初対面ではないが、男を信用できるほどには親しいわけでもない。

だが、それでも男は「今だけは信じる」と言った。

口を押さえられたまま、サウラスは前を見ていた。

鎧姿の男に向かって彼女が何か叫んだ瞬間。

男が足元に座る少女に突き付けた黄金の刀身をした剣が素早く動いた。

あまりの衝撃にサウラスは目をそむけることもできなかつた。

男の手を振り払うことさえもできなかつた。

雨足がわずかだが弱まり、鎧姿の男を取り囲むように灯りを持った鉄の鎧姿の兵士たちによって、それは鮮明に浮かび上がる。

少女の首からは真っ赤な血が空へと噴き出し、ゆっくりと崩れ落ちていく。

泥に半分埋まるような少女の体を、彼女がすぐに抱きかかえた。

「リチエットオオオオツツ!!!」

彼女の絶望の声がサウラスの心を引き裂くようだった。

「おまえなんか……おまえなんか死んでしまうがいい!!」

彼女の怒りの声が耳に届いたとき、サウラスは男の手を渾身の力で押しのけていた。

走り出し、手を伸ばしていた。

『アスナム』と叫んでいたのかもしれない。

その力を使つてはならないと。

その力を使って自分自身を壊してはならないと。

そう思うのに、彼女の力はまたしても解き放たれる。

（ダメだ!! 間にあわない!!）

天眼の力を解放しようとして、サウラスが力を込めようとした瞬間。

男が空に向かって右の腕を高らかに上げたのが見えた。

(なに！？)

アスナムから解き放たれた亡者の群れが男を取り囲むその時に、男の右の腕から青白い光が解き放たれた。

それは一気に辺り一帯を包み込み、視界は真っ白くなった。

それと同時に、サウラスは言いようのない痛みを襲われた。

吐き気と体を割くような痛みが襲い、思わずその場に足をついた。

体の芯を凍らせるような冷気を纏ったその光の感覚は、アスナムの放つ『地眼の力』に似ている感覚だった。

「うっ……」

うずくまりながら前を見る。

戻ってくる視界に彼女も同じようにうずくまり苦しむ姿が目に入った。

「おい、大丈夫か!!」

駆け寄ってくる男が支えるようにサウラスを立たせた。

「おいつ、そこで何をしている!!」

突然、背後で声が響いた。

隣の男が小さく「チッ」と舌打ちした。

「おまえさんには悪いが、ここは引くぞ。ここから無事に出られたら、その時に改めてその怒りを受ける」

そう言うや否や、男はうまく力の入らないサウラスの身体を担ぎあげ、クルリと踵を返すと勢いよく走りだした。

「待て!! 逃がさん!!」

数人いるらしいデルブールの兵士を簡単に打ち倒しながら、男はサウラスがやってきた方向へと走る。

雨がさらに弱まり、霞む視界に彼女の小さな後姿が目に入った。

長髪の髪を結いあげた男とともに、どこかへ去っていく彼女の後姿に向かって、彼女の名前を叫んだ。

それは声になったのか、それともならなかったのか。

それすらも分からないものだったけれど……

彼女が一瞬立ち止まり、振り向いたようにも見えた。

だが、もうその姿は遠く、延ばした手は宙を掴むだけで

虚しさが雪のように胸へと降り積もる。

憤りが荒れ狂う大波のように胸へと押し迫る。

彼女を求め心臓が、堪らない痛みとなって胸を抉る。

宙を掴む手にギュッと力を込めてサウラスは誓った。

絶対に彼女を取り戻すことを。

それがこの先、どれほど危険で過酷なものになるうとも

## 決意とともに

サウラスは目を開けた時、自分がどこにいるのか一瞬分からなかった。

粗末なベッドに、最低限の生活道具しか置かれていないその部屋に見覚えなどなかった。

ただ一つだけ。

部屋の戸口の脇にある椅子に無造作に引っかけられた枯れ草色の上着には見覚えがあった。

そう、それは宿屋で自分に忠告をし、里から自分を連れ出した男のものだった。

ゆっくりと起き上り、周りを見る。

怪我はなく、痛みも特にない。

あの引きちぎれるような痛みが本物の痛みであったのかさえも、今はあやふやになるくらいに何もなかった。

男の姿はその部屋にはなかった。

狭く、埃の臭いがした。

掃除をしてあるわけでもなければ、生活しているというかんじも見

受けられない。

たぶん、寝泊りだけにここを利用している。

そんな感じだった。

ベッドから立ち上がると、サウラスは自分の荷物を探した。

だが、旅人用のマントも腰に下げている長剣も見当たらない。

そのとき、扉がゆっくりと開いた。

カーテンが締め切られた部屋に、僅かにだが日の光がそこから差し込んだ。

警戒して構えるサウラスに、しかし、入ってきた人物は苦笑いを浮かべ「起きられるようにはなったな」と言った。

サウラスよりも一回り以上大きく、筋肉質のたくましい体つきの男の顔には右の眉の上あたりから頬に掛けて、斬られた傷らしきものが残っていた。

濃い茶色の髪は無造作に伸ばしているのか、後ろで邪魔にならないように一つで縛られていた。

荒々しいとさえ思える中年の男はゆっくりと傍にあった椅子を引き寄せ、そこに腰を下ろした。

うつすらと残る記憶から、この男がただの旅人という線はなく、むしろ鍛え上げられたその肉体と彼の持つ力強い雰囲気から、腕の立つ戦士 という印象を受けた。

「オレの荷物を返してもらおうか？」

その雰囲気には臆することなくサウラスは言った。

だが、男は小さく首を振った。

「話を聞いてもらうまでは無理だ」

サウラスには男の意図がよく見えなかった。

自分になんの話があるというのだろうか？

そんな話を聞いている暇があるのなら、すぐにでもここを出てアスナムを。

愛しい人を追いたいと思った。

「おまえさんにとっても悪い話じゃない」

「言いたいことがあるならばっきり言ってもらおうか？」

そう言うサウラスに男は小さくため息をついた。



「彼女を救えるかもしれない話だったら、素直に聞いてくれるのかい？」

男はそう言つと意味深に笑つて見せた。

「あなたは一体何者なんだ？」

「『あんた』は止めにしよう。オレは『ヤークン』。デルブルとマリエステの戦争を止めたいと思つている老兵としとくかな」

そう言つてヤークンと名乗つた男は小さく笑つた。

老兵と言うほど年は取つていないと思つたが、サウラスはあえてそれを口にしなかつた。

「オレはサウラス『バルジー』」

「知っている。悪いが彼女のことも知っている」

「な………！！」

あまりのことにサウラスは続ける言葉を見つけれなかつた。

そんなサウラスに男は「悪いな」と答えた。

「事情を今は話せない。ただ、絶対におまえさんの『敵』じゃないし、これからも『敵』になることはない」

「言葉だけならなんとも言える」

サウラスの返答にヤークンは「今は証明できない」と断った。

「それで信じると？ 都合がよすぎるだろう」

「そつだ、都合がよすぎる。」

だが、それでも信じる。

オレは戦争を止めたいと心底願っている。

この想いに偽りはない。

そのためなら、なんだってする。

ここで、オレの指を切って、おまえさんに捧げたっていい」

そう言うと、男は懐からナイフを取り出し、すぐそばのテーブルに突き立て『やるうか？』と言うように自らの手をその傍に置いてみせた。

男の揺らぐことのない真つすぐな黒にも近い茶の色の瞳に、サウラスは首を振ることしかできなかつた。

「もついい。あんたを信じよう」

「すまん。時が来たらすべて話そう。だが今は、おまえさんの言葉に甘えさせてもらおう」

そう言うと、ニツと白い歯を見せ笑い、ヤークンは突き立てたナイフを抜き、テーブルの上に静かに置いた。

それからサウラスに「帝国に潜入してほしい」と言った。

「なんだって？」

ヤークンの言っている意味にサウラスは眉を寄せた。

意図するところが全く見えず、困惑もしている。

帝国に向かうことになるのは間違いはない。

そこにアスナムがいるであろうし、彼女を助けるためには帝国へ渡るのは必須事項だろう。

(だが、潜入とはなんなんだ?)

帝国に潜り込んで何をしろと言いたいと?

この男が言うことが分からない。

「オレはこのまま『シユドラの地眼』を持った女をデルブルール皇帝の駒にさせるわけにはいかないと思っている。」

そのために、おまえさんにはデルブルールの兵士として帝国に潜入してもらい、彼女の奪還を計ってほしいんだよ」

「なんでオレなんだ？ それならあんたのほうが適任じゃないのか？ あんたは相当腕が立つように見えるが」

そう言うサウラスにヤークンは苦い笑みを返して見せた。

「オレもね、それが出来るのならそうしたいところだが。」

生憎、オレはあの国では『厄介者』として手配中の身の上でね。自由には動けないし、兵士に志願するには年を取り過ぎている」

「なるほどな。そうだった理由は？ 今は話せない……そういつい」とか？」

ヤークンは頭を申し訳なさそうに掻きながら「事情が複雑でね」と答えた。

「なら……『兵に志願』とはなんだ？ 簡単に入れてもらえるものなのか？」

サウラスの質問にヤークンは大きくうなずいた。

「デルブルは戦争を起こそうとしている。そのための『駒』を多く募集しているのさ。戦争に出たと思って思うヤツなら自国の民であるのが、なかるうが関係ないらしい」

そう言うとヤークンはギリッと強く唇をかみしめた。

瞳が曇り、拳は強く握られ、少し震えているようにさえ見えた。

「だからオレみたいな素姓の知れない人間でも、簡単に兵士になれると？　だが、そんなに簡単に帝国の尻尾をつかめるようなところに入れるとは思えない」

そう言うサウラスにヤークンは「心配いらない」と言った。

「帝国内におまえさんを支援する人間がいる。信じて、頼りに動いてもらえばいい。おまえさんの目的は一つだろうし、そうしてもらえれば、こちらは助かるのだしな」

「また『信じる』しかないということか」

苦い呟きにヤークンはまた小さく頭を下げた。

「今、おまえさんにどうしてもすべてを話せないんだ。僅かでも情報漏れたらダメになっちまうんだ、すべてが。頼むオレも心苦しいが、この礼は必ずすると誓おう」

名前しか明かさない男。

デルブルー帝国に追われる身の上の男。

素姓の知れない男ではあるけれど、言葉の内にもった決意は『信ずる』に『値する』ものであると心が叫ぶのが聞こえた。

これは理性で推し量るものではなく、本能で感じ得るものだった。

大きく深呼吸したそのあとで、サウラスは「わかった」と答えた。

「オレはオレの目的を果たすために。あんたはあんたの意思を通すために。その役、引き受けよう」

異国の地へと連れ去られた愛しい人のために。

それが彼女を救う道になると言うのなら。

これが自分に課せられた神の試練だと言うのなら。

この決意とともにそれに挑もうではないか。

( エシエンタール!! オレは、絶対に負けはしない!! )

今はなき神に向かって、サウラスはそう心の中で叫んだのだった。

## 志願者たち（1）

デルブール帝国の首都アシユナバールにヤークンの指示通り、サウラスはやってきていた。

自分の育った環境とは真逆である帝国には、土の臭いが無い。

埋め尽くすのは鉄の高層な建物ばかりであったし、整備された道路に木々が育つ余地さえもない。

見上げる空には無数の飛行船が行き交い、建物と建物の間を縫うように人工知能を搭載した機関車が往来している。

帝都内においては人々は階級に分かれ、物を購入する場所も店も指定がなされ、区画別にレベル分けされている。

帝都の中心に位置するザステイアン城塞に近づくには通過パスを必要とする。

一般の都民は勿論、その手前までしか行くことができないし、城塞内部に立ち入れるのも皇帝もしくは皇族の認証印が必要となる。

まるで迷路のように張り巡らされた複雑な道路は、マリエステとの戦争を考慮して作られたものでもある。

一步、迷いこめばそこから抜け出すのは至難の業であり、区画を間違えば、そこには闇も潜んでいる。

貧富の激しい国であり、人身売買や薬物などの闇取引も盛んに行わ



れているのに、今の皇帝が座位についてからは取り締まりもない。

強者だけが生き残ればいい。

腐敗と闇に覆われた世界がサウラスの前には広がっていた。

ヤークンに渡された帝都内の地図を頼りに『兵士志願者』の受付をしているという一般居住区内の宿屋に向かう。

帝都の入口にある駅へ行き、改札口に立つ鉄仮面の兵士に行き先を告げて通行パスを見せる。

鉄仮面の兵士はそれを一瞥するとすんなりとホームへと通した。

「一般車両は3〜5番だぞ」

その言葉に従い、サウラスは3番のホームに立った。

サウラス以外にも何人かがそこに並び、機関車を待つ。

ふと、サウラスは前を見た。

向かいの1番、2番のホームには高級そうなドレスやスーツに身を包んだ紳士、淑女らしい男女が備え付けられた豪華なベンチに並んで座り、機関車を待っている。

3番からはそのようなものではなく、立っている者、その場に座り込む者、様々だった。

全てにおいて差別化がしつかりなされている。

その状況に、サウラスはため息しか出てこなかった。

自国では全く考えられないことに、これがこの国の姿なのだということを感じ知らされた。

全てにおいて、『デルブルー』と『マリエステ』は真逆なのだ。

これで争いが起きないわけがない。

それにしても　とサウラスは思った。

ヤークンに渡された地図にもう一度視線を落とす。

帝国内での潜入調査とアスナムの奪還に同意した後、ヤークンはこの地図を説明しながら書きあげていった。

相当入り組んでいるはずの道の一つ一つをそれは丁寧に、目標物となる物まで明記して彼は教えてくれた。

機関車や飛空船の利用方法、帝国内部のことなども同じように解説

してくれた。

濁すところもあるように感じたヤークンの素姓がますます気になつてしまったのは確かだ。

推測するに お尋ね者らしい彼は、おそらくこの国と深くかかわる人物に違いない。

その証拠にサウラスは彼から『ザステイアン城塞への通行パス』を渡されていたのだ。

そしてもう一つ。

彼は帝都に向かう前にこう言った。

『城塞内部への皇族印入りのパスは受付で渡す』と

ただの老兵では絶対でない。

おそらく、皇族内部と深い関わりがある人物。  
もしくは相当なコネクションを持っている人物。

どちらにしても『敵』にはしたくない相手といつことは確かだろう。

『ファーンツツツ』

という余韻を含ませた警笛が鳴り、機関車は滑るようにホームに入ってきた。

ゆっくりと開く扉から乗り込み、2人掛け用のベンチの窓際にサウラスは腰を下ろした。

地図と通行証を胸ポケットの奥にしまいこむと、窓に肘をつき外を眺めた。

そしてギリつと唇をかむ。

この国のどこかにアスナムはいて、この国のどこかで同じ空を見ているのかもしれないと思うだけで、胸が張り裂けるほどに痛い。

彼女が今何を思い、何をしているのか？

『危害は加えられることはない』

とヤークンは言った。

彼女の力を戦争に使いたいと思っているはずだから、痛めつけるよ  
うなことは絶対ないだろうと。

そうでなければ生きたまま連れて行くことはない。

そうきつぱりとヤークンは言っていたが、それでも彼女の身が心配だった。

最後に聞いた彼女の絶叫は今も耳にこびりつき、離れてはくれない。あんなに近くにいたにも関わらず、自分は彼女を助けられなかった。それは6年前と少しも変わっていない。

不甲斐ない自分に苛立ちだけが募っていく。

「あの……」

ふと細かい声にサウラスは顔を上げ、振り返った。

車内の通路に17、8歳くらいの少年が立っていて、サウラスを見つめていた。

色素の薄い茶色の髪に、同じく透けるような茶色の瞳。

幼さの残る顔つきに脅えるように潤む瞳が印象的なか細い体つきの少年はもう一度勇気を振り絞るかのようにサウラスを見、「隣いいですか?」と言った。

「構わないが……」

ちらりと席を見たが、座るところがないというわけではなかった。

それでも少年はサウラスの隣に座ることを望み、わざわざ声をかけてきたのだ。

なにか事情でもあるのだろうか。

そう思ってサウラスは席を詰めるように座って、少年を見つめた。

少年は小さく頭を下げると、ゆっくりとそこに座った。

粗末な綿の上着に袖を通した少年の荷物は肩から掛けた小さなカバン一つだけだった。

少年はそのカバンを大事そうに膝の上に抱えながら「旅のお方ですか？」とサウラスに声をかけた。

「いや……これから兵の志願に行こうと思っているんだ」

サウラスの返事に少年は小さな瞳を思いきり開き、驚きと喜びの混じった笑顔を浮かべた。

## 志願者たち(2)

「本当ですか？ 実は……実はボクもそうなんです！！」

少年の言葉にサウラスの眉が小さく反応してしまった。

「キミも兵士に志願するのか？」

少年はサウラスの質問に大きく頷き「ルイーです」と言った。

「ボク、ルイー」ガルトって言います」

少年ルイーはそう言って手を差し出した。

小さな手であり、細い手首だった。

「サウラス」バルジーだ」

差し出された手を握り返したサウラスは、マメだらけで固くなっている見た目と違うルイーの手の感触に違和感を覚えたが、あえてそれに触れるのを止めた。

その理由を聞く前に彼は言った。

「ボク、この国で機械工の見習いをしていたんです。見習いはもう雑用ばかりで。いつつも重い鉄板運ばされたり、塊を金づちで殴りつけたりしていたんで。」

……へへ。いつの間にかマメだらけの固い手になっちゃったんです」

言いながらルーイは胸の前で両手を恥ずかしそうに握りしめて見せた。

「見習いを止めてまで、どうして兵にならなろうと思っただ？」

兵になっていいことなど何があるのだろうか？

人の命を刈らなければならぬし、自分の命の保証だとしてない。

それでも兵になろうとするのは、愛国心ゆえか、忠誠心ゆえか、サウラスには推し量ることもできなかった。

「お金が欲しいから……」

ルーイは膝の上のカバンに両手を置くと、そうぼつりと呟いた。



「兵士に志願すれば、見習工の一月分の賃金を一日で稼げるんです。ボクにはそのお金がどうしても必要で……」

「お金のために兵に志願するのか？ それなら止めておいたほうがいい。命を失ってからじゃ、お金がいくらあっても無駄になる」

サウラスの言葉にルーイはグツと拳を握りしめた。

「あなたはこの国の人じゃないから分からないんです。」

お金のない人間がどんな惨めな人生を歩まなければいけないのかわからないから、そうやって言えるんです。

ボクには夢がある。

そのためには命を懸けてもやらなくちゃならないときがあるんです」

ルーイの決意に満ちた返答にサウラスはなにも言えなかった。

黙ったまま、外に視線を移すと鉄の建物の殺伐たる風景のその奥に偉容とした城塞の姿を見てとることができた。

デルブールの国の繁栄の陰で、若い命の犠牲が降り積もる。

「あの……ごめんなさい。ボク、つい興奮しちゃって……」

振り返るサウラスの目に小さくうなだれるルーイが映った。

「いや、オレのほうが失言だった。すまないな」

そう言うサウラスにルーイは大きく首を振った。

「じゃ、ボクも聞いていいですか？ サウラスさんこそ、どうして兵に志願するんですか？ お金に困っている人っぽくは見えないんですけど……」

「……大事な人を取り戻すためだろうな」

サウラスの答えにルーイは丸い目をさらに丸くした。

「動機が不純だと人のことは責められる立場じゃなかったな」

苦い笑みを漏らすサウラスにしかし、ルーイは意外にも首を振り「素敵ですよ」と言った。

「取り戻せるといいですね、その人」

ルイーの人懐っこい笑顔にサウラスは久しぶりに気持ちちが和んだ気がした。

サウラスはそれ以上話さなかった。

ルイーももう聞いては来ず、目的の駅まで二人は黙ったまま機関車を降りた。

駅を降りてすぐにルイーはサウラスに「一緒に行きませんか？」と言った。

確かに目的地は同じだったし、デルブルーの国のことならばルイーのほうがサウラスよりもはるかに詳しい。

親切ともとれるこの申し出を断る理由がサウラスにはなかった。

「よかった」

隣を歩くルイーは笑った。

「ほんとには一人が不安で。

隣に座ったのも、少しでも人と話して不安をかき消したかったんです。

決心はしていても、怖くて。

でも、不思議なんです。  
こうやってサウラスさんといるとボク、なんか全然怖くないんです。  
安心するっていうのか……会ったばかりなのに変ですよね」

一人が心細いことは知っている。

サウラス自身もそういう時期があった。

いや、今ももしかしたらそうなのかもしれない。

だから、自分自身もルーイといると気持ちが悪くなるのかもしれない。

「サウラスでいい」

「え？」

「敬語で話さなくてもいい。オレも……おまえといると落ちつくよ」

余計な関わりを持つことは危険な分子を増やすことになることは分かっていたけれど、彼のことを放ってはおけない気持ちが大きかった。

「うん、ありがとう」

照れたように笑うルーイにサウラスは微笑みを返していた。

暗く沈む心に一筋の光が差し込む　　サウラスはギュッと拳を握りしめた。

決してこの笑顔を見失うことがないように。  
決してこの笑顔を絶やすことのないようにと

## 協力者たち

一般居住区内において一番広いと言われている宿屋の酒場の一角で、『兵士志願』の受け付けは行われていた。

さすがに大国の兵士募集というだけあって、相当の人間が列を作り、今か今かと自分の受け付け順を待っていた。

酒場の中は宿泊客と兵士志願者とでこった返し、活気に満ち溢れていた。

酒を浴び歓喜の声を上げる者、酒に飲まれ怒声を発する者。

それらを横目に見ながら、サウラスはルーイとともに受付の列に並んだ。

酒の臭いにルーイの顔が渋くなるのを見ると、本当に彼を一緒にここまで連れてこさせて良かったものかと悩んでしまう。

途中で説得し、帰らせることもできないわけではなかったけれど……

もう一度まわりを見渡す。

傭兵稼業を生業としていられると思われそうな肉付きのいい連中もいれば、ルーイのように年端もいかない少年の姿も随所に見られる。

その目的はおそらく国家繁栄のためというよりは、皆生きるため。

生きるための賃金を得るために志願しているようにしか見えなかった。

サウラスは思わずため息が漏れそうになって、ぐっと奥歯を噛みしめた。

こんなことをしてまで、帝国がなにをなしたいのかが理解できなかった。

いや、こんなことをしてまで、なぜマリエステを憎むのかがサウラスには理解できなかった。

特に、現在の皇帝になってからはその兆しというか、思いが強くなるように思えてならない。

現皇帝『バルドスIIグレイザー』。

三十代半ばの若き皇帝は、冷酷無比な性格と猛々しい容姿から『蒼き獅子王』の異名を持っていた。

彼が皇帝の座について6年になるが、その6年間で帝国はすっかり様変わりしたと言う。

階級制度や区画による人民の統一制度の導入も彼の統治下になってからだと言われている。

それともう一つ。

ヤークンは気にかかる情報を握っていた。

それは自国マリエステの存亡を左右するものだった。

「次！」

その声に、サウラスの服の裾が引っ張られた。

見ればルイーが「呼ばれたよ」とサウラスに教えていた。

「すまない」

軽くルーイに礼を言い、サウラスは受付をする鉄仮面の兵士の前に立った。

兵士は上から下までサウラスのことをなめるかのようにじっくり眺めると、サウラスに書類を突き出した。

それからそこに名前を記入するようにペンを置いた。

サウラスは言われるがまま、名前を記入した。



鉄仮面の兵士はその書類に朱肉印を押すと、その書類の下に隠すようにもう一つ、別の何かを添えてサウラスに差し出した。

サウラスは黙ってそれを受け取ると、急いで書類を隠すように懐の中へと押し込んだ。

「次!!」

鉄仮面の兵士は何事もなかったかのように、次を促した。

サウラスが列から外れると、すぐにルイーが駆け寄ってきた。

「部隊配属が決まるまではここが宿舎になるみたいだよ、サウラス」

そうかとサウラスは軽く返事をした。

受け取ったものを確認したいところだが、ここでは人目が多すぎる。

「部屋に行く？ 少し休みたいんじゃないの？」

「あ……ああ。でも部屋なんて……」

「部屋は二人で一つなんだって。とりあえず、ボクが受付済ませといたよ。一緒に大丈夫……だよな？」

ルーイがおずおずと窺うように尋ねたことに、サウラスは苦笑した。警戒させるようなことを言った覚えも、そんな態度を取った覚えもなかったのだが、どうやらなんとなくルーイは感じ取ったらしい。

「むしろ、おまえでないと困るくらいだ」

安心させるように笑うと、ルーイはほっとしたように息をつき「こつちだよ」とサウラスの手を引っ張った。

その手が見た目よりもずっとゴツゴツと強張っていることに、サウラスは少しだけ違和感を覚えた。

けれど。

ルーイは機械工の見習いをしていたと言っていた。

重い鉄を運んだり、金槌などを朝から晩まで振るっていたりすれば、そうなるのかもしれない。

疑い深くなるのはおそらく……そうやって兄に叩きこまれたせいかもしれない。

思わず苦笑する。

ルーイのような子供に何ができるのか？

己が夢のために兵に志願するような素直な少年を疑うほうがどうかしている。

「サウラス、ボク、ちよつと夕飯の買い出しに行ってくる。宿の飯は高いんだ。市場とかで何か安く腹もちのいいもの、見てくるよ」

部屋の前まで案内したルーイがサウラスに鍵を渡した。

「一人で大丈夫なのか？」

一歩裏道を入れれば闇が広がるようなところだ。

少年を一人、そのような場所へ行かせていいものかどうか、サウラスは悩んだ。

「大丈夫だよ。アシユナバルはボクの庭みたいなものだから」

にっこり笑い、ルーイはサウラスを残し出て行った。

サウラスはルーイの後姿が宿から見えなくなるまで見送った後、部屋の中に入った。

簡素な部屋だ。

木製のベッドが二つ部屋の両側に置かれ、そこには薄毛布が一枚無造作に置かれている。

ベッドに挟まれるようにローチェストがあり、そこに蝋燭立てと使用され半分以下になった蝋燭が立てられていた。

サウラスはベッドの際に浅く腰をかけると、先ほど受け取った書類を取り出した。

自分が名前を記入した用紙の下にあったのは白い封筒だった。

赤い薔薇の蝋の刻印で嚴重に封をされたそれを開く。

中にはヤークンの言った通り『城塞内部への皇族印入りのパス』が同封されていた。

皇族名をサウラスは目で追った。

『リーザII グレイザー』

その名にサウラスはあつと息を飲んだ。

皇帝バルドスの妹であり、一時はサウラスの兄レーテルの婚約者であった人の名前だった。

その名前がここにあるということは、帝国内でのサウラスを支援する人間というのは彼女のことに違いなかった。

「となると……」

ヤークンも兄と何かしら関係のある人間であり、『リーザ』グレイザー』との太いパイプを持った人物であるということになりはしないだろうか？

しかし、どうして皇帝の妹である立場の『リーザ』が『サウラス』に手を貸すのかがよく分からない。

戦争を避けるため？

それが一番濃厚な線だった。

ヤークンのもたらした情報が事実だとすれば……リーザの協力はありがたい以上のものがある。

だが、まだその情報の裏付けはしっかりとれたわけではない。

「考えても……仕方ないか」

サウラスはパスを懐にもう一度押し隠すようにしようと、蠟燭に火をともし、封筒を燃やした。

今はとにかくアスナムを探すこと。

そして、ヤークンの言った『飛空母艦ジリオン』の所在を確認し、そこに秘められた『兵器』の確認をすること。

そのためにはどんな者でも利用し、内密に事を運ばなければならぬ。

サウラスはベッドに横になった。

眠気が襲い、ゆっくりと瞼を閉じる。

三日後、サウラスは正式に『飛空挺部隊兵』に配属が決まったのだ。

## 帝国の目論見

帝国に潜入して一週間が経とうとしていた。

『飛空艦隊兵』として『飛空挺部隊』に配属されたサウラスが、まず一番にしなければならなかったこと。

それが『飛空母艦』の所在の確認だった。

ザステイアン城塞の隣に併設された飛空場の最深部でそれは開発中であるという情報をサウラスはヤークンから聞いていた。

その後の調べで、その戦艦には背筋が凍るような兵器が搭載されているということまで突き止めた。

ヤークンの情報は真実に限りなく近いものであった。

そして、それを裏付ける確たる証拠が今、サウラスの目の前に存在した。

「まいったな……」

顎に右手をあてながら、サウラスは眉間にシワを寄せた。

思わず小さなため息が漏れた。

帝国の兵士の中ではもっとも階級が低い軽装衣に身を包むサウラス

であったが、それにも関わらず疑いをかける者はいなかった。

『飛空艦隊兵』のみに許された閲覧の時間。

それは『母艦の完成の前祝い』とも取れた。

溢れる兵士たちの波にまぎれたサウラスが見た『飛空母艦ジリオン』はまさに圧巻の一言に尽きた。

目の前にあるものは『飛空船』ではない。

帝国の民が一般的に使う輸送用の木製の帆船ではない。

合金鋼で覆われた装甲は丁寧な磨かれ、黒とも鉛色とも言えるような光を湛えていたそれは、小型の飛空艦を搭載でき、飛行甲板を持つていた。

小型飛空艦を離艦・着艦させると同時に、飛行艦に対する整備能力と燃料や武器類の補給能力を有する。

空において単独で対空戦を継続する能力を有する軍艦であるのが母艦なのだが、『ジリオン』は他の母艦と全く違う点の一つであった。

母艦は軍艦としての攻撃能力は殆ど搭載艦に依存しているため、戦力は搭載した艦の能力や数とそれらを指揮運用する能力で決まる。

しかし、ジリオンはそれ単体でも十分な戦力を有している。

いや、むしろ他の追隨を許さないほどの圧倒的破壊力を有していると言っている。



それがサウラスの悩みの種であり、マリエステへの脅威となりえるものであった。

ジリオンが他の母艦と異なる点。

それはジリオンに搭載された『破魔砲』という主力砲にある。

『破魔砲』

その名の通り、魔術を打ち破る砲撃。

マリエステの王都を守る『魔障壁』を打ち破るために新たに開発されたものだった。

サウラスがこの一週間で仕入れた情報によれば、その開発のために帝国は何人も王国の魔術師を誘拐したらしかった。

開発に協力しない者はその場で容赦なく切り捨て、完成すれば今度は協力した者たちを機密の漏洩阻止のために斬首したと言う。

王国の魔術師たち自ら携わった破魔砲からいかに王国を、王都を守るか　それも問題だった。

「こんなところにいたの、サウラス！」

不意に声をかけられ、サウラスはハッと我に返った。

振り返った先にいたのはおなじ軽装衣に身を包んだルーイだった。

彼は屈託のない笑顔を浮かべながら、群がっていた野次馬兵たちをかき分けるようにしながら近づいてくると「探したよ」と言った。

「どうかしたのか？」

サウラスの問いにルーイは唸った。

「どうしたんじゃないよ。うちの隊、今夜出撃命令が出たんだ……  
って言っても演習らしいんだけど」

「演習？」

「ジリオンの軌道確認も兼ねて……らしいよ。ボクたちは護衛艦に  
乗るだけでいいみたいなんだけど、隊長は気合い入っちゃって。今  
から訓練だっさ」

そう言いながらルーイはため息をついた。

「どこで演習だ？」

「なんか……ジエスタ近郊みたい。マリエステとの国境近くの町近郊ってというのがね、引っかかるんだけど。陛下もいらっしやるらしいし」

（王国の国境近くで演習？ 何を考えている、帝国皇帝は？）

たった六年で軍事力をより強固なものとした今のデルブルを作った皇帝バルドス。

その力で近隣小国を飲み込み、今ではシャンタナの半分以上は帝国領土と化している。

王国近郊で演習をし、その力を見せつけ、王国に付き従う国家を牽制しようともいうのだろうか？

「ねえ、サウラス」

「ん？」

「デルブルは……ううん、シャンタナはどうなっちゃうのかな？  
本当に戦争になっちゃうのかな？」

ポツリとルーイは呟いた。

本当は誰も彼もがバルドスという皇帝の考えに賛同しているわけで

はないことを、サウラスはここへ来ることによって知った。

家族のため、自らの命のため、心を殺してしたがっている者も多いことをサウラスは身をもって知ることにもなった。

皆、未来を憂いている。

このまま帝国皇帝がシャンタナを支配するようになったら　この世界に残されるものは『死』よりも辛い『絶望』だけだ。

「さあ……？　オレには陛下のお考えなど想像もできないな」

『だからそれ以上は言うな』という意味を込めて、サウラスは返事をした。

反逆罪と他に訴えられでもしたら、ルーイの命の保証はない。

「うん……うん」

ルーイは押し黙ったまま、ジリオンを見上げた。

サウラスはギョツと拳を握った。

そんなことしかルーイに言ってやれない自分が齒がゆかった。

そして何より……まだ、彼女の消息が掴めていないこともサウラス

の苛立ちを募らせていた。

今は我慢の時だと自分を諫め、サウラスは前を見た。

（皇帝の好きにはさせない。絶対に！！ だから……アスナム。もう少しだけ待っていてくれ！！ 必ず見つけ出すから！！）

心の中で固く誓うサウラスの右目は確かに一瞬、碧眼ではなく琥珀色に輝いたのだった。

## 非情なる一撃

マリエステ王国国境付近に『ジエスタ』という街はある。

街と言ってもその大きさは小さな国一つと変わらないほどである。

エシエンタール信者が寄り集まり、布教活動も盛んなこの街は『軍事主義』であり『無神論者』であるデルブルー帝国皇帝に対して、かなり批判的などころでもあった。

その街近郊での『ジリオン起動確認演習』に、サウラスの不安は募るばかりだった。

おそらく帝国側としては『飛空母艦』の存在を見せ付けることで、批判的である『ジエスタ』の口をねじ伏せてしまおうという思惑があるに違いないのだが、それにしても、わざわざ王国国境付近である街まで出向き、敵側に手の内を見せるような真似をしなくてもいいのではないかと思うのだが……

ゆっくりと雲の中を進む飛空戦艦の甲板の上で、サウラスはずっと双眼鏡で母艦の様子をうかがっていた。

帝国一兵としてサウラスに課せられた任務は母艦に対する敵国の攻撃がないかを見張るものだった。

王国の有する対空兵器は太古の種族である竜を操る戦士たちで形成された飛竜部隊である。

一匹の竜の大きさは、もっとも大きなものではサウラスの乗る護衛

艦とほぼ同じくらい。

その体躯から繰り出される一撃や、吐き出される炎も戦艦とほぼ同等、もしくはそれ以上であるとも言える。

それらが母艦を攻撃したとしたら、撃沈の恐れこそないものの、ダメージは計り知れない。

開発したばかりであり、王国との戦争での切り札になるに違いないものを易々とは傷つけられない。

この任は思うよりもはるかに責任の重い仕事であった。

しかしながら、サウラスは王国の人間である。

出来ることなら帝国の新兵器を破壊してしまいたい気持ちは大きい。

兄レーテルがこの演習のことを知っていれば、もしかしたら飛竜部隊を送り込み、戦闘へと化すかもしれない。

王都が攻撃対象となる前に『破魔砲』を破壊できるのが一番いいのだが、今はレーテルとの連絡手段がなかった。

そのときだった。

サウラスの左耳にかけていたイヤホンマイクから母艦からの通信が流れ込んできた。

その内容にサウラスは耳を疑った。

『護衛各艦に告ぐ。ジェスタ上空に敵影を確認。ジリオンはこれより攻撃の準備に入る』

「なんだって!!」

急いで双眼鏡を持ち直し、ジェスタ上空を見る。

遙か雲の向こうに敵の影など一つも見えない。

『繰り返し護衛各艦に告ぐ。ジェスタ上空に敵影を確認。ジリオンは準備が整い次第、ジェスタとともに敵を殲滅する。各艦はその場で待機。次の指示を待て』

あまりの内容にサウラスは言葉を失った。

ジェスタとともに言った。

敵を殲滅するとも言った。

だが、ジェスタ上空にそれらしい影など見えない。

(もしかして ！？)



起動確認という名の元に行われる演習は、まったくの隠れ蓑。

本来の目的は『ジエスタ』への帝国の軍事制裁であったのではないか。

脳裏に掠めた疑惑は拭うことなどできない。

汗が一筋、サウラスの頬の輪郭を伝って落ちていく。

『敵を殲滅する』

と、ジリオン側は言っていた。

それは『ジエスタ』そのものの『殲滅』を意味しているものではないのか？

双眼鏡をジリオンに向け直し、さらに主砲に焦点を絞った。

動力炉らしき部分に微かにだが、光の粒子が集まってきている。

そのように見てとれた。

「破魔砲を……試す気か!？」

『ジエスタ殲滅』もでき『破魔砲の威力の確認』も出来る。

皇帝自らが『演習』に赴いた理由はここにあったのだ。

その考えに至ったにもかかわらず、サウラスには何も出来ないでいた。

破魔砲を止めるにしても、ジリオンまでの距離は遠い。

ジリオンに乗っていればまだしも、サウラス自身はその護衛艦の甲板の上だ。

『ジエスタ』を守るために『天眼の力』を使うか？

だが、そんなことをしたらおそらく自分の命の保証はなくなる。

このまま『ジエスタ』を見殺しにするしかないということなのだろうか？

いや、手が全くないというわけではない。

マリエステの王家の人間であるサウラスは、生まれた時に国王から祝いとして『飛竜』を授かっていた。

王子として、いずれ王家の軍を任されるはずであったサウラスに与えられた『飛竜ラウルト』は、王国飛竜軍の中のどの飛竜よりもその体躯は大きく逞しく、空を駆る速度や攻撃力は他を圧倒してい

た。

彼の竜を呼べば、ジリオンに乗りこむことは容易にできる。

ただ、サウラスは身分を隠し生きること強いられた身の上である。

そのため、その飛竜の存在も王国の限られた人間にしか知られていない。

飛竜ラウルートはそこでサウラスの呼び声をいつでも待っているのだが……

それは帝国に潜入している自分の身を追い詰めるだけでなく、アスナム搜索の機会を失うことになりかねない危険をはらんでいた。

それに今回の潜入は自分一人で為し得たことではない。

おそらく『ヤークン』という男の力が働いている。

己ひとりならまだしも、彼をも危険にさらすことなることは避けねばならない。

とすれば、おのずと答えは決まってしまう。

そう。

『ジエスタ殲滅』をこのまま見ているしかないという現実を受けい

ねるといふこと。

「サウラス！！ サウラス！！ ねえ、今の通信なんなの！？」

その声にサウラスは思わず振り向いた。

同じようにイヤホンマイクを付け、同じように双眼鏡を手を持ったルーイが蒼白な顔でサウラスを見つめていた。

「演習なんでしょ！？ これ、演習なんだよね！？」

実戦経験などない、今まで民間人として生きてきたルーイにとっては信じがたい現実が耳からの情報として入ってきたのだ。

その内容の過酷さに、気持ちが不安定になるのは致し方ないことだった。

「落ちつけ、ルーイ。持ち場を離れたらダメだ。これが隊長に知れたら、おまえ罰を受けるぞ！！」

嗜めようとするサウラスにしかし、ルーイの気持ちは波立つばかりだった。

「そんなこと、どうでもいいよ。それより、ねえ。なんなの？ 母艦でジエスタを本当に攻撃するの！？ どうにかならないの、ねえ、サウラス！！」

サウラスの胸倉を掴みかかるようにルーイは叫んだ。

サウラスにはこれ以上かけられる言葉が見つからなかった。

その時、またギリオンからの通信がイヤホンマイクを通してサウラスの耳に届いた。

『破魔砲発射用意完了まであと5……4……』

「ダメだよ……ダメだよ……ねえ……」

『3……2……』

「ジエスタは……ボクの故郷なのに……！！」

「な！？」

ルーイの言葉に、サウラスが息を飲んだ瞬間。

天を切り裂くような唸り声が一帯に響き渡る。

「やめろおおおつつつつ!!」

叫びだし、走り出そうとするルーイの身体をがっしりと掴み、サウラスは抱きしめた。

ジリオンから虹色に輝く光の帯がジェスタに向かって勢いよく伸び、雲の中へと消えゆく光を見届けた直後には、地の悲鳴が噴き出した。

「あ……あああああうつつつつ!!」

サウラスにしがみつき、声を上げてなくルーイをグツと抱きしめながら、サウラスはジリオンを睨んだ。

そこにいるであろう、皇帝バルドスを 何としても止めなければならぬと。

そうしなければ、このような悲劇がまた繰り返されるのだということを知らされた。

自分の故郷を、マリエステ王国を、そこに住むすべての者を帝国のための犠牲にしてはならない。

もう一度と、皇帝に非情なる破壊の一撃を使わせてはならないと  
そうサウラスは心に誓ったのだった。

## 視界を覆う闇

真っ赤な炎に焼き尽くされる里。

声を奪われ、変わり果てた姿となった大事な人たちはそれでも娘を助けてくれることを願い、懇願する。

そして、突然奪われた友の命。

噴出していく血は止まることを知らず、地を覆い尽くしていく

「リチエット！」

友の身体に手を差し伸べようとしたが、その手はただ空を掠めただけだった。

「夢……！」

眼前に広がるのは真っ暗な闇でも、真っ赤に染まった空でもなかった。

小さな丸窓のついた狭い部屋には大きなベッドと小さな金属製の飾り椅子以外ない。



鏡のように磨き上げられた床には毛の長い真つ赤な絨毯が敷きつめられている。

アスナムはその絨毯に悪寒が走った。

父の身体から流れる血のように、リチエットの首から噴出した血溜まりのように、それは見えてならなかったからだ。

小さな丸い窓から見えるのは雲ひとつなく冴え渡る青空。

まるですべてが夢のように、キラキラと光る温かな日差しが降り注いでいた。

だが、その視界に違和感を覚え、アスナムは息を呑んだ。

自分の左目を覆う藤色の髪がどういうわけか黒く染まっていた。

身に纏っていたワンピースは露出の高い黒の妖艶なドレスにその姿を変えていた。

獣のなめし皮で作られたブーツはヒールの高い金の装飾がなされたサンダルになり、手首も胸元も、そして足にも色鮮やかな宝石をちりばめたプラチナ色の装飾品で覆われていた。

急いでベッドを降りると傍らに打ち付けられた豪華な彫り細工のなされた姿鏡の前に立った。

目の前に映し出された姿に言葉も出なかった。

知らない女が立っていた。

目を彩る青いアイシャドウに浮き上がる真っ赤な唇、真っ直ぐな黒髪姿に自分の面影を見つけられなかった。

「なんなの……これ……？」

「やっと、目覚めたようだな」

驚きを隠せずにいるアスナムの部屋にやってきたのは、『陛下』と呼ばれた濃紺の髪の男と茶色の髪をしたレーヴンの二人だった。

濃紺の髪の男は眼光鋭くアスナムを眺めると「変わるものだな」と呟いた。

「ここまで変るとは……女とは恐ろしいものだな、レーヴン？」

男はクツクツ……と喉を鳴らしながら笑って、隣に控えるレーヴンを見た。

レーヴンは眉一つ動かすことなく「そのようですね」と抑揚のない声で答えた。

「私はあなたたちの玩具なんかにならないわ！」

リチエットを手につけて、関係のない里の人たちまでも焼き殺した目の前の男が、アスナムは憎くてたまらなかった。

自分に深く関わったわけでもないのに、多くの人を巻き込んでしまった。

戦争の犠牲になって、密やかに寄り添って暮らしていただけだったはずなのに、自分のせいで多くの命を刈り取ってしまった。

自責の念と、男への並々ならぬ憎悪がどろどろと溶けあつて、心の中に渦巻いていた。

見せしめか、他に何かの意図があつたのか　そんなことはこの際アスナムにとってはどうでもいいことだった。

理由など知りたくもない。

言えることはただ一つ……こんな男の操り人形に成り下がっていくなら、この男を殺してもここから出て行かなくては　その思いが左目の力を解放する。

三度目の正直。

絶対に仕損じてなるものかと。

「無駄なことを」

男はニヤリと余裕の笑みを浮かべながら右手を翳した。

昨夜と同じ青白い光が部屋中を飲み込み、アスナムの左目に激痛が走った。

思わず両手で顔をかばい、アスナムはその激痛を必死で抑え込んだ。

「どうして？ どうしてなの！？」

両手で顔を覆いながら、それでもアスナムは指先の向こうに見える男を睨み付けた。

男は涼しい顔を向け「無駄だと言っているだろう」と笑った。

「この『クシャトラの腕輪』がある限り、おまえでは余は殺せぬ」

青白い光を解き放った男の右の腕には確かに、紅蓮色に輝く宝石が

埋め込まれた黄金の腕輪がはめられていた。

いや、宝石のように見えるものは人の目だ。

透明な鉱石の中に閉じ込められた赤い眼だった。

「それは……地眼！」

「そつだ。おまえよりもずっと前にこの瞳を持って生まれた女のだ。」

我ら一族が長い、長い時間をかけて開発した腕輪だ。

おまえと同じ能力を期待していたのだが思うように働かなかった。

が……昨夜、おまえのおかげでおまえの力と共鳴することがよく分かった。マイナス同士を掛け合わせるとプラスになる。置かれてい  
る立場が理解できたか？」

「そんな……」

がっくりと肩を落としてうな垂れるアスナムの顎を男はグイッと掴むと、男の方に強引に向けさせた。

「本当に……これほど美しいものを余は見たことがない」

感嘆の溜息をつきながら男はアスナムの長い髪を撫でた。

絹のように艶やかな髪がハラリ……と舞い落ちる。

ぞくり、と身の毛がよだった。

それと同時にアスナムはサウラスのことを思い出していた。

彼はよくそうやって自分の髪に触れていた。

『キレイな髪だ』と褒めながら、そこに口づけて笑っていた。

その笑顔が脳裏に浮かび、アスナムは泣きたくなった。

会いたいと 会いたいと心の底からそう思うのに、会ってはいけないその身が呪わしかった。

瞬間、アスナムの唇は男の唇によって強引に塞がれた。

冷やかな唇の感触に耐えられずに、アスナムは男の頬を思い切り叩いた。

「クッ……!!」

部屋が一気に張り詰めた空気に覆われ、アスナムの喉元にはレーヴンの剣先が突きつけられていた。息を呑みながらも男を睨みつけるアスナムに、レーヴンは冷ややかな視線を向けていた。

一瞬の後、大きな笑い声が部屋の緊張を解いた。

アスナムが驚いて男を見ると、男はレーヴンの剣先をつまみながら「その気丈さ、余は気に入ったぞ」と上機嫌に言った。

「さあ、剣を納めよ、レーヴン」

「しかし、陛下……」

「余の言葉が聞こえなかったか？」

男の言葉にレーヴンはしぶしぶ剣を納めた。

男はそれを横目で見ながら、射殺さんばかりに睨み付けるアスナムの手を優しく取った。

「おまえはこれから余の傍に仕え、余とともにシャンタナを新しい世界へと導くのだ。」

そのための新しい名と地位をおまえに贈る。

それまでは窮屈な思いをさせることになるが、この部屋を出ることは固く禁じる」

それだけ言うと男は立ち上がり、レーヴンを伴って部屋を出て行った。

(イヤ！　こんなのはイヤ！　サウラス！！　サウラス　！！！)

男たちが出て行くと、アスナムの身体の緊張が一気に解けた。

今になってガタガタと震えが走った。

背中もぐっしょりと汗で濡れている。

頬を伝う涙はもはや止めることは出来なかった。

アスナムは枕に顔をうずめ、声を押し殺して泣いた。

愛しい人の名を心の中で叫び続けながら……今のアスナムにはそうすることしかできなかった。



## 駒となり得る者

「お戯れが過ぎはしませんか、陛下？」

レーヴン「ハイヤットは前を歩く濃紺の髪の主に向かってそう言った。

男はその言葉に一度立ち止まり、ちらりとレーヴンを見たがすぐに前に向き直ると、クツクツ……と喉を鳴らしながら「それは嫉妬かね？」と返した。

思いもよらない主の言葉に珍しくレーヴンは「陛下！」と声を荒げた。

そんな彼にデルブルー現皇帝バルドス「グレイザーは「冗談の通じぬ奴よ」と呆れたように笑ってみせた。

「あの女を陛下の後に迎えられるというのは本意なのですか？」

レーヴンは真つすぐにバルドスを見つめながらそう尋ねると、「何か問題でもあるのか？」と相手であるバルドスはそう答えた。

それからふと立ち止まると、長く伸びる廊下のバルコニーに立ち、そしてその先に見える帝都の様子を眺めるような遠い目つきになった。

冴え渡る空に伸びる高層の建築物たち。

その合間を縫うようにいくつもの小型飛空船が飛び交い、機関車の発着を知らせる警笛の音がそこかしこで鳴り響いている。

街の至る所から灰色の煙が空に向かってゆらりゆらりと立ち上る姿をバルドスは黙したまま、見つめ続けていた。

「あの女は庶民……いいえ、卑しい奴隷の身分と変わりません。高貴な血を受け継ぐ陛下の家系にあのような血が混ざるなど私はあってはならぬことだと思います」

沈黙を破るように、レーヴンは主であるバルドスにそう告げた。

バルドスはすうっとレーヴンに視線を走らせると、そう言うのが分かっていたかのように笑って見せた。

「だから新しい名と地位を用意するのだ。そうでなければ、おまえのように融通のきかない輩が反対するだろうと思ったからよ」

その言葉にレーヴンは尚も食い付いた。

「あの女は危険すぎます！ 『クシャトラの腕輪』もいつも反応するとは限りません！ 陛下、どうかお考え直しを……！」

普段は冷静で物静かなレーヴンがいつになく口調荒くそう言った。

そんな臣下の様子にバルドスはフウ……と大きく溜息をつく、「心配性だな」と呟いた。

「危険は承知の上だ。だが、そのリスクを犯して有り余るほどの利用価値がアレにはある。」

『崩落の乙女』を後に迎えた余に誰が刃向かう？

それにあの容姿だ。余の隣に並び立つには不足あるまいよ」

「あの女がそう簡単に陛下に従うとは思えません。それに、ゴルギアはともかく、私はどうもあの男が信用できません。陛下を利用しようとしているように思えてならないのです」

レーヴンの口にした『あの男』という言葉にバルドスはまたクツクツ……と喉を鳴らして笑った。

「シルスカ？ そうだとして何の問題がある？ アレのおかげで『崩落の乙女』が手に入ったのだ。しばらくは好きに泳がせればよい。どうせ捨て駒よ」

「ですが、もしあの者がマリエステに寝返ったとしたら？ 乙女の情報をやツらに流したとしたら？ 我らが窮地に立たされます！」

その言葉にバルドスの顔は一気に冷め、瞳に鋭い光が宿った。そしてそれをレーヴンに向けると「余を侮辱するつもりか？」と問うた。

「いえ。そんなつもりは……」

言葉を詰まらせる臣下に、バルドスは「問題ない」と言い放った。

「ヤツが何を思い、どうしようとすべて余の想定内のことよ。それ以上も以下もない。おまえは安心して、余の考えに従えばよい。それよりもヤツは……アインバイルは見つかったのか？」

バルドスの口から出た『アインバイル』という言葉に一瞬レーヴンは肩を震わせた。

その顔はひどく曇り、苦渋に満ち満ちていた。

それを見たバルドスはまた大きく溜息をついた。

「見つからぬ……か。『デルブールの守り神』を失ったのは、余にとっては大きな痛手だな」

「申し訳ありません、陛下。將軍の亡骸だけでもと思ったのですが、それすらも……」

レーヴンのその返答にバルドスは深いしわをその眉間に湛えた。

『デルブールの守り神』と謳われ、帝国にこの男ありと言わしめたその者の名はアインバイル。

前守護総長である彼の者の名を知らぬ帝国の人間はいない。

人望厚く、前皇帝からも絶対的な信頼を得ていた男は、一度戦に立てば一人で千の敵をも薙ぎ払うと言われるほどの力量の持ち主だった。

その男の消息にバルドスは一抹の不安を抱えていた。

「このまま搜索は続けよ。ヤツは生きておるかもしれん」

そう言うバルドスにレーヴンはハッと息を飲み込んだ。

しかしすぐに小さく頭を振ると「將軍に限ってそのような事はないのではないか」と答えた。

明らかにレーヴンはバルドスの言葉に動揺を隠せないようだった。

それも仕方のない話だ。

レーヴンにしろ、バルドスにしろ、その才を見出し伸ばしたのは他でもないアインバイル自身なのだ。

彼らからしてみれば、アインバイルという男は師匠とも言えるべき存在であり、実際に血のつながった父親以上に父親らしい存在だった。

師である男の突然の死は半年以上も前の話になるが、いまだにその亡骸は見つかっていない。

狩りの同行中に敵の強襲にあい、それを退けるために一人敵の群れの中へと消えていき……そのまま戻ってこなかったと。

戻ってきたのはアインバイルの乗った馬と、多量の血痕がべったりと染みついた上衣だけだったというその事実、バルドスはいまだに疑いを持ち続けていた。

何度考えようと、どう考えようと、あの男が簡単に命を落としたとは思えないのだ。

姿をくらませる機会をうかがっていたとしか思えないその確信とも言える理由を、バルドスをはっきりと握っていた。

「可能性はないとは絶対に言い切れん。あの男はリーザと特に親しかったからな」

その一言にレーヴンの感情の読みとれない顔が一瞬だけ崩れたのをバルドスは見逃さなかった。

幼い頃から妹リーザに心を寄せているレーヴンはしかし、大きく頭を振って見せた。

「姫君様ですか？ 『バイシャの首飾り』がある以上、何も出来ません。将軍もそれはよく分かっておいでだったはずです」

認めたくないのは、アインバイルに対するレーヴンの敵意の表れでもある。

心寄せるリーザはいまだ、その職がレーヴンに移っても、同じように信頼を置いてはいないのだ。

それは絶対にこの男にとって、齒がゆく、悔しいものに違いない。

「だから可能性の問題だと言っておるのだ。

アインバイルは腑抜けた先代のお気に入りだった。それゆえに不安も尽きぬ。

それにどんなに僅かであろうとも、余にとっての危険分子は排除せねばならない。

余はこれからエシエンタールに替わる、シャントナの絶対的存在にならなければならぬのだから」

レーヴンの心を煽るように、バルドスはあえてアインバイルという

名前を出していた。

使えるモノはどんな手段を取ろうが使っ。

それは目的を。

大いなる目的を達成するための小さな犠牲にすぎない。

バルドスの強い口調に、レーヴンはただ黙って頭を下げた。

バルドスは同じように黙ったまま、真っ直ぐに前を見つめていた。

青く広がる空の向こうをひたすらに



## 噂 その裏付けとなるもの(1)

サウラスがその噂を耳にしたのは、『ジエスタ殲滅』から1週間後のことだった。

あの演習で故郷を失ったルイーは3日ばかり寝込むほどに消沈していたが、それでも今はなんとか気持ちを奮い立たせ、帝国の一兵としてその訓練に一層力を入れるようになっていた。

そんなルイーが一般兵である自分たちよりも上位にあたる鉄仮面の近衛部隊から仕入れたという噂に、サウラスはこれ以上ないほど胸が締め付けられると同時に、怒りと焦りが混じり合う、複雑な心境に陥っていた。

「皇帝陛下が魔女と結婚すると……本当に言っていたんだな？」

念を押すように確かめるサウラスに、ルイーはこくりと大きく頷いて見せた。

「うん。そのうち帝国全土にお触れは出るらしいんだけど。近衛部隊にはどうも魔女の警護任務まで与えられてるらしくて。でも……魔女って誰のことなのかな？」

噂話をたまたま耳にしたというルイーの言葉の中で疑う余地というものがサウラスにはなかった。

帝国内に連れ去られたというアスナムの、その力を知っている自分には理解出来ることだった。

皇帝がアスナムをどう扱い、どうするのか。

おそらく婚儀という祭ごとを催すことで国民の意思を一つにまとめるためだろう。

しかも、その相手が『破壊の力を宿した神の眼を抱く者』である『崩落の乙女』だったら？

帝国内の戦争に対して反感を持っている者でも、『神の力』という言葉に踊らされ、その意思を容易に変えてしまいかねないのではないだろうか？

それほどに強力で、畏怖される者であるアスナムをしかし、そう簡単に戦争の切り札にされるわけにはいかなかった。

代償は大きい。

それは己の身をもって知っている。

彼女をこれ以上傷つけるのは絶対に許されない。

彼女のことを今度こそ守るために力と知識を身につけたのだから。

6年という長い月日を費やしたのは、それなりの覚悟と想いがあった

たのだから。

アスナムはなんとしても早急に助け出さなければならぬ。

噂の真相を確かめた、裏付けとなる証拠に彼女の所在を突き止めなければならぬ。

救出の方法は、そのあとじっくり練るとしても、失敗した時のことも考えておかねばならぬだろう。

噂が本当だとして、本当にそれがなされてしまった最悪の場合。

自分の命を犠牲にしても、彼女の破壊の力は絶対に止めなければならぬ。

それが出来るのはこの世界で自分だけであるのだから……

「サウラス？」

腕組みしながらじっと何かを考え込むサウラスに向かってルーイは声をかけた。

その声にハッと我に返るサウラスにルーイは「何を考えてるの？」と尋ねた。

「いや、なんでもないさ」

はぐらかすようにサウラスは笑った。

帝国の目論見を潰し、アスナムを自分の手に取り戻すこと。

それは定義としては世界のためにやらなければならないことである。  
う。

だが、そうしたいと思うのは国のためでも、世界のためでもない。

そんなことにルーイを巻き込むわけにはいかない。

「少し、散歩に出かけてくる」

そう言うとサウラスは野外戦用に配給されたコートを引つ掴むと、  
兵士宿舎を後にした。

見上げた空に浮かぶ星は、都の高層の建物たちが放つ色取り取りの  
ライトによってかき消え、その姿を見つけることができない。

深い、深い闇に身を滑り込ませるようにコートを羽織ると、サウラ  
スはザステイアン城塞へと足を向けた。

人の目に触れないように、闇にまぎれ城塞へと向かって走る。

パスがあるため、内部にはどうにか潜り込めるはずだ。

城塞内部の地図はジェスタ殲滅後、知らぬ間に宿舎のサウラスの枕元に届けられていた。

赤いインクで丸く囲われた部屋。

そこにおそらくアスナムはいる。

皇帝がアスナムとの婚儀を本気で考えているのだとしたら、あまり時間はないだろう。

戦争を始めたいのだ。

戦争のために国民の心を一つにまとめたいのだ。

国家を、民衆を扇動するための舞台の準備は水面下で着々と進められているに違いない。

急ぐ心をそれでも必死に抑えつけながら、サウラスは城塞入口ではない別の道へと闇夜を走っていた。

城塞内部への侵入は地図に指示されている地下排水路を使用する。

地下排水路は城塞裏口から入ることが可能であり、その奥には水門がある。

水門までの排水路は複雑に入り組んでおり、地図なしで地下中央の

巨大な貯水槽には辿りつけないようになっている。

城塞地下にあるそれは敵国の侵入を受けた際には、城塞を守る水の盾となる仕組みになっており、侵入者を阻むとともに、逃走用のルートも兼ねて設計されたという。

皇族と限られた一部の人間のみに与えられたはずの情報が今、サウラスの手にしつかりと握られている。

その意味の重みを考えるだけで、汗がにじむ。

失敗は許されない。

多くの人間の命と覚悟がこの一枚の紙切れに込められているのだから

## 噂 その裏付けとなるもの(2)

地下排水路に通じる入口は鉄の厚い扉で塞がれていた。

銅版色の扉の取っ手に両手をかけるとグツと上へと押しやった。

ガガガ……と引っかかるように鈍い音を立てながら、それでもなんとか入れる程度の間隙を作りそこへと体を滑り込ませる。

それからもう一度扉を元の状態へ戻すように押し下げる。

ズシャンツという重い音とともに扉が閉まるのを確認すると、サウラスはくるりと前に向き直った。

数歩先には橙色の光がぼんやりと暗闇の中に浮かんでおり、そこから水の流れるような小さな音も微かにだが、立ち上ってきていた。

一步、その光へと足を進める。

地下に続く階段を慎重に下りると、サウラスの身の丈よりも深そうに思われる排水路が姿を見せた。

排水路の両脇は一人がやっと通れるほどの幅の道しかなく、それが奇妙に入り組みながら奥の水門へと続いている。

壁と天井の間部分には水門を動かすための動力管が走っており、その赤いランプが排水路内をぼんやりと照らしていた。

流れるささやかな水の音と、サウラスの足音だけがその世界を支配していく。

慎重に歩を進めながら、排水路から城塞中央の広場に出る階段への道を進む。

入り組む巨大な迷路を地図と対比させながら進むのだが、どこを見ても同じような景色に、迷ってしまいそうでじつとりと手にも額にも汗が浮かんだ。

水門の管理室へと続く道の奥に、城塞の中庭に続く階段がある。

それを駆け上ると、目の前に現れた扉の取っ手に静かに引く。

ガガツ……と重たい音とともに僅かに扉が開くと、サウラスは一度扉に顔をすり寄せるようにし、外を見る。

警備の兵士らしき姿はなく、中庭に人気はない。

安全を確認し、排水路に入ったときと同様、身を滑り込ませるように中庭に出る。

崩れた石像の残骸がそこに横たわっている。

エシエンタールの像であつたらしい顔は、原形をとどめないほどに酷く破壊されていた。



( 信仰心もない国の戦争の道具になど…… )

彼女をさせるわけにはいかないと、そう思い、サウラスは城塞上方を見上げた。

遙かに高く聳え立つ城塞の頂き付近にある小さな丸窓が目映った。

不思議に吸い寄せられるように見上げたただけなのに、そこから彼女の呼び声が聞こえたような気がしたのだ。

想うだけで胸が張り裂けそうになるのを抑えつけるように、サウラスは胸元をぐつと驚掴みし、中庭から城塞への出入りできる場所をぐるりと見回して見つける。

鉄製の銀色に輝く扉には取っ手はなく、代わりに通行証を差し込むらしき挿入口を見つけた。

懐から通行証を取り出し慎重に差し込むと、『ピッ……』という機械音とともに通行証が手元へと戻ってくる。

それと同時にガツチャンツと重みのある音が響き、施錠が解かれる。

上衣の内側に隠し持っている短刀の柄に手を伸ばしながら、城内へと忍び入る。

扉が閉まった瞬間に鼓膜がやぶれるのではないかと思われるほどの警報音が鳴り響いた。

「な……!?!」

間違った操作をした覚えはないが、それでもその警報音につられるように遠くに衛兵の姿を確認する。

(くっ……まずい!!)

再び元の道に戻ろうと扉にパスを差し込もうとするものの、パスは挿入できない。

「サウラス様、こちらへ!!」

不意に名前を呼ばれると同時にサウラスは腕を掴まれていた。

見ると濃紺の長い髪を高い位置で一つに結びあげた線の細い女性が腕を取り、走っていた。

白く透けるような肌に、黒く輝く瞳は鉱石のように輝き、形のいい唇は肌に映え、燃えるように赤い。

一見しても美女だと分かるその人とともにサウラスも走った。

非常階段らしいところまでやってくると、彼女は掴んだ手を離し、「付いてきてください」とだけ言うと階段を駆け上がり始める。

それを追うようにサウラスも階段を急いで駆け上る。

女性の履く高いヒールの音と、サウラスのブーツの音が長い螺旋階段にこだまする。

駆けあがった先に現れた鉄製の扉を女性は押し開けると、ビュオオツという音とともに一気に風がなだれ込んできた。

その風に煽られるように女性の薄緑色のドレスの裾が舞う。

「こちらへ!!」

くぐもった声でそう告げると、女性はサウラスを扉の外へと導いた。

「あそこに見える赤いカーテンの部屋へ。私の部屋です。お急ぎを  
!!」

グツと鉄の扉を閉めると女性は早口にそう言った。

半開きになった窓に赤いカーテンが揺れている。

その部屋だけほのかに明るく、他の窓には明かりがない。

言われるままにそこへ向かって走り、案内されるままに中へ入り込

む。

「とりあえず、寢室のベッドの下へ!」

指示されたようにベッドの下に潜り込んだその時、部屋の扉を叩く音が響き渡った。

激しく叩かれる扉の音がピタリと止むと同時に、扉を開く音が聞こえた。

「何事です?」

「侵入者ありと報告がありました。ここへ逃げ込んだ可能性もあるので調べさせていただきたいのですが」

先ほどの女性と思われる声が静かに響くと、仮面でもしているのだろうか、はつきりしない内にこもったような声が続いた。

「私はずっとここで読書をしておりましたけれど、そのような侵入者など、ここへ逃げ込んできてはおりません。下がりなさい」

「しかし、これはレーヴン守護総長の命令で……」

「私下がれと言っているのです。聞こえないのですか?」

凜とした声が響くと、しばらくして扉が閉まる音が続いた。

コツコツコツというヒールの音が響き、それはサウラスの隠れているベッドの前でピタリと止まった。

「もう大丈夫だと思いますよ」

という女性の声に、サウラスはゆっくりとベッドの下から這い出た。

「ありがとうございます、リーザ様」

そう言うサウラスにリーザはにっこりと笑って見せ、「どうぞ」とソファアの置いてある自室へと案内をすると、サウラスをそこに座らせ、リーザ自身も向いの一人掛けのソファアに身を沈める。

「サウラス様、パスを見せていただけないかしら？」

そう言うリーザに先ほど使用したパスを渡すと、リーザは念入りにそのパスを調べるように見つめた。

「なにか問題があったのですか？」

問うサウラスにリーザはしかし頭を振って見せ「これに問題はない」と答えた。

「排水路からの侵入は……誰かの指示ですか？」

そう尋ねられた瞬間、サウラスは眉間にしわを寄せた。

「地図を……私にくださったのはリーザ様のご指示ではないのですか？」

「地図！？ いいえ、私ではありません。申し訳ありませんが、それも見せていただいてもよろしいかしら？」

驚いたように目を見開き、身を乗り出したリーザに、サウラスは握りつぶしていた地図を渡した。

それをゆっくりと開いたリーザの顔が一気に青ざめていくのをサウラスはじっと見つめていた。

「罨にかけられたようですわ」

そう言うとりーザは立ちあがり、窓辺にある香炉から蠟燭を取り出

すと手にしていたパスと地図に火を付けた。

「陛下に私の正体がバレていると？」

尋ねたサウラスにしかしリーザは頭を振って見せた。

「わかりません。ただ……これにシルスが一枚噛んでいるような気がします」

### 噂 その裏付けとなるもの(3)

「シルス？」

眉間に自然にしわが寄ったサウラスに、リーザは小さくため息をつくと、首元を飾る豪華な首飾りに触れた。

シンプルなドレス、シンプルな髪飾りとスマートな着こなしをするリーザの装飾品の中で、それだけが異質な光を放っていた。

ゴテゴテとたくどいくらいの彫り物に、大きな青い石がはめ込まれていた。

サウラスの視線に気がついたリーザはハッと我に返り、灰になっていくパスと地図にまた視線を落としながら続けた。

「シルベルース＝ビシュヌ。帝国の歴史研究員であり、豪商ゴルギアの息子です」

「帝国の歴史研究員！？ ではアスナム……いや『崩落の乙女』のこともその人物が？」

「はつきりとは申し上げられません。確固たる証拠がありません。でも、陛下に『乙女』について報告をしているのは聞いたことがありますし。」

歴史研究員の中でもその才能は他を圧倒していると聞いております。



陛下より『特別研究員』の称号も与えられていますから、いろいろな意味での情報収集、操作など、あの者なら簡単に出来ると思っただのです」

そこまで一気にリーザは言うのと、完全に灰になったのを確認し、またソファーに深く腰を下ろした。

「こうなってしまうとは、サウラス様が乙女を連れ出すことは難しいでしょう。婚姻の儀まで2週間。私のほうでなんとかいたします」

「婚姻の儀まで2週間とは！！では本当に皇帝は！！」

リーザの口からさらりとこぼれた言葉にサウラスの心は震えていた。

驚きと焦りが混濁し、足元の地面が震えているような錯覚さえも覚えた。

思わず立ち上がるサウラスにリーザは申し訳なさそうに顔を伏せ「どうにもできなかつた」と言った。

「兄であるあの人を止める術を持たない私をお許しください。けれど……絶対に乙女との婚姻は阻止いたします。それまでの間も、私が乙女を責任持って警護致します。兄の好きにはさせませんから！！」

懇願にも似た言葉にサウラスは戸惑いを覚えた。

リーザがどうしてここまで自分たちに協力するのか、その真意をはつきりと聞いていないせいなのかもしれない。

「どうして……私が王国の者だと知りながら手助けなどするのは？ 帝国のために、血の繋がった皇帝さえも裏切れるのですか？」

問うサウラスにリーザは一度キュツと唇をかみしめた。

一拍の後、彼女が口に載せた言葉はサウラスのよく知る人物の名前だった。

「兄よりも……いいえ、他の誰よりも私がお慕いしているのはレール様ですから。あの方が守りたいものは私も同じ。会えなくなってもなお、その想いは変わりません。この……指輪に誓って」

そう言うと、リーザは懐から金色の指輪を取り出し、サウラスの前に置いて見せた。

手にとってサウラスは息を飲んだ。

「この紋章……王家の指輪……！」

金にユリの紋章が施されているそれは王家の血の者が成人した時に与えられる特別な指輪だった。

「レーテル様が私にくださったものです。それがどのような意味を持つか、王家の血筋でいらっしやるサウラス様ならよくご存じかと……」

「なぜそれを……」

「ヤークンと私そしてレーテル様は、このようなことがいつか起ることであるうことを予想しておりました。

そのときが来たら全力で乙女と貴方様をお守りすると誓いも立てておりました。

ですから、私もヤークンも貴方様のこと、そして乙女のことをよく知っているのです」

「さすが兄上……というべきか」

サウラスは苦笑した。

自分を常に支えてくれている人がいたのだということに安堵もした。

そして、自分がまだまだ未熟であることも同時に思い知らされた。

「婚儀の日がおそらく一番乙女を外へ連れ出しやすい機会になるでしょう。そのときまで、どうかご辛抱を。連れ出す算段は私とヤークンで」

そう言うと、リーザは立ち上がり、サウラスに女性物のコートを差し出した。

「これを羽織って、私の部下とともに正門から外へ。急ぎましょう」

こくりと頷き、指示通りにコートを羽織りリーザの部屋を後にした。

正門近くでリーザに教えられた合い言葉を口にした兵士を一人連れ、まだ騒然とする城塞をなんとか無事に脱出する。

婚礼の儀まで2週間

ただ待つしかない日々を強いられる。

己の無力さに今また打ちのめされる。

こんなはずではない。

こんなつもりで6年を費やしたのではない。

けれど、迂闊に動けばすべてがダメになってしまふ。

王国を危険にさらし、リーザの立場をも危うくしかねない。

そして失敗したら……アスナムを取り戻すのはさらに困難な状況になってしまふ。

今日、それを実際に体験し、焦りや勢いだけではどうにもならないという壁にぶち当たった。

今はリーザを信じて待つしかない。

それだけがサウラスの心を捕え、きつく締めあげていた。

## 柔らかな手

誰かが優しく髪を撫でていた。

温かく柔らかな手は自分を大切にしてくれた人たちを思い起こさせた。

ゆっくりと瞳を開ける。

泣いたまま眠ったせいで目が腫れているのか、まぶたが異様に重たかった。

「目が覚めましたか？」

聞こえてきたのはか細い女の声だった。

ハッと我に返り、急いで身を起こす。

薄緑の絹のドレスに身を包み、細い黄金の冠を額に身に着けた二十代前半の美女がベッドの端に座り、アスナムにほほ笑みかけていた。雪のように白い肌、濃紺色の真っ直ぐで艶やかな髪からのぞく濁りのない茶色の瞳に敵意らしいものは見つけられなかった。

ただ、一つだけ彼女に違和感があるとしたら、それは彼女の首を飾る首輪の存在だった。

凍てつく輝きを放つ大きな青い宝石をはめ込んだ黄金の首輪が、可憐そうに見える彼女にはどうやっても不似合いだった。

「そんなに怖がらないで……私はただ、あなたと少しお話をしたいだけの」

心の中をまるで見透かすように彼女は笑った。

アスナムはどうしていいか分からず、ただじつと彼女を見据えた。

そんなアスナムに彼女は「リーザ」と名乗った。

「リーザ」グレイザー、それが私の名です。あなたはなんとおっしゃるの？ 崩落の乙女……と呼んだほうがよろしいのかしら？」

「崩落の……乙女！」

怪訝な視線を向けるアスナムに彼女は「ごめんなさいね」と苦いほほ笑みを浮かべた。

「あなたのことを知られたくない人たちが、あなたのことをそう呼んでいるの。そんなふうには呼ばれるのはあなたも嫌でしょう？ だから本当の名を教えてくださいませんか？」

「私は……アスナム。アスナム」ウルバン」

「花の名前ね。マリエステの王宮にだけ咲く藤色のリリーと同じ名前。可愛らしくて、でも儂げで。その花がとても好きだった」

「父は……マリエステの王宮の庭師だったから……」

アスナムの返事にリーザは「そう」と静かに頷くと、そっとアスナムの手をとった。

「辛いことばかりだったのでしょうね。あなたから聞こえる音は、とても悲しみに満ちているもの……」

「音？」

「変なことを言うと思うでしょう？ 幼い頃から人の心が音として聞こえてくるの。でも、あなたはとても澄んだ音も持っている。とても優しい、キレイな音もね」

そう言うリーザのほほ笑みの向こうに、リチエットの姿が重なる。

彼女と似ても似つかないのに、この人から感じるのはリチエットと同じものだった。

優しく、穏やかに自分を包む春の日差しのようなほほ笑みに、アスナムの瞳から思わずポロリと涙がこぼれ落ちた。



「私。私、リチエツトを助けられなかった。トンゴおじさんも、ジルおばさんも……お父様も、お母様も……大事な人は誰ひとり助けられなかった……特別な力があるのに！ 私、何も出来なかった！」

リーザは一瞬驚いたようにアスナムを見た。

しかしすぐにアスナムの頭を抱えるように優しく抱きしめると、長い髪をそつと撫でた。

リーザの鼓動がすぐ近くで聞こえる。

一定に保たれた心地の良いその音が、怖くてたまらなかったときに聞いたサウラスの心臓の音と重なった。

どうして初対面であるこの人にそんなことを言っているのか 自分で分でも分からなかった。

戸惑いもあるのに、それでも言わずにはいられなかったのだ。

何もかもを包み込んでくれるようなほほ笑みを湛えたこの人なら言ってくるような気がした。

『あなたは一人で頑張った。だから仕方なかったのだ』と

「アスナム……あなたは精一杯戦ったのだと思う。誰もあなたを恨

んではないわ。皆、エシエンタール神の腕の中で、今は安らかな  
ときを過いでしている。そう思いませんか?」

『だから涙を拭いて』とリーザは言った。

待ち望んでいた言葉だった。

自分を責め続け、息が苦しくてたまらなかった。

でも、この人の言葉で少しだけ軽くなったような気がした。

リーザはそれからしばらくの間、黙って髪を撫でていてくれた。

どれくらい時間が流れたのか　それは短いようにも、長いよう  
にも感じた。

そして、やっとアスナムが落ち着きを取り戻すと彼女は「本当のこ  
とを言つとね」と口を開いた。

「兄上が後に迎えるという人がどんな人であるのか、見極めに来た  
の」

「兄上?」

「ごめんなさい。私はデルブルール現皇帝バルドスIIグレイザーの妹。  
そしてこの国の王女。あなたにとっては敵になるわね」

リーザの言葉にアスナムは言葉を失った。

こんなに優しい人があの冷酷な男の妹などとは到底信じられなかった。

そう言われてみれば、似ているような気もする。

「でも、こんなに若いとは思ひもしなかった。兄上は本気でマリエステを滅亡させようとしているのね」

「私、イヤ！ 罪もない人を殺すなんて、そんなこと耐えられない！ 私は道具じゃない！ 道具じゃないのに……！」

取り乱すアスナムにリーザは「落ち着いて」と言った。

「兄上は間違った方向にデルブルを、いいえ、シャンタナを導こうとしている。それだけは私の命を賭けても阻止します」

「リーザ様」

「婚礼の儀までには必ずあなたをこの国の外へ。

だからそれまでは我慢してほしいの。

そしてこれだけは約束して、アスナム。

何があっても自ら命は絶たないで……あなたを大切な方の元へとお

返しできるように努めますから」

「大切な方……?」

「ええ。あなたの一番大切な方があなたを助けるためにここにいるのです。だから、希望は捨ててはなりません」

そう言われて、アスナムの頭の中に名を呼ぶサウラスの声が響いた。

(サウラス!! サウラス!!)

胸の中で何度も彼の名を呼ぶ。

それだけで溢れてくる想いに胸がいっぱいになる。

「私……私……約束します!!」

強く、強く頷いた。

彼女との出会いさえもバルドスによって仕組まれたことであることに、まだ気がつくこともなくただ、強く頷くのだった。

## 裏切りの足音（1）

ザステイアン城塞潜入から2週間が経過していた。

その間にも婚儀の準備は行われ、サウラスたちの部隊にも婚禮の儀のパレードの警備の命が下っていた。

2週間という間、サウラスにはなにをすることもできなかった。迂闊に動けば潜入したときのようになる。

さらにあの騒動で帝都内の警戒レベルは最も高いものへと引き上げられ、各エリアに鉄仮面の兵士たちがその警備にと配属されていた。

各エリアに行き来するのも制限がなされ、機関車に乗るにしても兵士たちによるボディチェックがいちちなされるまでになった。

もちろん、城塞に近づくことなど容易ではなく、あの地下排水路の入口付近にさえも警護兵の姿を見るようになった。

徹底した情報制限もなされ、サウラスがかき集めることができたのは帝都に住む民衆たちと大差ない噂程度のものしかなかった。

「もうすぐだね、サウラス」

興奮を隠し切れないルイーは目を輝かせながら、隣で微動だにせず立ち尽くすサウラスに向かって言った。

サウラスは横目でちらりとルイーを見ると、小さくため息をついた。

「パレード見るのって陛下が即位されて以来なんだよ。婚礼の儀のパレードなんて生まれて初めてだから」

「俺たちはその警備なんだ。自分の立場を忘れるな」

「それは分かっているけどさあ」

ルイーは口を尖らせた。

周りはパレードを一目見ようとやってきた帝都の市民たちで溢れていた。

珍しいのは下層階級の庶民の姿も見えることだった。

(これだけ人が多ければ、暗殺も可能か……)

ひしめきあう人の群れを鋭く観察する。

警備の兵の数は尋常ではない。

だが、手馴れた者なら警備をかいくぐって『皇帝暗殺』をすることも出来ないことではない。

リーザからの指示を思いだしながら、サウラスは回りの動向にピリピリと神経を研ぎ澄ませていた。

婚礼の儀の前にアスナムを城塞裏までリーザの部下が連れ出すこと

になっている。

『乙女失踪』に乗じてヤークンが『皇帝』を『暗殺』し、騒ぎに紛れて全員が帝都を脱出する算段だ。

刻々と差し迫る時間に、サウラスの鼓動は早くなっていた。

じんわりと額に汗がにじむ。

この日が来るまでじっと耐えてきたのだ。

全てもうまくいく。

何も問題はない。

そう思っただけと拳を作り、力を込めるのだが、不安や焦りは消えてはくれない。

そのときだった。

（あれは！？）

並び立つ群集の向こうに走り去る影を見つける。

粗末なボロのコートを頭から被った影が真っ直ぐに城塞裏へと走っていく。

見覚えのある姿だった。

走り去るその後姿にサウラスの中で何かが弾け飛んだ。

「サウラス！ ちょっと、どこ行くの！？」

気がついたら追いかけて走っていた。  
見失わないように必死で追いかける。

彼は城塞裏の地下排水路に向って走っているようだった。  
慣れているように路地裏を走っていく大柄な影は、間違いなくヤー  
クンその人のものだ。

排水路の入り口までやってくると一度足を止めた。

「ヤークン！！」

誰もいないことを確認したうえでサウラスはヤークンに近づき、そ  
の名を呼んだ。

その声に「しっ！！」というように右手の人差し指を唇に当て、ヤ  
ークンは振り返る。

切迫した危機迫る額に、じっとりと滲む汗が見てとれた。

「何があっただんだ！？」



問うサウラスにヤークンは「予定変更だ」と低い、唸り声とも思えるような程に低い声で、苦い一言を漏らした。

そして回りを窺つと懐から短刀を取り出し、排水路の出入り口を見遣った。

「警備兵がない!？」

配置されているはずの鉄仮面の兵士の姿がそこになく、サウラスは違和感を覚えた。

ヤークンを見ると「中だ」と言うように、手で合図された。見れば扉にほんの僅かに隙間が出来ている。

「もしかして……!!」

「ああ、その『もしかして』だよ。皇帝にバレた。いや、こうするであろうことを完全にあつちは予想していたんだろうな」

そう言うとヤークンはギリツ……と悔しそうに唇を噛んだ。

「アスナムは……!! アスナムは無事なのか!!」

荒く大きくなる声に、ヤークンは急いでサウラスの口を残った左手で塞いだ。

「命は……な。だが、精神的なものまで保証はしない。それを確かめに行くつもりだが……おまえさんはどうする？」

ヤークンの放つ言葉に、サウラスの心の蔵がギュツと縮まった。

『精神的なものまで保証はしない』という言葉の意味が、サウラスには全く理解も想像もつかなかった。ふと、嵐の日の出来事が脳裏を掠める。

「まさか……!!」

また彼女の目の前で誰かが命を落としたとでも言うのだろうか!?

腰の剣をスラリと抜き、構えながらサウラスはヤークンとともに地下排水路に続く階段へと入っていった。

慣れているらしいヤークンは階段を駆け下りと、排水路の奥の水門の方角へと進んでいく。

この間来たときと同様、変わったところにはない。

だが、ピリピリとした緊張感は一人で潜入を試みた時よりも増していた。

ふとヤークンの足が止まり、サウラスもそれに習うように足を止めた。

前方に鉄仮面の兵士の姿があり、何か黒い塊をドサドサと下ろしているのが見える。

ヤークンがサウラスを振りかえり、『ここで待て』と言うように指示を出した。

それに従うように壁に張り付き、サウラスは後方を窺った。

## 裏切りの足音(2)

その間にヤークンは鉄仮面の兵士に静かに忍び寄ると、短剣の先で鉄仮面を押し上げ、あらわになつた後頭部へと鈍く重みのある一撃を加えた。

ドサリ……と一人の兵士が呆気なくその場に倒れ込むと、もう一人がいきり立ったようにヤークンに突っ込んでくる。

「くそっ！！ 侵入者め！！」

そう言つて斬りかかつてくる兵士の剣を短剣で受け止めると、ヤークンは体を捻り、顎を押し上げるように蹴りを入れる。

兵士の身体が宙に浮かび、その鳩尾にもう一撃蹴りを入れ込むと、兵士は物凄い勢いで壁に激突し、そのままズルズルと床に落ちた。

「いいぞ、サウラス」

呼びかけられ、サウラスはヤークンの元に向かった。

ヤークンにやられた兵士二人は見事にピクリとも動かず、その場に伏している。

「殺したのか？」

問うサウラスにしかしヤークンは首を振った。

「不用意に命を奪うつもりはない。ま、それが甘いと言われるんだがね」

そう言つと、ヤークンは短剣を胸の中へとしまい込んだ。

それからゆっくりとヤークンは先ほど下ろしていた黒いもののほうへと近づくと、膝を立ててその場にしゃがみこんだ。

一緒になつて近寄つた先にあつたもの。

それはは首のない二人の男の死体だった。

「何だ、これは……？ 帝都の兵士！？」

身に着けているのはサウラスが今着ているものと同じ、下級兵士に与えられる軽装衣だった。

他に何かないか見てみると、倒れた足元に首が二つ転がっていた。驚いたのはその死に顔が奇妙なほどに穏やかなものであったことだった。

「覚悟していた？ まさか……そんなこと！」

「いや、覚悟していたよ」

そう言って静かに語るヤークンの言葉の端に悲しみとも憤りとも取れる感情が滲んでいた。

ヤークンは首なしの死体の男達たちの懐から何かを取り出すと、それをサウラスに見せるように手のひらを広げた。

手のひらの上にあつたものは2枚の銀貨だった。

その一枚を手取る。

『薔薇に盾』の模様が描かれている。

「これは？」

「前皇帝フェイダスⅡグレイザー様の紋章だ。現皇帝に反旗を翻す同胞のみが持つ証だ」

「前皇帝の紋章!？」

「リーザ様から皆、頂いている」

ヤークンの言葉にサウラスは愕然とした。

リーザから与えられた前皇帝の紋章を施したコインを持つと言う兵士2名が殺されたという事実を、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「皇帝が……やったのか？」

絞り出すように問うサウラスにヤークンは銀貨を懐の中にしまいこみながら、小さく頷いた。

「こんなことが出来るのは心を持たない人間だけだからな。皇帝派に属する人間か、あるいは皇帝自身か。どちらにしても、我々の行

動は予測され、阻止されたと考えて間違いないだろう」

「それじゃ、アスナムは！！」

そう言うサウラスにヤークンは言葉なく、頭を振った。

「な……！！？」

アスナムを助けに行こうと駆けだそうとするサウラスの腕をしかし、ヤークンはしつかりと掴んでいた。

「放せ！！ 放してくれ、ヤークン！！ オレはアスナムを……彼女を助けなくては！！」

しかしヤークンはその腕から力を抜くことはなく、ただ黙するだけだった。

そのとき、背後の方からいくつもの騒々しい足音が聞こえてきた。

「チツ！ 誰かが通報したか！！」

舌打ちするとヤークンはサウラスを掴む手にグツと力を込め「考える」と言った。

「不用意に今動けば、乙女を救う機会は永遠になくなる。自らの命を無駄にするな。まだ機会はある。今まで耐えた時間まで無駄にするな！！ 辛いのは……おまえだけではないはずだ」

ヤークンの言葉にサウラスはハッと我に返る。

瞬時に浮かんだのは他でもないアスナムの顔だった。

逃げる方法はおそらく、リーザからアスナムにも伝わっている。

それが失敗に終わったことで、逃げる機会を失ったアスナムがどれほどに傷ついているのか……それを考えるだけで胸の奥底がジリジリと焼き付いた。

ギョツと唇をかみしめ、諦めるサウラスたちに足音はさらに近付く。

「すまないが、オレは行くぞ、サウラス。ここで捕まるわけにはいかない。おまえさんは不審者を目撃して追ってきたと説明しろ。姿を見られたのはオレだけだから、おまえに疑いがかかる心配はないはずだ」

そう言うと、足音とは反対のほうへとヤークンは一歩踏み出し、足を止める。

「サウラス、気をつける。敵は案外身近にいるかもしれない。シルスは……おまえの行動をおそらく見ている。どこからかはオレには分からんが……」

「なに!？」

「忠告はした。また会おう」

そう言うとヤークンは水門の方に向かってさらに走って行ってしまった。

取り残されたサウラスの元にやってきたのはルイーと鉄仮面の兵士数名だった。

突然持ち場を離れたサウラスをルイも追いかけて、排水路に入っていくサウラスを心配し、近衛兵を呼んできたということだった。

近衛兵たちにいる質問されたが、サウラスは指示通り、見失ったとだけ答え、ひたすらにヤークンのことは黙っていた。

ヤークンの言動に引っかけかりを覚え、それが胸に悶えている。

『敵は身近にいる』とはどういう意味なのだろう。

(シルスが……オレの傍でオレを見張っている?)

『シルベルス・ビシュヌ』という存在だけはリーザの話で知ったものの、いまだにその全貌が分からない。

ゆえに不安が胸を突き上げる。

今後は益々慎重に動かなければならないと……ヤークンは言いたかったのに違いない。

「サウラス、どうしたの？」

怪訝そうなルイーの声にサウラスは我に返り、「なんでもない」と笑って見せた。

想いは募り。

されど、今はそれを諦めるしかない。

胸をかきむしるほどの想いを胸の奥底へと沈ませる。

そのことにもどかしさと苛立ちが心に大きな闇を作っていく。

サウラスがルイーとともに排水路を出る頃。

パレードの始まりを告げる飛空艦隊の空砲の音が響き始めていた。



## 断たれる退路

窓越してではない、生の景色を見るのはアスナムにとっては本当に久しぶりのことだった。

そよぐ穏やかな風になびく髪を撫でる。

頬を掠めていく風に変りはないはずなのに、その香りは変わってしまった。

大好きな、幼い頃から慣れ親しんだ木々の青々とした匂いも、土の埃臭さもそこにはない。

当然のことだ。

デルブルは自然を排他し、科学と機械にのみ頼っている国である。自然の豊かな力に重きを置くことのない国の中で、自然の香りを求める方が間違っていた。

（これがバルドスの求めるシャントナの姿……）

眼前に広がる無機質な建物たち。

そこを縫うように走る飛空船を見上げながらアスナムは目を閉じた。

しかし、その風景も今日で見納めになる。

自分は今日、ここからいなくなる。

そう、愛しい男ひとの手によって、自分はやっとこの監獄から抜け出すことができるのだ。

ずっとずっと待ちわびていたその日がやっとやってきたのだ。

上る太陽を仰ぎ、沈む月を数えた。

来る日も来る日も愛しいその人の顔を思い浮かべ、その声に耳を澄ませた。

目を瞑れば広がる残酷な出来事も、彼の名を心で叫ぶことで耐え忍ぶことができた。

「気が済んだか？」

後方から聞こえてくる声にアスナムは小さな溜息をついた。物思いにふける僅かな時間もこの声がすべて奪っていく。

この国に連れられてから毎日のようにバルドスもまた、自分のところにやってきた。

何をするわけでもなく、ただ同じ部屋にとどまりアスナムを観察する。

その棘のような視線が身を串刺しにし、心の平安は訪れることはなかった。

それでも、何とか耐え忍んでこられたのはリーザの存在だった。

彼女の言葉に、励ましに心が救われた。

この窮地から必ず救い出すからと。

必ずサウラスの元へ返すからと毎日のように彼女は言った。

そして、昨夜バルドスはアスナムに向けこう告げた。

『明日、婚礼の儀を執り行なう』

ついにその時が来たと思った。

人々が集まるその騒ぎに乗じて、自分はこの檻を抜け出すことになっていた。

しかし……どれだけ待ってみてもリーザも、そしてその手引きらしい相手も現れなかった。

そして今、目の前にバルドスが立っている。

そのことが酷く恐ろしく、ギョツと拳を握りしめた。

「皆、おまえを待っている。行くぞ」

全身白の円舞服に身を包んだバルドスはそう言ってアスナムの腕を取った。

アスナムは彼の手を振り払うと「触らないで」と叫んだ。

そんなアスナムの様子に彼は呆れたように溜息をつくと、風でまくれ上がったアスナムの黒のベールを優しく整えた。

「己の立場をわきまえよ。おまえのすべては余が握っておるのだ」

「私はあなたの好きにはならないと……何度言えば解るの！」  
睨みつけるアスナムにバルドスは小さく溜息をついて見せた。  
そして「祝い事の前でこういうことはしたくなかったのだが……」  
と言うと、指をパチンと鳴らした。  
すると、バルコニーの向こうから鉄仮面の兵士たちが現れた。  
彼らの腕には拷問を受け、歩くのもままならない二人の若者が捕ら  
えられていた。  
その姿に目を見張ってしまう。  
冷静でなければならぬ。  
動揺など見せてはならない。  
気取られてはならない。  
そう思っても胸の鼓動は早くばかりで、じつとりと握った拳が湿り  
気を帯び始める。

兵士は彼らをバルドスの足元に跪かせると、深々とバルドスに向っ  
て頭を下げた。

「おまえが待つていたのは、こやつらではないのか？」

「何を……何を言っているの？」

「こやつらはリーザが手配した者たちだ。だが、残念ながら余には  
お見通しだったのだよ」

言いながらバルドスは鉄仮面の兵士の一人に手を差し出した。

兵士は腰の剣を抜くと、丁寧に彼の手にそれを預けた。  
嫌な予感が背筋を駆け抜けていく。

思い出したくない凄惨な画が、アスナムの脳裏に何度も何度も消え  
ては甦る。

口が一気に乾いていくような感覚が遅い、ガクガクと膝が鳴り始め  
る。

「何をするの！ やめて！ やめてよ！」

「余も不本意だが、致し方ない。これもすべて、おまえのせいなのだ」  
そう言うと、躊躇することなくバルドスは右手に握った剣を振り払った。

二人一片に首が飛ぶ。

血しぶきが視界を真っ赤に染め上げた。

大きな音を立ててその場に突っ伏す首のない死体に、アスナムは声にならない叫び声をあげた。

口を。

顔を。

手で覆っても目に焼き付いて離れないその瞬間が、激しい痛みとなつて心と左目を襲う。

「おまえが余の言うことを素直に聞くのなら、リーザの罪は咎めずにおこう。それとも、おまえはアレの死に際にも立ち会いたいのかね？」

「そんな……！」

（もしかして……こうするためにリーザ様と私を会わせたの？）  
バルドスを見つめる。

不敵なほほ笑みを浮かべて見つめるその目に迷いはなかった。

この男なら実の妹であろうと簡単に手に掛けるだろう。

（なんて男……！）

自分を逃げられないようにするために

逆らわせないようにするためだけに

何も知らない彼女を保険にしたのだ。

その手の中で、自分も彼女も完全に踊らされてしまった。

悔しさにこぶしが震えた。

何も出来ない自分が齒がゆかった。

それでももうこれ以上、自分の目の前で人が殺されるのは見たくなかつた。

浮かんだのは愛しい人の笑顔。

もしも……この男が彼の存在を知ってしまったらどうするだろう。

間違いなく彼の命は危険にさらされる。

6年前、彼の元を去ったのは彼に生きていてほしいと願ったことだつた。

二度と会わないと決めたのは、彼の命を危険にさらしたくないからだつた。

同じことを繰り返してはならない。

一緒に逃げるなど、土台無理な話だつたのだ。

一瞬でも夢を見た自分が愚かしい。

自分さえ我慢すればいいのだ。

そうすれば、もう誰も死なずに済む。

それはサウラスを守ることにもつながらる。

「何なりとお申し付けを、陛下」

こぼれ落ちそうになる涙をぐつとこらえ、アスナムは頭を下げた。

バルドスは満足そうにほほ笑むと、優しく彼女の手を取つた。

そして懐から取り出した黒の皮の眼帯を取り出すと、そつと彼女の左目にあてがつた。

再び顔を上げたアスナムの瞳には、もう希望の光は宿ることはなかつた。

閉ざされた左目の視界と同じように、心を埋め尽くす絶望の雨雲に飲み込まれ、輝きは消え去っていった。

## 絡まぬ想い

眼下に広がるのは帝都の道路を埋め尽くす人の波だった。

眼前には鮮やかなブルーの空　まるでこの日を祝福しているような  
ぬみのない空が遙か遠くまで広がっている。

その空を憂うつそうな面持ちで見つめる薄水色のレース地のドレス  
に身を包んだ女性が、甲板で一人佇んでいるのを見つけるとレーヴ  
ンは声をかけた。

「憂うつそんなお顔でいらっしやいますね。陛下の、いいえ兄君の  
ご結婚を喜べない……そんなふうにお見受けしましたが？」

ジリオンの甲板から外を眺めていた女性は不意に話しかけられ、一  
瞬ビクツと体を震わせた。

だがすぐに平静を装い、話しかけてきたレーヴンに向き直ると、に  
っこりとほほ笑みを浮かべて見せた。

「私の前でそんな演技はおやめください、リーザ様」

そう言つてレーヴンは苦い面持ちでリーザの傍らに並び立った。

周りにいるはずの護衛の姿はすでになく、甲板にはリーザとレーヴ  
ンの二人だけになっていた。

リーザはそんなレーヴンの言葉に小さく溜息をつく、ほほ笑みを  
消し、代わりに冷たい眼差しを向けた。

「おまえは嬉しいのでしょうか、レーヴン。マリエステを滅ぼす切り  
札を手に入れられたのですから……」

棘のある言い方だった。

普段は物腰も、そして言葉も柔らかい目の前の女性はしかし、レー  
ヴンにはひどく冷たい物の言い方をする。

いや、会話だけではない。

その態度もまったく違う。

それはいつからだったか……守護総長にレーヴンが任命されて以来、  
ずっと続いているような気がする。

「貴女が憤りを感じているのは『崩落の乙女』のことですか？ それとも貴女の焦がれるあの男がいる国が滅ぶかもしれない憂いから、私に八つ当たりをなさっているのですか？」

「兄上のやっていることが間違っていることだと、おまえだってわかっているのでしょうか？ それなのに、兄上に反論することなくただ従って。守護総長とは名ばかりですね」

「いつになく……厳しいお言葉ですね。ですが、きつと貴女も陛下のとる道こそがデルブルにとつて、いいえシャンタナにとつて最善の道であるということをお分かりになる日が来ると私は思っています」

「人が人を超える存在になれるなどと、本気で思っているのですか！」  
「陛下なら……いいえ、陛下にしか成せないことだと信じております」

（そう信じる自分が自分に与えられた使命なのだ）  
レーヴンは後ろで手を組みながら、その手にギュツと力を込めた。レーヴンに残された道はバルドスを信じ、進む道とともに進むことにしかなかった。

本当に歩みたかった道は別にあつた。

けれど、もうその道を進むことはできない。

したくてもそこに導いてくれる大きな背中が、もうレーヴンの前にはなかった。

「アインバイルがその言葉を聞いたなら、ひどく落胆したでしょうね」

『アインバイル』という名前がリーザの口から漏れた途端、レーヴンはカッと胸の内が熱くなるのを感じた。

その名前をリーザの口からは聞きたくなかった。

超えられぬ偉大なる存在　デルプールの守り神とまで称され、前皇帝の、いやリーザの信頼を得ていた男。

そして彼女にマリエステのあの男との婚儀を勧めた張本人。

尊敬をしながらもどこかで彼を疎ましく感じていた。

彼が死んだと聞いたとき嘘であって欲しいと思う一方、喜んでいたことも事実だった。

ようやく自分がリーザの信頼を得られる唯一の存在となれるのだと

しかし、姿なき今も彼は自分の大きな壁になっている。

彼『アインバイル』の存在がある限り、自分は永遠に比べられ続けるのだらう。

レーヴンにとってそんなことは願い下げだった。

「いつまで亡者にすがりつくおつもりですか、姫？　それとも姫はまだ将軍が生きていると思っておいでなのですか？　違いますね。

姫は将軍が生きていると知っているから、そうおっしゃるのでしょ  
うね」

リーザの顔から血の気が失せる。

平静を装うとしているが、動揺していることをレーヴンは見逃さな  
かった。

見逃せるはずがないほどに、リーザへの想いは日々募っている。

（陛下の危惧されていたとおり……か）

落胆もある。

否定したい気持ちがないわけではない。

リーザの意思を尊重し、彼女に付き従えばおそらく信用は得られる。  
だが、本当に欲しいものがそれではないことをレーヴンは知り過ぎ



ていた。

「本当に姫はウソのつけないお方です。それでは到底、陛下にはかないませんよ」

「レーヴン！ もう、昔のようにには戻れないの？ 優しいほほ笑みをたたえたおまえには……」

見つめるリーザの瞳は潤んでいた。

こんな悲しい顔を見たいわけではない。

欲しいのは彼女の笑顔であって、涙ではない。

だが、自分もこれ以上押しとどめることは出来ないほどに、彼女を愛してしまっている。

「陛下は私にこうおっしゃった。『欲しいものは待っていても手に入らない』と 私はただ、陛下のその言葉に従うまでです」

「欲しいもの？ おまえは何が望みだと言うのです！ 他国を滅ぼしてまでおまえは何を望むと言うのです！ それほどに価値のあるものなど……」

リーザの言葉に一度レーヴンは奥歯を噛みしめた。

ギリツと歯の擦れる音がするほどに強く、強く……

「価値があります。私の望みはただ一つ、貴女の心なのですから」  
「レーヴン！」

「貴女の心は七年経った今でも、あの男の元にある。あの男がいなくならない限り、私は永遠に貴女を手に入れられない。待っていても……貴女の心は私には向かない。私の心の音を聞いてはくださらない。だから私は陛下に従うのです」

「愚かな！ レーテル様を殺したところで私の心など……！」

確かにリーザの言う通り、マリエステ王国のあの王子を殺したところでリーザの心が手に入るなどと安易には考えてはいない。

けれど、それでも無価値ではないと思っっていることもまた事実だっ

た。  
「時は人を変える。それを私が証明して見せます」  
そう言うとレーヴンはリーザに背を向けた。

人は変わる。

自分が変わったように、誰であれ。

時間はかかるかもしれない。

それでも、そうしてでも。

リーザを手に入れたと思う欲望がなによりも、どんな願いよりも勝っている。

どんなに汚いと罵られようと。

どんなに汚いことに手を染めようと。

もはやどうでもいいほどに、胸を焦がし、想いの刃で身を引き裂いてしまっている。

「一つ、貴女に教えて差し上げましょう。あの女は貴女の命と引き換えに、自らの意思で陛下に従うことにしたのですよ」

「なんですって……！ それでは私を彼女に会わせたのは兄上の…

…」

「陛下に楯突く者は妹君でも例外なく滅ぼす……それを肝に銘じておかれよ」

残酷な言葉だけを残し、レーヴンはその場を後にした。

残された彼女が何を思い、どう行動するか……それが分かっているながらも、レーヴンはあえて真実を伝えた。

警告は与えた。

だが、それでも彼女は自分の信念に従うだろう。

（そのときは私の手で……）

近い未来を想像しながら、レーヴンはただ強く、強く拳を握り締めた。

## 交錯する視線

排水路から出てきた頃には、すでに人の波は何倍にも膨れ上がっていた。

持ち場に戻ることもどうやら出来そうになく、サウラスは結局ルーイと二人、人ごみに紛れパレードを見ることになった。

空を何万発もの色鮮やかな花火が埋め尽くす。

人の熱気も最高潮に達しているようで、波のように人々の姿が、その声があふっていた。

ざわめく人々の列を掻き分けるように、サウラスとルーイは最前列のほうへとなんとか進み出た。

「もうちょっと近くで見たかったのになあ」

口をとがらせるようにルーイが小さなため息をもらしながらそう言った。

サウラスはその言葉に「すまない」とだけ返した。

ルーイにも本当のことは言えない。

元々任を放り出すつもりではいたものの、当初の予定とは大幅にその筋書きは修正されることになった。

胸がやけるように熱いのに、それを何もないかのように涼しい顔でやり過ごす。

想いも理性も全て、向かうところは一つであるというのに。

駆けだしたい、全てを投げ出しても彼女の元へと思うのに、それができないのは抱えるものが彼女と自分の二人だけでは済まないという巨大すぎる壁と直面しているからなのか？

いや……自分の心が弱いせいなのかもしれない。

世界を放棄できるほどの度胸が自分にはまだないと　そんなふうにサウラスには思えてならなかった。

「ごめん、そんなつもりで言ったんじゃないよ。サウラスのせいじゃないし。不審者を見かけたんだから仕方ないよ。でも、サウラスの身に何もなくてよかった。帝国兵士の死体が見えたから、エスメルもやられちゃうかもって、ちよつと心配だったから」

（帝国兵士の死体……？）

ルイーの言葉に引っかけかりを覚える。

排水路に入っていくのを見かけて近衛兵を連れてきたのだと彼は言った。

地下排水路は暗く、サウラス自身もそれが『兵士の死体』だと確認できたのはそれに近づいたときだった。

遠目からではただの黒い塊にしか見えないはずだし、ルイーは近衛兵たちの後ろからやってきていた。

小柄なルイーを覆い隠すほどに大きな体つきをした兵士二人に阻まれても、それが見えたのかと。

ジリツと胸が焼けつくような感覚に襲われる。

「どうしたの、サウラス？」

屈託のない笑顔を浮かべるルイーにサウラスはそれでも「なんでもない」と首を振った。

妙な不安が胸にこみ上げるは確かだった。

ヤークンの言葉が頭の中をグルグル這い回り、考えれば考えるほどそちらへと向かってしまう。

疑いたくない。

彼に限ってそんなことあるはずがない。

彼は剣の持ち方も知らなかった、機械工見習いの貧しい少年なのだ。デルブルの未来を憂いている一人だ。

そんな彼がどうしてサウラスを監視などする？

何のメリットが彼にあるというのか？

（そんなもの、あるわけがない！）  
可能性は限りなく低い。

けれど0ではなく、不審はどうしても拭いきれない。

（なにを考えているんだ、オレは！ ルーイはそんなヤツじゃない！ そんなヤツじゃ……！）

目を出す感情を必死に否定し、排除しようとするけれど、どうやってもうまくいかない。

苛立ちと焦りでサウラスはギリツと唇を強く噛んだ。

血の味に眉間に深いしわが寄った。

「ねえ、サウラス、君の夢ってなに？」

不意にそう聞かれ、サウラスは戸惑った。

視線だけをルーイに向けると、ルーイは小さく笑った。

その笑顔はどこか儂げで、悲しみで溢れているように見えてならなくて。

余計に言葉が出なくなってしまうていた。

「ごめん。ちょっと聞いてみたかったんだ。ボクにはサウラスみたいな剣の才能はないからさ」

他の才能も特にないんだけど……と付け加えながらルーイはまた笑う。

サウラスはルーイから視線を外し、前を見た。  
夢。

ただ一つだけある確かな夢。

それはやはり愛しい女とともに平和に穏やかに暮らすこと。

小さいけれど、自分たちには遥かに大きな夢だった。

「おまえの夢は？」

ごくりと自分の夢と想いを飲み込んでからサウラスはそうルーイに

尋ねた。

ルイーはどこか遠くでも見るような目つきで「マリエステに行ってみたい」と答えた。

「マリエステは敵国だろう？ どうしてそんなこと……」

「ボクの故郷はジエスタって言ったでしょ？ ジエスタに住んでいた人間なら誰でも思うことだよ。」

それに、デルブルにはエシエンタールの像はないから。マリエステのエストセラ城には美しいエシエンタールの彫像があるってずっとずっと聞かされてた。

それを一度でいいから見てみたいんだ。殺された母と妹の代わりに

……ボクが祈りを捧げたいんだ。

なんか、ちつぽけな夢で恥ずかしいんだけど」

「殺されたのか、家族？」

問うサウラスにルイーはしまったというように顔を歪ませた。

そして誤魔化すように「そのせいでデルブルに来ることになった」と零した。

「余計な事を聞いたな」

ううんというようにルイーは首を振った。

それ以上、お互いに何も言えなくなったが、サウラスにとっては逆にそのほうが都合よかった。

踏み入れてはいけない。

互いの距離に触れた気がしたからだった。

そのとき、周りがにわか騒々しくなった。

華々しい管弦楽曲に乗ってカッソン、カッソンと地に響き渡る大き

な金属音が遠くから聞こえてくる。

地を蹴り上げる太くたくましい音は鋼鉄の馬が鳴らす蹄の音だ。

「見てよ、サウラス！ 陛下の乗った馬車だよ！」

興奮したルーイが指を指したその先に皇帝の乗った鋼鉄の馬車の姿が見てとれた。

馬車はエスメルたちのすぐ側までやってこようとしていた。

不意に右目が熱を帯び始める。

（なんだ……？）

今まで感じたことのない違和感がサウラスを襲い始めていた。

音が近くになつてくるにつれ、右目がドクン、ドクンとうなり声をあげ始め、熱はどんどんその温度を上げる。

焼け付くような痛みさえも姿を見せ始め、サウラスは思わず右目を覆った。

「くっ！！」

痛みに思わずうめき声もれる。

歯を食いしばり、必死で堪え忍びながら前を凝視する。

鋼鉄の馬の引く鋼鉄の馬車の姿が残された左目に映る。

満足げなほほ笑みを湛え民衆に手を振る白装束のバルドスの隣には、対照的な漆黒のドレスに身を包んだ黒髪の美しい女が立っていた。

女は無機質な表情のまま真っ直ぐに前を向いていた。

がしかし、サウラスの横を通り過ぎる瞬間、女はサウラスの方に顔を向けた。

左目を黒の大きな眼帯で覆った女は凍てつく冷たい瞳でエスメルを捉えていた。

そうして視線が交わった瞬間、右目に火花が走った。

見開かれた瞳に映ったはずのその顔は愛しい女のものであるはずなのに、全く知らない女の顔でもあった。

希望もなく。

願いもなく。

あるのは押し寄せる絶望と失意の念。

ただそれだけに囚われた空っぽな彼女の姿がそこにあった。

強烈な痛みは電気のように全身を駆け巡っていく。

頭の中が真っ白になり、ざわめきがはるか遠くに流れていくような感覚がサウラスを襲った。

体がずっしりと重みを増して、立っていられなくなる。

（アスナム！！ アスナム　！！）

闇に吸い込まれる意識の中ではつきりと感じたのは、冷たい波動だった。

どす黒い闇に染め上げられた強烈な力が、一瞬でサウラスを飲み込んでいた。

『デルブルーに勝利をもたらす魔女　アース』その名をサウラスが耳にしたのは翌日の事だった。



## 闇に沈む身体

「あたしね、いつか絶対に素敵な人と結婚するわ。そのときはこう言うのよ。『シャンタナの空と大地と海に誓って、生涯愛することを誓います』って」

ニッコリ。

ほほ笑みをたたえ、うつとりと夢見る瞳を輝かせながらリチエットが言った。

それは遠い幻。

もう二度と戻れない美しい過去。

ゆっくりと目を開ける。

飛び込んだできたのは見慣れない闇色の天井だった。

大きな窓からは青白い三日月が顔を覗かせている。

鼻の鳴き声も、森の獣の声も、森の木々のさざめきもここにはない。隣で眠っている男の腕には紅蓮色の宝石がはめ込まれた腕輪が輝いていた。

男は疲れきって眠っているのか、死んでいるように動かない。

（今ならこの男を殺せるかもしれない！）

ふとそんな思いがアスナムの頭をよぎった。

視線が枕元に置かれた銀色の短剣に向く。

『おまえにこれをやる。どう使うかはおまえ次第だ』

アスナムを抱く前にバルドスはそう言って短剣を渡した。

それで命を絶とうが、バルドスを殺そうが構わないと

そつと手にとつて、柄を握る。

薔薇と獅子の紋章の入った美しい短剣の鞘から、ゆっくりとその刃先を抜き取る。

月明かりに滑らかな刀身が露になり、月の光を反射して輝く刃先に  
ごくりと喉がなった。  
バルドスは眠っている。  
これは最大のチャンスだ！  
この男を殺して逃げよう。  
警備も薄い今ならやれないことはない！

だが、すぐにそんな気持ちは萎えていった。

眠っているはずなのに、妙な緊張感が心を貫いてくる。

アスナムが少しでもバルドスの体に触れれば、その直後にアスナム  
の胸を鋭い剣先が貫く　そんな映像がまざまざと脳裏に浮かび上  
がるのだ。

愚かな考えに蓋をする。

この男に逆らえば、もう一人命を落とすことになる人がいる。

それは絶対に避けたかった。

短剣を鞘にしまつと枕元に戻した。

それからバルドスを起こさないように、アスナムはゆっくりと身を  
起こした。

裸の体に絹のシーツを巻き、静かにベッドを離れ窓に近づく。

外は昼間の出来事がまるでウソのように静まり返っている。

空に伸びるいくつもの高層の建物たちはエシエンタールを求めている  
かのように、必死に手を伸ばしているように見えた。

それは今の自分の心そのものに見えて、ギョツと唇を噛みしめた。

（リチエット。私、あなたがしたかった結婚をしたわ。でも、とっ  
ても虚しい……）

リチエツトが夢見ていた、いや、二人で夢見ていた結婚式を自分は挙げた。

自分たちが夢見ていたものよりもずっと華やかで、贅沢な結婚式をしたはずなのに……心に残ったのは充実感ではなく虚しさだけだった。

望んだのはこんなことではなかった。

欲しかったのはそんなことではなかった。

ささやかな幸せを。

愛する人と貧しくてもいい。

穏やかに、平和に暮らすことがアスナムにとっての夢だった。

6年前に手離した夢。

けれど、手離すにはあまりにも彼の人を愛しすぎていた。

心のどこかでいつの日か、遠い、遠い未来でならば叶えられるかもしれないと儚く望んだ夢。

しかしそれは無残にも切り裂かれてしまった。

もはや取り戻す術もない。

けれどそれもすべてアスナム自身で選んだことだった。

受け入れたのは自分。

逃げ出すことを諦め、絶望に身を落とすことを選んだのは他でもない自分なのだ。

希望など持つことがすべての間違い　それは痛いほど分かっていることなのだけれど。

好奇と畏怖の視線にさらされ、悔しさと悲しみで満たされた心を隠すように顔に仮面をつけ耐えたパレードは、まさに地獄の始まりと呼ぶにふさわしいものだった。

ただ一つの偶然を除いては

(サウラス! !)

パレードの最中に感じた違和感を放つ存在。  
ひしめき合った群集の中にいながら異彩を放つ灰色の髪美しい顔の青年。

遠目でもすぐに彼だと分かった。

左目が教えてくれた。

彼がそこにいることを。

視線がぶつかった瞬間、懐かしいあの碧眼の瞳に仮面を外しそうになった。

闇の中で輝きを放つ一寸の光。

その輝きの強さは例えようもなく、激しい炎のようにも感じられた。喉から手が出るほど欲しくなる、魅惑的な光……手を伸ばせばすぐそこに愛してやまない男がいた。

(サウラス!!)

彼の手を取れなかった。

彼とともに逃げられなかった。

潰れてしまった。否、潰れてしまった最後の機会。チャンス

彼とともにもう一度手を取り合って生きる道を自ら閉ざしてしまった。

もう、愛を囁き合ったあの日には二度と自分は戻れない。

「そんな格好していると風邪を引くぞ、アース？」

息がかかるほどに近いところで低い男の声が響いた。

刹那、体が緊張して石のように硬くなる。

指先に震えが走りそうになるのを、拳をにぎりしめることで回避する。

彼は優しくアスナムの肩に絹のローブをかけると、力強く彼女の体を引き寄せた。

「余の腕の中で苦悶するそなたは、今までの中で一番美しかった……」

……」  
その言葉にアスナムはより体を固くした。

思い出したくもない生々しい体の感触が鮮やかに甦ってくる。

背中を這う長い指先。

胸を滑る冷たい舌の感触。

そして捕らえて離さないたくましい腕。

思い出した途端、吐き気が襲う。

愛する彼以外に触れられた全てが激痛となってアスナムを襲っていた。

だが、それを必死に耐え、平静を装う。

「美しい余の宝……この身も、宿す力もすべて余の物……もう誰にもそなたは渡さぬ」

バルドスの熱い吐息が首筋を伝っていく。

大きな指が体に巻きついたシーツの中に潜り込んでくる。

絶望のどす黒い闇が身も心も侵蝕していく。

でも、耐えなければ……これこそ、神が自分に与えた罰。

リチエットを、彼女の両親を助けられず、罪のない多くの人の命を奪うことになった愚かな自分への罰なのだ。

そんな自分にどうしてサウラスとの未来を描くことができようか！！

い。 エシエンタール。 愚かな自分の願いをただ一つだけ叶えて欲しい。

どんな屈辱にも痛みにも耐えるから。

どんな罰も仕打ちにも耐えるから。

どうかサウラスにもう一度だけ。

一目だけでいいから彼に会いたいと願うこの想いを許してほしい。  
もう一度、彼に会うことが出来るなら己の身など、いくらだってこの男に、この悪魔のように残酷な男に捧げる。

どんな辱めを受けようと、どんな苦を強いられようと耐えてみせる。  
だから……

そう強く、強く願いながら、アスナムは静かに目を閉じた。

## 刺し違える覚悟（1）

マリエステ国境近く シャントブリ湿原 デルブルー陣営地  
婚礼の儀から三日が経とうとしていた。

サウラスがパレードの最中に倒れ、目が覚めたのは翌朝になってのことだった。

三日経った今でも、胸焼けは激しく、時には眩暈すら起こる。

（なんだって言うんだ……この体のだるさは！）

『魔女アース』

その名を聞いたのは目覚めてからのことだった。

名前は違う。

髪の色や纏う雰囲気が変わっていた。

それでも、『魔女アース』と喝采を受けたあの女性は『彼女』に間違いなかった。

その彼女と瞳を交わした瞬間に尋常ではない痛みが全身を覆った。

こんな経験は初めてのことだった。

これがアスナムの持つ地眼の力なのだろうかとサウラスはずっと考えていた。

ただ彼女とすれ違っただけで、これほどのダメージを負うことになるなど想像もしていなかった。

ダメージ？

体ではない、精神的な痛み。

アスナムの内に住む絶望と悲しみ、恐怖、怒り。そんな負の感情が自分の心を蝕もうとする。自分の中の光を飲み込もうと手を伸ばしてくるのだ。

アスナムの抱える闇に触れ、サウラスは自分の体温が失われていくようだった。

彼女がどうしてそこまで絶望し、悲しみ、脅え、怒りを持っているのか。

それを推し量ることさえできなかった。

そして、そんな彼女をいまだに救えないでいる自分の無力さをなじり続けていた。

「ウツ……」

こみ上げる吐き気に口を覆う。

額には脂汗がにじみ出る。

激痛が襲っても、サウラスはそれに必死に耐えていた。

それこそがアスナムの抱える『痛み』であり、自分に対しての神の戒めであると思ったからだ。

「サウラス、どうしたの？ 苦しいの？」

ルーイが心配そうに駆け寄ってくる。

サウラスは小さく首を振り、持ち場に戻るように言った。

「でも……こんなに苦しそうなのに」

「いいから戻れ……オレは本当に大丈夫だから……」



ルーイはしかし、首を振りサウラスの肩を担いだ。

「おいっ、その二人、何をしている！」

背後から怒声が飛ぶ。

やってきたのは鉄仮面で顔を覆った近衛兵だった。

「彼を休ませたいんです。ずっと具合が悪いのに無理して……」

「病人だと？ なぜ病人が戦場に来ている！」

「志願したんです！ どうしてもバルドス皇帝陛下とアース様のために戦いたくて……」

サウラスの言葉に近衛兵は押し黙った。

（これは最後の機会なんだ！）  
チャンス

戦闘の指揮を執るために、バルドスは自らこのシャントブリ湿原の陣営に赴いている。

湿原は雨季と乾季で地形を変える。

雨季は草原を走る川が道を分断してしまうため、剣や槍のような近接武器での戦闘場所には向かない。

魔術を主とするマリエステの兵にとっては、この上もない好機となる。

火薬が湿り、決して好条件ではないこの地をなぜ開戦の地にバルドスが選んだのか？

危惧していることはただ一つ、アスナムと地眼の存在だった。

バルドスはここにアスナムを連れてきていた。目的はおそらくマリエステの士気を削ぐことにあるのだろう。得意とする戦闘で負けることがどれほど精神的に追い詰められるものか。

士気を削り、抵抗する気力を失くさせ、弱ったところで息の根を止める。それが皇帝バルドスⅡグレイザーの戦いだっただ。

アスナムはそのための切り札に違いない。

だが、そんなことをさせるつもりはなかった。

アスナムに地眼の力は使わせられない。

自分を飲み込もうとしている彼女の闇の深さを知った今、『心を削る』力をこれ以上彼女に使わせる訳にはいかなかった。

天眼の力は地眼の力を封じることが出来る。

だが、逆に地眼の力に飲み込まれる場合もある。

互いの力の均衡が崩れることから生じる事象であるのだが、もう迷っている場合ではない。

アスナムの地眼の力を封じることができれば、バルドスの思惑を崩し、マリエステへの脅威も削がれることになる。

だが、アスナムの地眼の力は予想以上に強くなっているとサウラスは感じずにはいらなかった。

## 刺し違える覚悟（2）

「心意気は認める。しかし、足手まといの者を戦地に出すわけにはいかん。無駄な犠牲を出すことにもなりかねん」

近衛兵はそう言って、サウラスにデルブルーに戻るようにと告げた。

しかしサウラスは諦めなかった。

自分は大丈夫だと必死に食い下がるが、近衛兵のほうも折れない。いつまでもしつこく粘るサウラスに近衛兵は苛立ちが募ったのか、サウラスの喉元に剣先を突きつけた。

サウラスも負けずに剣を抜く。

突然始まった決闘に、あたりがにわかに騒然となる。

「貴様！ これ以上言うことを聞かねば、この場で首を撥ねる！  
それでもいいのか！」

「オレは死ぬことなんて怖くない！ だが、あんたに首を撥ねられるのはゴメンだ」

「貴様！ 誰に向かってそんな口を……許せん！」

「サウラス！」

いきり立った近衛兵が剣を大きく振るう瞬間、ルーイは叫び声を上げた。

だが、その剣は振り下ろされることはなかった。

近衛兵の胸を貫くのは黄金色の刀身をした美しい剣だった。鋼鉄の鎧をいとも簡単に貫いた剣先から赤い血が滴り落ちる。ゆっくりと近衛兵の体が揺らぎ、力なく膝が地面に落ちる。その刹那、黄金色の剣が勢いよく引き抜かれると、体は地面に突っ伏し二度と起き上がることはなかった。

「死をも恐れず余のために働きたいと言う者を殺そうなどと……余の許しもなく勝手な真似をしようとした罰だ！」

黄金色の剣を鞘に戻しながら、死体を冷ややかに見下ろしているのは皇帝バルドスⅡグレイザーその人だった。あまりのことにサウラスは言葉を失っていた。

この男も国の勝利のためにと取った行動であつたらうに　　ためらいなどなく斬り捨てたバルドスの姿にサウラスは気圧されていた。

「レーヴン、目障りな死体だ。早急に始末しておけ」

傍らに佇む茶色の髪の青年に向かってバルドスは告げると、そのまま陣営の奥、一般兵のものとは違う、一際大きな皇帝専用のテントに向かって行ってしまった。

「おまえ、名はなんと言う？」

不意に話しかけられ、サウラスはビクツと体を震わせた。

レーヴンがサウラスをじっと見据えていた。

「サウラス……サウラス」バルジーです！  
「サウラス」バルジーか……覚えておこう」

ほほ笑み一つ浮かぶことのない冷めた表情のままレーヴンは言うと、バルドスが消えたテントへと同じように消えていった。張り詰めていた空気が一気にその緊張を解いていく。

しかし、サウラスの緊張は解けなかった。指先が冷たく、感覚がない。

蛇に睨まれた蛙のように、身じろぎ一つ出来ずにいた。

「サウラス！　すごいよ！　レーヴン守護総長に名前聞かれるなんて！　サウラス？　ねえ、大丈夫？」

遠くでルイーの声がする。

しかし、石にでもなったかのように体は動かない。

（あれが『蒼き獅子王』……！）

初めて間近で対面した皇帝バルドス「グレーザー。その圧倒的な存在感にサウラスは初めて『死の恐怖』を感じたのだ。つた。

## 黒き策略

「お待ちしておりました、陛下」

卑しい笑いを浮かべ、手をすり合わせながらお辞儀をする中年の男にバルドスは鋭い眼差しを向けた。  
男の服装は戦場では場違いだった。  
絹のスーツに襟の立った白のシャツ姿の男はその視線にも臆することなく、白い歯を見せながら笑っている。

「準備に滞りはなさそうだな、ゴルギア」

ゴルギア「ビシユヌは「それはもう」と答え、シシシ……といやらしく笑った。

「マリエステに傾向している近隣の村や里に決起を呼びかけました。奴ら『デルブルーを討つ』気でやってきていますよ」

「そうか……ご苦労だった」

「とんでもない。陛下のお役に立つことこそ、至福の喜びでございます。それで報酬の方ですが……」

「分かっている。レーヴン、渡してやれ」

バルドスの言葉に傍に控えていたレーヴンは懐から筒状になった書状を取り出すと、それをゴルギアに手渡した。

ビシユヌはうやうやしく受け取ると、書状を留める蠟の印を破って中身を確認した。

その目は信じられないほど見開くと、バルドスのほうを向いた。

「不服か？」

ゴルギアは思い切り首を左右に振った。

バルドスが与えた報酬が思っていた以上のものであったらしく、ゴルギアは深々と頭を下げそそくさとテントを出て行った。

「おまえは不服そうだな、レーヴン。珍しく眉間にシワが出来ているぞ」

バルドスの言葉にレーヴンはビクツと身体を震わせた。

感情を表に出すことはレーヴンには珍しく、バルドスはツイツとレーヴンを見遣った。

それほど彼は納得していない　そういうことであろう。そう思いながら小さく笑って見せた。

レーヴンはそんなバルドスに深く頭を上げた後「御無礼とは思いますが」と続けた。

「ゴルギアごときにあの報酬はいかがかと……金貨だけでなく武器商の独占特許まで」

「余のために随分尽力してくれているではないか？」

「陛下のためではなく、己のためでしょう」

「厳しいな。余はそういう輩が嫌いではないが？」

「陛下！」と声を荒げ、怒鳴るレーヴンにバルドスは大きな口を開けて腹の底から笑った。

「夢ぐらい見させてやっても構わんだろう？　アースを見つけたのは他でもない、アレとシルスなのだから」  
「ではシルスも承知の上なのですか？」

シルスという名にレーヴンの顔がキュッと引き締まったように見えた。

バルドスは「いや」と首を振りながら「でも問題はなかるう」と続けた。

「あやつにとつても出来の悪い父親に長く居座られるといろいろ面倒だろうからな。

それに散る前に一瞬でも幸福な夢を見られるのだ。感謝されこそすれ、恨まれる義理はない」

そう言つてバルドスはクツクツ……と喉を鳴らし、レーヴンを見る。バルドスの真意をつかんだレーヴンは何とも苦い面持ちで、深々と頭を下げた。

「そういうわけだ。あの男の始末は頼むぞ」

レーヴンは間髪いれずに「御意」と返答した。バルドスは満足にほほ笑んで見せた。

役目の終わった駒に興味はなかった。

忠誠心の欠片もないゴルギアのようなクズは、戦局が変わりでもしたら平気で寝返り、寝首をかくと相場が決まっている。

ならば、害も利益もないうちにさっさと消し去ってしまったほうがいい。



自分の足元を揺るがすほどの器ではないにしても、偉業を成そうとする己の道に邪魔になるかもしれない存在は一つでも少ないほうがいいとバルドスは考えていた。

バルドスの顔からスツと笑顔がかき消える。

瞳は鋭くなり、深いシワが眉間に刻まれるとレーヴンは重い口を開いた。

「將軍は生きておられるようです」

レーヴンの言葉にバルドスは驚きもせず「そうだろうな」と呟いた。

「そうでなければ、こんな策をめぐらすこともなかったからな。ヤツではないマリエステが送り込んだ『ネズミ』が紛れ込んでいるせいでもあるがな」

「『ネズミ』……ですか？」

驚いたように微かに目を見開くレーヴンから視線を外し、バルドスは一度瞳を閉じた。

閉じた瞼の裏側にうつすらと金色の長い髪が特徴的な人物の姿が浮かび上がる。

今のマリエステを叡智で支える第一王子レーテルセラド。

その容姿は女性のように美しい。

いや、並みの女では太刀打ちできないほどの抜きん出た美しさを持っている男。

一度だけ見かけたことがあった。

遠目ではあったが、確かにその噂は真であったと納得させられた。そのうえ、優れた人格の持ち主であり、魔術にも精通している。その噂は国境を超え、帝都にも轟くほどであった。

厄介な相手ではあるが、壊し甲斐はある。

「マリエステの才人『黄金の王子レーテル』……リーザが惚れ込む訳だな」

目を開き、レーヴンに視線を注ぐ。

その言葉にレーヴンはギョツと唇を噛み締めていた。

その顔には苦悩の表情が浮かんでいるのをバルドスは見逃さなかった。

この男がリーザに惚れて込んでいることをバルドスは承知の上での言葉を投げたのだった。

レーテルへの憎しみの炎をさらに強くするためにあえてそう言ったことを、レーヴン自身はおそらく気付いてはいない。

バルドスはそんなレーヴンを一瞥しながら、顎を触った。それからまたポツリと呟いた。

「エサが要るな」と

レーテルが送り込んだと思われる『ネズミ』のほうには監視をつけている。

いざとなれば、始末するのは簡単だ。

だが、問題はアインバイルだった。

武術だけでなく、才知にも長けたあの男は侮れない。

バルドスとレーヴンを育て上げた男。

才を見出し、導いた張本人をおびき出すための有効なエサをついに使うときがやってきた。

（仕方ないか……だが、アレならそれも運命さだめと従うだろう）

「陛下？」

レーヴンはバルドスの瞳が嬉々として輝き始めていることに気が付いていないのか、怪訝な視線を向けていた。

バルドスは小さな溜息をつく、取り直したようにレーヴンを見つめた。

そして「アースを呼べ」と彼に告げた。

「始めるぞ、死の宴を……な。それからリーザを余の元に連れて来い」

そう言うとバルドスは不敵に笑った。

レーヴンはただ頷き、テントを後にした。

これから広がるうとする戦火に身も心も躍るのを、もはやバルドス自身には止めようがなかった。

## 突き付けられた剣先

ついにこのときがやってきたのだとアスナムは思った。

覚悟はしていたとは言え、やはりその場になると心が張裂けそうになる。

己の身が、そしてその力が呪わしかったが、そんなことを嘆いてもこの状態を回避できることも逃げ出すことも出来ないのをアスナムは十分すぎるほど理解していた。

空を見上げる。

薄暗かった空は、今はどんよりと黒味を帯びてきている。

風に土と埃と木々の青い匂いが混じっている。

雨が降る。

まるでエシエンタールが、自分が今からしようとしている行為に嘆き悲しみ流す涙のようだ。

「アース、頼むぞ」

背後から注がれる声にアスナムは溜息をもらしそうになり、グツと噛み殺した。

少しだけ顔を後ろに向け、長い髪で顔を隠すようにしながらチラリと視線を向ける。

傷一つなく輝くバラと獅子の紋章の施された甲冑に身を包んだバル

ドスの隣で、不安げに揺れる瞳をした美しい女性の姿が目に入った。バルドスの手は腰の剣の柄の上に置かれている。それが目に映ると胸がギュツと鷲づかみにされたような痛みを覚えた。

（やるしかないのよ、アスナム！）

挫けそうになる心を叱咤し、覚悟を決める。

今から自分は罪を犯す。

いや、正確に言うのなら罪を重ねようとしている。

一人の女性の命を救いたくて、罪のない多くの命を奪い去ろうとしている。

でも、それが戦争。

この戦いに身を置いているものは皆、命を落とす覚悟は出来ていないに違いない。

ギュツとこぶしを握り締め、アスナムは顔を上げた。

不安を悟られてはいけない。

迷いで顔を曇らせてはいけない。

（私はアース。死の魔女アース！）

言い聞かせるように偽物の名を自分の胸に刻みつける。

今更ここで躊躇しても始まらない。

全てを捨てた人間に、これ以上捨てるものはないのだ。

アスナムにとって己の心もその一つだった。

戦場が見渡せる小高い丘の上にアスナムたちはいた。

眼下ではもう戦いの火蓋は切って落とされている。

黒い煙が上がり、銃声が響く。

魔術の火が味方の兵士たちを焼いている。

『被害が広がる前に手を打とう』

バルドスの声なき囁きが耳を打ったような気がした。

アスナムはゆっくりと左目を覆う黒の眼帯を脱ぎ、それをその場に投げ捨てた。

雨露を含んだ生ぬるい風が露になった左目を撫でていく。

「アスナム！」

リーザの悲痛な叫び声が聞こえた。

だが、アスナムは振り向かなかった。

ゆっくりと瞳を閉じる。

深く息をし、精神を研ぎ澄ます。

真っ暗なはずの視界にはしかし、はつきりと外の世界が映って見えた。

命が赤い玉のように揺らめいて見える。

アスナムが想像していたよりもはるかに多くの命の炎が見てとれた。

木々の合間で息を殺し、機会を伺っているように、固まって動かない。

膝が鳴りそうになる。

目の前に広がる命の灯火を、今からひとつ残らず狩り取ろうとしている自分に恐怖すら覚える。

その力がある自分。

それを止めることも出来ない自分。

それでも……もう振り返る道はないのだからとギョツと足に力を入れた。

(リーザのために……すべてに死を！)

瞳を開ける瞬間「やめろ！」という叫び声が聞こえた。

その声に胸が大きく脈打った。

聞き馴染んだ声だった。

と同時に喉元に何か冷たいものが当たっているのが分かり、ゆっくりと目を開く。

黒色の髪のデルブールの兵士の格好をした男が一人、アスナムの前に立っていた。

その姿を捉えた瞬間、息をするのも忘れそうになった。

愛しい男。

サウラスその人が、アスナムの喉元に剣先を突きつけていた。

溢れてくる想いに必死に歯止めを掛ける。  
想いを悟られてはならない。

それはバルドスに対してだけではなかった。  
サウラス本人にもこの想いを隠さなければならぬ。

きっと想いが伝わってしまったら、彼は躊躇するだろうから。

自分に対して想いがあるないにかかわらず、サウラスが心の優しい  
人物であることを誰よりもアスナムは理解していた。

今はうかつに動けない。

平静を装い、この場がどうなるのか見守らなければ。  
それが今、出来る唯一のことである。

そうアスナムは考え、ゴクリと息を飲みサウラスを見つめ続けるの  
だった。



## 対峙する瞳（1）

これが最善の策だと思っているわけではない。

目の前にいる彼女に剣先を突き付けながら、サウラスはふっと視線をバルドスに向けた。

冷やかな瞳でこちらを見つめるバルドスは、特に驚きもせず足を組み替えた。

バルドスの隣にはリーザがいた。

バルドスの膝の上に乗る剣を見つけ、アスナムがなぜ力を使おうと決意したのか納得した。

そのやり方の非道さに苛立ちが募る。

憎いという感情を初めてサウラスは人に対して抱いた。

アスナムを追い詰め、己の妹さえも手駒として扱うその神経にサウラスは怒りしか湧かなかった。

この場で仕留めなければならぬと本気で思った。

だが、この場はあまりにも自分に不利であることも理解していた。

「おまえは……確か、サウラスはバルジー！ 己が何をしているのか分かっているのか！」

バルドスの隣で控えていたレーヴンが声を荒げた。

分が悪い理由の一つであるレーヴンの存在に内心サウラスは毒づいた。

分かっていたことではあった。

この状況下で飛びこまずに済むのならそれが一番であることも分かっている。  
ヤークンさえこの場にいたらまた違つのであろうが、戦場に赴いてから彼との連絡は途絶えている。

どこかでこの状況を見ていてくれればいい。

それは神にも運命にもすがりするような小さな願いであり、希望だった。

バルドスは表情一つ変えることなくサウラスを見据えながら、食って掛かるうとするレーヴンを手で静止した。

バルドスの鋭い視線にサウラスの手が僅かに震えた。

気圧される。

その視線と圧倒的な存在感に飲み込まれそうになる。

バルドスの背後に吼える獅子さえも見えるような気がしていた。

だが、負けるわけにはいかない。

小刻みに震える手にグツと力を込め、サウラスはバルドスを睨みつけた。

「おまえがネズミか？ あぶりだす手間が省けた。礼を言う」

バルドスはそう言ってクツクツク……と喉を鳴らして笑った。  
それからアスナムのほうを見て「かまわず続ける」と言った。

「地眼の力は解放させない！」

戸惑うようにじつとアスナムはサウラスを見つめていた。揺れ動くその瞳にサウラスは『ごめん』と小さく心の中で呟いた。

アスナムを救うためにはやはりもうその力を封じるしかない。彼女が力を使う前に為さねばならない。

お互いにとつてどんなリスクがあるのか分からない。彼女を今よりももっと危険な目に合わせるかもしれない。

それでももう彼女に『人を殺す道具』にはなつてほしくなかった。

サウラスは一度瞳を閉じた後、ぐつと右目に力を込めた。右目に熱が宿り、身体の中心から力がわき上がるのを感じる。

「ほう……天眼とはな。あの男もなかなかいい駒を持っているな、レーヴン？」

余裕の笑みをたっぷりと浮かべ、『やれるものならやってみろ』とでも言いたなバルドスの態度にサウラスはギリツと唇を噛んだ。バルドスはアスナムに向つて「殺れ！」と言うようにクイツ……と顎を動かして見せた。

アスナムの瞳に迷いが見えたのは一瞬で、彼女はゆっくりと右の太ももに手を伸ばした。

「邪魔はしないで」

銀色に輝く短剣の刃先をサウラスに向けるアスナムの瞳に悲痛の色が浮かんでいた。

サウラスの喉元に突き付けられた剣先がやはり小刻みに震えていたのを、サウラスは見逃さなかった。

『そのまま逃げて』

そう叫ぶ彼女の声が聞こえてくるのだが、サウラスも引き下がるわけにはいかず、そのままアスナムの喉元に剣先を向け続けていた。

沈黙とビリビリと震えるほどの緊張感がその場を支配していた。

互いに互いの出方を探り合う。

出来ることなら傷つけないなどない。

真に倒すべきはバルドスで、互いの存在ではないのだ。

だが、人質がいるこの状況で、サウラスにしてもアスナムにしてもただ守りたいという想いだけではどうすることもできないことを分かっていた。

どちらかが傷つく。

どちらかが倒れる。

そうでなければこの場を収めることができないことを互いに覚悟もしていた。

『パチンッ!!』

沈黙を破ったのはバルドスの指の音だった。

刹那、アスナムの表情が一変し、そこに見知らぬ女の顔が浮かび上がった。

「な………に？」

ほんの一瞬、気を抜いた瞬間にサウラスの腕が切り裂かれた。  
急いで飛び退ったが、左の上腕はアスナムの握る銀の短剣に切りつ  
けられ、血がにじんでいた。

## 対峙する瞳（2）

「アスナム！！」

逃げるサウラスを追うようにアスナムは何度も何度も斬りかかってきていた。

避けきれず、服を剣先が掠めて行く。

そんな彼女に何度呼びかけても反応はなく、ただうつろな双眸で見つめられるだけだった。

「くそっ！！」

サウラスは斬られる覚悟でアスナムに詰め寄ると、剣の柄でアスナムの甲を打った。

「キヤッ！！」

叫び声とともに銀色の短剣はアスナムの手から離れ、再び見上げる彼女の顔に再び正気の色が戻った。

だが、それがまずかった。

服が切り刻まれ、血のにじむサウラスを見つめるアスナムの瞳に怖れと怒りが入り混じった。

サウラスを傷つけたのが自分であると認識したアスナムの心に、暗雲が立ち込めるのをサウラスは背筋を這う悪寒とともに感じていた。

「ダメだ、アスナム！！ キミのせいじゃない！！」

そこにバルドスたちが座しているのも忘れ、サウラスは叫んでいた。

「顔見知りであったか……」

ゾワリと首筋に走った寒気にサウラスは息を飲んだ。

目の前のアスナムも同じように息を飲み、その瞳がゆっくりとバルドスのほうに向いた。

「やめ……て……！ 彼は……彼は見逃して……！」

泣き叫ぶように発したアスナムの言葉に、バルドスは黙したまま返事はしなかった。

その代り、ゆっくりと膝の上の剣に手を掛けるとそれをリーザの喉元に突き付けて見せた。

「選べ、アース」

足の先から頭の先まで一瞬で凍らせるほどの冷たい声でバルドスはアスナムに命じた。

フルフルと弱く首を振る彼女の目の前で、バルドスはツイツと剣先をリーザに食い込ませる。

リーザの白い首筋に赤い細い線が流れた。

「いや……いやあつ……！」

ズキンッ……！！

サウラスの右目に強烈な痛みが走った瞬間、身体を反るように空を見上げたアスナムの瞳から何かが飛び出していく。

怒りに満ちた叫び声をあげながら、それらはサウラスに向かって空か

ら急降下してくる。

迂闊だったと思ってみたところで、今更自分の発言を撤回できるわけもなく、サウラスはグツと拳を握りしめた。

右目の痛みは耐えがたいほどに激しい。

アスナムを追い詰めたのが自分自身であることにこれ以上はないほどの憤りを感じながら、それでもサウラスは自分に向かってくる亡者たちを見つめ、右目に力を集中させた。

「散れ！」

サウラスがそう告げた瞬間、襲い掛かってきた亡者たちが悶絶するうめき声を残して弾け消えた。

すべての亡者が消えたとき、サウラスの体には無数の傷ができていた。

赤い血が服を染めている。

それでもサウラスは神の力を戻そうとは思わなかった。

体力はにじみ出る血と一緒に外へとジワリジワリと流れ出していく。ともに立っていられる時間はそうない。

ならば意識のしっかりしているうちに、アスナムの力を封じなければ

「許してくれ、アスナム……」

サウラスが覚悟を決め、剣を構える。

研ぎ澄まされた剣先が冷めた輝きを放っている。

「させるかっ！！ やれ！！」



レーヴンの指揮で近衛隊が剣を構えると、サウラスはチツと舌打ちした。

それが合図となって、何人も近衛兵が一斉に彼に切りかかった。

「邪魔をするな！」

言い放ち、サウラスは左手を近衛兵たちに向って翳した。

トグロを巻く紅蓮の炎が兵たちの体を吹き飛ばしたのを見て、レーヴンが声を上げた。

「魔術！ マリエステの人間か！！！」

サウラスはボロボロと涙を流すアスナムににじり寄った。

こんな思いをさせたいわけではなかった。

こんな辛い目に合わせるために彼女を探してきたのではなかった。

だから今ここで終わらせる。

彼女が命を落とすことになったそのときは、自分もためらうことなくその後を追おう。

そう思い、アスナムに向けて力を発動させようとした刹那、緊迫したその場を切り裂くように銃声が轟いた。

サウラスの動きが止まり、ゆっくりとその場に足を付く。

崩れかけるサウラスの身体をアスナムが駆け寄ってきて抱きとめた。背中から胸に抜けるように熱を感じた。

痺れるような激痛の中、サウラスには何が起きたのかまったく分か

らなつた。

僅かに顔を上げ、銃声のした方角に目を向け愕然とした。真つ白な顔をした少年が、ガタガタと震えながら立っていた。その手には白い煙をくゆらせた拳銃が握り締められていた。

「ルイー……どうして……」

掠れるサウラスの声はしかし彼に届く前に描き消え、ルイーはただ脅えたまま震えていた。

「念のためにネズミ捕りの網を張っておいて正解だったな、レーヴン？」

レーヴンは正気を失いかけているルイーの肩を叩き「行け」と命じた。

彼は逃げるようにその場を去っていく。

「さて……邪魔者に止めをさそうではないか。それから改めてお願いするよ。アース？」

アスナムはサウラスを抱きしめたまま、リーザを見た。

リーザは「ダメだ！」と言うように首を振った。

その首に今度はバルドスの反対の手が伸びる。

「アース、どうした？」

『やらねばやるぞ……』 声なき声がアスナムを襲う。

「ダメだ……ダメ……だ……力は使わせない……！」

サウラスが声を振り絞ってアスナムに告げる。

アスナムはサウラスを抱きしめたまま泣き続けていた。

グイツと襟首を強い力で引っ張られ、サウラスの身体はアスナムから引き離された。

レーヴンはそのままサウラスを丘の上から転がし落とした。

「サウラス！」

「アース！」

転がり落ちるサウラスの耳にアスナムの呼ぶ声とバルドスの怒声が聞こえた。

転がり落ちた丘の下で、サウラスは動かない手足にそれでも必死に力を入れて這い上ろうとした。

『許して！』

アスナムの声が頭の中に響いたと感じた瞬間、数え切れないほどの白き亡者たちが奇声をあげサウラスの横をすり抜けていく。

霞む視界の中、断末魔の絶叫がこだまする。

雷鳴が轟き、強烈な稲光が一瞬辺り一帯を飲み込んだ。

それと同時に激しい雨が草原に降り始め、サウラスも例外なくその強い雨に打たれた。

それはサウラスを鞭打つかのように激しさを増す。

遠のく意識の奥で涙に濡れるアスナムの幻影が見えたような気がしたが、それも一瞬で闇に飲み込まれる。

耳に残る絶叫を飲み込んで、雨は降り続けていた。

## 逃げられない理由（1）

目が覚めたときそこにあったのは、冷徹な悪魔の顔ではなく穏やかな、だが悲しみに沈んだ瞳だった。

「アスナム、大丈夫ですか？」

青ざめた顔が安堵のそれに変る。

アスナムはゆっくりと身体を起こした。

ほの暗いテントを照らすのは、小さなランタンの光一つだけだった。身に纏うものに濡れた感覚はない。

あれは夢だったとアスナムは思ったかった。

けれど、身体がそれを許してはくれなかった。

サウラスの身体に触れた己の腕。

彼の血でまみれたときの手の感触。

刻み込まれた感覚に震えが走る。

サウラスはどうなったのか？

あれからサウラスはどうなったのか？

地眼の力を解放した後の記憶がアスナムにはなかった。

「リーザ様、サウラスは……彼はどうなったんです!!」

詰め寄るように問うアスナムに、しかしリーザは首を振った。

「わかりません。レーヴンが川に流したと兄上に報告しているのを聞きました。あの傷ではおそらく……」

言葉を濁すリーザにアスナムの心は押し潰されそうになった。

(彼が……死んだなんて!?)

目の前が真っ暗になる。

信じられない。

信じたくない。

守りたかったのは彼の命だった。

彼の元を去ったのも、魔女アースとして帝国に残ることに決めたのも、全ては彼を守るためだった。

それなのに、自分の選択した答えのせいで彼が命を落とすことになったなど。

涙も出ない。

足の先や指の先がゆっくりと冷たくなり、息さえも凍りそうになる。もやもやとドス黒い闇の雲が胸の中に立ち込める。

力なくうな垂れるアスナムに追い討ちをかけるようにリーザは言った。

「なぜ、力を解放したのです？」

リーザの言葉には非難の念が多分に含まれていた。

アスナムは押し黙ったまま何も答えられなかった。

避難されても仕方ないのだ。

自分は多くの命を奪い……あろうことか、最愛の人の命さえも奪ったのだから。

「なぜサウラス様の声に従わず、私の命と引き換えにこのような酷いことをなされたのですか！ あなたはこれから先も兄上に従って、罪のない命を奪い続けるつもりなのですか？」

リーザの瞳は落胆と失望で満ちていた。

彼女は明らかにアスナムを非難している。

こんなことをされるくらいなら、死んだ方がましだとも言わんばかりだった。

そんなリーザにアスナムは返す言葉が見つからなかった。

サウラスを失った今、生きていく価値も未来もアスナムにはなかった。

いつそ彼を追って死のう。

そう思うアスナムにしかしリーザは信じられない一言を放った。

「ここを去りなさい、アスナム!! ウルバン」

リーザの口から出た言葉にアスナムは顔を上げた。

一瞬、彼女が何を言っているのか理解さえできなかった。

ここを去る？

去ってどうなる？

自分が去ればリーザの命はない。



自害してしまえば、バルドスも諦めるだろう。

ならば去ることはせず、命を絶った方がいい。

そうすれば無駄に命を落とす人もなくなるはずなのだ。

そう思い、アスナムは大きく首を振った。

「私は逃げられません」

「アスナム！」

とリーザは強くアスナムの名を呼んだ。

「こうなる前にどうやってもあなたを救うべきだったと……私は後悔しています。でも、起きてしまったことを悔いてももはや仕方ないこと。私たちはこれからどうすべきかを考えねばなりません。」

そして取るべき道は一つ。

天眼を持っていたサウラス様を失った今、あなたをここから逃がし、兄上を……いいえ『バルドス』『グレイザー』を討つこと。それがマリエステ王国を、シャンタナを救う唯一の方法なのです」

「そのどこがシャンタナを救う方法なのですか！！ あの人は諦めず、きつと私を探し出す。ならばいつそ命を絶ってしまえばいい。そうすれば、追うこともできないし、私もサウラスの元に行けません！！！」

逃げたところでバルドスは執拗に追い続けてくるだろう。  
逃げるたびに、逃げ込んだところを破壊される。

自分が死ぬか。

それともバルドスが死ぬか。

それしか方法はない。

だが、後者は達成不可能なことだ。  
ならば、自分が死ねばいい。

サウラスもきつと喜んでくれるに違いない。

彼もきつと自分を待っているに違いないのだから

## 逃げられない理由(2)

パシッ！！

刹那、頬に熱い痛みが走り、アスナムは思わず頬を手で覆い前を見遣った。

右手を上げたリーザが怒りに満ちた顔でアスナムを凝視していた。

「貴女は私一人の命のために多くの命を犠牲にした。それは優しさだったのかもしれない。

けれど、そのために貴女同様愛する者を失い、残された多くの人々はどうすればよいのですか？

貴女のように未来から目を逸らし、諦め、同じように死を選びなさいと……貴女は言えますか？」

リーザはそこまで一気に話すと、深いため息をついた。

「諦めてはなりません、アスナム。

神の投げた試練から、逃げてはいけません。

それを乗り越えた先に、貴女の未来はきつとあるのですから」

「でも……サウラスは……サウラスは死んで……」

そう言うアスナムにリーザはにこりとほほ笑んで見せた。

「助からない可能性のほうが大きいというだけで、誰も確かめたわけではありません。ならば確かめるまで信じてみたらどうでしょう？」

私はそうしたいと思っています。

アスナム、貴女はどうですか？」

信じるか？

信じないか？

それは『自分次第』だとリーザは言った。

サウラスが『生きている』というならば信じたいに決まっている。

いや、『可能性がある』限りは信じたいに決まっている。

望むことは一つだった。

サウラスにもう一度会いたい。

一目だけでいい。

遠くからでもいい。

生きている彼にもう一度会いたい。

心からそう思えた。

「心は……決まったようね」

静かにそう言うリーザに向かってアスナムは強く頷いた。

そしてそんな彼女に向け「一緒に」と続けた。

「リーザ様も一緒に逃げましょう」

アスナムの提案にしかし、リーザは首を横に振った。

「それが出来るのなら……そうしたいと思います。けれど、私にはそれは許されていないのです」

そう言ってリーザはアスナムに、青い宝石のはめ込まれた黄金の首輪を指し示した。

「それは？」

「『バイシャの首飾り』。これがある限り、私は国の外には出られない。これには発信装置がついているの。」

青い石の中身は猛毒で、私が国境を越えたり、無理にこれをはずそうとしたりすれば、石の後ろに隠された針が喉に直接毒薬を注入するのです」

「な……誰がそんなこと!？」

驚嘆するアスナムにリーザは小さくほほ笑み返すだけだった。

答えがなくても分かる。

そんなことが出来るのはただ一人。

バルドスⅡグレイザーしかなかった。

「解毒薬は!？ それがあれば……」

そう言うアスナムにまたリーザは小さく頭を振った。

「この毒にはそれがないのです。兄上はそういう人……分かるでしょ」

「そんな……！ それじゃ、まるではじめからリーザ様を殺すつもりで……」

アスナムは言った瞬間、自分の口を両手で覆った。

リーザは気にする様子もなく、微笑して見せた。

切なさや悲しみが複雑に絡まったその顔に、アスナムはギュッと胸が締め付けられた。

同時に、バルドスが憎くてたまらなくなった。

血の繋がった妹でさえ平気で手を掛ける。

あの男の非道さに胸やけがしそうだった。

「アスナム、分かったのなら急ぐのです。この湿原を抜ければマリエステの領地に出られます。」

王都ローゼンブルームにあるエストセラ城に行き、レーテル「セラ」様に会いなさい。きっとあなたの力になってくれます」

「リーザ様……でも、また力を使えと強要されたら……」

不安げなアスナムにしかしリーザは「絶対に大丈夫」と言った。

「あの方は聡明です。きっとあなたにとって最善を尽くしてください。私は信じています。だから、あなたも私の言葉を信じて……」

リーザの瞳には確固たる自信が宿っていた。

揺るぐことのない絶対的な信頼感をそこから窺い知ることが出来た。だが、どうしてもそれほど彼女はその人を信じてことができるのだろうか？

アスナムの疑問を察したのか、リーザはゆっくりと自分の首の後ろに手を回した。

そしてそこから金色に輝く小さな輪を通したネックレスをはずして、アスナムの右手に握らせた。

手を開いてそれをまじまじと見つめる。

百合の紋章が彫られた指輪のようだった。

「マリエステの紋章……」

「それを私に下さった方こそ、レーテル様なのです。私たちは心か



ら愛し合っていました。いいえ、今もそうであると私は信じています」

「そんな大事なもの……！」

アスナムは慌てて指輪を返そうとしたが、リーザは包み込むようにその手を押し返した。

「私の代わりにそれをレーテル様に届けて欲しい。たとえ離れていても、心はいつも傍にがあると　私の代わりに伝えて欲しい。」

それが出来るのは、今はあなただけなのです」

リーザの決意に満ちた瞳にアスナムは抗うことが出来なかった。

彼女は己の命を掛けて自分にこれを託そうとしている。

その思いを裏切ることなど誰にできようか。

アスナムは無くさないようにネックレスを自分の首に掛けると立ち上がった。

外はまだ雨が降っている。

テントの入り口の隙間から外を垣間見る。

日は落ち、外を照らすのは僅かな電光虫の光だけ　夜の闇に紛れ、木々たちの合間に身を潜ませながら行けば逃げられるかもしれない。

「川沿いにマリエステを目指すのです。もしも兄上の放った追っ手に追いつかれるようなことになってしまったら 川へ身を投げるのです。」

この川はマリエステの領土に続いています。あなたにエシエンタールの加護がありますように……」

リーザから渡された皮なめしのロングコートのフードを目深に被ると、枕元に置かれていた短剣を胸元に押し込めた。

そして、アスナムは夜の深い闇の中へと飛び出した。

## 捨てられた理由

酷い雨の中、黒色の合皮のコートのフードを目深に被り、レーヴンは歩いていった。

肩には泥と血に塗れた銀色の髪を青年を担いでいた。

念には念を入れろ　そう言ったバルドスの命に従って、レーヴンは青年にとどめを刺すつもりでいた。

死体を投げ捨てられる川辺にその身を連れて行き、大木の根元に青年の身体を投げ捨てた。

「うっ……うっ……」

ドサリとぬかるんだ土の中に落ちる青年の身体が、冷たい土の中に埋もれる。

ところどころから滲む血は、いまだ雨と一緒に流れ続けていた。

ゆっくりとレーヴンは腰に下げていた剣を抜いた。

抜かれた剣先が雨の雫を滴らせながら、鈍い光を放っている。

「おまえに恨みはない。だが、これも命令だ」

雨音でかき消されてしまっくらしいの小さな声でレーヴンが告げた瞬間、青年の瞳がゆっくりと開いた。

「……………アス……………」

虚ろな瞳がレーヴンを見上げ、力ない腕が伸びてくる。

何かを掴みたげなその手が、がっしりとレーヴンの足首を掴んだ。

「だ……………め……………」

絶え絶えの息の中で、青年は必死に言っていた。

『アスナム。ダメだ』

と繰り返し

命の灯が消えかけているその時でさえ、己の身も顧みずにそう呟き続ける青年の姿にレーヴンは握っていた剣を鞘に戻した。

気力だけで。  
精神力だけで。

必死に生にしがみついているのはきつとたった一つの想いからに違いないと、レーヴンは確信した。

青年から伝わる溢れるほどの想いの正体は、自分の中にあるものと一緒だとそう思えたからだ。

「愛ゆえか……」

ゆっくりとしゃがみこみ、レーヴンは前進しようとして泥の中でもがく青年の延髄に軽い衝撃を加えた。

刹那、青年の首が土の中に埋もれ、微塵も動かなくなる。

「許せ」

そう言うとレーヴンはその身体を持ち上げ、大木の根に青年の背を沿わせた。

完全に意識を失った青年の首が肩に落ちている。

脈拍を測り、弱まっているのを確認した。

それからあたりの様子を窺う。

人の気配はない。

コートの内側に括りつけられた緊急バックの中から、ガーゼと包帯

を取りだした。

青年の上半身を脱がし、傷の程度を見る。

打ち抜かれた場所からは血がとめどなく流れているが、弾丸は突き抜けたらしく、そこには残っていない。

急所も若干だが外している。

止血をし、早期に治療を受けられれば助かる可能性は全くないわけではない。

手早く止血の処理を施し、急いで包帯を巻く。

それから身につけていた服を元に戻した。

パチパチと青年の頬を何度となく叩く。

青年の意識が再び戻るのを確認すると、レーヴンは言った。

「止血はした。あとはおまえの運次第だ」

聞こえているかどうかは定かではない。

青年のうめき声は続き、朦朧としていることに変わりはないである。

止血をしたところで気休めにしかならない。

『奇跡』でも起きない限りはこの場で命を落とすことになる。

「己の中の想いだけでなんとか出来るというのなら、してみるがい  
い」

そう吐き捨て、ゆっくりと立ち上がる。

どうなるかは分からない。

ただ、あれほどの強い想いを簡単に殺してしまいたくなかった。

愛ゆえに苦しみ。

愛ゆえに必死になるその姿に、レーヴンは自分自身を重ねていた。

リーザへの想いに苦しみ。

リーザへの想いゆえに必死になっている自分自身。

いつか愛ゆえに己も命を落とすかもしれないと　あの青年を見て  
思ったことは確かだった。

踵を返し、バルドスの待つテントに向かう途中で足が止まる。

陣営地の入り口で静かに佇む黒いコートに身を包んだ人物の姿に、レーヴンは内心舌打ちをした。

黙って通り過ぎようとするレーヴンにその人物は「お帰りなさい」と声を掛けてきた。

「ここで何をしている、シルス」

シルスと呼ばれた人物はフードを目深にかぶったまま、脱ぎごうとも頭を上げようとせず、俯いたままクツクツと喉を鳴らして笑った。

「天眼を持つあの男は殺やれましたか？」

その問いにレーヴンはギツとシルスを睨みつけた。

「何が言いたい？」

そう問うとシルスはクスリと一ツ笑い「心配をしているのですよ」と答えた。

「心配？」



「ええ。冷徹だと噂のレーヴン様の素顔は違うのではないかと思いまして……」

そう言っただけで目深に被っているフードから少しだけ顔をのぞかせる。

色素のない灰色の瞳が『全てを知っている』とでも言いたげに鈍く光っていた。

冷やかにレーヴンはシルスを見つめた。

何を言うでもなく、シルスはただニヤリと笑む。

そんなシルスに「無用な心配だ」とレーヴンは一言残し、テントへと向かう。

やはりシルスは特に答えなかった。

ただ不気味に声もなく笑っていた。

何を考えているのか掴みかねるあの男を出来ることならば陛下の元には近寄らせたくない。

けれど、あの男のおかげで『魔女アース』という『兵器』を手に入れたのもまた事実。

ふと足を止め、レーヴンは振り返る。

振り返った先の陣営地の入口にすでに黒コートの男の姿はなく

内心舌打ちしながら、レーヴンは静かにテントの中へと入って行ったのだった。

## 雨の中の逃亡(1)

アスナムはひたすら走り続けていた。

雨のせいでいたるところがぬかるんでいるが、そんなものにひるんでいる暇などなかった。

追っ手がいつ迫ってくるかもしれない。

疲労感と緊張感で胸が満たされている。

息は荒い。

打ちつける雨は容赦なく降り続け、視界は良いとは言い切れない。

リーザから渡された小さな電光虫の小瓶の明かりだけを頼りに道を進む。

川伝いに行けばいいと彼女は言った。

それを忠実に守る。

川は雨のために急流になっていた。

いざとなったら身を投げると言ったが、たとえ追っ手からは逃げられても命の保障はできかねない。

不意にアスナムは足を取られ、その場に倒れこんだ。

電光虫の小瓶が手を離れ、ぬかるみに埋まる。

フードがはずれ、雨が髪を打ちつける。

身体を起こす瞬間、右足に激痛が走った。

つまずいたとき、足を捻ったらしい。

このままでは追っ手に見つかりかねない。

マリエステまではまだかなりの距離がある。

(こんなところでぐずぐずしている暇などないのに……!!)

「……」

雨の音に混じって微かなうめき声が聞こえた。

背筋が凍りつく。

(もう追いつかれたの!?)

アスナムは首を振った。

声は自分の足元近くでしている。

手元を離れた電光虫をなんとかつかみ取り、泥を拭う。

それからゆっくりと自分の足元を照らした。

その瞬間、アスナムは声にならない小さな叫び声をあげた。

一瞬、息をするが出来なかった。

信じられない光景に、夢か現かも区別が出来なくなりそうだった。

そこに、生きていてほしいと願って、願ってやまない愛しい男が横たわっていた。

光に反射し輝く白銀の髪。

苦悶に顔を歪ませてもそれは変わらない、愛する人の顔だった。

「サウラス!!」

痛みも忘れて駆け寄った。

彼の体は深い傷がいたるところにできていた。

肉が見え隠れしている。

ボロボロになった服は血で真っ赤に染まり、顔はこれ以上なく青白く、息は微かだった。だが、幸いなことに出血は止まっている。

止血の応急処置だけはされているらしく、乱雑ではあったが包帯が巻かれていた。

「サウラス!!! しっかりして!!!」

これ以上は手の施しようがないほど、彼は傷ついていた。

傷口が彼の命を垂れ流している。

アスナムは雨だけでもしのげないかと、コートを脱いだ。

それをサウラスの体にそっと掛ける。

雨でこれ以上体温が奪われるのを避けたかった。

それからサウラスの力ない手を取ると強く握った。

（お願い！ 死なないで！）

生きてこうして会えたのだ。

一目でいいと。

遠くからでもいいと。

ただ生きている彼に会いたいと。

その願いが叶ったのに、こうしているうちにも彼の体力は奪われていく。

なんとかしなければ、サウラスを失うことになる。

それはもう二度と経験したくなかった。

アスナムはあたりを見回した。

電光虫のほのかな光にある草が目に入った。

その草に這うように近づくと手に取ってみる。

刺々しい肉厚の葉にアスナムは心当たりがあった。

まだ幼かったとき、父に連れられこのシャントブリに来たとき教えてくれた。

自然の治療薬　ヒズラの葉は気付薬として貧しい里の人たちの間で重宝されているものなのだよ　そう言って笑った父の顔が思い浮かんだ。

高価な薬を買うことの出来なかつたりチエット一家や里の人たちが病気になった時も、アスナムはよくこの葉摘んできては煎じて飲ませていた。

それが今、目の前にあった。

アスナムはすぐにその葉をむしると、口の中で噛み砕いた。

酷い苦味が口の中に広がった。

顔をしかめながらも、何度も口の中で噛み砕き、汁を溜め込む。

（お願い、飲んで！！）

彼の唇に自分のそれを重ね、苦いヒズラの葉の汁を流し込む。

意識もほとんどないであろうサウラスはしかし、それでもなんとかそれを飲み込んでいた。

（その調子よ！ あなたは死なない！ 死なせない！！）

アスナムは何度もそれを繰り返した。

ヒズラの葉の棘が時々口の粘膜を切りつけ、血の味が混じった。



それでもやめることはなかった。

不意に、背後から小さな光が幾つも幾つもちちらに向ってやってくるのが目に入った。

自分を追ってやってきたのだろう。

思ったよりも早いことに焦りと不安で全身に震えが走る。

必死で立ち上がろうとしたが、足の痛みにどうしても立つことができなかつた。

## 雨の中の逃亡(2)

(ああ、エシエンタール！　どうか私たちをお助けください！！)

アスナムはサウラスの手を強く握りしめたまま、天に祈った。

祈ることしかできなかった。

何かがこちらに向って走ってくる音がし、動物のいなく声が聞こえてくる。

アスナムは目を凝らした。

地を蹴り上げる大きな影が真っ直ぐにこちらに向ってくる。

ギュッと目を固くつむった。

背筋が固くなる。

浮かんだのはリーザの顔だった。

彼女のためにもどうにかこの場を切り抜きたい。

『川に身を投げるのです』

リーザの言葉が頭にこたました。

川は大きなうねりを作っている。

身を投げて助かるかは分からない。

ただ、サウラスはどうしたらいいのだろうか？

この傷では、川と一緒に飛びこむのは絶対に無理だ。

この場から動かすことさえも危険なはずの彼を、どう救えばいいのかわからない。

サウラスの手をもう二度と離したくなかった。

アスナムは意を決したように前を見据えた。

生きるも果てるも、彼と共に

バルドスにもう一度捕まるくらいなら、運を賭けてみるのもいい。

自分たちがエシエンタールに選ばれた人間なのなら

サウラスの身体を庇うように膝の上に抱えながら、前だけを見るアスナムの瞳に飛び込んできたのは雄雄しい動物の顔だった。

それは竜馬だった。

珍しいその動物をアスナムは王都でよく見かけていた。

マリエステの地上部隊がその戦力として用いている竜族の一種だ。

王宮の湖に住む希少種たちに父とエサをやりに行ったこともあった。

その竜馬の顔にアスナムは安堵した。

おそらくこれに乗る人物は自分たちにとって敵とはならないだろうと

「無事か！」

竜馬に乗った大きな影が小声ながら、そう問うた。

アスナムは首をこくりと小さく頷いた。

知らない男の声ではあったけれど、その声はどこか安心できた。

「とにかく急いで離れるぞ」

竜馬を下りた男が早足に近寄ってくる。

フードを目深に被っているため、男の顔は見えない。

ただ、男は横たわるサウラスを確認するとその身体を肩に担ぎ、竜馬に跨った。

「さあ」

大きな手がアスナムに向かって真っすぐに差し伸べられる。

足は痛むけれど、この手を取らなければ逃げられない。

痛みを必死にこらえ、転びそうになりながらもその手を取った。

強く引つ張られ、そのまま持ち上げられると、竜馬の背に寄せられる。

男は竜馬を迫ってくる光とは反対方向　　マリエステ領土に向って  
走らせる。

「振り落とされんよう、しっかりしがみつけ！」

アスナムはコクリと強く頷いた。

竜馬は暗闇を風のように駆け抜けていく。

『エシエンタールの加護がありますように』

リーザの最後の言葉がいつまでもアスナムの頭の中をこだましていた。

## 名を知る者

草原を抜ける頃には雨は上がっていた。

竜馬の足は風のように早く、その巨体からは想像もつかないほどしなやかで、軽やかだった。

暗闇の中、遙か前方に幾つもの真つ赤な炎が浮かんでいた。

近づくにつれてその全貌が明らかになる。

石造りの堅牢そうな要塞にアスナムはごくりと生唾を飲み込んだ。

「マリエステの国境要塞シャングリアだ」

そうアスナムに説明した男は枯れ草色のコートに身を包んでいた。

顔は見えないがかなり大柄で、アスナムの身体はその背に完全に隠れてしまうほどだった。

要塞の門が差し迫った頃、男は竜馬の速度を落とした。

「おいっ、止まれ！」

街の門の上にある物見台から声がした。

そちらに視線を向けると衛兵らしい眼光鋭い男が二人、アスナム達を見下ろしていた。

「デルブールの人間ではないのか！ 立ち去れ！ 去らねば命の保障はない」

しかし男は竜馬を止めることはしなかった。

それどころか「開けろ！」と命令した。

「瀕死の男を連れているんだ！ 一刻を争う！ 早くここを開けろ！」

男の威厳に満ちた声に衛兵がうろたえる。

男はチツと舌打ちすると竜馬の手綱を引いた。

竜馬は大きな身体をしならせると口から真っ赤に燃え盛るブレスを吐いた。

城門が破壊され、衛兵たちはその姿に怖気づいたようにその場に座り込んでしまった。

男は何もなかったように城門に押し入った。



要塞からたいまつを片手に掲げた数多くの兵士たちが飛び出してくる。

竜馬は取り囲まれ、兵士の持つ剣や槍がアスナムたちに突きつけられた。

男は小さく溜息をつくとき、コートで隠れた腰から何かを抜き取った。

豪華な細工の施された柄をした剣だった。

「覚悟のある者から来い！」

男の一喝で一瞬兵士たちは士気を削がれる。

だが、それでも意を決し、男に切りかかってくる。

しかし、今回は完全に相手が悪かった。

男の身のこなしは圧巻の一言に尽きた。

巧みに竜馬を操り、剣や槍を弾き飛ばしていく。

あっという間に全ての武器を取り除いた男に、アスナムはまったく声の一つも上げられないほどその空気に飲み込まれてしまっていた。

「何の騒ぎですー！」

不意に背後から声がし、アスナムは振り返った。

要塞の入り口から金色の髪美しい青年が、何人かの兵士たちに囲まれるようにしてやってきた。

その声に反応するかのように男は竜馬を下りた。

それから枯れ草色のコートのフードを取ると、やってくる青年の前に進み出た。

「お久しぶりです。レーテル殿下」

そう言つて男は深々と青年に頭を下げた。

アスナムは息を飲み込んだ。

（この人がレーテル〃セラド様！）

王宮に出入りはしていたが、実際に王国随一の美貌の持ち主と謳われる王子その人に会うのは初めてだった。

しかしレーテルの顔を見て、アスナムはどこかで見た覚えがあるような気がしてならなかった。

（誰かに似ている……）

だが、それが誰なのかが分からない。

そんなレーテルの顔は驚愕に満ちていた。

男はレーテルの様子にはお構いなしに竜馬の背に乗っているサウラスの体を抱えると、彼にそれを差し出した。

「すぐに医務室の用意を！！」

男が差し出したサウラスの姿を見るや否や、レーテルの顔は一気に青ざめた。

それからすぐに近くにいる兵士たちに何かを指揮した。

兵士たちはすぐに男からサウラスの体を受け取ると要塞へと運び込んでいく。

「彼をどこで？」とレーテルは男に尋ねた。

男は振り返り、アスナムに視線を向けた。

無精ひげをはやした顔に傷のある男はアスナムに「事情はすべて彼

女が話す」と言った。

レーテルの視線がアスナムに向く。

アスナムはその鋭い眼差しに背筋が自然に真っすぐになった。

だが、緊張は長くは続かなかった。

ふっと意識が遠くなる。

急激な眠気がアスナムを襲い、意識が真っ白に途切れていこうとする。

(安心したのだろうか？　これで助かると安堵したから急に？)

「眠りなさい、今は……目が覚めたとき、ゆっくり貴女のお話を伺うことにしましょう」

眠りゆく意識にはつきりと彼女は聞いた。

レーテルが自分のことを『アスナムⅡウルバン』と呼ぶ声が

## 決意する者たち

長い木製の机が東西に横たわっていた。

その机の向かいにはマリエステの王国花である『アスナムリリー』を模った紋章を宿した大きな旗が掲げられていた。

それに背中を向けるようにヤークンは一人立っていた。

この部屋には他に誰もおらず、静寂だけがともにある。

ヤークンは安堵していたがしかし、不安も多かった。

（これで本当に良かったのか？ この道しか残されていないなかったのか？）

自分のしたことで王国も決断をくださねばならなくなることを、ヤークンは憂っていた。

『いつかはそういう日が来るだろう』と、マリエステの王が語っていたことを思い出す。

避けられぬ道ではある。

けれど、この状況で帝国と正面から向き合わねばならないことがざわついていた。

「アインバイル将軍。お待たせして申し訳ない」

静寂を打ち破るように部屋の大きな扉が開いた。

やってきたのは自分の正体を知る数少ない人物の一人であるレーテルⅡセラドその人だった。

厳しく張り詰めるレーテルの顔にヤークン自身も自然に顔が強張った。

「助かりそうか？」

「ええ、それは間違いなく大丈夫だと思われるのですが」

そう言ってレーテルは顎に手を添え、考え込むように瞳を閉じたあと「不思議な話なのですが」と続けた。

「不思議な話？」

「ええ。弟、『エウル』の傷は大きなものを除いて、ほとんどが回復していました。完全に癒えるのにそれほど時間は要らないかと

……」

「あんな大きな傷を負っているのに命に別状はないとは……彼の生  
命力のなせる業かね？」

ヤークンの言葉にレーテルは苦い笑みを浮かべ首を振った。

「傷を癒したのは彼の力ではありません。再生の力は自分には使え  
ないのです」

「では……誰が？」

「確かめてみないことには分かりませんが。考えられるのは一人し  
かいません」

そう言うレーテルに、ヤークンはさらに眉をひそめた。

「一番考えられないことだった。」

けれど、その人物以外に思い当たるところがなかったのも確かだっ  
た。

「アスナムか」

「彼女の意識が戻り次第、話を聞くつもりでいます。將軍はどうし

ますか？」

そう問うレーテルにしかしヤークンは頭を振って見せた。

「遠慮しよう。オレのような人間がいては言いたいことも言えないだろうから」

その答えにレーテルは小さく笑って見せた。

「デルブールの守り神と慕われた貴殿らしからぬ言葉ですね」

ヤークンはコリコリと無精ひげを搔いて見せた後「今はただのお尋ね者だ」と返した。

「それにしても……見事に皇帝の策にハマったな。我々も……」

大きなため息がついて出た。

守ると目の前の男と約束した相手を窮地に追い込んだのは自分の責任でもある。

皇帝の策を見破れず、足留めのための皇帝の差し向けた戦力を振り切るのに時間がかかってしまった。



駆けつけた時にはすでに地眼も天眼も解放された後だった。

リーザからの連絡がなかったならば、あの二人をまた皇帝の手の中へと返すことにもなりかねなかった。

押し黙り、悔しさで震えるこぶしに力を込める。

だが、そんなヤークンにレーテルは静かに「後悔している時間はありませんよ」と告げた。

その言葉にヤークンは苦い笑みが漏れた。

「確かに。『魔女アース』はここにいます。他に道がなかったとはいえ、このことは皇帝に王国を攻撃させる明瞭な理由を与えたことになってしまった」

ヤークンの言葉にレーテルも大きく頷いた。

「そうですね。彼女はいまや皇帝の後、デルブルーの王妃ですからね」

短い沈黙が漂う。

『魔女アース』の奪還を達成するためにバルドスは容赦なく王国を攻撃してくるだろう。

その戦力も帝国には余りあるほどにある。

今回の戦争で多少なりとも犠牲を出すことになった王国に立て直す時間などきつとあの男は与えてはくれないだろうことをヤークンは身をもって知っていた。

そうするように教えたのは他でもない自分自身。

『化け物』を作り上げた責任は自分自身でもあると、ヤークンは常々思っていた。

だから皇帝を止めるため、帝国を止めるため。

『お尋ね者』にまでなったのだ。

なんとしても王国を守り、帝国の野望を阻止せねばならない。

そのためにも多くの犠牲を払ってきたのだから

「間違いなくアレも出てくるぞ」

「ジリオン 破魔砲ですね」

美しい顔をこれ以上ないほど曇らせるレーテルにヤークンは大きく頷いてみせた。

「だが、地眼の力に比べれば対抗する策がないわけではないぞ」

そう言うヤークンの言葉にレーテルは「確かに……」と呟いた。

そう、『地眼の力』はどうあっても『天眼の力』でしか対抗できない。

それはあれらが『神の遣した力』である所以だ。

だが、ジリオンは違う。

あれは人が作り出したモノ。

人の欲が作り出したモノ。

完璧ではない。

人が作ったものに完全という文字はないのだから。

時間はない。

だが、ジリオンさえ攻略できれば、王国にも勝機はある。

母艦というよりも要塞と呼んだ方がしっくりくるジリオンをバルドスは正義名分をはためかせ、用いてくるに違いない。

打ち崩さなければ王国に、いや、シャンタナに未来はない。

「我々に力を貸していただけですか、將軍？」

「無論だ」

ヤークンはレーテルの差し出した手を強く握り締めた。

それを握り返すレーテルの熱い手にヤークンは心の中で固く誓った。

必ずや勝利をもたらすことを　固く、固く誓ったのだった。

## 穏やかな目覚め

穏やかな目覚めだった。

温かな日の光が小さな窓から差し込んでいた。

スプリングのきいたふかふかのベッドに、絹の肌掛け。  
小ぢんまりした部屋だったが、デルブールで監禁されていた部屋に  
比べれば、数段良かった。

これがマリエステという国なのだと改めて実感した。

やっと戻ってくる事が出来た。

気の遠くなるようにも思えるほど長い時間、ずっとこの国へ戻って  
くることだけを願っていた。

できないと分かっていたけれど、それでも諦めがつかなかった故郷、  
それがマリエステ。

「気分はいかがですか？ ゆっくり眠れましたか？」

そう言って笑ったのは金色の髪的青年だった。

女性のように美しい彼は、これ以上はないと思えるほどのほほ笑み  
を湛え、アスナムを見ていた。

「はい、とても。こんなふうに眠れたのは久しぶりだったので……」

アスナムの返答にレーテルは小さくほほ笑んだだけだった。

もう何日も味わった事のない深い眠りだった。

目をつむれば必ず浮かぶ惨劇の数々……その悪夢に悩まされ、眠ることなどできなかつた。

悪夢だけのせいではない。

隣には必ずあの男がいた。

身にかかる吐息も、腰を抱くあの大きな腕も自分を逃がさない鎖になつていた。

重い、重い貪欲な愛欲の鎖。

ポロリ……涙が伝い落ちた。

こぼれそうになる嗚咽を抑えようと手で口を塞ぐ。

「よほど辛かつたのですね」

ベッドの傍らの小さな椅子にレーテルは腰を下ろすと、そっとアス

ナムの肩に手を置いた。

その労わりにアスナムは胸がギュツと締め付けられた。

「私には……こんなふうに優しくしていただく資格はありません。私は罪のない多くの人を死に追いやった魔女です。魔女アース……なんです」

「貴女は何も知らないのですか？ エウルが……いやサウラスがなぜあれほどの傷を負っているのか……」

頭に瀕死の重傷を負ったサウラスの姿が浮かんだ。

大きな傷痕が幾つも身体にできていた。

自分と対峙した時、その力を使った時はまだあれほど酷い傷ではなかった。

確かに胸を撃たれたし、そのときのこと覚えている。

けれど……骨が見えるほど肉が裂けるような傷はまだ、あのときは負っていなかった。

サウラスがまだあの時意識を持っていたのだとしたら？

もしも自分が逆の立場にあったら？

「私の力を防いだの……？ だから……！」

レーテルは大きく頷いた。

そして「被害がまっただくなかったわけではないが」と付け加えた。

その言葉にアスナムは思わず顔を覆った。

自分の罪をサウラスは被ったのだ。

自分が彼をあそこまで追い詰めたのだ。

けれど、まだ彼は生きていてくれた。

それだけが救いだっただ。

ハッとアスナムは顔を上げ、レーテルを見つめる。

「サウラスは……彼はどこですか！？」

アスナムの言葉にレーテルは眉間にシワを寄せ、その質問には答えはくれなかった。

しばらく考え込むように口を閉ざした後、レーテルは言った。

『サウラスに何かしなかったか』と



「なにか……とはどういう意味でしょうか？」

レーテルの意図するところが見えず、そう質問するとレーテルは「なんでもいい」と言った。

「どんな些細な事でも言い。サウラスを助けるために、貴女がしたことを教えてほしいのです」

「薬草を飲ませました……あとは祈っただけです。彼の手を握って……」

薬草を煎じて飲ませはした。

けれど、他には何もしていなかった。

いや、正確にはしたくても何も出来なかったのだが、それが一体なんだというのだろうか？

「本当にそれだけですか？」

そう問うレーテルの真つすぐな瞳に、大きく頷いた。

嘘も偽りもない。

取り繕うことなど何一つなかった。

「そうですねか」

レーテルはそう呟くとゆっくりと立ち上がり、アスナムに「一緒に来てもらえませんか？」と告げた。

「はい」

戸惑いながらもアスナムはレーテルの後に続くことにした。

長い廊下を進むと、レーテルは振り返り「中へ」と言った。

厚い木製の扉を護るように佇む衛兵が、深々とレーテルに頭を下げた。

重い扉は軋んだ音を立てながらゆっくりと開く。

一歩入って中に入った瞬間に、目に飛び込んできたのは大きなベッドに横たわっているのはサウラスの姿だった。

彼はまるで死んでいるかのように真っ白な顔で、そこにいた。

思わず駆け寄って彼の顔に触れた。

息はある。  
温もりもある。

けれど、そのどちらも微かなものでしかなかった。

気を抜けば一瞬で冷たくなってしまっ、息をしなくなってしまっ。

それほど危つく感じるものだった。

「もう一度、彼の手を握ってもらえないだろうか？」

レーテルは言いながらベッド脇に立ち、サウラスの力のない手を差し出した。

アスナムは小さく頷くと、「こうですか？」と彼の手を握って見せた。

レーテルは真剣な眼差しで固唾を呑み、見守っている。

だが、しばらくすると大きな溜息をついた。

どうやら考えていたことが外れたようだった。

「ありがとう……すまない。私の勘違いだったようだ」

レーテルは苦いほほ笑みを浮かべていた。

アスナムには彼の意図が全く分からなかった。

ただ、レーテルの瞳の奥に落胆の色がのぞいて見えて、それがアスナムの胸を締め付けた。

サウラスは静かに眠り続けている。

何か出来たらいいと思うのに、何一つ彼のためにできない自分自身が齒がゆかった。

彼は自分のために『命』を賭してまで守ってくれようとしたのに、そんな彼の想いに答えられない自分自身が恨めしく、情けなかった。

「気に病むことはない。貴女を責めるつもりはないのだから」

いたわりの言葉を掛けられ、アスナムは俯いた。

その視線の先に揺れる金色のリングが目に入った。

（そうだった！！）

「あの、レーテル様。私……」

大事なことを思い出し、首に下がったままのネックレスを握り締めながら顔を上げた。

これを渡さなくてはならない。

そしてリーザ様の伝言をこの人に伝えなければならない。

約束して逃げたのだ。

それだけは守らねばそう思い、アスナムがレーテルにリーザの言葉を伝えようとしたそのときだった。

荒々しく扉が開かれたかと思うと、一人の兵士が必死の形相で飛び込んできた。

「どうしたのだ！」

兵士はゼエゼエとままならない呼吸を必死で整えると、レーテルの前に膝をついた。

「リーザッ 그레이ザー様、謀反の罪により明朝公開処刑されること―。」

もたらされた衝撃的な報告にアスナムもそしてレーテルも、時間が

止まったかのようにただ立ち戻ることしかできなかつた。

## 譲れないもの

「これは畏だ！ 我々をおびき寄せるための畏に違いない！」

ヤークンは落ち着かずに部屋を行ったり来たりし続けるレーテルに向って言った。

すると、レーテルはその言葉に立ち止まり「分かっています」と答えた。

「リーザ様はそうなることを承知の上で貴殿に魔女アースを、いやシヤンタナの未来を託したのだ！」

「そんなこと、分かっていますとも！」

レーテルの怒声に近い返答に、ヤークンは意表を突かれた。

常に冷静で何事にも動じない男　それがレーテル「セラドという人間だと思っていた。」

幼い頃から大国の王になることを運命つけられたこの王子は、そうなるべきだと誰もが思わずにはいられないほどに思慮深く、常に理性を重んじ行動する優秀な人物だった。

そんな彼が今、目の前で我を忘れ取り乱していた。

(それほどに想いが強いということか　　!!)

リーザとレーテルのこれまでを一番間近で見してきたのは他でもない  
ヤークン自身だった。

けれど。

『世界』と『一人の女性の命』とどちらかを選択せよと迫られても、  
この王子ならば間違っても『一人の女の命』などと血迷ったことな  
ど言わないだろうと思っていた。

血が通わないという意味合いではなく、冷静に物事を見極める目を  
持っていると思つてのことだ。

だがやはりレーテルも一人の若い青年だということを、ヤークンは  
改めて実感をした。

「レーテル殿、貴殿は次期マリエステ王国の国王になる大事な方だ。  
今、貴殿がいなくなることはマリエステだけでなく、シャンタナに  
とっても大きな損失になるのは間違いない。そんなことになったら  
一番誰が悲しむのか……」

「將軍……」

レーテルは苦い、苦い眼差しをヤークンに向けた。

ヤークンも悔しさに歯を食いしばる。



酷な事を言っている。  
酷な選択を迫っている。

生身の人間であることを実感した今、彼にこれほどはない苦い選択を突きつけている。

（汚いマネを……！ 陛下だけでなく姫君まで手に掛けようというのか！ バルドス！！）

バルドスの不敵な笑いが脳裏にまざまざと思い浮かんだ。

前皇帝の死に疑問を持ち、バルドスの目を盗みながら独自で調査をし続けてきた。

思ったとおり、バルドスの策略だった。

医師を懐柔し、皇帝に毒を盛らせた。

長い、長い日をかけ、病死だと思わせるように徐々に徐々に……真相を知ったときはひどく自分を罵った。

『何がデルブールの守り神だ』と 守らねばならない人が悪人の手に落ちていることも知らず、何が守り神だと

己を戒めるために顔を切りつけ、一生消えない傷痕を作った。

そして命を落としたことにして姿をくらませた。

バルドスを野放しにすることにはなるが、それでもいつか訪れるであろう転覆の機会を待つことにした。

そしてやっとその機会はやってきたのだ。

危険はともなうが、やれないことはない。

だが、ここでレーテルを失ってはそれが叶わなくなる。

「リーザ様は私が必ずお助けする！ この命に代えても……」

二度と失うわけにはいかない。デルブルーとマリエステを繋ぐことのできる二人を

そのとき急激な眠気に襲われた。

頭の中で何かが鳴り続けている。

立っていられなくなり、膝が床につく。

視界が大きく揺らめいている。

「レーテル……殿？」

ぼやけていく視界にはレーテルの苦い顔が映っていた。

「すまない、將軍……」

『こればかりは譲れないのだ』そんなレーテルの囁きが聞こえたよう気がした。

## 託された想い

見渡す限り闇の中だった。

光はなく、閉ざされた狭い空間でもない。

広く、無限な闇　何もかもを飲み込むようなどす黒い闇は、どこか絶望に似ていた。

サウラスはゆっくりと立ち上がった。

（ここはどこだ？）

あんなに痛くてたまらなかったはずの痛みは、今はまったく感じられない。

背中に手を這わせても、撃たれた傷痕はない。

（夢だったのか？　いや、それともオレは……）

『死』という言葉が脳裏をよぎった。

意識が途切れる前に放った天眼の力はかつて今まで自分が使ったことなどないほどに強大なものだった。

捨て身でなければアスナムの地眼の力は止められなかった。

いや、きっと完全には阻止できなかったはずだ。

彼女の意識下で蠢く絶望の波はサウラスが想像していたよりも遙かに凄まじかった。

苦痛。

虚しさ。

悲嘆。

この世に生まれたことそのものを呪っているような感じだった。

彼女がそれほどまでに追い込まれているのに、何一つ出来ないでいるのが悔しかった。

(今もどこかで彼女は泣いているのだろうか?)

そう思うとサウラスは息もできなくなるほどに胸が締め付けられた。

彼女に救われた幼い頃の自分を思いだし、サウラスはキュッと拳を握った。

彼女という存在がなければ今の自分はなかった。

どうにかここを抜け出さなければならぬ。

そして彼女を今度こそ取り戻さなければならぬ。

(しかし、ここはどこだ?)

『知りたい?』

頭の中に突然声が響いた。

周りを見回すが何も見えなかった。

『本当に知りたい?』

妙な感じだった。

声を聞いているのは耳ではない。

声は直接サウラスの頭の中に話しかけていた。

若い女の声?

いや、少女のようだった。

「誰だ！ 姿を見せる！」

叫んだ瞬間目の前の闇がパツと一瞬明るくなり、サウラスは思わず目をつむった。

しばらくしてからゆっくりと瞼を開く。

サウラスを取り囲むように、幾つもの映像が無声映画さながら闇の中に浮かび上がっていた。

無残に転がった首なしの死体。

灰のように死んでいく男の姿。

拷問された拳句、無惨に切り裂かれた中年の男女を取り囲みながら笑う野蛮そうな男たち。

茶色の髪の子女の首を容赦なく斬りつけたバルドスの姿。

宙を飛ぶ二人のデルブルー兵の首。

サウラスの記憶の中にあるものとなないものが入り混じっている。

どの映像も胸が締め付けられ、苦しくて息ができなくなりそうだった。

どれも凄惨で、多量の血に塗れたものだった。

そして、一番目を覆いたかったのは彼女がバルドスの手によって『凌辱』されている場面だった。

「くっ………!!」

思わず目を逸らしたくなるような光景に、けれど声は「逸らさないで」と告げた。

愛する人が目の前で他の男に抱かれている。

必死に目を閉じ、耐えるように唇を噛みしめていた。

目じりには涙のあとさえ伺えるそんな光景を直視すると……少女は告げた。

こんな酷な事があるだろうか？

痛みが波のようにサウラスを覆う。

わなわなと拳が震えた。

ここにあの男がいたら殴り殺してやりたいとそう思えるほどに拳を強く握りしめていた。

拳の色が変わるほど、爪が掌に食い込むほどに強く……!!



彼女がどんなに苦しみ、悲しみ。

その心に絶望を巢食わせたのか、それが抉るような痛みになってサウラスを飲み込んでいた。

『これはあの娘この記憶なの……あの娘の絶望の記憶』

ふと隣に人の気配を感じ、サウラスは映像から目を離しそちらを見た。

暗闇からゆつくりと一人の少女が姿を見せた。

茶色の髪に粗末な木綿のワンピース。

鼻の頭のそばかすが目立つ少女が、サウラスの隣に立ちながら目の前に繰り広げられる惨殺シーンを見つめていた。

『あなたには知ってほしいと思ったから……彼女の絶望を一緒に背負ってほしいと思ったから。』

だから酷な事だと思ったけれど。それでも彼女の全てを見せたの』

少女は目を伏せるようにしてそう言った。

サウラスはもう一度映像を見つめた。

バルドスが斬りつけた少女にそっくりだった。

（これがアスナムの記憶だとすれば、この少女は死んでいるんじゃないのか？ ならオレも……？）

よぎる考えにしかし少女は小さく首を振って見せた。

『安心して。あなたは死んでない』

「じゃあ、ここはどこだ？ 死んでいないのなら、これは夢なのか？」

『ここは現世に強い思いを残し、エシエンタールの元に旅立っていない者が集う場所』

まっすぐに映像へと視線を馳せたまま、呟くように少女は言った。

その瞳はどこか悲しく、切ないものだった。

「どうしてそんなところに……」

『あの娘があなたをここへ導いた。命を繋ぎ止めたいと願うあの娘の思いがあなたをここへ運んだ』

「アスナムが？」

こくりと頷いた後、少女はサウラスを見つめた。

『望んだ道ではない、強いられた道。泣いている。あの娘の心は血を流している』

そしてサウラスに少女は言った。

『本当のあの娘を取り戻して』と

『あの娘を縛るのは自責の念。守れなかったという負い目があの娘をさらに追い詰めている。』

好きでもない男に身を任せたのも、それが自分に与えられた罰だと思っただけのこと。

望んでなつたわけじゃない。

お願い！！ あの娘の心を解き放って、救ってやって！！

それはあなたにしかできない』

「……キミはそれを言うがためにここへ残ったのか？」

サウラスの問いかけに少女は『会ってみたかった』と答えた。

『あの娘がずっと心の中に秘めていた想いを知っていたから。あの娘は何も言わなかったけど、知っていたから。あの娘が好きになった人と話をしてみたかった』

そう言うと少女は淋しげに笑った。

『会ってみて分かった。あたしの想いを託せるのはやっぱりあなただけだ』

少女の目が映像へと向けられる。

悲しい映像の合間に楽しげな食卓風景が浮かび上がる。

キラキラと月の光のように輝く笑顔を放つアスナムがいた。

その彼女をいつくしむように見つめる中年の夫婦とそばかすの少女。

家族の団欒の中で、穏やかな笑顔を放つ彼女を見つけ、サウラスはじわりと目頭が熱くなった。

辛い目にあっていないだろうか、ずっとずっと心配をしていた。

一人で孤独を抱え、悲しみに打ちひしがれていないだろうかとずっとずっと心配していた。

傍にいてやれなかったから。  
隣で守ってやれなかったから。

けれど、彼女はこうやって新しい環境の中でも愛に満ちた暮らしを送っていたのだと思ったら、嬉しさがこみ上げた。

彼女には笑い合えた日々が合った。  
安らげる場所があった。

それがこれほどまでに嬉しい！！

「彼女を守ってくれて……ありがとう」

感謝しかなかった。

最後まで彼女を守ってくれたことに感謝の言葉しか出てこなかった。

そっと少女の手に触れ、握りしめる。

実体はないはずなのに、彼女から温もりが伝わってくる。

そんな少女の輪郭が揺らめき、小さな光の泡が立ち上がり始め、それは輪郭だけでなく、少女の全身を包み込む。

『アスナムを……頼むね』

ニツ……大きな口から白い歯をのぞかせて笑った瞬間、彼女の体はパンツ……と弾け飛び消えてなくなつた。

「キミの思い……ムダにはしない!!」

消えていった少女に届けるように、サウラスは言葉に乗せた。

静寂と暗闇が戻ってくる。

その中を小さな光の泡が一つだけ、サウラスの前に舞い落ちる。

サウラスは手を伸ばし、広げた。

伸ばした手の中に落ちた泡はいつまでも暗闇を照らし続けた。

まるで未来を照らしだす希望の光のように、キラキラと……

## 重なる手

(どうしたらいいの?)

リーザの処刑の話が出た途端、レーテルは血相を変え部屋を飛び出していったことでアスナムは一人、青年が眠る部屋に取り残されていた。

今すぐにでもここから出て、リーザを助けに向いたかった。

自分を逃がすために謀反の罪を着せられることは耐えがたいことだった。

だが、一人で何ができようか？

地眼の力は『クシャトラの腕輪』を持ったバルドスには効かない。

解放すれば関係のない命さえも巻き込む恐れがある。

何よりも、彼女が喜ぶはずがない。

それに仮に助けられたとして、彼女の首にあるものをどうにかしない限り、彼女をデルブールの領域外に連れ出すことは不可能だった。

「私じゃダメ……でも、サウラス。あなたなら……」

アスナムは静かに眠るサウラスの額の髪にそつと触れる。

人に命を吹き込むことのできるサウラスなら、リーザを助けられるような気がした。

だが、それを彼に頼めないこともアスナムは痛いほど分かっていた。力を解放すれば彼が傷つく。彼が命を落とすことにもなりかねない。

それは耐えられないこと。

でもきつと、彼なら……

彼ならリーザを助けるために天眼の力ではない、別の方法でならば力を貸してくれるに違いない。

心優しい人。

誰よりも愛情深い人であることをアスナムは身をもって知っている。

アスナムは力なく胸の上で組まれたサウラスの右手を取った。

そして両手で包み込むように彼の手を握った。

息はしているはずなのに、冷たい手だった。



生きている。

確かに彼は今、こうして息をして命を繋いでいる。

けれど、『彼』はここにはいない。

それは直感で、本能で分かる。

どうやったら彼はこっちへ戻ってきてくれるのだろうか？

「お願い……助けて、サウラス。私一人では何も出来ないの……」

ポトリ……涙がこぼれ落ちた。

悔しくて仕方なかった。

自分の力は人を助けるためにはない。

滅ぼすための力。

奪うだけの力。

それが厭わしく、それが呪わしかった。

（あなたを失いたくない！！ もう誰も失いたくないの！！）

自分に関わった人が死ぬところを見たくなかった。

自分を守るために犠牲になる人などもう見たくなかった。

愛する人をこれ以上失いたくなかった。

サウラスが助かるのであれば、自分の命など惜しくもない。

自分の身一つで彼が助かるのであれば、喜んでこの命を捧げよう。

（エシエンタール、この人を助けて！）

ギュツ……力強くサウラスの手を握った瞬間。

握ったその手が温かな光を放った。

それは見る見る大きくなり、彼の体を包み込んだ。

アスナムは何が起きたのか分からなかった。

「……ん……うん……」

光が徐々に小さくなって消える頃、サウラスの瞳がゆっくりと開いた。

澄んだ湖のように美しい碧眼の瞳がじっとアスナムを見つめていた。

その顔がぼんやりと霞む。

すうっと。

自然に涙が目じりを伝って頬へと流れて行った。

もう涙を止められない。

「泣かないでくれ……もう大丈夫だから……」

彼の大きな手が伸びてきて、アスナムの頬を拭う。

温かな手。

先ほどの氷のように冷たかった手ではない、血の通う温かな感触。

柔らかで、けれど固い。

大好きで。

愛しくて。

求めてやまない愛しい人の手だった。

「少し……痩せたみたいだな」

そう言われた途端、今まで我慢していたものが噴き出すかのよう声にならない声でアスナムは泣いていた。

そつと彼の手が伸びてきて、ゆつくりと頭を引き寄せられた。

サウラスの腕の中に抱かれる。

やんわりと包み込むような優しい抱擁に。

一定のリズムで刻む胸の鼓動に。

これ以上のない安心感を得る。

懐かしい音。

懐かしい温もり。

懐かしい力。

懐かしい匂い。

懐かしい呼吸。

懐かしい声。

愛しい人がそこにいて、愛しい人の腕がそこにある。

これがどれほど幸せで、どれほど満ち足りたものであるのか……それを完全に表現する術をアスナムは持っていなかった。

けれど、愛しい。

想いが溢れて、溢れて止まらなかった。

枯れた泉が息を吹き返す。

このときをどれほど自分自身が待ち望んでいたのか。

諦められず。

忘れられず。

いつか、いつか……きっとまた巡り逢えるのだからと……

そんな想いに縋りつくように生きてきたアスナムの願いが叶った瞬間だった。

「落ち着いたかい？」

涙が乾く頃、そう言ってサウラスはアスナムの顔を覗き込んだ。

アスナムはこくりと小さく頷き「ごめんなさい」と返した。

本当は言いたいことが山とあった。

もう一度彼に会えたらと、何度も何度も胸の中で繰り返し最初の言葉を練習していたこともあった。

本当は「ごめんなさい」ではなく、もっと違うことが言いたかった。

けれど、今の自分に言える言葉はこの一言しかなかった。

そんなアスナムに彼は言葉ではなく、小さなほほ笑みを返してくれた。

「長い夢を見ていた。キミが泣いていた夢だった」

サウラスはアスナムの瞳のずっと奥を見つめた。

強い光を湛えた瞳にアスナムは見つめ返すことしかできなかった。

「その夢でオレは……茶色の髪をしたそばかすの少女に会った。キミの傍に……ずっといたらしい」

「リチエットに!？」

驚きの眼で見つめるアスナムにコクリと頷き、「彼女の名はリチエットと言っただね」とサウラスは答えた。

その言葉にアスナムは「私の親友なの」とまた答えを返した。

「キミを……もっと早く助けてあげられれば、彼女も彼女の家族も死なずに済んだはずなのに。弱いオレですまない」

サウラスはそう言って小さく頭を下げた。

もっと早く助けたかったとそう言う彼に、アスナムは小さく頭を振って見せた。

彼は悪くない。

逃げ出すことを選択したのは自分だった。  
悪いというのならばむしろ自分だろう。  
守れなかったのは自分の弱さのせいだ。

誰かに頼ることしかできなかった自分自身の罪。

身を隠すのならば一人で暮せばよかったのだ。

けれど出来なかった。

淋しくて。

辛くて。

誰かに傍にいてほしかった。

それがあのような凄惨な結果をもたらしたのだ。

誰が悪いわけでもない。

悪かったのは全て強くなれなかった己自身。

「私がリチエットを見殺しにしたの。私の力がいろんな命を殺したの。

悪いのは私。

他の誰のせいでもない。

ましてあなたのせいなんて……」

そう言うとサウラスは「違うよ」と言った。

その声は穏やかではあったけれど、とても力強かった。

「君がオレを助けたいと願った強い思いが、オレと彼女の想いを引き合わせたんだよ。」

君の強い思いがオレの命と彼女の想いを救ったんだよ。

だから、そんなふうに自分を責めないでくれ」

「私にはそんな力はないわ、サウラス。」

それはあなたが一番よく知っているでしょう？

私は他人の命を奪いこそすれ、助けるなんて……私はデルブールの魔女アースだもの……」

「アスナム、聞いてくれ。彼女は死してなお、キミを案じていた。キミを解き放つて欲しいと言っていた。自責の念に縛られ、身動き取れなくなつた君を救い出して欲しいと……」

「リチエットは私を恨んでいないと言うの？ 私と関わらなければ、こんなことにならなかつたのよ！」

「彼女はキミをオレに託すと言っていた。彼女はキミを恨んでなんかいない。だってそう思わないか？ もしも同じ立場だったら……本当に好きだと思える相手をキミは恨む？」



サウラスの言葉にアスナムは胸が鷲づかみにされた。

彼女と最後に交わした言葉が頭の中をよぎっていく。

『あたし、アスナムのことが大好きだ。そのことだけは忘れないで……』

(リチエット！)

サウラスは涙するアスナムの頬にそっと手を伸ばすと優しく身体を引き寄せ、ギョツと力強く抱きしめた。

引き寄せられた刹那、胸の鼓動が早くなるのを感じた。

顔が熱を帯びて、ドキドキする鼓動の音が異様までに大きな音に聞こえた。

手に小さな震えが走っていた。

彼の吐息が髪にかかるたびに息苦しくてたまらなくなる。

だが彼はその腕をほどこうとはせず、強く抱きしめたまま言った。

「キミを愛している、アスナム」

その言葉にアスナムはサウラスの腕から逃れるように身を離した。

「私は多くの命を犠牲にした非情な女なの！ 死をもたらず恐ろしい存在なの！ あなたに愛される資格もないし、受け入れることを許される資格もない」

サウラスの想いは嬉しい。

その言葉はどんなものよりも嬉しい。

受け入れられるものなら喜んで受け入れたいし、その想いに浸りたいと思う。

けれど、許されないことをした自分がいた。

多くの命を犠牲にしたのに、自分だけがぬくぬくと愛する人の腕の中にいることなど許されないことだと思った。

「アスナム、確かに多くの命を犠牲にしてしまった。その事実を変えないし、君が言うとおり罪深い行為だろう。

でも、それならなお更、オレたちは進まなければならぬ。彼らの命を無駄にしないためにも戦わないといけない。

君と同じように、大事な人を失くして泣く人がいない未来を創らなければいけないんだ」

サウラスの言っていることは十分すぎるほど分かる。

けれど、その罪だけではない。

自分はもう昔の自分自身ではない。

穢れを知らない頃の『アスナムⅡウルバン』という少女に戻れたらいいのにと、悔しくて胸が痛くてたまらなくなる。

ただのアスナムに戻れるのなら。

彼の知る唯一の女性に戻ることが出来るのなら、彼の愛を受ける資格もあるう。

けれど、もうあの時のアスナムではない。

今の自分はバルドスⅡグレイザーに抱かれ、身を穢した魔女アース。

サウラスの純粋な想いを受け取ることなど出来ない存在。

「私はもう……あなたの知っているアスナムじゃないわ」

心が千切れそうだった。

バルドスの腕の中で穢されるときよりも遙かに心が千切れそうだった。

身を粉々に打ち砕くほどに辛く、痛みが全身を駆け巡るようだった。

そんなアスナムにサウラスは首を振った。

「それでも構わない」

「やめて……あなたまで……」

「それでも構わないんだよ、アスナム。」

オレは全てを知って、それでもキミを受け入れたいと思ってる。

変わらない人間などいないんだ。

そういうオレだって……もうあの時のサウラスじゃない。

キミも知っただろう？

オレの本当の名を……」

そうサウラスに言われ、アスナムはハッと息を飲んだ。

そう言えば　レーテルがサウラスという以外の名を口にしていた気がした。

「オレの本当の名は『エウル』セラド』。マリエステ王国第2王子。天眼を持つが故にその存在を隠され、キミにも偽名を名乗っていた」

だから違つのだとサウラスは言った。

『サウラス』バルジー』という仮の姿だった昔とは違つのだと。

「それでも……あなたはあなただわ。名前など……」

「そう、関係ないんだよ」

そう言つてサウラスはにこりとほほ笑んだ。

懐かしい顔、懐かしい笑み。

思い出すのは二人で過ごした草原での日のこと。

6年経つた今でも鮮明に思いだせる。

あの日の瞳、あの日の口づけ、抱擁。

この身に確かに刻みこまれた記憶。

「オレの想いはあの頃から変わらない。いや、むしろ強くなったよ。キミは……もうオレを愛していないかい？」

優しく問われるその声に、アスナムは首を振っていた。

そんなわけがない。

バルドスに穢されようと思いつけたのはただ一人サウラスだった。

その想いに一遍の曇りも陰りもない。

「もう、一人で背負わなくていい。二人で……一緒に乗り越えよう」

サウラスはそう言ってアスナムに手を差し伸べた。

ずっと女として生まれてきたことを呪っていた。

もしも男だったら、剣を持つことも出来ただろうに、なぜ非力な女などに生まれたのかと呪いもした。

でも、今は分かるような気がする。

どうして自分が女の性を持って生まれてきたのか　すべては彼と  
出会ったためだったのだと、そう思えてならなかった。

アスナムはほほ笑むサウラスに同じようにほほ笑み、そつと彼の手の上に自らの手を重ねた。

『それでいいんだよ、アスナム』

遠く空でリチエツトがそつほほ笑みかけてくれているような気がした。

## 迷うことなき瞳

ヤークンは自分の目を疑った。

(これは夢なのだろうか?)

いまだぼんやりとする視界に覗き込むようにしてあるその顔はレーテルの弟エウル、いやサウラスだった。

彼の顔は生気で満ち溢れ、少し前までとても大きな傷を負って生死を彷徨っていた人間には見えなかった。

外のざわめきが耳に入り、ハッと我に返った。

辺りを見回すものの、レーテルの姿はそこにはなかった。

「殿下は……? レーテル殿は?」

「兄上の竜馬がなくなっていた。衛兵たちを眠らせて、一人で出て行ったみたいだ」

「オレも……その口というわけか……」

そうなることも今となれば考えられないことではなかった。



レーテルとリーザの関係を考えれば、彼の行動くらい読めたはずだった。

甘かった。

説得してどうこうできる問題ではなかったということは今更ながらヤークンは悔やんだ。

「レーテル殿を助けなくては……」

まだすっきりしない頭を軽く振る。

ここでのんびりしている暇はない。

レーテルを失えば、バルドスをさらに増長させることになる。

一人で出て行こうとするヤークンの肩をサウラスが強く引つ張った。

「オレたちも行く！」

しかしヤークンは首を横に振って見せた。

「貴殿はこの国の第二王子だろう。ここに残って兵の指揮をとれ。レーテル殿はオレが命に代えても連れ帰る」

「あんた一人で一体何ができる？ バルドスは幾つも罫を張っているに違いない。仮に兄上と合流できたとして、たった二人でデルブ

「イルの大軍と戦うつもりか？」

「抜け道を知っている。何よりオレと同じ志を持つ者たちがすでに行動を起こしているはずだ。それに今回のことはオレをおびき寄せするための罠なのだ」

そう答えるヤークンにサウラスは怪訝な視線を向けてきた。

「何者だ？」

そんなサウラスにヤークンはフツとほほ笑んで見せると「オレの捜索命令が出なかったか？」と尋ねた。

するとヤークンの言葉にエスメルは目を見開いた。

それから納得したように苦い笑みを浮かべ「あんたがアインバイル將軍だったとは……」と呟いた。

「バルドスはオレと姫が内通していることを間違いなく知っているはずだ。それでオレをあぶり出す手段として、姫の処刑を口外したのだろう。」

仮にそれが失敗に終わったとしても、姫を処刑すれば見せしめになる。国内どころか、国外にある反バルドス勢力に対しても絶大な影響を及ぼすだろう。

身内でさえも手に掛ける皇帝に逆らう気を持ち続けていられる心の

強い人間は、そうはいないだろうからな」

リーザが単独で行動しているなどと、あの男は鼻から思っではないないだろう。

それが分かるだけに、胸がジリジリと焼けるように痛んだ。

己の甘さが全てを引き起こしているような気がする。

リーザを、レーテルを危険に晒したこの責任はきっちり取らねばならない。

そんなヤークンにサウラスア「なおさら、あんたを一人で行かせるわけには行かない」と告げた。

「どうしても来ると言うのか？」

サウラスは勿論と言うように大きく頷いた。

「リーザ殿を助けるのに、オレたちの力が必要になるんじゃないのか？ 《バイシャの首飾り》にはめ込まれた毒には解毒薬がない。あんたも分かっているんだろう？」

痛いところを突かれたとヤークンは思った。

そうなのだ。

仮に助け出すことに成功できたとしても、バルドスはそんなに簡単に自分たちを国外に逃がしてくれるマネはしないだろう。

リーザの首の毒針のスイッチをためらいなく押し、苦しみ悶える様を楽しむことだろう。

解毒薬はない。

だが、どうしてそれを彼が知っているのだろうか？

「頼んでいいのか？」

ヤークンの言葉に、サウラスは振り返った。

その先に藤色の髪をした美女が立っていた。

「それが彼女の望みだから……」

「崩落の乙女……」

彼女は強い瞳をしていた。

支配的ではなく、決意に満ちた黒曜石の瞳には迷いも不安もなかった。

ゆっくりヤークンの前までやってくると、彼女は右手を差し出した。

「『アスナム・ウルバン』それが私の本当の名前です。私、もう誰かが死ぬのはイヤなんです。ともに……戦ってくれませんか？」

断る理由などヤークンにはなかった。

『再生の君』と『崩落の乙女』が自分と共に戦ってくれるとそう言っているのだ。

これ以上の援軍はなかった。

ヤークンはしっかりとその手を握ると改めて彼女の本当の名前を呼んだ。

「よろしく頼む、アスナム」と

## 遠ざかる意識

休むことなくレーテルは竜馬を駆っていた。

夜の内にデルブールの帝都に潜り込まなくてはならなかった。

リーザの居場所を突き止め、救出するまでの時間をできるだけ多く稼ぎ出さなければならなかった。

身勝手な行動であることは百も承知していたが、それでも自分を抑え込むことが出来なかった。

弟の身の上よりも、国の大事よりも一人の女性を選んでいる自分自身を笑いたくもなかった。

これでは弟と何一つ変わらないではないかと 身勝手ゆえに気持ちちは急いでいた。

一刻も早く彼女を助け出し、無事に帰ることが身勝手ながらも今の自分の責務であるとレーテルは思っていた。

草原に長い影が伸びる。

空は青い色からゆっくりと茜色にその姿を変えようとしていた。

そのとき、竜馬が大きな身体をしならせ唸るような声をあげた。

何かに苦しむように竜馬は身体を揺すり、激しく暴れた。

なだめようとするレーテルの身体を振り落とし、ついにはその場に倒れこんでしまった。

その足に小さな針が刺さっているのをレーテルは気がついた。

針をゆっくりと抜きとる。

先端が紫色に変色していた。

（毒針！ 吹き矢か！？）

腰まである草に身を隠すようにしながら辺りを伺う。

生温かな風が頬を撫でて去っていく。

刹那、首にチクリと痛みを覚える。

身体に変化はない。

しかし、急いで首を探るとやはり針が刺さっていた。

抜き取り、先端を見る。

毒針ではない。では……

(しまった！ 睡眠針だ……！！)

ここで意識を失うわけにはいかなかった。

どうしてもやらなければならないことがあるのに、ここで倒れるわけにはいかなかった。

己の身勝手さが招いた失態であるが故に、どうしてもこの場から逃げなければならなかった。

急いで治癒の印を結ぶ。

しかし、結び終わる前に頬に冷たい感触が伝わった。

「まさかおまえ自ら飛び込んでくるとは……レーテル＝セラド。

国よりも女の命を取ったのか？ 美貌の才人もただの男か……」

レーテルは両手を挙げながらゆっくりと振り返った。

頬に銀色の鋭利な剣の先端を突きつけているのは、茶色の髪を高い位置で一つに結った青年だった。

身に着ける鎧にはデルブールの紋章が施されているところを見ると、帝国でも相当な地位にいた者だと察しがついた。



彼はレーテルを蔑むように見つめていた。

その瞳に憎悪の炎が揺らめいているのを感じる。

「そうか。貴殿がデルブルーの守護総長レーヴン＝ハイヤットか…  
…將軍ではなく、私で残念だったな」

レーテルの挑発するような言葉にレーヴンはふっと口元を緩めた。

「アインバイルもすぐに捕まえる。心配は無用だ」

「私を捕らえても国は私を見捨てる。意味はないぞ」

「それならそれで構わない。おまえがこの世から消えることこそ、  
私の本願なのだから」

「なんだと……!」

「歓迎する、レーテル＝セラド。我が大いなるデルブルーへ、よう  
こそ……」

まぶたがゆっくりと垂れ下がってくる。

身体は鉄の楔が打ちつけられたかのように動かなくなる。

必死で抵抗を試みる。

額からポタリと汗が伝い落ちた。

それが、最後にレーテルが感じたことだった。

(すまない、リーザ！ 將軍！ エウル……！！！)

必死で名を呼ぶのを最後に、深い暗闇の中へとレーテルの意識は吸い込まれ、すぐに何も見えなくなった。

## 後を追う者たち

日が落ちるのを待ってから、サウラスたち一行はシャントブリ湿原地帯を横断することにした。

まず、囿の竜馬を走らせる。

マリエステからやってくるサウラスたちを狙い撃ちするとしたら、間違いないそこに潜んでいるに違いないとヤークンが言ったのだ。

そしてその狙いは正しかった。

月明かりの下、大きないななきとともに竜馬が倒れるのを確認すると、暗闇に幾つもの影が姿を見せた。

それは一斉に倒れた竜馬に向かっていく。

「今だ！」

ヤークンの掛け声とともにサウラスは竜馬を駆った。

アスナムは振り落とされないようにサウラスの腰に手を回す。

影が驚いたようにこちらを見た刹那、サウラスの握った蒼い鞘に納まったままの剣が大きく振り下ろされる。

鈍い音がし、その場に影が崩れる。

「敵襲！」という声があたりにこだました。

だが、サウラスはそれにひるむことなく炎の魔術で敵の数を減らしながら、鞘に入れたままの剣を振るっていた。

実際に殺すことはせず、気を失わせるだけだった。

どんな相手であっても、ムダな殺生は極力控えること。

それがレーテルという男の信念であり、サウラス自身が彼に教えられてきたことだった。

的確に相手の急所を突きながら、一瞬で気を失わせていく。

相手があまりにすんなり倒れて行く様に、サウラスは疑心を抱いた。

なにか誘導されているようにも感じた。

だが、それも一瞬のこと。

すぐに気持ちは背後のアスナムへと向いた。

アスナムはサウラスの背中にしがみつくように抱きついていった。

彼女を気遣いつつ、サウラスは敵を一掃し、竜馬の足を止めた。

「アスナム、もう大丈夫だ」

サウラスの言葉に反応するように、アスナムは顔を上げた。

そんな彼女を安心させるようにサウラスはにっこりとほほ笑み、その手をギュッと握りしめた。

「私は大丈夫」

その言葉を聞くと、サウラスはゆっくりと竜馬から下りた。

そして後方からサウラスたちの元へとやってきたヤークンを見る。

囿の竜馬のすぐ近くにもう一頭別の竜馬が倒れていた。

金糸の刺繍の施された馬鞍を背負った竜馬の口はだらしなく開き、そこから青く変色した舌が力なく伸びていた。

「兄上の竜馬だな」

「デルブルルの暗殺部隊の仕業だな。その竜馬はオレたちの囿と同じように毒針を打ち込まれたんだろう」

竜馬の首元を調べていたヤークンがそう言って、トントンと首の根元辺りを叩いて見せた。

レーテルの乗っていた竜馬がここで息絶えているところを見ると、レーテルの身に何か起きたのはまず間違いがなかった。

選択肢は多くはない。

「兄上は殺されたのか？」

最悪の選択肢をヤークンにぶつけてみる。

しかし、彼は頭を振る。

「おそらくデルブルに連行されただろう。リーザ様とともに処刑したほうが、マリエステの打撃は大きくなるからな」

「そんなこと……させるものか！」

「ああ、その通りだ。急ごう、時間が惜しい」

再び竜馬を走らせる。

今まで陰で支えてきてくれていた兄レーテルを、そんな形で失うわ

けにはいかなかった。

愛し合っているというレーテルとリーザの二人を救うことで、バルドスの考える道とは違うシャントナを作りだせるのだとしたら、絶対に二人を失うわけにはいかなかった。

そのために自分の力を使うことに、もはやサウラスにためらいはない。

それに自分の傍にはアスナムがいてくれる。

彼女がいればどんな危険も乗り越えられる、そんな気がしていた。

誰も傷つけず、誰も殺さず、彼らだけを救い出す……絶対にやり遂げてみせる。絶対に！

（頼む、二人とも無事でいてくれ！）

サウラスは前を向いた。

草原のはるか向こうにそびえる城砦を思い浮かべながら、真っ直ぐに前を見据え続けた。

## 月夜に叫ぶ影

月明かりしかない薄暗い闇の中にレーテルはいた。

手を動かそうと試みるも、後ろ手にされ太い鉄の手錠に縛られていたためどうにもならない。

印を結べなければ、高度な魔術は使えない。

レーテルは上体をなんとか起こすと、辺りを見回した。

見上げるほど高い位置に鉄格子の小さな小窓が一つあるらしく、そこから青白い月が見える。

人は通れそうにない。

そのとき、カッーン、カッーンと誰かがこちらに向かって階段を下りてくるような音が響いた。

レーテルはすぐに横になると目をつむった。

「レーテル様？　そこにいるのは本当にレーテル様なのですか？」

聞き覚えのある女性の声に急いで目を開くと、身体を起こし、ゆっくり近づいてくるランタンの明かりの向こうの影に目を凝らした。

黒いドレスに黒のベールを身につけた色白の女性の顔が近づいてく



る。

ずっと忘れる事のなかった、愛する女がそこにいた。

「リーザ！」

レーテルは鉄格子まで這うように駆け寄った。

彼女は石畳の床にランタンを置くとそっと手を伸ばし、レーテルの顔に触れた。

僅かに震えている彼女の手に、レーテルは自分の不甲斐なさを痛感せずにはいらなかった。

「レーテル様！！ 本当にレーテル様なのですね！！」

レーテルは肩と頬で彼女の手を包んだ。

そこに生温かな雫が止めどなく落ちてくる。

リーザの涙に、レーテルはグツと唇を噛みしめた。

こんな顔を見るために一人抜け出てきたはずではなかったのに、このような状況に陥っていることに苛立ちを覚える。

「レーテル様、これは兄上の罠です。アインバイルをおびき出すた

めの……それなのに貴方まで危険を冒すなんて……」

リーザの声が震えていた。

その言葉にレーテルは首を振る。

百も承知だったのだ。

分かっているがそれでも止められなかったのだ。

そしてその想いを口にする。

「たとえ罨でも貴女を失う方が私には耐えられない。貴女を失った世界で生きるより、ともに死ぬ道を選びます」

愛する女を失った世界で生きる弟を目の当たりにして来ていた。

その苦しみがどれほどのものであるのかレーテルには十分すぎるほど推し量ることが出来た。

「いけません！ 貴方はマリエステを背負って立つ御方なのに、私などのために……」

「リーザ……私にとっての希望は貴方なのです。貴女を失うことは私には死の宣告と同じこと。でも、貴女を助けるどころかこんなことになって……私は愚かですね」

弟にあれほど冷静であれと諭し続けてきたのに、己の身になった時、それを振り返られなかった。

弟は笑うだろうか？

不甲斐ない兄だと、きっとそう思うことだろう。

そう……弟さえいればマリエステは守られる。

いや、シャンタナの未来をも彼なら背負って立てるに違いない。

たとえば、ここで命尽きようと弟ならば……！！

しかし、そんなレーターとは対照的にリーザは首を振った。

そして「諦めないで」と言った。

「希望はあります。最後まで諦めないで……アインバイルが貴方をここから助け出してくれるはずですよ！」

リーザの最後の言葉を聞き終わるか、終わらないかという時、レーターは並々ならない殺気を感じ、彼女の背後にある気配に向けて視線を走らせた。

「それは聞き捨てならない言葉ですね、姫君？」

いつの間にかリーザの後ろにレーヴンが立っていた。

レーヴンは冷ややかな眼差しをレーテルに向けるとリーザに「戻りますよ」と告げた。

「陛下の慈悲でこうして会わせてもらえただけ感謝なさい、姫？」

「兄上の慈悲？」

「明日、姫の身代わりになる予定の囚人とその男は仲良く処刑されるですよ。その前にせめて言葉を交わす時間くらいはと……他でもない血の繋がった妹君を思われての御配慮、涙が出ませんか？」

「姫の身代わりだと！」

レーテルの問いにレーヴンは「当然だ」と答えた。

「陛下が本気で姫を処刑するとでも？ デルブルの民に愛されている麗しい姫を肉親である陛下が殺したらどうなるか、愚かなおまえでもわかるでしょう？」

確かに陛下に反感を抱く内外の勢力に対しては抑止力になるでしょう。しかし国を支えるのは民だ。その民の心を挫くのは得策ではない。

それよりも政治的に姫を利用し、この国を内側から崩壊させようと目論んだ敵国の王子と、それが用意した替え玉を処刑した方がいるんな意味で効果がある。陛下はおまえたちが想像するより一手も二手も先を読んでいらっしやるのだよ」

レーテルは返す言葉が見つからなかった。

自分たちの行動はすべてバルドスの思惑の中でのことだということなのか？

そう思うだけで胸の中がギリギリと音を立てて軋んだ。

リーザの名前を聞いたことで冷静さを欠いていた。

それは認めなければならぬ。

だが、それにしてもあまりにデルブルー皇帝に踊らされすぎていた。

そのことに悔しさがこみ上げる。

「さあ、参りましょう。ここは貴女のような方が来るような場所ではありません。それとも明日の朝を待たず、私がこの男を今この場で斬り捨てることをお望みですか？」

「そんなことをして兄上が……」

「また替え玉を用意すればいいこと。髪を金に染め、顔は拷問で腫れ上がらせてしまえば、美しい顔かどうかなど問題ではなくなりますから」

別に構わないと言うようにレーヴンは冷やかな視線をレーテルたちに送った。

リーザの目がレーテルのほうを向いた。

レーテルは彼女を安心させるようにほほ笑んでみせた。

「行くんだ、リーザ。私は大丈夫。君の言葉を信じてみるから。だから……」

リーザは名残惜しそうにレーテルの髪に触れた。

レーテルはそんな彼女の耳元にそっと囁いた。

ここを出てバルドスを見事打ち倒したそのあとは、今度こそ一緒になるかと……リーザは黙って小さく頷くと立ち上がり、振り向きつつゆっくりと階段へと歩いていった。

それを見送るとレーヴンはリーザが持ってきたランタンを手にとった。

「冥土の土産にいい話をしてあげましょう。

明日、おまえの処刑を見届けた後、陛下自らの手でローゼンブルームに攻撃を仕掛ける。

破魔砲に王都の魔障壁はどれくらい耐えられるか見せられなくて残念だが、安心して逝け。リーザ様の悲しみは私がしっかり癒して差し上げる」

ニツ……眉一つ動かさなかった男がレーテルを見据えて、勝ち誇ったようにほほ笑んだ。

そしてくるりときびすを返すと、リーザの後を急いで追いかけるように走り去っていった。

静寂と薄闇が戻ってくる。

レーテルは力の限り叫んだ。

彼の苦渋に満ちた叫び声が狭い空間にこだまし続けていた。

## 手を伸ばす黒い雲

シャントブリ湿原を越えた頃、ヤークンは「村に寄る」と言った。

彼の後について竜馬を駆る。

彼が案内したのは住む人もなくなった廃屋ばかりの壊滅した村だった。

月明かりに今にも崩れそうな古い家屋たちがひっそりとひしめきあっている。

静まり返った村に竜馬の蹄と荒い息遣いだけがこだました。

生ぬるい風が吹き抜ける。

ふと誰かに見られているような感じがし、サウラスはその気配に意識を集中させながら、さらに奥へと進んでいった。

村の一番大きな家で竜馬の足が止まったとき、その視線が間違いでなかったことを確信する。

いつの間にか竜馬は取り囲まれていた。

月明かりに鋭利な刃物が鈍い輝きを解き放っていた。

背中その向こうでアスナムが息を飲むのが分かる。



それほどに静まり返った空間は何かきつかけさえあれば、張り詰めた糸がすぐにでも切れてしまいそうだった。

サウラスはアスナムの緊張を和らげるようにそっと手を握り締めた。

だが、その手にサウラスは一瞬違和感を覚えた。

彼女の手が熱い　　！！

アスナムの手をギュッと握りしめながら、サウラスはヤークンを見つめた。

ヤークンはこくりと頷いて見せた後、取り囲む刃物を見据えた。

「この二人は敵ではない。剣を納めよ」

ヤークンのいつにない威厳に満ちた声が響き渡り、その声に一齐に刃物が姿を消した。

「お待ちしておりました、將軍」

ヤークンの向かいに立った男がゆっくりと近づいてくると敬礼した。

周りを取り囲んでいた男たちも続けて敬礼する。

ヤークンは小さく頷くと「首尾は？」と尋ねた。

「城内に入るルートは確保してあります。」

それから刑の執行と同時に民衆に扮した同士たちが攻撃を仕掛ける手はずになっております。

二人を救出した後、将軍が名乗りを上げれば、皇帝に反感を抱く民衆も立ち上がることでしよう。

迷っていた兵士たちもおそらく反旗をひるがえすかと……我々の勝利は目前です、将軍！」

「そうだな……ご苦労だった。明日は早い。おまえたちも今のうちに休息をとっておけ」

ヤークンが小さく笑うと男たちは目を輝かせながら敬礼した。

そして廃屋の中へと散り散りに消えていく。

「ここはオレがあんたに連れてこられた村じゃないのか？」

ゆっくりと竜馬から降りるとぐるりと周りを見回し、サウラスはそうヤークンに尋ねた。

見覚えのある風景なのに、以前とは様相が異なっていた。

さらに荒んだ感が否めなかった。

その問いに、ヤークンは重く苦い笑みを浮かべた。

「シルベルス」ビシュヌは知っているな？」

ヤークンの口から出た名にサウラスは「名前だけなら」と答えた。

「ビシュヌの傭兵部隊に襲われて……な。そのせいもあって、おまえさんの救出に向かうのが遅くなったんだ」

「ここに皇帝に知られていたのか？」

「そうなるな」

そう言うとヤークンはまた重苦しい息を吐いてみせた。

「ここに留まって危険じゃないのか？」

「さあな。警戒するに越したことはないだろうが、もついに皇帝の手は伸びないだろうよ」

そう言いきるヤークンにサウラスは首を傾げてみせた。

「根拠は？」

「……長年ヤツを見てきたからな。勘……としか言いようがない」

「そう……か」

サウラスはそう返しながら空を見上げた。

（嫌な予感がする……）

気持ちの悪い感覚だった。

ざわざわと胸が騒いで仕方なかった。

見上げた空に浮かぶ青白い月を飲み込もうと、黒い雲が手を伸ばしている。

「サウラス……？」

ハッと我に返ると、アスナムが心配そうにサウラスの顔を覗き込ん

でいた。

月明かりに照らされた彼女の顔はいつもよりも蒼白に見える。

刹那、彼女の身体が揺らぎ竜馬の背から落ちそうになる。

「アスナム!!」

サウラスはアスナムの身体をしっかりと受け止める。

呼吸が僅かに早くなっていた。

額には脂汗のようなものが浮かび、彼女の身体から熱を感じる。

顔面は蒼白で、唇が乾いているのかカサカサとしていた。

ヤークンはサウラスの向かいに膝を立てるように座るとアスナムを覗きこんだ。

それから彼女の脈や顔に触れると「とにかく休ませよう」とサウラスに告げた。

サウラスはヤークンに案内されるまま、村の一番奥。

ヤークンの寢床になっている廃屋にアスナムを運んだ。

埃っぽいベッドの上に彼女をゆっくりと横たわらせると、その傍らに置かれた小さな木製の椅子に腰をかけ、その手を握りしめた。

「大丈夫だ……」

熱にうなされる彼女に、サウラスは安心させるようにそう囁いた。

「オレがキミの傍にいる……だから大丈夫だ」

彼女の体調に気づいてやる余裕のない自分の不甲斐なさに、サウラスは悔やむばかりだった。

彼女を守ると決めたのに、まだまだ力もその気遣いも足りないことに男としての力量の小ささを感じずにはられない。

でも、もう決めたのだから。

彼女を守ると。

世界も守ると。

そう決めたのだから。

明日、上手くいくのか不安だからこんな気持ちになっているだけだと自分を納得させる。

こんな不安を抱いたままではいけない。

それこそ足を引っ張ることになりかねないのだ。

「大丈夫。きっとキミも。みんなも守って見せる。だから……」

アスナムの手を力強く握りしめる。

彼女の熱が伝わってきて、サウラスの心から不安の雲は消えてなくなる。

いや、余計に心の不安の雲が大きく、そして黒く広がって行く。

サウラスはアスナムの手を握りしめながら心の底から祈った。

自分の不安が現実のものとならないことを、ただひたすらに祈ったのだ。

## 罪なき命

帝都潜入まであと二刻。

夜明けはまだ遠く、あたりはまだ静けさと闇に支配されていた。

不意にトントンと肩を軽く叩かれて、ハッと我に返るようにサウラスは顔を上げた。

自分がいつの間にか眠ってしまったことに気づき、肩を叩いた相手を見上げる。

そこには神妙な面持ちをしたヤークンがいて、囁く声で「ちょっといいだろうか？」とサウラスに表で話そうとでも言うようにクイクイと親指で示された。

サウラスはその表情に不安を覚えながら、そっと握りしめていたアスナムの手を布団の上に置くと、ヤークンに続くようにして部屋を後にした。

静かに。

音を立てないようにゆっくりと扉を閉める。

アスナムはその後ヤークンが煎じてくれた薬湯を飲んで、今は安らかな寝息を立てていた。

熱も落ちつき、脂汗も引いた。



早くなっていた呼吸も正常に戻っている。

安心して疲れが出たのだと……アスナムは深く眠る前にそうほほ笑んでいた。

「どうかしたのか、ヤークン？」

尋ねるサウラスに、しかしヤークンはすぐには答えなかった。

躊躇いの間が生まれ、沈黙が流れる。

サウラスはもう一度「ヤークン？」と尋ねた。

ヤークンはふうっと大きく息を吐くとサウラスをじっと見つめた。

「アスナム抜きで姫の救出に向かいたい」

そう切り出したヤークンの顔は今までになく苦渋に満ちていた。

サウラスにはどうにも訳が分からなかった。

確かにアスナムの体調を考えれば彼女抜きで帝都に潜入したほうがいい。

今の状態の彼女を連れてはリーザの救出には足手まといになりかねない。

そう判断されても致し方ないことは理解できる。

「しかし、彼女抜きでは目的は達成できない」

そうなのだ。

彼女と力を合わせることで生まれる力でなければリーザは救えない。

いや、確かに自分の天眼の力ならばリーザを救うことは可能だ。

しかし、自分たちがなそうとしている策は彼女あってこそその策だ。

自分がリーザのために力を使えば、バルドスに対抗できる力を割くことになる。

出来なくはない。

けれどリスクは伴う。

「彼女のことを想うのであれば、彼女の身をマリエステに保護してもらった方がいい」

ヤークンはそう含んだ言い方をした。

彼女のことを想うのであれば？

ヤークンの言うところが掴めず、サウラスは首を傾げた。

そんなサウラスにヤークンはためらいがちに、しかし覚悟をしたようににはっきりと告げた。

「彼女はおそらく妊娠している」

そうはつきりと　　！！

「なん……だって……！？」

あまりの衝撃にサウラスはすぐに言葉を見つけれなかった。

出てきた言葉がその一言だった。

アスナムが『妊娠』している。

誰の子かは聞かなくても分かる。

まざまざと脳裏にあの狭間の世界で見たものが蘇る。

歯を食いしばり、涙をこらえた彼女の顔が鮮明すぎるほどにサウラスの脳裏に蘇って、あまりのことに拳に震えが走った。

「確かなのか……？」

やっと紡いだ言葉にヤークンが首を振ることはなく、淡々と。

「間違いないだろう」

そう答えが返ってきた。

苦渋に満ちた顔。

眉間による皺の深さがその真実の重みをサウラスに伝えていた。

バルドスⅡグレイザーの子供をその身に宿したアスナム。

敵国の次代の王をその身に宿したアスナム。

魔女アースとしてその身を帝国に置いていた時間は短くとも、彼女がバルドスの妻である事実は今も変わらない。

ガタンッ……！！

整理がつかずにいるその時に、背後から大きく物が倒れる音が響いた。

その音にサウラスとヤークンはハッと顔を合わせた。

急いで扉を開ければ、そこには真っ青な顔をしたアスナムが立っており、震える手で口元を覆っていた。

「アスナム……」

掛ける言葉が見つからず、彼女を抱きしめようと近づくと近づくとサウラスにしかしアスナムは「近づかないで!!」と叫んだ。

「アスナム!!」

次に叫んだときには彼女は懐から銀色に輝く短剣を取り出し「近寄らないで」と自らの腹に突きたてるような格好をとった。

「早まるんじゃない、アスナム!!」

ヤークンがサウラス同様、アスナムを落ちつかせようと声をかけた。

しかしアスナムは涙で顔を濡らし、悲痛な叫びを上げるだけだった。

そんなアスナムの手からナイフだけでも取り上げようと彼女に飛びかかるうとしたヤークンを、しかしサウラスは右手を上げて制止した。

「サウラス!!」

声を荒げサウラスの名を呼ぶヤークンに、サウラスはフツとほほ笑んで見せた。

その顔に迷いはなく、どこか晴れ晴れとしていることにヤークンは度肝を抜かれたような気がしていた。

サウラスはアスナムが取り乱したことで、冷静さを取り戻していた。

ヤークンの口から出た真実は重く、それは胸を掻きむしるほどの痛みと苦痛をもたらすに値するものだった。

けれど、それすらもつごうでもいいことのような気持ちにサウラスはなっていた。

彼女を求めていた時間は長かった。

彼女を失っていた時間は長かった。

やっと彼女と一緒にいられる。

再び彼女を取り戻すことが出来た。

どんなことになるうとも。  
どんな状況になるうとも。

彼女を失うことも傷つけることもしたくない。

それを為すために時間を費やし、自身を鍛えてきた。

「やめるんだ、アスナム」

一歩近づくと彼女は一歩後退した。

「来ないで、サウラス!!」

私のお腹には悪魔の子供が宿っているんだから!!」

その悲痛な叫びこそが痛みだった。

こんなことを言わせたくない。

こんなことで彼女を泣かせたくない。

「違うよ、アスナム。

その子は『悪魔の子』なんかじゃない」

サウラスはほほ笑んで見せた。

確かにお腹の中の子供はバルドスの子だ。

憎い。

本当に心底憎らしい男の子供だというのが本音だ。

もしもこの場にバルドスがいたら、すぐにでもその命を刈り取ってしまいたいと思えるほどに憎い相手の子供であることは間違いがない。

けれど……

「その子に罪はない。

親に罪はあれど……キミのお腹に宿るのは罪なき命。

無垢な魂だ」

心の底からそう思う。

そして愛する人の血が通う愛すべき命であることもまた事実。

「オレは守ると誓ったんだ、6年前に。

なにかあっても。

どんなことがあっても。



キミを守ると誓ったんだ。

だから……キミの分身であるその命もオレは愛するし、愛しいと思えるよ」

早まるなど。

その言葉は付け加えなかった。

アスナムの視線と己の視線が混じり合う。

彼女は困惑していた。

当然だ。

事実を受け入れ、それを整理することなど当人であれば尚更出来るものではない。

しかも望んで宿した命ではない。

「エシエンタールの意思だよ、アスナム」

課された試練はこれほどに残酷で重いものであるけれど。

しかしそこには間違いなく、エシエンタールの意思があると。

そつでなければ、これほどに互いが苦しむことなどあるわけがないのだ。

「キミとオレなら。」

二人ならば乗り越えられる。

そつだろつ?」

ゆつくりと……彼女の前に手を差しだした。

彼女の手からナイフが離れ、鈍い音を立てて床に落ちる。

「サウラス……私……」

その場に崩れ落ちそつになる彼女の身体をハシツと抱きしめる。

彼女は声押し殺すことなくサウラスに縋るように泣きついた。

その背を撫で、サウラスは彼女を落ちつかせるように愛おしく抱きしめた。

「大丈夫……オレと一緒に背負うから」

無慈悲な運命。

そう思えなくもない。

残酷な試練。

そうであるとも言える。

けれど、乗り越えようとサウラスは決意した。

そうでなければおそらく、新しい未来を切り開けないと彼は確かに感じていた。

それから二刻の後、サウラスにその身を預けるようにアスナムは村を後にした。

揺るがない決意をその胸に刻んで、二人は確かに手を取り合いリ―ザ救出に向かうのだった。

## 憂う瞳

電光虫 シャンタナに生息するその虫は、死体から発せられる死臭に群がることから《死人堂しびとほたる》と呼ばれていた。

尾から放たれる強烈な光は戦場における貴重な光源として、自然の力を忌み嫌うデルブルール帝国では唯一使われている自然界のものだった。

その電光虫が数多く飛来する小さな骨董部屋で、男は一人静かに目の前の大きな肖像画に向き合っていた。

床から天井まで五メートルほどの高さの肖像画には濃紺の髪色のほっそりとした女性が描かれていた。

その姿は今すぐに動き出してもおかしくないほど、鮮明に描かれていた。

彼女は穏やかで慈愛に満ちたほほ笑みを浮かべながら、ただ真っ直ぐに前を見つめ続けている。

「母上……」

そつと女性に触れる。

これは肖像画であるのだから、当然答えてはくれない。

何年この絵を見上げ続けてきたのだろう。

同じ城の中でありながら接触を許されなかった母にどれほど焦がれたのか分からない。

目の前の女性がどのような人となりであったかは母を失った今となつては想像するしかなく、母が亡くなることになった事件のことを思い出すだけで怒りがこみ上げた。

あのととき、父ではなく自分が帝位についていたら間違いなく母を救えていただろう……と今でも思う。

母が父の帝位転覆を目論む貴族諸侯に人質として捕らわれる事件が起きたのは、リーザが生まれて間もなくの頃だった。

平和主義などという偽善的思想を振りかざした父は穏便な解決を優先させた。

自分がどれほど武力行使に出るべきだと助言しても、父は耳を傾けることなどなかった。

結果的に強硬派は話し合いに応じることはなく、母は斬首されることになった。

母の亡骸は見るも無惨で、切り落とされた首は戦利品のように酒瓶の中に漬け込まれていた。

母の首の浸かった酒瓶を取り囲み、祝宴を催すような蛮族どもを父は極刑に処すことはなく、流刑した。

憎しみの連鎖を絶つには時に苦渋を呑まねばならない　そんな聖書に書いてある模範解答までして見せた父に殺意を抱いたのは確かこのときだった。

力には力で対抗するしかない。

異を唱える者は二度と唱えられないように舌をちぎり、反発する者は一人残らず斬り捨てる。

自分へのみ付き従う者を引き連れ、より強い国家を形成する。

今でもその信念に揺らぎはないし、自分のやってきたことに後悔もしていない。

だが、なぜか今日に限って虚しさが胸をついていた。

明日ですべてケリがつくというのに、何をためらう？

異なる者を排除すれば争いはなくなる。

強い者による力の統率こそが悲劇を失くす最善の近道なのだ。

間違っではないない。

間違っではないない。

コツン……床を蹴る音が夢現の世界から引き戻す。

歩き方一つで相手が分かるほどに研ぎ澄まされた聴覚で相手を捕らえる。

場違いな男の登場に自然、顔が固くなる。

「こんなところで何をしていたらっしやるんでしょう、陛下……？」

「シルスカ……立ち入る許可を出した覚えはないが？」

「いえね、マリエステの蛮族が潜伏しているのかと思って覗いてみたら陛下でしたので……それにしても陛下にもこんな人間らしい一面がおりだったとは……正直、驚きましたよ」

黒の学者服に身を包んだ白髪青年が喉をおかしそうにクックツツと鳴らした。

バルドスはシルスの言葉に動揺一つ見せることなく「何の用だ」と返した。

「将軍が暗殺部隊の罠を掻い潜って、こっちに向かってきているようですよ」

『暗殺部隊も役に立たない』と付け加えながら、シルスは探るような口調で近づいてくるとバルドスの隣に並び立った。

「やはりな。それぐらいではヤツの足止めにもならなかったか……」

「想定の内ですか。では、もう一つ、將軍のお供の男女についてはどうですか？」

「供の男女だと？」

「ええ、確かに見たと報告がありましたね。一人は白銀の髪をしたマリエステの男、もう一人は藤色の長い髪をした女だとか……」

「アース！」

思いがけない話にバルドスは一瞬声を荒げた。

リーザの先導で逃げ出したアースがインバイルとともにいることは予想していた。

マリエステの庇護を受けることも分かっていた。

だが、自らこの国に戻ってくるとは思ってもいなかった。

いや、もしも一緒にいるのがあの天眼の男だとしたら……？

胸が早鐘を打ち、頭に血が上り始める。

「なぜ……生きている？」



天眼の男は死んだはずだ。

弾は確実に急所を捉えていたはずだ。

出血の具合からも、あのときの川の状態からも生きていられる可能性のほうが低かったはずだ。

「最後にあの男と一緒にだったのは誰だったんです？」

知っているはずなのに、シルスはわざと含んだ言い方をしたようだった。

川に流したと言ったのはレーヴンだ。

片腕であるあの男が自分を裏切るようなことをするだろうか？

リーザを一途に想うあの男に祖国を貶め、妹を危機にさらすような真似ができるだろうか？

「誰も信じることなけれ、信ずるは己のみなり。陛下の信条ではないかもしれませんが？」

耳元で囁くシルスの言葉に自然に顔が強張った。

そのとき、大きな音を上げて扉が開かれた。

小走りにやってきたのはレーヴンで、振り返り凝視するバルドスの隣に佇むシルスを見つめると、キツと目つきがきつくなった。

「なぜここにおまえがいるのだ、シルス……」

「陛下と明日のことでお話をしただけだよ。それより、何か急ぎの用があるんでしょう？」

シルスの挑発的な物言いにレーヴンは憚然とした表情をしてみせたが、すぐにバルドスに向き直ると深く腰を屈め「申し訳ありません」と詫びの言葉を口にした。

分をわきまえた礼節を重んじる男、そして誰よりも忠実な臣下であるはずの彼の顔も所詮は偽りに過ぎないだけなのか

「申し上げます、陛下。アインバイルの消息ですが……」

「シルスから聞いた。足止めに失敗したようだな」

レーヴンはチラッとシルスを見る。

シルスは何食わぬ顔で窓の外を見ていた。

「では、いかがいたしますか？ 帝都に侵入される前にケリをつけますか？」

居所は掴んでいると付け加えながらレーヴンは厳しい目を向けていた。

「いや、入れてやれ。そのほうが一気に叩けて都合がいい」

アインバイルを慕う残党どもも一気に叩き潰せる機会はこのときにおいて他はない。

そして、この男の真意を問うのにもいい機会かもしれない。

隣に立つシルスを一瞥する。

この男の口車に乗るのは口惜しいが、致し方ない。

すべてはシャンタナの未来のためなのだ。

「おまえはアインバイルとの決着をつけよ。だが、保険は掛けさせて貰う。おまえの腕を信じていないわけではないが、相手はあの男だ。用心に越したことはない」

「陛下、私は絶対に負けません！ 国を、陛下を欺いた卑怯者になどに負けはいたしません！ ですからリーザ様は……」

必死で食い下がるレーヴンにしかしバルドスは冷たく言い放った。

「そこまでの自信があるのなら、なおさら構わぬではないか？ おまえが勝てばリーザは死ななくてすむのだ。何を怖がる必要がある？」

「陛下……私は……」

「明朝、リーザを城砦地下牢に拘束！ 看守にはおまえの死亡確認とともに水門を開くように命じよ！」

「……御意……」

苦しげに顔を歪ませながらレーヴンは立ち上がると部屋を出て行った。

「さすが、陛下。正しい御決断です……」

ゆっくりとお辞儀をして部屋を出て行くシルスの嬉々とした軽い足取りに、バルドスは胸焼けを覚える。

(どれもこれも信じられぬとは……)

窓の外に目を向ける。

星のない夜空に一人ぼつんと浮かび上がる月が、自分のことを棚にあげながらこちらを見て嘲笑っているようだった。

その姿に自分の今の姿が折り重なって見え、失笑する。

目の前を飛来する電光虫を掴み、握りつぶす。

ジジジ……と死に際の短い喘ぎ声のような羽音を立てて死に行く虫の姿を見つめる。

薄い羽が無惨に捻じ曲がっている。

その姿に一人の女の姿が重なった。

彼女の自由の羽をもぎ、逃げられないようにしたはずなのに、彼女は自分の元から去ってしまった。

ただ、傍にいてくれればよかった。

笑わなくとも、自分を愛さなくとも傍にいてさえくれればそれでよかったのに……

（なぜ余ではないのだ！）

ジリジリと妬き付く胸の炎を押し殺すように、固く瞳を閉じた。

ただ一人、この胸の渴きを癒してくれる女の名を呟いた。

「アース」とただ一言だけ

## 破滅への道

コツコツと暗闇に二人分の靴音だけが響いていた。

その中をレーヴンは一人の女の背を見つめながら歩いていた。

前に行くのは愛しい女。<sup>ひと</sup>

凜々しく、背筋を伸ばし、堂々と。

まっすぐに前を向き、俯きはしない。

ため息も憂いもそこにはない。

ただ、自分の信念を貫き、そして信じている。

その相手が自分ではなく、他の誰かであることを痛いほどに感じながら、それでもレーヴンはその女の背から目を背けることはしなかった。

(これが最期かもしれない)

その覚悟は遙か昔からできていたはずなのに、いざその時を迎えると心が震えた。

本当は傍にいて、ずっとずっと大切にしていた。

笑い、泣き、喜び、悲しみ、全てを分かち合い、共に生きて行きたかった。

けれど、彼女は選んでしまった。

自分ではない、他の誰かを

他の誰かといるときに見せる幸せそうなあの顔を、レーヴンは一度として忘れたことがない。

胸の奥で燃え盛る嫉妬の炎に身を焼いて、焦げ付かんばかりになっていた自分に声を掛けたのは尊敬していたあの男だった。

『未来のために許せ 』

恨むなら自分を恨めとあの男は言った。

未来とはなんだと、聞かなくても分かったから聞けなかった。

二つの未来。

彼女の未来と、この世界の未来。

その両方のために心を犠牲にしてくれと言われた。



隣に並ぶことを諦め、彼女の後ろを守ろうと誓ったのに、今、自分は何をしているのだろうかと思う。

水門の貯水湖はもうすぐそこで、その入り口を守るように立つ鉄仮面の兵士達が一斉にこちらに敬礼した。

「では、リーザ様の身は私共が責任を持ってお預かりいたします！」

そう言うと、リーザは鉄仮面の兵士二人に両脇を抱えられる。

奥へと連行されていくリーザの背を見つめながら「すまないが……」と兵士たちを呼びとめた。

「すこし、リーザ様と話がしたい。二人にしてもらえないか？」

その言葉にリーザはゆっくりと振り返った。

兵士たちは沈黙したまま小さく敬礼し、闇の中へと散って行く。

それを見届けると、レーヴンはリーザを見つめた。

「少し……昔話してもよろしいでしょうか？」

そう言うレーヴンにリーザは悲しげな瞳を向け、小さく頷いた。

「幼い頃、私はひどく身体が弱く、剣をまともに振るうことが出来ず、よくもそれで陛下の付き人が務まるものだ、成り上がりの俄か貴族の出でありながら、陛下と年が近いからと言うだけでその地位を手に入れただけの小僧だと、いろいろ虐めや中傷をされてきました」

ハイヤット家の嫡子として、城塞へ来たときのことを思い出しながらレーヴンはそう語っていた。

抜きんできた才能を開花させる陛下の傍で、いつも对象的に何もできなかった幼い自分。

遠い昔、遠い記憶。

「ハイヤット家を疎ましく思う近衛兵にある時、『女みたいだから本当に男かどうか確認してやる』と着衣を無理やり剥がされ、裸で城塞裏庭に放り出されたことがありました。

凍えるほどの寒い日で、雪が降っておりました。

滅多に人など来ることのない裏庭で、私は裸のまま打ち震え、意識を手離しそうになるまで追い詰められていたそのときに……あなたに命を救って頂きました」

リーザの瞳が揺れるように動く。

レーヴンはフツとほほ笑み、「感謝しております」と頭を下げた。

「今でもあの時の貴女の姿、言葉を覚えております。『泣かないでと、『負けないで』と、何度も何度も小さな手で私の手をさすり、ご自分の身も顧みずに、私のようなものにコートを掛けてくださった。」

ポケットの中にあつた笛を喉から血が出るまで吹いて助けを呼んでくださった日のことを……私は一度として忘れたことなどありません」

リーザはその言葉を聞くと目を伏せた。

それから「私も忘れておりません」と答えた。

「あの日、私は誓いました。どんなことがあるうと、必ず貴女をお守りすると　どんな危険からも絶対に貴女をお守りすると。」

たとえば、自分の命を捨てることになろうとも構わないと。

あの時、貴女がいなければ、私は今ここにはいない存在なのですか  
ら」

そっとリーザの傍に近寄って、その足元に膝を立てた。

「もしも私がもう一度、貴女の元へ戻って来られたら……」

施錠された彼女の両手をやんわりと握り、そこに頬を寄せた。

温かく滑らかなリーザの手は、昔と何一つ変わらない。

けれど、その大きさは以前とはまるで違う。

子供の手ではない、女性の手。

その手に……やっと触れられたと感じた時、ギュッと胸が押しつぶされるほど痛くなった。

「私の愛を……どうか受け止めてください」

叶わない、儂い希望を口に乗せる。

生きて戻ってこられないかもしれない。

生きて戻ってきたとしても、彼女はやはり拒絶するのだと分かっている。

けれど、その言葉を言っておかなければそれ以上進めなかった。

「レーヴン……私は……」

戸惑う声が聞こえ、レーヴンは顔を上げた。

物憂げな瞳に涙が滲んで見える。

不安で打ち震える瞳に、レーヴンはフツとほほ笑んで見せた。

「大丈夫です。貴女の命はどんなことをしても、私がお守りしますから」

昔と変わらない笑顔を乗せる。

彼女の瞳が驚いたように見開くと、スクツと立ちあがった。

「リーザ様をお連れしろ!! くれぐれも丁重に!!」

散っていた近衛兵が戻ってくるのを確認し、クルリとレーヴンは背を向けた。

「待って!! レーヴン!! 戻ってきなさい!! 必ず!! 必

ず！！」

これでいい。

その言葉が聞けただけでいい。

振り返りはしなかった。

泣いている彼女の顔を最期にはしたくないから、絶対に振り返らなかつた。

破滅への道が伸びている。

先へ進んでもきつと自分に開かれている未来はない。

分かっていて進む道。

けれど、自分にはこういう生き方しかできない。

それを誰に許してもらうつもりもない。

リーザー人を守るために、陛下に従い、多くの命を刈り取ってきた。

今更、その罪から目を背けることなどできない。

ゆっくりと階段を上る。

地下から外へ出れば沈んでいた夜は明け、ゆっくりと日が昇り始め

ていた。

遠くからファンファーレの音が聞こえる。

(急がねば!!)

強く拳を握りしめ、レーヴンは走り出した。

その顔に冷めた仮面を被り、想いを振り切るようにひたすらに走っていた。

## 処刑という名の罠

日が昇る少し前に、一行は帝都に潜り込むことに成功していた。

帝都の警備は驚くほど薄く、静まり返り、うつすらと霧さえも立ち込めている。

城塞を臨む帝都の大広場には処刑台が用意されていた。

十字の磔が二本、土を高く盛った山に突き刺さり、それに向って銃を携えた鉄仮面の兵士たちがリハーサルをするように照準を合わせ、銃声を轟かせていた。

その音を聞きつけてちらほらと市民や下級の兵士らしい人々が集まり始めた。

その波に同じように身を滑り込ませた。

自分たちと同じようなフードを被った人々が多くいる。

きつとそれがヤークンの同志たちに違いない。

アスナムはサウラスから離れないように歩きながら前を向いた。

太陽の光がゆっくりと十字の磔を照らし始める。

数人の鉄兜の兵士たちが片手にトランペットを持って磔の横に立ち並ぶ。



一指一足の乱れもない。

鍛え上げられた動きに緊張が高まった。

ファンファーレが朝靄を断ち切るように高らかに奏でられる。

城塞上方のテラスに血の色のような真紅の衣装に身を包んだバルドスが姿を見せると、空気はより一層冷たさを増した。

「これより謀反を企てた者と、それを手引きした者の処刑を執行行なう！」

鉄仮面の兵士の一人が声高く叫んだ。

城塞の奥の鉄格子がゆっくりと持ち上がると、中から鉄仮面の兵士に引きずられるように二人の男女が姿を見せた。

一人は黒装束を身に纏い、黒のベールを被った細身の女性らしかった。

彼女は抵抗する力もないのか、ぐったりと力なく兵士に抱えられていた。

もう一人、男の顔にアスナムは胸が大きく波打った。

思わず声が漏れそうになるのを、サウラスの大きな手によって阻まれる。

見上げたサウラスの顔は悲痛そのものであったが、彼は小さく首を振って「我慢して」と囁いた。

薄汚れ、乱れた黄金色の髪。美しい顔はぼんやりと虚ろだった。

だが、その姿は間違いなく、レーテルその人だった。

磔の前まで連れてきた兵士たちの手によって、二人は十字架に括り付けられた。

朝日が二人を照らす。

だが、そこにアスナムは違和感を覚えた。

「あれは……リーザ様じゃない!」

アスナムの呟きにサウラスとヤークンが振り向いた。

「よく似ているみたいだけど、リーザ様じゃない。だって……『バ  
イシャの首飾り』がないもの!」

「それはバルドスがはずしたんじゃないのか?」

サウラスの答えにアスナムは小さく首を振った。

それも考えられないことではない。

でも、そんなことをする男ではないことをアスナムはよく知っていた。

「あの男なら、たとえ妹でも自分を裏切った人間を簡単に殺すようなことはしない。

自分が受けた屈辱を、死の瞬間までじっくりと痛みとして相手に思い知らせる方法を取るはず……銃で、しかも人の手で殺すなんて有り得ない！」

アスナムの言葉に、静かにヤークンも頷いた。

「その考えは正しいだろうな。それにあの男なら姫の心を殺すほうを選ぶだろう。」

肉の痛みより、精神の痛みは遥かに辛い……オレたちもまんまと奴の術中にはまってしまったようだな」

ヤークンの話が終わるか否か、背後から殺気のようなものを感じた。

「サウラス、アスナムを！」

アスナムはサウラスに抱えられるようにその場にしゃがみこんだ。

ヤークンが腰の剣を抜き、振り返る。

金属の擦れる音が静寂の中を駆け巡る。

だが、それが合図のようにあたりが騒がしくなった。

「將軍たちを守れ!」「リーザ様を救え!」という掛け声とともに、斬り合いが始まる。

民衆に扮していたバルドスの配下に、仲間らしき手足れの戦士達が斬りかかっていた。

「走れ、サウラス!」

ヤークンの言葉にサウラスは剣を抜き、アスナムの手を取った。

斬りかかって来るデルブールの兵士たちの攻撃をかわし、レーテルの礫台を真っ直ぐ目指す。

混乱の最中であるにもかかわらず、礫を取り囲む鉄仮面の兵士たちの様子は変わらない。

再びファンファーレが鳴り響く。

「撃ち方、構え！」

銃を携えた鉄仮面の兵士が身代わりの女に照準を合わせるように構えの姿勢を取る。

「させるか！」

サウラスがアスナムの手を離し、銃を構えた兵士たちに飛び掛る。

「なんだ、貴様はあ！ ええい、撃てえい！」

銃口がサウラスに向けられ、引き金が引かれる。

一瞬早く、サウラスの鮮やかな回し蹴りが決まり、体勢を崩した兵士たちは身動きの取れない駒のようにバタバタと仰向けに倒れこんでいった。

「命が惜しければ、退け！ 退かねば斬る！」

指揮官らしい鉄仮面の兵士の喉元に剣先を突きつける。

兵士はその場を這うように逃げていった。

「アスナム……？ それにエウルなのか？ どうしてここに……！」

「ヤークンも一緒です。助けに来ました！ もう心配ありません」

磔になっているレーテルに近づき、手首と足首の鉄輪を壊せるものを探す。

鍵の代わりになりそうな鉄くずを見つけ、先端を鍵穴に挿すがうまく外れてくれない。

「磔の後ろに隠れる、アスナム！」

サウラスの言葉にアスナムは素直に従った。

銃声が轟く。

鉄輪が外れ、レーテルの身体が土の山に落ちる。

立ち上がり歩き出そうとするレーテルに駆け寄ると、何か薬を盛られているらしく、レーテルの足は頼りなかった。

足がもつれ、その場に崩れてしまったレーテルにサウラスとともに肩を貸した。

「私は大丈夫。バルドスは……バルドスはどこに行った！」

テラスの方に視線を向けると、バルドスがゆっくりと城塞の中へと身を翻すその後姿が目に入った。

「追わねば……バルドスを……！」

「その身体では無理だ、兄上。ここは一度マリエステに戻って、体を整えてから……！」

「それでは遅いのだ！ 行かねばローゼンブルームが……マリエステが壊滅する！ バルドスがジリオンを動かす前に……！」

アスナムの脳裏に里を焼いた忌まわしい砲撃の映像がまざまざと浮かび上がった。

すべてを飲み込み、焼き尽くす地獄の業火。

あんなものをまた使おうと言うのか？

「止めなくちゃ……！ あんなもの、使わせてはダメ！」

アスナムの言葉にサウラスも強く頷いた。

それからレーテルを城塞脇の窪地に連れて行くとそっと座らせた。

「オレたちは先に行く。いいよな、兄上？」

「ああ……私もすぐにおまえたちを追いかけろ。気をつける！ 奴はきつとこの先にも何か罠を張っているはずだ」

「分かっている」

「すまないな……頼りにならない兄で……」

そんなレーテルとサウラスはがっちり固い握手を交わした。

するとレーテルはゆっくりと目をつむった。

アスナムがサウラスを見つめると彼は「気を失っているだけだ」と小さくほほ笑み、立ち上がった。

サウラスの手がアスナムの前に差し出される。

その手を取ろうとしたときだった。

立ち上がるうとするアスナムの背後に赤い影が忍び寄る。

振り返った瞬間、その影がサウラスに向って素早く動いた。

一瞬、サウラスの身体が浮き上がる。



アスナムは両手で口を覆った。

声にならない叫び声が喉の奥を突く。

次の刹那、サウラスの脇から真っ赤な血が溢れ出し、アスナムの目の前で彼は地面に膝をついた。

傍らに立っていたのは真紅の長衣に身を包んだバルドスだった。

手には真っ赤な血を滴らせた黄金の剣が握られていた。

「生きながらえられたのに、わざわざ死に急ぐとは。憐れよな、天眼を持つ者よ」

「バルドス……グレイザー……貴様……」

バルドスは冷ややかにサウラスを見据えた後、不敵な笑みをアスナムに向けた。

「アース、迎えに来た。さあ、行くぞ」

サウラスに駆け寄ろうとしたが、バルドスの剣に阻まれる。

サウラスは荒い息の下、ダメだと言うように首を振った。

アスナムはゆっくりと上衣の下に隠し持っていた短剣を抜き取った。銀色の短剣は婚礼の日の夜にバルドスから受け取ったもの、そして自らに突き立てようとしたものだった。

再びバルドスに返す時が来た。

あの時は怖くてできなかった。

(でも、今度こそやってみせる！)

胸元で短剣を構える。

バルドスはフウ……と深呼吸してアスナムを見据えた。

「余を殺すか、その短剣で？　これは面白い」

「あなたが望んだことよ！　それにマリエステは壊させないわ！」

「そんなに大切なものか？　己の命を懸けるほど？」

刺したければ刺せ。余は構わぬ。

だが、その前に多くの輩が死ぬぞ？　その男も、そこにいる男も皆例外なく　それでもいいか？」

「……どういう……意味？」

バルドスは怪訝な視線を送るアスナムに腕を差し出した。

捲り上げた袖の下から出てきたものにアスナムは目を覆いたくなくなった。

そこにあるはずの腕輪が今はなかった。

あつたのは赤い瞳だけ　腕にめり込み、根を這わせた得体の知れないものがアスナムを見つめている。

「クシャトラの腕輪が……こんな……」

バルドスは静かに腕を袖の中に戻した。

足がガクガクと力なく震え、握った短剣を落としそうになる。

「どうしてこうなったか教えてやろう。それはシャントブリでおまえが気を失った後のことだ。」

おまえが解き放った亡者どもはおまえが気を失い、瞳を閉じたことで帰る場所を失った。奴らは命を吸っていたとはいえ、その男の放った天眼の力で弱りきっていた。

だから余が手を差し伸べてやったのだ。新しい宿り場を……」

「はじめからそれが狙いで私に力を使わせたのね！」

しかしバルドスは「喜ぶべきアクシデントだった」と言った。

「だが、まだ足りない。絶望にすすり泣く声が……余がエシエンタールに替わる神になるにはまだまだ力が足りないのだ」

「神になる？ あなたが？ そのためにまた私の力を利用するつもりなの！ そんな協力、絶対にしないわ！」

「ならば力づくで、連れて行くまでだ」

バルドスが近づいてくる。

「やめる、アスナム！」というサウラスの声が聞こえたが、やめなかった。

今、自由に動けるのは自分だけだ。

サウラスを助けられるのは自分だけなのだ。

この場をなんとかしても切り抜けなければ……！

グッと短剣を持つ手に力を込める。

今は一人ではない。

ちらりとお腹を見つめた後、ギツとバルドスを握りしめた。

守りたいものは一つではない。

守らなければならぬのは一人ではない。

サウラスが勇気をくれた。

サウラスが全てを受けいれてくれた。

だから自分がやるのだ。

サウラスと……お腹に宿る命を守るために……！！

アスナムはギョツと短剣の柄を握り締めるとバルドスに走り寄った。

肉にめり込む不快な感覚が手を伝わる。

急いで短剣を抜き去ろうとしたが、抜けず逆にバランスを崩し、その場に尻餅をついてしまった。

見上げたバルドスの腹から何かが伸びている。

ぬめりとした体液を飛び散らせながら、赤黒い体を四方にくねらせ蠢いている触手がアスナムの剣にしっかりと巻きついていった。

剣が見る見るうちに形を失い、白い煙と化していく。

溶かし終わるとそれらはまたバルドスの腹の中に戻っていった。

そして開いていたはずの傷は、あっという間に消えてなくなった。

「ウン……」

「便利な身体だろう？ 世を統べる神に相応しいとは思わぬか？」

「神なんかじゃない……！ 魔物よ！ 魔王だわ！」

「フフフ……魔王か。それも悪くないな」

そのとき「アスナム！ 伏せる！」というヤークンの声が聞こえた。頭を抱え込むようにその場に伏せる。

キイイインツツツ！

金属のぶつかり合う高音が響き渡り、アスナムは顔を上げた。

「おまえの相手は私です！ ヤークン＝アインバイル！」

「退け、レーヴン！ おまえの相手などしている暇はない！」

バルドスの前に立ちふさがったのは他でもないレーヴンだった。

二人の斬り合いが始まると、バルドスは剣を腰の鞘に納めた。

「おまえの好きになんかさせるか！」

サウラスが渾身の力を振り絞り、バルドスに斬りかかった。

だが、その身体はバルドスから解き放たれた触手に貫かれた。

「サウラスッ　！」

「う……うっ……！」

サウラスの身体が力なく、地面の上に叩き落ちる。

その脇をバルドスは涼しい顔で通り過ぎるとアスナムに近寄り、手を差し伸べた。

「立て、アース。もうここに用はない」

だが、アスナムは大きく首を振った。

サウラスたちをこのままにはしておけない。

やっと、やっと一緒になれたのに、また離れ離れになるなど考えら

れなかった。

「あの男は死ぬ。諦めろ」

サウラスを見る。

荒い息をしていた。

だが苦しい息の中でも「ダメだ」と告げた。

ヤークンはレーヴンと剣を交えている。

「相変わらず、強情だ」

耳元で囁くバルドスの声が聞こえた途端、みぞおちに鈍い痛みが走る。

グラグラと世界が揺れ、意識が遠のいていく。

「アスナム！」

サウラスの声が聞こえたよつな気がする。



(サウラス……サウラス……!!)

「魔王の手に再び美しい魔女が戻ったぞ……どうする、エシエントール？」

バルドスの不敵な笑い声が遠く、遠くに聞こえたまま、何も見えなくなつた。

## 震える拳

不甲斐ない。

情けない。

それに尽きた。

バルドスに簡単にやられた己の弱さに、愛しい女を守るどころか守られ、目の前でいとも簡単に連れ去られたそのことに、憤りだけがサウラスの心の中に渦巻いていた。

生身に受けた傷よりも、精神に受けた傷のほうがよほど深かった。

何をしていたのだろうか、何をしてきたのだろうか。

六年間を費やしたのに、何一つ変わっていない現状に拳が震えて仕方なかった。

「う……く……」

滴る血が足元を濡らしていた。

痛みと出血で意識が飛びそうになるのを必死で耐えながら、それでも立ちあがる。

行かねばならない。

彼女を取り戻しに、バルドスを追わねばならない。

それに、ここでこうしては祖国も守れない。

「サウラス!!」

呼び声にサウラスはハッと息を飲んで振り返る。

駆け寄ってくる相手に一瞬気を抜いてしまったために、身体のバランスが崩れ、その場に倒れかける。

地面に崩れるよりも一瞬前に、駆け寄ってきた見知った顔の腕がサウラスの身体を支えた。

「しっかりしろ、サウラス!!」

「兄……上……」

「今、楽にしてやる」

そう言うとレーテルはサウラスをその場に座らせ、両の手で複雑な印を素早くいくつか結んだ。

結び終わった瞬間、ぼんやりと白色の光が指先に宿る。

レーテルはその光る指先でサウラスの脇をなぞった。

触れた先から徐々に出血が止まり、肉が噴き始める。

サウラスの顔は青白く汗がにじんでいたが、幾分か楽になったように顔に赤みが差し始めた。

「完全とはいかないが、これでしばらくは持つだろう。だが、あくまでも応急処置だ。無理をすればすぐに開くぞ」

「身体が動けばそれでいい」

立膝をつき見つめるくレーテルに、サウラスはこくりと小さく頷き立ちあがった。

「兄上。飛竜部隊を呼んでもらえないか？」

サウラスの問いにレーテルは答えず「行くのか？」と問うた。

サウラスは黙ったまま頷いた。

それしかないとをレーテルもそして自分自身もよく分かっていた。

「バルドスは想像以上に強大だぞ、サウラス」

レーテルの言うとおり、バルドスと対等で戦える自信はない。

けれど、それでもやらねばならないのだと。

今がそのときであるのだと覚悟した。

「これを最後にしたいんだ」

アスナムの悲しむ顔を見るのはこれを最後にしたかった。

誰かが傷つき倒れる様を見るのはこれを最後にしたかった。

だから行くのだ、たとえ自分の命を落とすような結果になろうとも

サウラスの決意をその背に感じ、レーテルは懐から小さな金色の笛を取り出した。

同じようにサウラスも懐から白銀色の笛を取り出す。

レーテルの笛は王国の飛竜を呼ぶもの。

そして、サウラスの笛は……白銀の翼と湛えられる『飛竜ラウルト』を呼ぶもの。

二人は同時に笛を吹いた。

人の耳では感知できない高い音が、風に乗っていく。

飛竜の能力ならば、国一つ超えても数十秒でその音は彼らの耳に届く。

レーテルが最後の手段としてシャントブリ湿原近郊に配備していた飛竜部隊が到着するのに、それほど時間はかからなかった。

大きな影が真つすぐに空を駆けてくる。

「行ってくるよ、兄上」

「ああ。頼む」

サウラスは空に手を伸ばした。

「ラウルート……」

『必ず戻れ』というレーテルの声がサウラスの耳に届くか届かないかのうちに、彼は白銀色の美しい飛竜の翼に抱かれるように空へと昇って行った。

彼に続くように蒼白色の飛竜に乗った兵士たちが空を駆けて行く。

それを見届けると、レーテルは立ちあがり強く前を見据えた。

己の目的を果たすために、ひたすらに真っすぐ走るのだった。

## 穏やかな微笑み

次から次に繰り出される攻撃に、ヤークンは防戦を強いられていた。まるで憎しみをぶつけるようにレーヴンは自分に対して剣を振るっていた。

その一撃、一撃が重い。

それが彼の感情だと　幼い頃から彼を知るヤークンには痛いほど伝わってきていた。

彼は己が思っていたよりも遥かに強かった。

いや、強くなっていたというべきか。

強くならざるを得なかったというべきか。

「どうした、アインバイル！　デルプールの守り神とは口先ばかりですね」

挑発するようなレーヴンにヤークンは失笑して見せた。

「おまえはずいぶんと余裕だな、レーヴン。だが、本当のところはどうだ？　焦っているのが見え見えだ」



その言葉にレーヴンの表情が一変する。

人形のように表情のない顔がカツと赤みを帯び、眉がつりあがった。

キィィンツツ　　一際甲高い音が響く。

レーヴンの渾身の力の込められた一撃を受け止める。

ガチガチと刃が触れ合って、擦れ合う。

レーヴンの顔がすぐそこにあった。

冷たい光を放つ瞳の奥に静かに燃える火が見える。

揺るぎない覚悟と決意に満ちた瞳がそこにはあった。

「なぜ、おまえほどの男がバルドスに従った！　思慮深く、温和だったおまえがどうしてこんな非道を許せるのだ！」

「祖国を脅かす敵を排除することのどこが非道だと言っただい！」

私からすれば、貴様はただの腑抜けではないか！　前皇帝をたぶらかし、姫君を利用してお前は何を企んだ！　マリエステと手を組むなど愚行以外の何者でもない！

我らは誇り高きデルブールの民。我々こそがこの地を支配すべき！

「マリエステの凡俗など、この地には無用！」

「レーヴン、そこまで堕ちたか！」

「堕ちたのではない！ 目覚めたのだ！」

レーヴンの力に押し戻され、彼の振った剣先が鼻先を掠める。

そのまま身体を弾き飛ばされ、宙で何とか体制を整える。

手が土に着くと同時に身体を反転させると、キッ……と前を見据えた。

「死ねえつつ、アインバイル！」

剣先を地面にこすり付けるようにしながらレーヴンが斬りかかって来る。

剣先は火花を散らし、不規則な和音を奏でていた。

静かに目を閉じ、深く息を吸い込む。

騒音が掻き消え、レーヴンの駆けてくる足の音と息遣いだけが耳を伝わってくる。

何一つ見えない暗闇の視界にはしかはつきりと相手の姿が見えて

いた。

剣先が地面を離れ、大きく宙で弧を描きヤークンの頭上に伸びる。

ガキィンッ！

「なんだ……と……？」

ゆっくりと瞳を開く。

レーヴンの剣を受け止めた左腕から合金製の籠手が鈍い音を立てて砕け散った。

その下からポタリ、ポタリと赤い液体が滴り落ちる。

顔を上げたヤークンの目を真っ直ぐに見つめるレーヴンの瞳を突き刺す手前で、ヤークンの剣先は止まっていた。

彼の顔は驚愕の色に染まり「そんなはずはない……」と搾り出すように呟くレーヴンの声が震えていた。

「心の乱れは命取りになる。戦いの場においては常に冷静であれ  
そう教えたはずだ」

ヤークンは受け止めていた剣を突き返すと、剣先を突きつけたまま立ち上がった。

バランスを崩しながらレーヴンは数歩後退した。

身体を支えるように剣を突き刺すとヤークンを睨み付けた。

「潔く負けを認める。そうすれば、命は助けてやる」

その言葉にレーヴンはフンツと鼻を鳴らした。

「勝者の余裕か？ 敵に慈悲までかけるとは、甘い男だな。それでは到底陛下を討つことなど出来ないな」

レーヴンは言いながらあざ笑うように喉を鳴らした。

空の向こうから重低音を轟かせたエンジン音が近づいてくる。

大きな黒い影が空に浮かび上がり、朝日に反射する金属質の大きな戦艦が近づいてくる。

それを勝ち誇ったように見るレーヴンにヤークンは「確かにそうかもしれない」と言った。

「人を人と思わず、自分を特別な存在だと思っている。あの男を倒

すには同じように非情に徹するべきなのかもしれない。

だが、それで奴を討つたとして何が残る？ 何も残らんよ、何も…  
…な。

むしろ、同じことを繰り返すだけだ。虚しい怒りと欲望の連鎖をな」

「怒りも欲望も、古来より人が持ち合わせているものだ！ それに従って何が悪い！ その感情ゆえに科学も魔術も発展した！ それを否定するつもりか？」

感情を露わにし怒鳴るレーヴンの姿に、ヤークンは悲しみとも哀れともとれる視線を送っていた。

これが本来の彼であった。

これが本来の彼の姿であった。

それを封じてしまったのはまぎれもなく自分自身であることをヤークンは身を持って知っていた。

「おまえの言うことも正しいさ。戦争が科学や魔術を発展させた、その事実を否めない。

だが、それだけが人の持つ感情ではない。それだけですべてが発展してきたのではない。

人が人を思う気持ち、その力が源になっていることも否定できない」

「人が人を思う気持ちだと？ 生ぬるいことを……」

「では、おまえがバルドスに付き従うのはなぜだ？ 陛下から姫君を守りたい その思いからではないのか？」

ヤークンの言葉に、レーヴンは一瞬怯んだように目を泳がせた。

「あの男の非情さは、幼馴染でもあるおまえが一番よく知っているはずだ。姫が少しでも奴の機嫌を損ねるようなことをしたら、躊躇せずには切り捨てる。それを避けるために己を盾とした。そうじゃないのか？」

「違う！ 私は……」

「確かに己の欲望もなかったわけではなかったろう。マリエステを憎む気持ちも確かにあったのだと思う。」

だが、姫に対する気持ちは他のどんな感情よりも勝っていたはずだ。だからオレは身を隠すことが出来た。おまえがいたから、おまえが姫を必ず守ってくれると信じていたから……」

誰にも打ち明けることのなかった真実をヤークンはレーヴンに告げていた。

リーザの傍を離れることを決意できたのはすべてこの男の存在があ

ったからだった。

信じていた。

頼っていた。

彼ならば自分の真意を悟り、必ずそうしてくれると思っていた。

それが彼を追い詰めることになると分かっていたながら甘えた。

酷な事をする。

酷な事を強いる。

自分はいつも彼に対して非情だった。

もしかしたらバルドスよりも酷い仕打ちを自分のほうが彼にしていたと思う。

だからこそ、今、その事実をヤークンはレーヴンに晒していた。

「何を勝手な想像を……！　すべておまえの妄想だ！」

「いい加減、本当のことを言え！　どうしてそこまであの男に付き従う！　姫はどこだ！」

自分の本音を見せても、それでも頑として口を割ろうとしないレーヴンにヤークンは語気を強めて言い放った。

どうしてここまで彼が抗うのか　その真なる意図をヤークンは見つけることが出来ずにいた。

そのとき空に奇妙な鳴き声が響き渡った。

「キュエール、キュエール」という鳴き声にヤークンはゆっくりと顔を上げた。

蒼白いしなやかな肢体をならせた何十匹もの飛竜がジリオンを取り囲むように飛んでいた。

「マリエステの飛竜部隊!？」

「シャントブリに待機させてあったんだ。だが、あの男ならこの状況も想定の内だろうがな」

「やはり……私は貴方には敵わないようですね」

フツ……とレーヴンは小さくほほ笑んだ。

そのほほ笑みにヤークンはビクツと身体を振るわせた。

その笑顔こそヤークンの知っているレーヴンの本当の顔だった。

不器用で自分の感情を素直に顔に出すことが出来ない彼が、心を許した者だけに見せる穏やかなほほ笑みだった。



ざわり……妙な胸騒ぎが一瞬で全身を駆け巡っていた。

「レーヴン！」

レーヴンの手がヤークンの腕を掴んだ瞬間、急いでその手を振り払おうとした。

けれど、それよりも早く彼は動いていた。

剣先が彼の腹へと引き寄せられ、肉を貫く鈍い感覚がヤークンの手を伝わった。

ゆっくりと目の前でレーヴンの身体が崩れていく。

それを残った腕でヤークンは支えるように抱きかかえた。

「しっかりしろ、レーヴン！　なんてバカなことを……」

彼の姿が滲む。

そうだ。

こういふ男なのだ、彼は……

それが分かっていたのに止められなかった。

その感情が涙となって溢れてくる。

「己の欲望に負けた……これは戒め……そして多くの罪なき命を摘み取った贖罪……」

「死ぬことが贖罪だと！ ふざけるな！ 罪を償うのは生きてすることだ！ 命を無駄に捨てることで償えることなど……」

「貴方のお説教……懐かしい……」

レーヴンはそう言うとフッフ……と小さく笑った。

その笑顔にヤークンは幼い頃のレーヴンの姿を思い出した。

すべての物事に対し、否定的な考え方をしていたレーヴンをヤークンはずっと諭し続けていた。

そのたびに彼はどこか嬉しそうな顔をしていた。

レーブンの手がそつとヤークンの頬に触れ、そこに流れる涙を掬う。

「こんな私のために……泣いてくれるのですね、將軍……」

「レーブン、頼む……！ それ以上、しゃべるな……！」

けれどレーヴンは荒い息の下、ただ静かに小さく微笑んで見せた。

「どうして私は……貴方を超えられるなんて思っただんではないか……  
貴方はいつだって私の中で偉大な存在だった……大きすぎて、疎  
ましくて……姫に貴方と比べられる度に悔しかった。男として悔し  
かった気持ちもあった。

でも、少し違う。

ただ、反抗しなかったんです……父親に齒向かう息子のように……  
今になってそのことに気付くなど……私は本当に愚かだ……」

「レーヴン……!」

「將軍……姫は城砦の地下牢に……時間が……ない。私が敗れたら、  
水門が開くようになっていきます。急いで……!」

「分かった! 必ず助ける! だから死ぬな! オレが姫を連れて  
帰るまで死ぬんじゃない!」

「私は貴方を……本当の父のように……」

レーヴンの震える手をヤークンとは別の白い手が握り締めた。

虚ろな瞳に映る黄金の髪の青年の姿にレーヴンは驚きながらもほっ  
としたように口元を緩めた。

「どうか姫を……」

「分かっています。気をしっかり！ 今、治癒を施します」

治癒の印を結ぶレーテルにレーヴンは小さくほほ笑んだ。

そしてそれを邪魔するかのように残った手をレーテルの手に重ね、首を小さく振った。

「……無駄です……それより姫を……」

レーヴンの目が虚ろになる。

彼の口から洩れる声も小さく弱まっていた。

彼の命の灯火はもう消えようとしていた。

「姫の相手が……貴方で良かった……」

そう言ったレーヴンの瞳から輝きが消え、抱きかかえていたヤークンの腕にずっしりと重みが加わる。

ヤークンはグツと唇を噛み締めると、半開きのレーヴンの瞳をそっと閉じるように顔を撫でた。

レーヴンの瞳から流れ落ちる一滴の涙を拭うようにそっと……

それから静かに彼の遺体を横たわらせると、立ち上がり彼の腹に突き刺さったままの剣を引き抜いた。

そして、地面に刺さったレーヴンの剣を抜くと、そっと彼の遺体の上に横たわらせた。

「ゆっくりと眠るといい……息子よ……」

「ヤークン……」

沈痛な面持ちでヤークンを見つめるレーテルに、ヤークンは「心配は無用」と答えた。

大事なのは彼が命を賭けて築いてくれた道に行くこと。

その想いと覚悟を全力で守らなければならない。

それはヤークンもレーテルも変わりなかった。

「サウラスは……!?!」

「応急処置を済ませ、空に上がりました。私たちも行きましょう」

「待ってくれ、姫が地下牢に……水門の水が牢を満たすまで、あま

り時間がない。我々は姫の救出と帝都の鎮静化を！」

（そっち（バルドス）は任せるぞ、サウラス！！）

空に上った同士の勝利をただひたすらに信じて、ヤークンはレーテルとともに走り出した。

## 突き付けられた真実

眩い光が壁を反射し、白く照らし出していた。

窓一つない壁からせり出した合成樹皮のベッドから身体を起こすが、まだ、みぞおちに軽い痛みが残っている。

そっとお腹に触れる。

宿る命があるというのに、かばいきれなかった。

小さくごめんなさいねと謝りながら、アスナムは周りをぐるりと見回した。

二畳ほどの部屋はまるで牢屋のようだった。

逃げ道になりそうな通風孔一つ見当たらない。

そう、ここにはネズミ一匹入り込むスペースもないのだ。

「おや、やっと目が覚めたみたいだね」

不意に声を掛けられて、アスナムは顔を上げた。

重い金属の自動扉が開き、漆黒のコートに身を包んだ白髪の青年がズカズカと入ってきた。

彼は部屋をぐるりと見回すと「苦痛？」と尋ねた。

「そんなことどうでもいいから、ここから出して！」

アスナムの言葉に青年は首をかしげ、何か別のことを考えているように、アスナムを見つめている。

「じゃあ、どうしたら苦痛を感じてくれるの？」

「あなた一体何が言いたいのか？」

「君には苦痛を感じてもらわなければいけないんだよ。そうじゃないんだよ、ボクの復讐が果たせないじゃない？」

アスナムは怪訝な眼差しを向けた。

言っている意味がまったく理解できなかった。

復讐？

彼に恨まれるようなことをしたのか？

思い当たるが多すぎる。

地眼の力で誰かを亡くしたというのだろうか？



「ボクの顔、誰かに似ていると思わない？ よく思い出して……君は知っているはずだよ」

「あなたの顔なんて……」

知らない顔だった。

でもどこかで引つかかっている。

そうだ。

サウラスを撃った少年に似ているのだ。

でも、彼とは髪の色も雰囲気も違う。

サウラスを襲った彼は幼く見えたのに、目の前の人物はそれよりもずっと年が上のように見えた。

纏う雰囲気のせいなのか、それとも大人びたその目のせいなのか、それを判別するのは難しかった。

アスナムはグッと拳を握りしめると、思っていることをぶつけることにした。

「ルーイ？ あなた、サウラスを撃ったルーイなの？」

青年はまた首をかしげた。

それから「それも間違っていない」と告げてから「もう少し思い出して」と言った。

アスナムはもう一度青年の顔をじっくり見た。

遠い記憶の糸を手繰り寄せる。

どこかで見たことはある。

でも彼自身ではないような気がした。

そのとき、頭の中で何かが弾けた。

セピア色の思い出がスライド写真のように甦ってくる。

初めて力を解放したあの日。

父を殺された忌まわしいあの出来事に彼はいた。

いや、彼に似た人がいた。

『死にたくない!』と泣き叫び、怯え、縮り、逃げていったあの男の顔と彼はよく似ていた。

「思い出した? そう、君が逃がした男に似ているだろう? あれ

から彼はどうなったと思う？

恐怖でね、気が狂ったんだ。恐怖から逃れるために酒に溺れ、幻影を見るようになった。

拳銃の果てには家族を皆殺しにしようとしてさ。娘も妻も殺された。でも息子だけは生き残ったんだ。

息子は自分の身を守るために、新しい人格を作り出し父親を惨殺した。ここまで言えばボクが誰か分かるよね」

あまりのことにアスナムは返す言葉を失っていた。

ルイーという少年のもう一つの顔は楽しげに口元に笑みを湛えながら、そんなアスナムをじっと観察するように見つめていた。

それからゆっくりと続けた。

「ルイーはね、あまりに恐ろしくて、必死でボクを作り出したんだよ。

シルスベールという別人格をね。

ボクは死にたくなくて親父を殺した。ろくでもない親父だったから、殺すことに躊躇なんかなかった。親父もやっと解放されて嬉しそうだったよ」

「あなたの父親たちはお金のために私の父を殺し、私を誘拐しよう

としたのよ！ それに自分の父親を殺したのは他でもないあなたでしよう？」

「確かに親父を殺したのはボクだ。でも、親父をそんなふうにしたのは他の誰でもない、君だよ。君があのととき親父を逃がしたりしなければ、母も妹も死ぬことはなかった。ボクの家族は間違いなく君に殺されたんだ」

「逆恨みだわ！」

責任が全くないと言えばウソになるかもしれない。

それでも、自分も被害者であったはずなのに、どうしてそんなことを言われなければいけないのか納得が出来なかった。

だから『逆恨み』だと言った。

しかし、目の前の青年は不満げに目を吊り上げるだけだった。

「だからなんだって言うんだ。ボクにとって結果がすべてだ。原因なんかどうでもいいんだよ」

身勝手すぎると思った。

好きでやったことではない。

好きでこの力を持ったわけではない。

死ぬほどつらい目に合わなかったわけではないのにと

すると、青年は声をさらに低くして、アスナムを睨みつけるように言った。

「君に何が分かる？ 家族を失った子供がたった一人で生き抜くことがどれほど困難なことなのか、君に分かるのか？」

分かるわけがないよな、君は一人になんてなったことがないんだ。

家族を失っても、家族同様に君を愛してくれる人たちがいたんだから……」

ぞくり……と得体のしれない冷たいものが背筋を走った。

聞いてはいけない。

そんな気持ちが胸の中で渦巻き始める。

だが、青年は止めなかった。

悪意のある瞳を一瞬アスナムのほうに向けると、口元に指先を添えた。

「トンゴ……って言ったかな、あの男……機会は与えてやったのに、君は渡さないと 娘も同然の君を戦争の道具なんかにはさせはしな

いって。

ム力ついた、心底ね。何様だと思ったよ。力も地位も金も何もなくて、ボクに盾つくなんてね。

だから殺してやった！ 義父の傭兵達ビシユヌに命令してね。髑り殺してやった」

シルスはそのときのことを思い出しているかのような遠い目しながら、含み笑いをした。

心底喜んでるかのようにだった。

(なんてこと！？ トンゴおじさんたちも私をかばって……！)

彼らの無惨な姿がまざまざと思い出され、じわりと目頭が熱くなった。

自分なんかを庇ったためにトンゴ夫婦もリチエツトも殺された。

ただ自分に復讐したいがために彼らは利用されたのだ。

「私が憎いなら、私を殺せばいい！ それ以上の復讐なんてないじゃない！」

アスナムの言葉にシルスは我を取り戻したかのように、笑うのをや

めた。

横目で流すようにアスナムを見つめながら「面白くないだろう」と答えた。

「君をすぐに殺したら楽しみがなくなってしまふ。

君が自ら死を選びたいと思えるほどの苦痛を味わう様を間近で見たほうが楽しいじゃない？

だって、ボクはそのためにこの身を捧げてきたんだからね」

悪巧みを思いついた子供のようにシルスは笑った。

いや、子供のようにではなく、子供なのだ。

シルスの人格は大人になりきれない子供のままなのだ。

そのとき船が大きく揺れ、アスナムはその場に仰向けに転んでしまった。シルスはなんとかその場で踏みとどまっていた。激しい爆音が響き渡り、何かの鳴き声が聞こえる。

「なんだよ、あの鳴き声は！ ジリオンが攻撃を受けているのか？」

シルスが自動扉を開けた瞬間、鉄仮面の兵士が駆け寄ってくる。

「シルス様、ジリオンがマリエステの飛竜部隊の攻撃を受けております。その中に天眼の男がいると……陛下がすぐにアース様と一緒にブリッジに来るようにと」

（サウラスが無事だった！！）

胸に希望の灯が燈るように温かくなった。

彼が生きていてくれることが嬉しくて、思わず口元が緩む。

だがすぐにその顔は凍りついた。

シルスがじっとこちらを見ていた。

アスナムは思わず口元を覆ったが、すでに遅かった。

「悪いけど、アース様は君が陛下の元に連れて行ってくれない？

それから陛下にお伝えして。ボクがああ男を仕留めますから、陛下はゆっくりアース様と見物しててくださいって」

シルスの命令に兵士は頭を下げると、部屋の前で警護をしていたらしい別の鉄仮面の兵士二人に号令をかけた。

兵士たちはアスナムの両脇を抱えるように、部屋から連れ出す。



すれ違いざまに睨みつけるアスナムにシルスは満面の笑顔を浮かべ、  
こう返した。

「楽しんでくださいね、アース様？」と

## 掠める弾丸（1）

（アスナム、どこだ！！）

飛竜部隊の乗る飛竜の中でも一際大きな飛竜の背に乗りながらサウラスはジリオン周辺を飛来し、アスナムの姿を探していた。

ブリッジに彼女とバルドスの姿を確認する。

バルドスに身体をつかまれているかのように、彼女は寄り添い立っていた。

その瞳とサウラスのそれが重なる。

無事だったとほっと安堵の息が漏れるとともに、彼女の瞳に自然顔が引き締まった。

なにかを訴える瞳だった。

来てはいけない、危険が迫っている。

声にならない彼女の声はその瞳には宿っていた。

しかし引き返すことなど出来なかった。

たとえどんな危険が待っていようと構いはしなかった。

己の身がどうなるうとも、それは問題ではなかったのだ。

ズキリ……身体が痛みを訴えた。

思わず顔を歪め、その個所を抑える。

レーテルの治癒の印によって、サウラスの身体はある程度は回復していた。

だが、処置はあくまで応急処置であり、完全ではない。

バルドスに貫かれた傷は内部の組織を破壊しようとする侵食を始めている。

その程度を遅くすることが今できた精一杯の処置だった。

「ジリオン内部に侵入する！ 援護を頼む！」

「殿下、そのお体では危険すぎます！」

「今のバルドスは、おまえたちでは歯が立たない！ アイツはオレが何とかする！ ジリオン進入までは頼むぞ！」

「……了解しました」

「進入を確認後は各自散開し、敵艦主砲を狙え！ 他には構うな！ 破魔砲さえ撃破できればいい！」

そう叫ぶとサウラスはギリオンの甲板目指して一気に降下を始めた。気流の波を利用し、ラウルトはギリオンの砲撃をかわしていた。しなやかに優雅に、時に雄々しく空を駆ける。

ラウルトはその身体からは想像もできないほど俊敏に砲撃の嵐を切り抜けていた。

飛竜部隊たちが甲板に向かうラウルトを援護し、道を作っていた。砲撃を受け、小さな泣き声と共に落ちる同胞を見つめながらも、サウラスはただそこへと進路を取っていた。

甲板に降り立つとサウラスはラウルトに「頼む」と告げた。

深い深海色の飛竜の眼がじつとサウラスを捉え、分かったとでも言うようだった。

そんな飛竜の顎を何度か撫でると、サウラスは「分かっている」と答えた。

その答えとともに飛竜はゆっくりと瞬きをし、空へと戻っていく。

苦戦する部隊の援護に向かうために

ズキズキと身体中を蝕む痛みで顔を歪めながら、サウラスはキツと前を見据えた。

膝がつきそうになるのを堪えながら、なんとか体制を整えると剣を抜く。

いつもよりも腕が重い。

けれど、それを振り切るように走り出そうとしたとき、前方から並々ならぬ殺気を感じた。

右頬を弾丸が掠め、皮膚が裂ける。

剣を構え前方を睨む。

火花の散る甲板の向こうから黒い影がゆっくりとこちらに向って歩いてきていた。

漆黒の闇のコートに身を包んだ男の顔を目深にかぶったフードが覆い隠してしまっている。

「バルドスの刺客か……！」

間合いを取りながら歩み寄ると、刀身二本分ほどの間隔が開いたところで男は立ち止まった。

それからゆっくりとフードを取る。

その顔にサウラスは目を疑わずにはいられなかった。

胸の動悸が激しくなる。

信じられない光景に時の流れが止まり、静けさが襲う。

「やあ、サウラス。元気そうで何よりだ」

見覚えのある顔はしかし、サウラスの知っている顔とは程遠かった。

真っ白い髪に冷ややかな灰色の瞳、嘲笑する歪んだ唇。

同じであって同じものでないものがそこにいた。

「ルーイ？ おまえ、本当にルーイなのか？」

そこにいたのは紛れもなくルーイその人だった。

ルーイはクククツ……喉を鳴らすと「正解！」とおどけて見せた。

「なぜおまえがこんなところにいるんだ！ それにその姿……バルドスに何をされた！」

ルーイはそんなサウラスにクスクス笑って見せた。

「何もされてなんかいないさ。ルイーはボクの本体。ボクはルイーに作り出された別人格シルスだよ、サウラス。いいや、エウール殿下と呼ぶべきかなあ？」

「なんだって？」

シルスは驚くサウラスにクスクスと含み笑いをして見せた。

それから銃口をサウラスに向けながら「消えてくれないかな？」と言った。

「ボクの復讐の成就のためにも、陛下の創る新しい未来のためにも君が邪魔なんだよね」

サウラスは腹の底から怒りがフツフツと込み上げていた。

シルスの軽い口調がさらにその思いを増長させる。

「おまえたちは何をするつもりなんだ！」

「この世界をエシエンタールの呪縛から解放放つんだ。そして陛下が新しい神になるんだよ。素晴らしいとは思わないか？」

「あいつは神なんかじゃない、ただの化け物じゃないか！ あんなものを人が敬い崇めるなんて本気で思っているのか？」

「化け物とはひどいなあ。死ぬことなどない完璧な体なのに……や

「ぱり君みたいな奴にはこれがどんなに素晴らしい奇跡なのか理解できないんだね」

シルスは大げさに肩を落として見せた。

「おまえ……自分が何を言っているのか、分かっているのか？」

「分かっているのはむしろ君のほうがよ。」

この世界に残ったエシエンタールとの鎖を断ち切るためにはね、彼女に替わるほどの絶対的な力を持った強い指導者が必要なんだ。

この世に絶対的な神が一人存在すれば、無益な争いはなくなる。自分が一番だと争うことが虚しくなる。素晴らしいとは思わないか？」

うっとりとした目でシルスは言った。

自分たちの成そうとしていることに疑心の欠片もなかった。

「それがシャントナにとって一番良い事だと……他者を排除してまで成すに値する行為だと……そう言いたいのか？」

「勿論だ。不完全な形でしか力を遺せなかった不完全な神など、この世界には必要ないんだ。さあ、おしゃべりはここまでにして、最後の殺し合いといこうじゃないか？」



「ルーイイツツ！」

フフフ……楽しむように笑うシルスに向かって、サウラスは斬りかかった。

剣先がシルスの白い髪をかすめる。

パラパラと宙に舞う髪を見ながらシルスはまた笑った。

その顔を睨みつけながら、もう一度剣を振るう。

ズキツ……と全身に痛みが走り、その痛みに体がバランスを失う。

「もーらった！」

ニヤリ……シルスの銃がサウラスの額をとらえ、唸り声をあげる。

「クツ……」

反射的に上体をそらす。

銃弾がエスメルの額の皮ギリギリ一枚を走り抜けていった。

## 掠める弾丸（2）

「なかなかしぶといね」

横転し、体勢を整える。

飛竜部隊との戦闘で船が不安定に揺れ、爆煙が周りを取り囲む。

「運もボクに味方しているよ」

煙の中にシルスの姿が消えていき、気配を追うが熱気に撒かれ分からなくなる。

額から一筋の汗が垂れ落ちる。

雫がゆっくりと頬を伝い、頬骨の輪郭をなぞっていく。

「王手詰み（チェックメイト）」

カチリ。

引き金をかける音が聞こえた瞬間、サウラスはゆっくりと瞳を閉じた。

左手を腰に滑らせる。

右手に握った長剣の鞘の隣に納まっているそれより少し短めの剣の柄を握り締めると振り返った。

勝ち誇った笑みを浮かべるシルスの時が止まる。

左手に握った剣がシルスの手から銃を空に弾き飛ばし、喉元に突きつけられた右手の剣の先でシルスの顔が強張った。

「残念だったな。詰めが甘い」

「二刀流とはね、知らなかった」

ニツ……不敵な笑顔をシルスは浮かべた。

次の瞬間、耳元で銃声が鳴り響く。

右手から剣が滑り落ちた。

うな垂れる視線の先に白い煙を燻らせた銃がシルスの左手の中で鈍い輝きを放っていた。

「ボクもね、二丁使いなんだよ。残念だったね」

撃ちぬかれた右の肩から血がとめどなくあふれ出していた。

全身に痺れが走る。

腕だけでなく、体が鉄の重りをつけているかのように重い。

「痺れ薬を銃弾に塗っておいたんだ。楽には死ねないよ。己の無力さを痛感しながら逝くといい。くだらない力しか遺してくれなかった無能な神を呪いながらね」

「なぜだ？ なぜそこまでエシエンタールを憎む！」

痛みが気を失いかける意識を叱咤する。

気を保つために、万が一の逆転の鍵を見つけるためにサウラスはシルスに尋ねた。

シルスはフッフ……と口元を歪めると「家族を殺されたから」と答えた。

「あのときは言わなかったけどさ、ボクの家族を殺したのはあの女……魔女アースなんだ。」

正確には間接的にで、直接手をかけたのは彼女が殺し損ねたボクの父親だけだ」

「彼女が殺し損ねたおまえの父親だと？」

「ああ、そうだよ。彼女を誘拐してビシュヌに売ろうとしていたん

だけど失敗して、彼女に殺されかけたんだ。

だが、運が良かったのか、悪かったのか親父は逃げることができかね。

でも、よほど怖かったみたいでさ。親父はすぐに気が狂って幻覚を見るようになり、果てには自分の家族を惨殺したんだ」

「そのこととエシエンタールを憎むことと……どんな関係がある！」

「まあ、話は最後まで聞いてよ。

ボクの母と妹は敬虔なエシエンタールの信者だった。彼女たちは死に瀕してもなお、エシエンタールを信じ続け祈っていた。だが、そんな信仰深い彼女たちを神は助けるどころか見捨てた。

信じれば奇跡が起こり、窮地を救ってくれるなんていう夢物語からこの世界を救い出さねば、彼女たちのように犠牲になる人間がまた増えちゃつんだよ」

「だから新しい神を創るといふのか……！」

「君には分からないだろうなあ。いや、君だけじゃない。あの女もそうだ。

ああ、イライラするよ！どいつもこいつも温室でぬくぬく育ちやがって、反吐が出るんだよ！

おまえたちが温かい毛布に包まれて眠っているとき、ボクは殺したヤツから剥ぎ取った服を着て寒さを防いでいた！ おまえたちがパ

ンや野菜のスープを口にしているとき、ボクは腐ったゴミの山からなんとか食べられるものを探して飢えをしのいでいた！ ビシユヌの養子になるために、どんな汚いことにだって手を染めたし、苦い汁だって甘んじて飲んだ。想像できるか？

おまえたちにこの地獄が想像できるか？ 子供が一人で生きていくっていうのは、おまえらが想像するよりはるかに過酷なものなんだよ！」

「おまえはバカだよ、大バカだ！ 新しい神を創ったってそれは変らない！」

むしろおまえと同じ辛さを味わう子供が増えるだけだ！ それを変えられるのは神の手なんかじゃない、人の手だ！」

サウラスの言葉に激昂していたシルスに再び落ち着きが戻る。

彼は面白くなさそうにチツと舌打ちした。

「エシエンタールを信仰する国の人間の言葉だな。」

人の手で成すものだというのなら、証明して見せる。この窮地を脱して見せる。あの薄情な神が本当に君を救ってくれるのか、神の奇跡とやらをボクに見せてみる……！」

額に銃口が突きつけられる。

サウラスはじつとシルスの顔を睨みつけた。

ルーイの皮を被った別の人間が笑っている。

これが彼なのだろうか？

これを彼は望んでいるのだろうか？

ルーイの屈託のない笑顔を思い出しながらサウラスは思っていた。

この皮の下で本当のルーイは何を見つめているのだろうか……と。

引き金を引く指が不意に止まり、シルスの歪んだほほ笑みが苦渋の色に変わる。

「くそっ！ 邪魔をするな！ ボクの邪魔をするな、ルーイイイツ  
！」

サウラスに引き金を引こうともがくシルスの右腕を左腕が食い止めていた。

彼の白い髪の色がにわかには茶色を帯び、醜く歪んだ顔がサウラスのよく知っている顔に変わり始める。

「ボクを……ボクを殺して！ エスメル！」

シルスではない、本当のルーイがそこにいた。

意のままにならない右腕を押さえ込んだ姿勢でルーイは叫んでいた。

「ボクの意識はもうすぐシルスの意識と完全に同化してしまう！  
どうせ消えるならボクはボクとして死にたいんだ！ シルスじゃな  
くルーイとして！」

大きく震える右腕に握られた銃がガチャガチャと音を立てていた。

うな垂れたルーイの顔がふつと正面を見つめ、その顔がまたシルス  
に戻った。

「勝手なマネをするなよ！ 誰のおかげで今まで生きてこられたと  
思っている！ もうすぐボクたちの悲願は達成される。そのために  
はこの男が邪魔だ！ 欺瞞に満ちた陳腐な友情にほだされるのか、  
貴様は！」

「……確かにおまえの言う通りかもしれない……でも、ボクには……  
……ボクにとってサウラスは初めて出来た友達だった……だから……」



ルイーに戻った彼の瞳から一筋涙が流れ落ちた。

痺れる体を走る痛みに耐えながらサウラスは左手に握った剣の柄を強く握った。

彼の思いに応えてやらなければならない。

だが、本当にそれでいいのか？

自分にとってルイーはなんだ？

ただの兵士仲間ではない。

もっと、もっとずっと大切なものはずだ。

彼が望んでいるからと言って簡単に彼の身体に刃は突き立てられない！！

「オレには……できない……！ おまえ、言つてたろう？ マリエステに行きたいって！ 殺された家族の代わりに自分がエシエンタールに祈りを捧げたいって！ 夢を叶えなくていいのか？ おまえの夢はそんな程度だったのか？」

「君を殺すくらいなら、夢なんかどうだっていいんだ！」

「ルイー……おまえの悪いところは諦めが早いところだ。だが、生憎オレは諦めの悪い男なんだ」

「サウラス……？」

「今、シルスの意識を抑えているのはおまえの意志なんだろう？  
勝てよ、シルスに！ おまえ一人で勝てないって言うんなら、オレ  
が力を貸してやる！」

右手を添えて剣を構えて見せる。

ルーイが僅かながらに頷いたそのときだった。

彼の体を赤黒いモノが貫いた。

長い四肢のそれからほとばしる体液が彼の肉を焼き、白い煙を上げていた。

彼の手から銃が離れ落ちた瞬間に、赤黒い触手たちは彼を解放した。

その勢いに数歩ルーイは後ずさり、その場に仰向けに倒れた。

「ルーイイイツ！」

這うように駆け寄ったサウラスにルーイは虚ろな瞳を向けた。

「ルーイ！！ しっかりしろ！！ 助けてやる、今助けてやるから  
！！！」

「いいんだよ、これで……ボクはやっと楽になれる。」

結果的に騙すみたいになっちゃって……ごめん……ボクはシルスのやっっていること……分かっていたのに……止められなかった。ごめん……」

「おまえのせいじゃない！」

「君の国に……行ってみたかった……」

「いつだって連れて行ってやる！！ だからしっかりしろ！！」

「フフフ……ムリだよ、ボクは行けない……だから……代わりに祈っておいてくれないかな……？ ボクの夢を……君に託したいんだ……」

サウラスが差し伸べられた手を固く握り力強く頷くと、ルイーはニッコリとほほ笑んで静かに息を引き取った。

しばらく顔を上げることが出来なかった。

嗚咽が喉を突く。

怒りに全身が打ち震えた。

しびれた手足に再び感覚が戻り、痛みが引いていく。

体を熱い血がグルグルと駆け抜けていく。

「所詮、捨て駒。役に立たなければ用はない」

煙の向こうから聞こえてきた声にサウラスは顔を上げた。

黒い煙の向こうに男が立っている。

その背後に藤色の髪の愛しい彼女の姿も垣間見えた。

「バルドス　　ッッ！」

転がっていた長剣を拾い上げると、サウラスは飛び掛っていた。

脇目も振らず、一直線に　憎しみで満ちた剣を渾身の限りに振り上げていた。

## 亡者たちの合唱

サウラスの姿はまさしく鬼だった。

怒りに身を任せ、剣を振り上げる。

バルドスの体から伸びる無数の触手たちを切り落とし、紫色の血色にまみれた彼の瞳はギラギラとした憎しみの炎が燃え上がっていた。

その姿をバルドスは喜んでいいのか、からかっているのか　口元には余裕のある笑みを湛え、応戦していた。

切り落としても、切り落としても触手の数は減らなかった。

無限に増殖し続けるそれをサウラスは力の限りに落とし続けている。

（このままじゃダメ！！）

サウラスの体から真っ赤な血が噴出していた。

剣を振るうたび傷が大きな口を開け、血を吐き出していた。

彼の純白の上衣はすでに元の色が分からないほどに汚れている。

おそらく彼はバルドスの地眼の力を削ぐために天眼の力を解放しながら戦っている。

琥珀色に輝く右目が何よりの証拠だ。

傷つきながら一心不乱に剣を振るうその一振り一振りが彼の命を削っていくようにアスナムには思えてならなかった。

（止めなくちゃ！！）

体力を消耗するだけでバルドス自身には致命的な傷を負わずに至っていない。

傷ついた今のサウラスでは天眼の力を思うように制御できない。

このまま続けても勝ち目がない。

自分の首を絞めるだけだ。

バルドスを打ち負かすのは力ではない。

憎しみに捕らわれ、怒りに満ちた力では彼には勝てない。

その力をバルドスは糧とし、自らの力に取り込むのだから……サウラスの行為は自殺行為以外の何ものでもなかった。

「サウラス、やめて！！」

声の限りに叫んだ。

だが、心を閉ざした彼には届かない。

銃声が鳴り響き、サウラスの肩を掠めた。

白煙の中から、多くの鉄仮面の兵士たちが姿を現し、自分たちを取り巻きながら、銃や弓を構えていた。

空の向こうからは鈍い銀色の光を放った何隻もの戦艦が姿を見せていた。

ジリオンの護衛艦だった。

神経を研ぎ澄まし、左目に集中させる。

普通では見えない距離でも、今ははっきりと見える。

甲板からこちらに向って攻撃を仕掛けようとしている兵士たちもいれば、こちらに乗り移ろうとしている者の姿もあった。

そのすべてがサウラスを狙っていた。

だが、サウラスの目はバルドス一人に注がれている。

もう一度彼の名を叫ぼうか、一瞬アスナムは迷った。

しかし、彼が耳を傾ける可能性の低さや、今の状況を考えたらもはや決断するしかなかった。

ダメな事は重々承知の上だった。

そうする道しか残されていないのかと迷う気持ちもあった。

けれど、一瞬の迷いで彼を。

愛しい人を失うわけにはいかなかった。

(許して!! 彼を殺させられないの!!)

全神経を集中させると、左目の力をアスナムは解放した。

奇声を上げた亡者たちが兵士たちの命を次から次に奪っていく。

断末魔の絶叫が響き渡り、戦艦は炎を上げて墜落していく。

命を喰らい尽くした亡者の群れが嬉々とした笑い声を上げながら自分の元へと戻ってくる。

しかし、様子が違う。

彼らは自分の瞳に戻ることはなく、取り囲み始める。

幾重にも、幾重にも折り重なり、喜びでゆがんだ顔を近づけ、遠ざけしながらグルグルと回り始める。

「何?」



ゾクリと背筋が寒くなる。

グルグル回っていた体がピタリと音もなく止まると、それらはうつろな目玉を一齐にアスナムへと集中させた。

瞬間、驚くべき速さで全身に巻きつき、侵食し始める。

体の中に滑り込んでいくそれらの後には大きな水泡が出来上がり、それは破裂すると小さな白い触手が顔を覗かせ、萌え出てくる。

引き抜いても、引き抜いてもそれらは止まることなく生え続ける。

「イヤアアアツツッ！」

吐く息が冷たくなり、白い吐息に変わった。

指先の感覚が麻痺して、痺れたように動かなくなる。

自分が自分でなくなっていく。

背筋を冷たいものが駆け抜けていった。

(助けて、サウラスッ!! いや!! いやあっっ!!)

その恐怖に意識がブツツ……という音を立てて途切れた。

広がるのは漆黒の闇の世界だった。

音もない。

温度もない。

深い闇の淵が大きな口を開けていた。

そこへ足が吸い込まれる。

（死ノ肅清ヲ……世ニ滅ビノ祝福ヲ……）

亡者たちの合唱が聞こえる中、アスナムはゆっくりと瞳を閉じた。

## 諦めない想い

ゲギヤオアアアア！

天を貫くような悲鳴にも似た雄叫びに、サウラスは冷水を浴びせられたかのような感覚を覚えた。

バルドスに向けて振り下ろしていた剣は、今は盾代わりとなって攻撃を防いでいた。

冷静になって見回した周囲の状況に息を呑む。

泣き叫び、逃げ惑う兵士たちの声があたりを支配し、黒煙を上げて何隻もの戦艦が墜落していた。

原因を作っているのは、得体の知れない大きな白い塊だった。

バルドスの操る触手とは違う、糸のように細い白い触手が体中をびっしりと覆い尽くしていた。

それは酷い腐臭を撒き散らし、ドロドロに濁った泥水色の体液を撒き散らしながら、デルブルーもマリエスでも関係なく逃げ惑う兵士を捕まえては、頭からバリバリと骨を砕きながら喰らっていた。

肉片が飛び散る血の海の中で、それは猛々しい唸り声をあげながら、さらなる獲物を探すように喉を鳴らしている。

その瞳とサウラスの視線がぶつかった。

右と左と違う瞳の色だった。

右目は黒い闇色。

左目は真っ赤にたぎる血の色をしていた。

（アスナム！？）

思い当たる人物をサウラスは一人しか知らなかった。

バルドスの後ろにいた彼女の姿を探す。

だが、影さえも見つけられない。

「余との勝負中に脇見とは、余裕だな？　だが、少々遅すぎた」

バルドスの長い触手がサウラスの腹を突き飛ばす。

空中で体制を整えるように一回転すると、バルドスの姿を見据えながら地に降り立った。

「アースはおまえを守るために地眼を使った。亡者どもに心をくれてやったのだ。だが、やっと崩落の乙女は真なる目覚めを迎えることが出来た。おまえには礼を言うべきかな？」

「あれがアスナムだと！ 真の目覚めだと！ ふざけるな！」

切りかかったサウラスの剣がバルドスの黄金色の刀身とぶつかって高い金属音を放った。

ガチガチと小刻みに震える刃を交えながら、サウラスはバルドスを睨みつけていた。

だが、バルドスは余裕たっぷりの傲慢な笑みを返してくるだけだった。

「それにしても醜いとは思わないか？ あれほど美しかったアースがあんな醜い姿になるとは……エシエンタールも罪なことをする。

だが、これは余の仕業か？

いや、これは力なきおまえが招いた結果だ。そんな女一人も守れない青二才がどうやって国を、世界を守ろうというのだ？

それとも世界を救うために、愛する女を斬るか？」

地上に向って、黒い球体を落とし続けている生物を横目で捕らえる。

黒い球体の中で赤子のような形をした亡者が喉を鳴らしながら蠢いていた。

彼女を止めなければならない。

それは分かっている。

バルドスの言うとおり、世界を救うために彼女を斬るか？

それしか方法はないのか？

仮に世界を救うために彼女を斬ることになるとするならば。

それは自分が言ったことを裏切ることにもなる。

彼女の中には違う命が宿っている。

『罪なき命』

『穢れなき魂』

次の……時代のシャントナを担うであろう命が確実に宿っていると  
いうのに　　！！

（そんなことできるものか！！）

不安に揺れる彼女の姿、泣き叫んだ彼女の顔、小さく震える細い肩。  
そしてとびきりの彼女の笑顔が代わる代わる頭に浮かんでは消えた。

彼女を取り戻すためにどれだけの時間を費やし、どれほどの苦勞を  
してきたか。

そのためにどれほどの犠牲を払ってきたのか。

なんのために今、こうやって戦っているのか。

全てがサウラスの中でぐるぐると絡み合い、悲鳴を上げる。

彼女を失いたくない。

彼女のためならどんな危険も冒せる。

覚悟をしてきたのだ。

彼女を取り戻すためなら、どんなこともすると覚悟したのだ、六年  
も前に。

そして、どんな苦痛も悩みも飲み込んで受け入れてきたのだ。

こんなところで諦めるわけにはいかなかった。

（本当にオレはつくづく諦めの悪い男だ。おまえもそう思うだろう、  
ルーイ）

横たわった親友の亡骸を一瞥した後、固く目をつむる。

それから渾身の力でバルドスの体を蹴り、突き飛ばした。

その反動を利用して、背後に回ると、白い生物に向かって一目散に走り寄る。

気配に気付いた生物が怒りに満ちた唸り声をあげ、サウラスにつきみかかろうと長い腕を伸ばした。

「アスナム！」

彼女の名前を叫ぶ。

返事の代わりに無数の触手たちが一斉に伸び、サウラスの腕や首、足にまとわりついた

（君を失わなければ得られない未来なら……オレはそんなものいらない！！）

そんな未来ならいらない！

欲しいのは誰かを犠牲にして得る未来ではない。

愛する人と手を取り合って生きられる世界だ。

「くだらんな。くだらなすぎる！ 己の国よりも、世界よりも一人



の女の命を優先するなど！ ただの醜い化け物に成り下がった愚かな女一人のために、すべてを放棄しようというのか！」

「くだらないかもしれない。間違っているかもしれない。愚か過ぎて、きつとあんたには分からない。でもどうせ後悔するのなら、オレは彼女を助けたい！」

握り締めていた剣をサウラスは躊躇なく放し、蠢く触手に身を任せた。

その瞬間、体をおびただしい数の触手が覆い尽くした。

『一緒二十ナロウ……一ツ二十ナロウ。怖い！ 一人八怖い！』

触手の海の中を掻き分けながら、サウラスはそこにいるであろう彼女を探した。

触手を伝わって彼女の思念が入ってくる。

触手がサウラスを取り込もうと次々に手を伸ばしてくる。

息が苦しく、垂れ落ちる体液で皮膚が焼ける。

それでも負けるわけにはいかなかった。

(ごめん、アスナム！ 君を一人にしてしまっ……！！)

正気を失った自分を守るために彼女は力を解放した。

彼女を省みることさえしなかった。

「君は一人じゃない」と言いながら、彼女を一人で戦わせてしまった。

心を削らなければ力を使えない地眼の痛みを分かっていたはずなのに、土壇場で彼女を見捨てた。

こんな姿に変わるほどに彼女の心は蝕まれていたのに！

バルドスの言うとおりだった。

愛する女、一人も守れないで世界を救おうなどと自分は驕っていた。

手が触手とは違う滑らかなものに触れた。

白く埋め尽くされた視界の先に、ほんのりと赤い肌が見えた。

「アスナム！」

叫ぶ口の中にまで触手が入ってくる。

吐き出しながら彼女の名前を呼び続け、彼女の肩を掴むと一気に引き寄せた。

触手の媒体となっっている彼女の体は恐ろしいほど冷たく、死人を思わせた。

「君は死なせない！ 君を化け物なんかにしてやらない！ だから、君も諦めるな！」

（エシエンタール！ 力を貸してくれ！！）

虚ろに漂う瞳を見つめ、だらしなく半開きになったアスナムの唇を捕らえるとサウラスはそこに固くくちづけた。

その刹那、右目が強烈な熱を帯びた。

つむっていられなくなり、くちづけたまま右目を開いた。

白い炎がほとばしり、アスナムの体を覆い尽くしていた触手の群れを焼いていく。

アスナムの美しい四肢が再び姿を見せ、冷たかった体にゆっくりと温もりが甦る。

頬に赤みがさしてくるのを確認すると、サウラスはゆっくりと彼女の体をその場に横たわらせた。

「思ったよりもやるよつだ。認めてやらねばなるまい。余の相手として……」

「オレもあなたに礼を言う。あなたに言われなければ、オレは彼女を殺していたかもしれない」

足元に転がった二本の剣を静かに拾い上げるとサウラスは構えの姿勢をとった。

その姿を嬉しそうにバルドスは見つめると黄金色の剣を同じように構えて見せた。

「とりあえず礼は尽くそう、白銀の王子エウル」

挑発とも取れるバルドスの言葉をサウラスは鼻先で一蹴した。

「オレの名前はサウラス。バルジーだ」

そう言い放つと、サウラスは力強く地を蹴った。

## 天のユリ

高い金属同士のぶつかる連続した音が途絶えることなく鳴り響いていた。

決意に満ち溢れた剣をサウラスは振り続けていた。

それをバルドスは受け流し、均衡が保たれる。

けれど、サウラスが気を抜けば、その一瞬を突いてバルドスの剣先が伸びてくる。

皮一枚でかわし続けていたものの、それでも全身は傷だらけだった。

(まずいな……!!)

傍から見れば、五分に見えないことはない。

けれど、サウラスの動きに切れがなくなってきたことを自分自身が一番よく分かっていた。

それは仕方のないことだと言える。

無傷のバルドスに比べ、自分は遥かに傷つきすぎている。

大きな切り傷に加え、火傷も負っている。

内臓の腐食もいまだ止まらない。

内も外も、バルドスという男の攻撃によって傷ついていた。

この体であとどれくらい立っていられるか？

それでもやらなければならない。

彼女を守るために。

彼女の宿した命を守るために。

祖国を守るために。

世界を守るために。

この強大な悪をこのままにしてはおけないのだ。

(刺し違えてもこの男だけは……！)

生かしてはおけないのだ。

そのとき、バルドスがニヤリと大きく笑った。

背筋に悪寒が走るその笑みが漏れた瞬間、船が今までにないほど大きく揺れた。

船首に目を向けたサウラスは、目を見張った。

虹色の太い帯状の光が真っ直ぐに伸びていて、それは難を逃れるこ

とができた空を舞う数少ない飛竜を飲み込み、巻き込んではおるか向こうの空まで伸び大爆音を轟かせると、すうっと消え失せた。

「破魔砲か!？」

叫んだサウラスの手は思わず止まってしまった。

船首を見つめたことで不覚にも一瞬だけ、バルドスに背を向けてしまっていた。

「うう……!!」

背中を突き飛ばされ、サウラスは我に返った。

そこにはバルドスの指先から伸びる触手に脇腹を貫かれたアスナムがいた。

「アスナム　ッ!」

前のめりに倒れるアスナムの体をサウラスは素早く抱きとめた。

「アスナム、しっかりしろ!!」

膝をついた状態でサウラスに抱かれたアスナムは、その腕にしがみつきながら「大丈夫だから」と返した。

「なぜこんなこと……!!」

気を抜いてしまったがために彼女を傷つけたことに、またしても後悔の念が渦巻いた。

けれど、そんな思いを抱くサウラスにアスナムはやんわりとした笑みを返した。

「気づいたら身体が動いてしまっただけ……あなたは……私のことなんか気にしちゃダメ。  
バルドスを……討たなきゃ……」

目がじわりと熱くなる。

なぜ、いつもこういうのだろうか……お互いに大切に想っているだけで、どうしてもどちらかが傷つかねばいけないのだろうか。

「頼むから……もう二度とそんなことを思わないでくれ。キミは……キミの身体は一人のものではないのだから……」

「サウラス……」



盾にならなければならぬ。  
犠牲を伴わなければならぬ。

そうなのだろうか？

そうしなければならぬのだろうか？

お互いをただ大事にしているだけなのに、血を流さねばならぬのだろうか？

サウラスはゆっくりとアスナムを抱きかかえ、立ち上がった。

向き合ったバルドスは無然とした面持ちだった。

そして大袈裟なくらい大きな溜息をついて見せ「失望した」とアスナムに向かって吐き捨てた。

「おまえには失望したぞ、アース。力の使い方が半端なだけではなかったのだな。」

余の慈悲で生きながらえていることも省みず、虫けらの命を助けるために捨て身になるとは「

しかし、いつも温和であるはずの彼女は今回は違った。

キツとバルドスを睨みつけ、きっぱりと言った。

「あなたにとっては虫けらでも、私にとっては命を懸けるほどに大切な人だわ！！」

「一体あなたは人の命をなんだと思っているの！！」

啖呵をきるアスナムにバルドスは再び大きな溜息をついて見せた。

「くだらん質問だ。余が自らの所有物をどう扱おうと関係なからう？」

それともこの世のものすべてはエシエンタールの族制だ……とでも言うつもりか？」

「少なくとも、あなたの族制でないことだけは確かだよ！」

アスナムの言葉にバルドスの右の眉がピクリと動いた。

余裕の瞳からは怒りが顔を覗かせ、アスナムに降り注がれる視線は矢のように鋭かった。

「おまえ自身には多少なりの未練もあったが……余に楯突くその目は気に入らん！」

おまえが素直に従わぬつもりなら、地眼を奪うまで！ 本当の地眼の使い方をその目に焼き付けるがいい！」

バルドスはまるで身体の中に閉じ込めていた力を解放するように、大きく胸を張って見せた。

どす黒いオーラがバルドスの全身からほとばしって空に立ち上った刹那、青く冴え渡った空は澱んだ赤黒い空へとその姿を変えた。

螺旋状に渦を巻いた風が激しく吹き上がり、その風圧にサウラスたちは吹き飛ばされそうになった。

「大丈夫か？」

風圧に裂ける傷に耐えながら剣を甲板に突き刺し、サウラスはアスナムの体を支えていた。

力を入れるたびに全身、至る所から血が噴出した。

「私は何とか……サウラスこそ」

「大丈夫だ。それよりもバルドスだ！ この風じゃ、奴に近づけない！ それどころか、鬨り殺しにされるだけだ！」

「さっきブリッジで……バルドスが兵士に命令していたの。『エネルギー充填後連続して撃つように』って……きっとまた……」

「そうか。エネルギー充填には時間がかかるはずだが、次の発射前に奴とのケリをつけないと……」

一瞬考えた後。

サウラスは静かに目を閉じてから、もう一度アスナムを見た。

それから彼女の手をとるとギュツと握りしめた。

「オレに考えがある。命を預けてくれないか？」

サウラスの真っ直ぐな瞳にアスナムは満面の笑みを返して見せながら「あなたを……信じている」と　そう答えた。

その言葉にサウラスは頷いて見せた。

二人ならやれる。

彼女が傍にいてくれれば、どんなことだって自分はやり遂げてみせる。

今はそれを強く、強く感じる事が出来た。

「バルドスにオレたちの力を解放する」

「サウラス！？」

「オレたちの力を個々に解放するんじゃなく、同時にするんだよ、アスナム」

「私たちの力は両極に存在する。もしかしたら共鳴するかもしれないと？」

サウラスはコクリと頷いて見せた。

確信があったわけではない。

賭けの領域を脱しないのも確かだった。

だが、サウラス自身、瀕死の重傷を負ったとき、確かに奇跡は起こった。

それが互いの力の共鳴による影響だとしたら？

互いの力を補完し合った結果だとしたら

「本当にそれでバルドスを倒せるのかしら？」

「分からない。もしかしたら倒せないかもしれない。

それでもオレは『想いの力』を信じたい。

この先もキミと二人でずっと生きていきたいから」

「私も……私もサウラスと一緒にこの世界で生きていきたい！」

「キミが……地眼の持ち主で良かった」

「それは私も同じ。あなたで良かった。」

あなたに会えたこの喜びをこのままで終わらせたくないから……だから、絶対に生きて帰りましょう」

(エシエンタール、今なら貴女のしたかった意味が分かる気がする……！)

力をどうして分散し、託す相手を男女に分けたのか

今やっと、彼女の意思を理解できる気がした。

サウラスは返事の代わりにアスナムの手をギュッと強く握り締めた。

彼女の心が熱い血流のように流れ込んでくる。

サウラスの心に、もはや迷いや戸惑いはなかった。

前方をアスナムとともに見据える。

突風の中で、バルドスの体は変異していた。

無数の触手が足ののようにバルドスの体を浮き上がらせていた。

それは四方に伸び、獲物を探すかのように唾液らしい体液を飛散させ、隆起した背中には漆黒の大きな六枚の翼が力強く翻っていた。

服は破れ、体中の筋肉が異様なまでに盛り上がり血管が浮き出て、赤黒い肌の各所には亡者たちの顔が浮き上がり、悶絶の表情を浮かべては奇声を上げていた。

「どうだ、アース？ これこそが地眼の真の力だ！ これこそが究極の神の姿だ！ おまえのような醜い姿ではないだろう？ おまえたちに神が滅ぼせるか？」

バルドスの触手が突風の中を這い攻めてくる。

「アスナム！ オレの背後に回れ！」

サウラスの声に素早くアスナムは体を動かそうとしたが、脇腹の痛みに足がとられ背中に回る前に膝をついてしまう。

それを好機とばかりに口をパツクリと開いたそれがアスナムに襲い掛かる寸前で、サウラスの剣が食い止めた。

アスナムを取り込もうと伸びてくる触手を次から次に切り落とす。

しかし、それは増殖を続けるばかりで一向に数は減らない。

それどころか増え、ますます勢いを増していた。

「騎士ナイトさながらの素晴らしい活躍だ！　だが、これではどうだ！」

右腕の地眼に力を集めるかのようにバルドスはグッと力を込めた。

赤黒いオーラがそこに集中し、亡者たちのいななきは激しさを増していた。

その声が絶頂の雄叫びを上げたとき、それらはバルドスの体から解き放たれた。

透けるような反物質的な体ではない実体を持ったそれらは、嬉々とした奇声を上げ一直線に二人を目掛けて宙を駆けてくる。

「サウラス！」

アスナムはサウラスに手を伸ばした。

それに応じるようにサウラスは剣を捨て、アスナムの手を強く握ると、抱きかかえるように反対の手を背中に回した。



「いくよ……！」

サウラスの胸の中でアスナムはうんと頷き、静かに瞳を閉じた。

もはや喧騒は聞こえなかった。

深い静けさの中にアスナムの呼吸と鼓動だけが響いていた。

自分の呼吸と鼓動が彼女のそれとぴたりと一致する。

身も心も一つに溶け合った、そんな感覚がサウラスたちを襲った。

カッ  
！

亡者たちの絶叫も、バルドスの驚愕の叫びも丸ごとまばゆい閃光が飲み込んで、あたりはその射光によって何も見えなくなった。

どれほどの時間が経ったのか……多分、一瞬のことだ。

芳しい香りが鼻先をくすぐった。

それはとてもとても懐かしい香りだった。

王宮の庭園でいつも嗅いでいたあの美しい花の香りだった。

「百合<sup>リリー</sup>だわ……」

そんなアスナムの呟きにサウラスはゆっくりと瞳を開けた。

眩い光に遮られた世界に漂う甘く芳醇なアスナムリリーの香りに、ハツと息を飲み込む。

何も見えないはずの視界に映ったのは神々しい女性の姿だった。

愛の羽を広げるように両手を広げ、安らぎに満ちた慈愛の光を湛えた面持ちをしたエシエンタールは確かにそこにおいて

すべてを包み込むように抱きしめたのだった。

## 美しく輝く空

雪のように小さな光の結晶が降り注いでいた。

赤黒かった空は元の色鮮やかな青い姿を取り戻し、白い綿雲を抱いていた。

アスナムはゆっくりと立ち上がると、空を仰ぎ見た。

脇腹の痛みはもはやなく、その姿も消えていた。

そっと手を空に向って伸ばす。

手のひらの中に結晶が舞い落ち、触れるか触れないかのところで消えてなくなった。

その傍らでサウラスも同じように手を伸ばしていた。

ひどく傷ついていた体には一つのかすり傷も残っていなかった。

青白かった顔は生氣に満ち溢れ、その瞳はキラキラと瞬く粒子たちを反射しているかのように輝いていた。

瞳がじんわりと熱くなった。

サウラスのほほ笑みに自然に笑みがこぼれた。

彼に抱きしめられ、アスナムは同じように彼の体を強く抱きしめた。

生きている喜びと、終わったのだという達成感が溢れ出てくる。

そのとき、背後でゆっくりと何かが立ち上がった。

振り返った先にいたのはバルドスだった。

全身から白い煙が立ち上がっていた。

翼は原型をとどめないほどに折れ曲がり、隆起した肉に死んだ触手の残骸が落ちていた。

右腕の地眼は焼け焦げ、その周りの肉は腐ったように溶け出していた。

声もなくたたずむアスナムたちに、憎憎しげな視線を向けたバルドスは「まだまだ！」と叫んだ。

「もうやめて！ 私たちはこれ以上あなたと戦う気なんてないわ！」

「それは憐れみか、アース！ 余はまだ戦える！ こんな負けは認めない！」

「バルドス……！！！」

アスナムはキュツと唇を噛んだ。

睨みつけるバルドスの瞳に前ほどの勢いはなく、ギラギラとした鋭い輝きは今や失われ、空虚な光だけが彼の瞳を支配していた。

アスナムの瞳に映っているのは幼いバルドスの姿だった。

小さな子供が必死に自分を守ろうと虚勢を張る姿しかそこにはなかった。

「その目はなんだ？」

可哀想なものを見る目はなんだ！

おまえごときに同情されるなど……」

アスナムは答えられなかった。

胸がギュッと締め付けられるような痛みを覚えているのは確かだった。

これは同情なのだろうか？

可哀想だと思つ心が痛いと言っているのか？

分からない。

けれど、ひどく傷む胸に何も言えず、押し黙つたままのアスナムの肩をサウラスが優しく叩いた。

うな垂れるアスナムの肩をそつと抱きながらサウラスは立つとバルドスと向き合った。

「なぜ、それほどまでにエシエンタールに拘る？」

こんなことをしなくても、あんたほどの男なら世界を支配できただろう。いや、こんな真似をしなければ、誰もが尊敬する偉大な皇帝にあんたはなれたはずなんだ。

それなのに、こんな方法を取ったのはなぜだ？」

「うるさい！ おまえに話すことなどない！」

「いい加減にしろ！ あんたには戦う力なんか残されていない！」

エシエンタールがすべてを奪ったんだ。

それを一番理解しているのは誰でもない、あんた自身だろう！」

サウラスの一喝にバルドスは言い返せずに言葉を飲み込んだ。

ブヨブヨに膨らんだ右足が針で刺した風船のように破裂し、骨がバツキリと折れ曲がる。

バランスを失ったバルドスは突つ伏すようにその場に崩れ落ちた。

「情けないな」

呟きながらバルドスは乾いた笑いを浮かべた。

「サウラス……こんな方法しか知らないと答えたらおまえはどう思う？」

ゲホゲホと苦しそうな息を吐きながらバルドスは言った。

それからサウラスを見ると「おまえは愛された口だな」と言った。

「おまえには何も分かるまい。愛されたくても愛されず、ゆえに愛し方も知らず……孤独という名の恐怖を押し量ることも出来まい」

「そんなこと……！」

「あるはずがないと？ 母という存在があれば確かにそうだったかもしれない。」

だが、物心つく前から母親とは切り離され、母親に抱かれた記憶も愛された記憶もない。

貴族たちの政治の駒になるのを避けるために、人との接触は極力まで減らされ、徹底した英才教育だけを施された幼子はいつ愛を知るのだ？

余には愛を語る時も相手もなかった。  
相手を滅ぼす術と、身を守る知恵だけを教えられた。

ましてエシエンタールの教えなど……体験のない己にどうやってそれを理解しろと？」

「それは違うわ！ あなたにだっていたはずよ！

心を閉ざしたのは自分自身だわ！

人に愛されることだけを望むのはただの甘えだわ！」

思わず出た言葉にバルドスの視線がアスナムに向けられた。

その表情にアスナムはしまったと口を覆った。

バルドスに切り返される     ！！

しかしバルドスはフツ……とほほ笑んで見せた。

「おまえの言うとおりだ、アース。

余は甘えていたのだろう……愛し方を知らないと誤魔化し、努力をしようとはしなかった。

……何もしなくても貰えると思っていたのだ、温もりも……母親が子供にする優しい褒美のキスも……な」



「バルドス……」

「本当はおまえに愛されたかったのだ……おまえの心がその男に向いていると知ったとき、嫉妬で胸を妬いた……憎しみの気持ちが抑えられなかった。

おまえを誰かに奪われるくらいなら、おまえを殺してしまいたいと思った。

おまえなら……分かってくれると思っていたのだ。同じように孤独を知ったおまえなら、分かち合えると思ったのだ」

「本当のあなたを、あなたの心を、もっと早く教えてくれていたならば……きっと違ったと思う」

「そうだな……だが気づくのが遅かった……」

バルドスは嘲笑するようにカラカラと乾いた笑いを浮かべた。

アスナムはその傍らに歩み寄るとそっとバルドスの手を取った。

大きな逞しい熱い手が冷たくなりつつあった。

「エシエンタールに抱かれて……あの温もりを感じたとき分かったのだ。

これこそが神の奇跡であり、力だと。

そして、余が神になれぬことも……だが、認めたくなかった。いや、今でも心のどこかで認めていない。

愚かと分かっているながら、それを飲み込むことに抵抗を覚えるのも確かだ。

それにしても、神の真の力を目の当たりにしなければ気が付かぬとは。

この世界はいつでも神の力に満たされていたのだよ、アース……

神はこの世界を去ったのではなく、己が望めばいつだってそれを感じることが出来たのだ」

「もう、分かったから……それ以上は何も言わないで」

「生きる、アース……おまえの信じた男とともに……そして伝えよ、己の子らに……真なる神の姿を……」

「バルドス、あなた……!？」

ハツと息を飲むアスナムの頬にバルドスはそつと触れる。

何もかもを見通した強い師子王の目に、アスナムは小さく頷くことしかできなかった。

バルドス触れた手をはゆっくりと地面につけるとグツと身を起こした。

片足で立ち上がり、アスナムをエスメルの胸の中へと突き飛ばした。

「バルドス！？ なにをッ！？」

這うようにふらふらと船首に向って歩むバルドスの背中に向ってアスナムが叫ぶと、彼は立ち止まり「このまま終わるつもりはない」と言った。

「そんな身体でどこに行くつもりだ！？」

バルドスは立ち止まると振り返った。

力のなかったはずの瞳には熱い炎がたぎり、その表情は自信に満ちていた。

不敵なほほ笑みを浮かべた皇帝の顔だった。

「余はデルブルー帝国皇帝バルドスⅡグレイザー！ 己の死に場所は己で決める！」

「やめて！！ バルドス！！」

「一矢は報いさせてもらうぞ、サウラスⅡバルジー！」

「バルドス！」

バルドスを追いかけてよとアスナムをサウラスの腕がギュツと抑えた。

振り解こうとするアスナムにサウラスは黙って首を振った。

「今は逃げるんだ」というサウラスの言葉に、アスナムはこぼれ落ちる涙を止められなかった。

バルドスも助けなかった。

この気持ちは同情ではない。

心の中のどこかで彼を慈しんでいた。

サウラスに感じたものとは違う　母性だったのかもしれない。

後ろ髪を引かれながら、サウラスの笛に呼応してやってきた飛竜の背に飛び乗った。

その瞬間、アスナムは飛竜の手綱で手首を縛り上げられ、身動きが取れない状態になった。

驚いて振り返ったアスナムの唇をサウラスの唇が覆う。

けれどそれは一瞬。

離れたサウラスの口が放ったのは「ごめん」という小さな呟きにも似た言葉だった。

「サ……ウラス？」

「君は生きるんだ、アスナム！」

混乱するアスナムを一人残し、サウラスは飛竜から飛び降りた。

まっすぐに甲板に彼の体が引き寄せられる。

それはみるみる小さくなり、甲板に佇むバルドスの姿も、それを追うサウラスの姿も見えなくなった。

「いやあああ！ サウラス　！」

ジリオンが遠くなる頃、それは起きた。

大きな爆発音とともに、船は虹色の波紋を広げ、粉々に崩れ去ったのだ。

## 風に乗って

見上げた一面の青空はどこまでも澄み切っていた。

爽やかな風に乗って、白い翼を広げた鳥の群れが空の海を泳いでいた。

「ここに居りましたか、陛下？」

重みのある低い声にアスナムはゆっくりと立ち上がり、振り向いた。白い立ち襟の正装衣に身を包んだヤークンが立っていた。

「二人のときは敬語でなくて構わないのよ、ヤークン」

「では、お言葉に甘えて……」

ヤークンはアスナムの隣に並び立つと、眼前の墓標の前に立て膝をつくと、祈りを捧げた。

あの戦いから一年が経とうとしていた。

戦いからしばらくは雨が止むことを知らぬかのごとく降り続けた。

偉大なる皇帝の死を嘆き悲しんでいるかのように

そして今日、彼の喪が明ける。

一年前、バルドスの最期を伝えたときの沈痛な面持ちのヤークンの姿をアスナムは思い出していた。

ヤークンにとってはバルドスも、そしてレーヴンも自分の子供同然の存在だった。

その二人の子を一気に亡くすことになった彼の心痛をアスナムは推し量ることが出来なかった。

『こうなったのはすべて自分が至らなかったからなのだ』と言ったヤークンの姿が痛々しかった。

「早いものだな、一年というのは」

「ええ、本当……」

アスナムは顔を覆っていた黒のベールを脱いだ。

柔らかな風が頬を撫で、漆黒の髪がふんわりとなびく。

黒革の眼帯にかかる髪を整えると、アスナムはゆっくりと息を吸い込んだ。

「どうしてデルブルーに残ろうなんて思ったんだ？ おまえさんには選ぶ道は沢山あった。」

力を失ったただの女に戻ったのだ。

あえてアースのままにいる必要はなかったのだぞ？ それにサウラスを探しに行くことも……」

ヤークンの口から漏れた『サウラス』という名前にアスナムは息苦しいほどの胸の痛みを感じた。

彼との突然の別れのあと、アスナムもレーテルたちと共にサウラスの姿を搜索した。

生きていることをひたすら願い、彼を探した。

だが、見つかったのは彼の剣の柄の破片だけだった。

マリエステの王子に与えられる特別なものとレーテルが言っていた。

だから彼のものに間違いないと 天眼の力に共鳴する地眼の力ならば探せるかもしれないと、そう思って力を使おうとしたけれど……バルドスとの死闘で使い尽くした形になった左目に、再び神の力が戻ることはなかった。

そして彼の痕跡は、小さな破片だけを残して消えてしまった。



「諦めたのか？」

ヤークンの言葉にアスナムは苦いほほ笑みを返して見せた。

諦められるなら、もうずっと前に諦めていたはずだ。

彼は自分と共に生きたいと言った。

その彼が約束を違えるはずなどないのだ。

そう思つて諦められないから、その心をごまかすようにこんなマネをしているのだとアスナムはヤークンに言いそうになった。

それを寸前で押しとどめ、胸にしまった剣の破片の入った袋を服の上から握り締めると「もうすぐね」と返した。

「そうだな。レーテル殿の復興支援のほうも一段落ついたと言うし、こちらのほうもおまえさんのおかげですっかり落ち着いたからな」

「シヤンタナはやっと一つになるのね」

長い、長い間。

互いを憎しみあつてきた二つの国はやっと一つになるときを迎えようとしていた。

ジリオンから放たれた破魔砲は、軌道は逸れていたとはいえ、マリエステ領内の山を切り崩し、流れた土砂などによって近隣の村や里は大きな打撃を受けていた。

レーテルが復興支援に立ち回るのは必然のことだった。

王子自らが復興に手を差し伸べるとなれば国の求心力も高まるし、何より民を大切にしている彼が困っている人々を見捨てるようなマネが出来るはずなどなかった。

一方、デルブルも絶対的な支配者であったバルドスがいなくなっただことで、その秩序が乱れようとしていた。

貴族たちの台頭、各地での反乱で混乱する国内を鎮めるため早急な手が必要だった。

最も有効なのは新しい君主を立てること。

それも誰もが認める大きな力を持った人物であることが要求された。

地眼の力は失われたけれど、自分にはバルドスの妻という肩書きがあった。

それに暴君を倒したのは他でもないアスナム自身だった。

その上、アスナムのお腹の中には確かにバルドスの子が宿っていた。

次代の王となる子を授かった王妃であり、神の力をその身に持った彼女彼女の言葉に、だれが抗うことが出来ようか

「デルブルーに残ったのは、この世界のために自分には何が出来るかを考えただけのことよ」

「償いのつもりか？」

償い……自分が奪ってしまった命に対して？

自分のせいで命を落とすことになってしまった人たちに対して？

命を持って自分の過ちを償った人々に対して？

そのどれもが当てはまるような気がしたが違う。

「償いたい気持ちがないとは言わない。でも、そうじゃないの。命を賭して私を助けてくれたサウラスを……彼の世界を私は守りたいと思っただけ」

アスナムの言葉にヤークンはフツ……と笑って見せた。

「おまえさんには感謝しているよ。」

そこで……だ。

リーザ様とオレで贈り物を用意したんだ。受け取ってもらえるとあ

りがたいんだがな」

「私なんかに？」

「そう、私なんかに……だ。まあ、おまえさんには勿体ないほどの素晴らしい贈り物だが、リーザ様が言うことを聞かなくてな。それに乳母が困っていた。ルーファスがずっとおまえさんを探して泣き止まないらしい」

「まあ、それは大変だわ」

「とにかくオレは伝えたぞ。贈り物に関してはおまえさんの選択に委ねるとしよう。」

これ以上引き留めるとオレが乳母に怒られそうだからな。

さっさとルーファスのところに行ってやれ」

アスナムは「ええ」と小さく頷くと走り出そうとした。

「アスナム！」

振り返ったアスナムにヤークンは真面目な顔を向けていた。

そして「ありがとう」と彼は告げた。

アスナムは満面の笑顔をヤークンに返すと走り出した。

贈り物なんて久しぶりだった。

最後に貰ったのはリチエットからだった。

あの甘い木苺のケーキを、幸せな日々を思い出す。

懐かしく、温かな思い出にアスナムは浸ることはなくなっていた。

リチエットたちをアスナムは感じる事が出来ていた。

自分が望めば彼女たちに会えるのだ。

彼女たちが注いでくれた愛を知っていたから

アスナムは自室の扉の前で一呼吸した。

ルーファスの鳴き声は部屋の中からはしない。

どうかしたのだろうか……ふいに不安がよぎる。

(なにかあったのかしら!?)

不安に急かされるようにアスナムは思い切り扉を開けた。

その途端、アスナムの胸は大きく波打った。

にわかには信じられなかった。

足の震えが止まらず、それは全身を飲み込んだ。

まばたきを忘れ、目の前を見据える。

夢を見ているのだと錯覚しそうになった。

真つ青な長衣に身を包み、ベッドの脇の小さなゆりかごをのぞいている人物がいた。

見慣れた白銀の髪をした青年の手に向かって小さな赤子が懸命に手を伸ばしている姿がアスナムの目に映った。

「サウラス……!!」

ゆっくりと青年が顔をあげ、アスナムを見た。

間違いなく彼がいた。

この一年、彼のことを考えなかった日はなかった。

いや、彼と一緒にいた幼い日も、彼と離れた日々も、いつもいつでも彼を考えなかった日などなかった。

本当は会いたくてたまらなかった。

彼を見つけるためだけに生きてかった。

けれど身重の自分は動けなかった。

守らなければいけない命があったから……だからひたすら生きていると信じていた。

自分ひとりを残して死ぬはずがないと言い聞かせていた。

ずっと会いたくて、自分の心を騙すために国務に勤しんだ。

でも、もう限界だった。

「アスナム!!」

足が勝手に動き出していた。

腕が真っすぐに伸び、彼の元へとひたすら走っていた。

広げられた胸の中に飛び込む。

懐かしい彼の匂い、彼の鼓動に一瞬で包まれた。

そして彼の力強い腕がまるごとアスナムをギュッと押しつぶすように抱きこんだ。

彼の大きな手がアスナムの頬を包み込み、そこに彼の顔が近づいた。

彼の温もりが、重なった唇から流れ込んでくる。

何度も何度も、こうやって口づけをした遠い日を思い出す。

長かった。

本当に長い時間だった。

離れた時間は気の遠くなるほどに長い時間だった。

けれど……この口づけでその時間が一気に消し飛んでいく。

離れていた時間を埋め合うように、深く深く口づけをした。

張り詰めていた心の糸がプチンツと音を立てて切れたように感じた。

涙がせきをきったように流れた。



口づけを一旦止めて、アスナムの涙を拭いながらサウラスは「迎えに来たんだ」と言った。

「ひどいわ！ 生きているならどうしてすぐに教えてくれなかったの！」

「ごめん……君に見せられるような状態じゃなかったんだ。骨とかバラバラだったし、助かったのが奇跡みただったから」

「それでも私はあなたに会いたかった！ どんな姿でも生きているあなたに会いたかったのよ！」

「すまない……本当にすまないと思っている。でも、君には守るべき者があったから……だからその子を無事に生んでくれるまではと。オレのことで君に負担を掛けなくなかったんだ。オレはアスナムとは笑って会いたかったから」

だからヤークンたちには自分が回復するまでは黙っていてくれるように言ったのだと サウラスはそう言った。

彼にしてみれば、それは優しさだったのかもしれない。

これ以上、心配をかけさせたくなかったからだとそう言うだろう。

それは理解できる。

自分だって同じ立場だったらきつとそうする。

彼の辛い顔は自分の体の痛みよりも遥かに辛いから……

アスナムはちらりとサウラスの顔を覗き見た。

困り果てたサウラスの顔にアスナムは何だか楽しくなってしまうた。これは夢ではない。

(生きていた！ この人は生きていた！)

「一緒に来てくれ」

サウラスの囁きにアスナムは嬉しさのあまりにうなずきそうになった。

だが、寸前で押しとどまる。

「私……行けないわ。あなたと共にには行けないのよ！」

まだやることが残されていた。

自分はこの国を治める君主だ。

今、自分がいなくなったら再びこの国が混乱してしまう。

それに互いの立場もある。

自分はバルドスⅡグレイザーの妻だ。

そして、ルーファスの……バルドスの子供の母親でもある。

それに加えて、彼はマリエステの第二王子だ。

マリエステに恐怖をもたらした魔女アースとその国の王子が一緒になることなど、どうして許してもらえよう？

「そう言うと思った。でも、もう離すつもりはないよ。この日を7年も待ったんだから！！」

「サウラス、分かって！ 会いたいときは会いに行く。

でも一緒にはいられない。

あなたにも私にも立場があるわ」

「どんな？ デルブールを治めるのはアスナムじゃない、魔女アースだ」

言いながらサウラスはアスナムの長い黒髪に触れると、後ろでしばった眼帯の紐を解いた。

はらりと眼帯が床に落ちるのを眺めると、サウラスは続けた。

「それに君の目の前にいるのはマリエステの王子エウールじゃない、サウラスⅡバルジーというただの男だよ」

「私にどうしろって言うの？ この国を捨てて、あなたと逃げろって言うの？」

困惑するアスナムにサウラスは小さく首を振ってみせ「逃げるなんて言ってもりはない」と答えた。

「オレは二回死んでいるから、もう怖いものなんかないんだ。

それに君を幸せにしないとダメなんだ。

これは彼の意味でもあるから……」

「彼？」

「これは、あくまでも推測の域を出ないんだけど、バルドスはそのとき『一矢報いる』と言った。

オレはマリエステに一矢を報いるつもりなんだと思った。

だから戻ったんだ。君を一人にすることになるかもしれないのを承知で……

でも違ったんだよ、アスナム。

彼は『オレ』に一矢報いると言ったんだ」

「意味が……よく分からないわ？」

「負けたままでは終わらなかったんだ。」

彼はね、破魔砲ごとジリオンを沈めるために残ったんだ。

制御を失ったジリオンを空中で爆破させなければ、ローゼンブルムはおろか、マリエステ王国は壊滅していたと思う。

彼は君の愛したこの世界を守るために……君と生まれてくる新しい命を守るために、ジリオンを沈めたんだ」

「そんなこと……」

「彼がするはずがない？ 君は知っているはずだ。」

それに……結局のところオレは何も出来なかった。

彼に追いついたときには、吹き飛ばされていたから……でも、あの爆発の中で生きていられたのは彼が庇ってくれたからだと思う。

爆風に巻き込まれた時点で意識がなかったからはっきりとは言えない。

でも、聞こえた気がした。頼むって……彼の声が」

勇ましく、屈服することを知らない雄雄しい皇帝の後姿が浮かんだ。気付かないフリをしていたが、彼は時折、愛しむような視線を自分に向けていた。

体が自然に強張ってしまう自分を抱くとき、緊張をほぐすように気遣っていたことも分かっていた。

でも、そこから目を背け続けていた。

自分の信頼を得るために、わざとやっていることなのだと言い聞かせた。

人の心さえも道具にする人だったから

あの人はなんと憎らしい男なのだろう。

最後にこんな置き土産をするとは　！

きっと自分はこの先どんなにサウラスを愛しても、どこかでバルドスという男を思い出して泣くのだろう。

それがバルドスの仕掛けた最後の罠

サウラスはそつとアスナムの左手をとった。

その薬指には、銀色に輝く薔薇と獅子の紋章の施された指輪がはめられていた。

「彼を忘れるなんて言わない。彼を愛した君を、そのままの君を…  
…オレはまるごと愛することを誓うよ」

そう言うとサウラスは懐から金色の指輪を取り出した。

「7年前、君に話があると言っていたのを覚えている？」

サウラスの問いに、アスナムは強く頷いた。

忘れられない日。

父と母を失った日でもあった。

「あの日……この指輪を渡すつもりだったんだ。そして君に言いつもりだったんだ」

真つすぐなサウラスの瞳がアスナムの瞳へと落ちてくる。

アスナムは同じようにサウラスの瞳を見返した。

「オレと結婚してくれないか？」

その言葉を聞いた途端、アスナムはサウラスに抱きついていていた。

ずっと、ずっと自分も望んでいた言葉だった。

愛しい人にいつか言ってもらいたかったその言葉を、今このときやつともらうことが出来た。

その喜びに胸が打ち震えていた。

「はい!!」

アスナムはもう一度サウラスの瞳を見てそう返した。

アスナムの左の薬指に、サウラスは金色の指輪をそっとはめた。

金と銀の指輪が太陽の光にキラキラとまばゆく光り輝いた。

「さあ、行くよ」

子供のような笑顔を浮かべ、サウラスはルーファスをゆりかごから抱きかかえると笛を吹いた。

見覚えのある白い四肢をした飛竜がバルコニーに現れると、その背にサウラスは颯爽とまたがった。



赤子はサウラスの腕の中、泣きわめくことなく安心しているかのよう  
に静かにしていた。

サウラスがアスナムへと手を差し伸べる。

その手をとれずにいるアスナムにサウラスはニコリと微笑んで見せた。

「こんなことをしたら大変なことになるわ！　せめて二人の婚儀が  
終わってから……ちゃんと皆に説明してからでも……」

「大丈夫だよ。何も問題ない」

「サウラスったら、無責任だわ！　ルーファスはバルドスの子なの  
よー！ー！」

「いや、この子はオレたちの子だよ。それにヤークンが言っていた  
だろう？　これはリーザ様とヤークンからの贈り物だって。」

二人なら、きつと上手くごまかしてくれるさ。

なんと言っても、ヤークンはデルブルーの才知を極めた男二人を育  
て上げたほどの男なんだから……」

その言葉でアスナムはやつと理解した。

ヤークンが改まってアスナムに『ありがとう』と言った理由を……  
彼ははじめから分かかっていてアスナムを行かせたのだ。

(最高の贈り物よ……ありがとう、リーザ様。ヤークン)

アスナムは差し出されたサウラスの手を取ると同じように竜の背にまたがった。

「さあ、どこへ行く?」

「あなたといられるなら、どこだって構わないわ」

アスナムの言葉にサウラスはニッコリと白い歯を見せて笑った。

「じゃあ、風に任せるとしよう」

白い肢体をしならせ三人を乗せた飛竜は空高く舞い上がると、飛び立った。

どこまでも続く青い空を自由に泳ぐ風に乗って、輝く太陽に向って真っ直ぐに

【END】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4123t/>

---

猛る地の底で 君咲く天のユリ ~ 神の眼(まなこ)を抱く王子~

2011年6月24日09時53分発行